

福岡南バイパス関係

埋蔵文化財調査報告

筑紫郡太宰府町・筑紫野町所在遺跡群

第 1 集

1 9 7 0

福岡県教育委員会

永岡遺跡			
頁	行	誤	正
111	13	進掘	発
"	14	進掘	発
"	20	進掘	発
112	2	進掘	発
"	15	進掘	発
"	21	進掘	発
115	10	A地区	F
117	5	(2層褐色含)	(2層褐色土を含む)
118	3	部々上面	分
126	16	あるうか。	あるう。
"	21	とりも	の
"	30	(Bの加工	(B)の加工
129	5	今回永岡遺跡	今回の永岡遺跡
134	25	厚みを剥り	削
"	29	とする	とする。
136	24	台地様石器	形
137	17	中心となっている。	欠損されている。
140	14	カツテイングトウル	ツ
141	9	加工は⑤のそれに	⑤
144	31	石器の技能	族
148	14	「剥片錐」	金族
"	15	「石刃錐」	金族
150	9	8常松.....	縄文(晩期)弥生(中期)を追加
"	18	17弥ノ池	牧
151	19	44中牟田鬼神山.....	未確認を削除

野黒坂遺跡			
頁	行	誤	正
74	2	弥生初頭頃	頃
74	27	中期中葉頃	頃
76	25	トラピーズ	台形様石器
91	8	稜線	稜線
95	4	柱穴しきもの	柱穴らしきもの
100	7	焼炭層	面
104	3	宝珠	珠
"	第31図	(ノ一須恵)	(ノ一須恵器)
105	12	器もなく	間

序～池田遺跡		誤	正
頁	行		
序	7	九州大学理学部	工学部
11	26,31 32	高 坏 坏	高杯 杯
12	第8区	$\begin{array}{c} \overset{\cdot}{\cup} \\ \hline B \\ \hline \end{array}$	$\begin{array}{c} \overset{\cdot}{\cup} \\ \hline B \\ \hline \end{array}$
13	2	坏	杯
18	第10区	1 0 M	1 0 CM
18	29	小田富士夫	小田富士雄
20	32	最上層	最下層
25	2	直斜面	南斜面
23	13	瓦	瓦
30	7	炭 来	炭 素
"	8	$Fe_3O_4 + C \rightleftharpoons 3FeO + CO$	$Fe_3O_4 + C \rightarrow 3FeO + CO$
"	10	$2FeO + SiO_2 \rightleftharpoons 2FeO \cdot SiO_2$	$2FeO + SiO_2 \rightarrow 2FeO \cdot SiO_2$

大 曲 り 遺 跡			
頁	行	誤	正
35	27	道跡の遮断	路
36	29	グリット	ド
37	8	筑紫都	郡
39	3	埋め床を	埋め, 床を
40	27	切られているか、北東近	が 辺
41	7	土器など	土
45	7	巾 / 0m	10
46	7	最大形	径
"	7	不完形	定
"	9	不完形	定
"	16	不完形	定
"	25	短辺 2 / m の	径
"	25	不完形	定
47	6	周縁は認められない。	周
"	7	不完形	定
"	10	不完形	定
49	10	い、内外面とも	。
51	6	円形の土坂	板
55	30	杯蓋 (7)	5
56	5	変曲	変
"	12	変曲	変

頁	行	誤	正
57	5	高杯 (第15巻3・15 図版14 ~15)	~11)
58	22	本誌 (第15巻1~3 図版16 ~18)	5~12 10
"	23	筑紫都の遺跡 (17・12)	9・11
"	23	半個体分のもの / 点 (13)	12
59	19	高杯 (第17巻16~18 図版16 ~18)	18
63	12	サスカイト石	トル
64	26	後者に	は
68	32	須賀野の埴年上では	編
69	3	埴年上では	編
"	6	九州の埴年上	編
"	11	埴年上の時期	編
"	12	埴年上の式	編
70	11	土器埴年研究上	編
"	12	九州地方埴年	編

福岡南バイパス関係

埋蔵文化財調査報告

筑紫郡太宰府町・筑紫野町所在遺跡群

序

この報告は、日本経済の発展にともない激化する交通事情緩和を目的とした福岡南バイパス建設予定路線における埋蔵文化財の記録保存の措置として、昭和44年度及び45年度の両年度にわたり、福岡県教育委員会が九州地方建設局の委託を受けて実施した発掘調査の記録である。

本調査の実施にあたり、土地所有者の方々をはじめ、地元各位、賀川光夫教授以下別府大学考古学研究室の方々、角田文衛氏をはじめ平安博物館の方々、広島大学文学部助教授潮見浩氏、東京大学理学部教授渡辺直経氏、九州大学理学部坂田武彦氏、同工学部建築学教室土田充義氏、国学院大学考古学教室、学習院大学理学部木越研究室、福岡大学歴史研究室、熊本県五和町文化財保護委員柳原高太郎氏、ならびに種々ご配慮を賜った関係各位に深甚の謝意を表すものである。

昭和 46 年 3 月 31 日

福岡県教育委員会

教 育 長 吉 久 勝 美

例 言

1. 本書は、国道3号線福岡南バイパス建設事業に関連して、昭和44・45年度に発掘調査を実施した埋蔵文化財調査の概要報告である。
2. 調査は、九州地方建設局福岡国道事務所の委託を受けて、福岡県教育委員会が実施した。
3. 当初は遺跡名を番号を付して呼称していたが、報告書を作るにあたって次のように改めた。
なお、発掘調査にあたっては主として次の機関が担当した。

地点名	遺 跡 名	機 関 名
第2地点	——水城地区（水城跡）	福岡県教育委員会
第6地点	——五條地区（大宰府条坊跡）	福岡県教育委員会
第7地点	——池田遺跡	福岡県教育委員会
第8地点	——大曲り遺跡	平安博物館
第9地点	——野黒坂遺跡	福岡県教育委員会
第10地点	——永岡遺跡	別 府 大 学

4. 水城地区及び五条地区の報告は予報であり、改めて本報告書を作成する予定である。したがって名称も仮称である。
5. 図版目次、挿図目次を各遺跡ごとに記載する。
6. 調査の担当及び原稿執筆者は、各報告の本文中に記名する。

本文目次

まえがき

水城・五條地区

- 1. 水城地区…………… 1
- 2. 五條地区…………… 2

池田遺跡

- 1. はじめに…………… 4
- 2. 位置と環境…………… 5
- 3. 遺構・遺物の概要…………… 6
- 4. 第2調査区第1・4号窠跡出土鉄滓について…………… 30

大曲り遺跡

- はしがき…………… 34
- 1. 調査経過…………… 35
- 2. 立地…………… 37
- 3. 遺構…………… 39
- 4. 遺物…………… 48
- 5. 考察…………… 64
- むすび…………… 70

野黒坂遺跡

はじめに.....	71
1. 位置と地形.....	73
2. 調査概要.....	73
3. 遺構と遺物.....	76
4. 結 語.....	105

永岡遺跡

1. 調査経過.....	111
2. 遺 跡.....	114
3. 遺 構.....	116
4. 遺 物.....	121
5. 周辺遺跡の調査（その1）.....	129
6. 周辺遺跡の調査（その2）.....	140

ま え が き

日本経済の高度化した発展の結果、動脈となる交通網の整備が急務となり、福岡県下においても、この例にもれず、特に福岡市近郊における国道3号線の機能は麻痺する一方である。この状況を緩和するために、九州地方建設局は、福岡南バイパスの建設を企画した。この計画路線は、史跡大宰府跡を中心とする最も濃密な古代遺跡の集中地域内を通過することになり、これら遺跡群の保護と道路建設との調整を計るため、福岡県教育委員会と九州地方建設局との度重なる協議の結果、道路建設予定地に所在する各遺跡について、発掘調査を実施して路線決定の可否を探ると共に、消滅する埋蔵文化財の記録保存を計ることとなった。これら遺跡群は合計10個所で、各時代にわたる。調査は昭和44・45年度の2ヶ年間実施し、6個所を完了した。残り4個所は諸種の事情により調査を実施できなかった。なお、福岡南バイパス路線内所在遺跡発掘調査事業の全般については、次の福岡県教育委員会職員があたった。

総 括

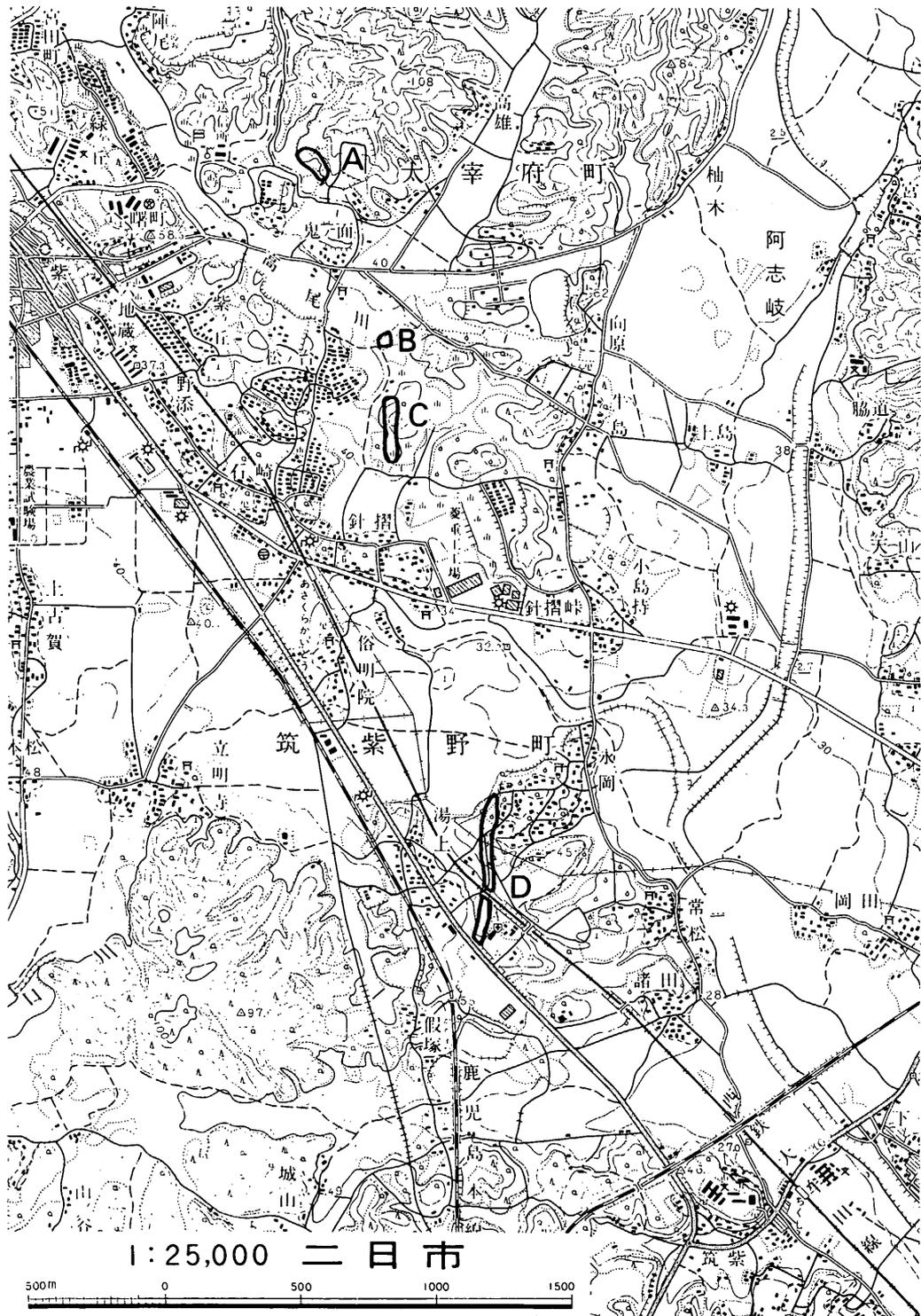
教 育 長	吉 久 勝 美
教 育 次 長	森 田 実
文 化 課 長	杉 原 信 彦
課 長 補 佐	岩 下 光 弘
課 長 技 術 補 佐	渡 辺 正 気

庶務会計

庶務係長	赤 司 岩 男
主 事	小 川 浩 一 郎
”	中 村 一 世

発掘調査

企画主査	藤 井 功	
技 師	松 岡 史	宮小路 賀 宏
	栗 原 和 彦	前 川 威 洋
	亀 井 明 徳	柳 田 康 雄
	酒 井 仁 夫	浜 田 信 也
	副 島 邦 弘	



遺跡位置図 (A : 池田遺跡, B : 大曲り遺跡, C : 野黒坂遺跡, D : 永岡遺跡)



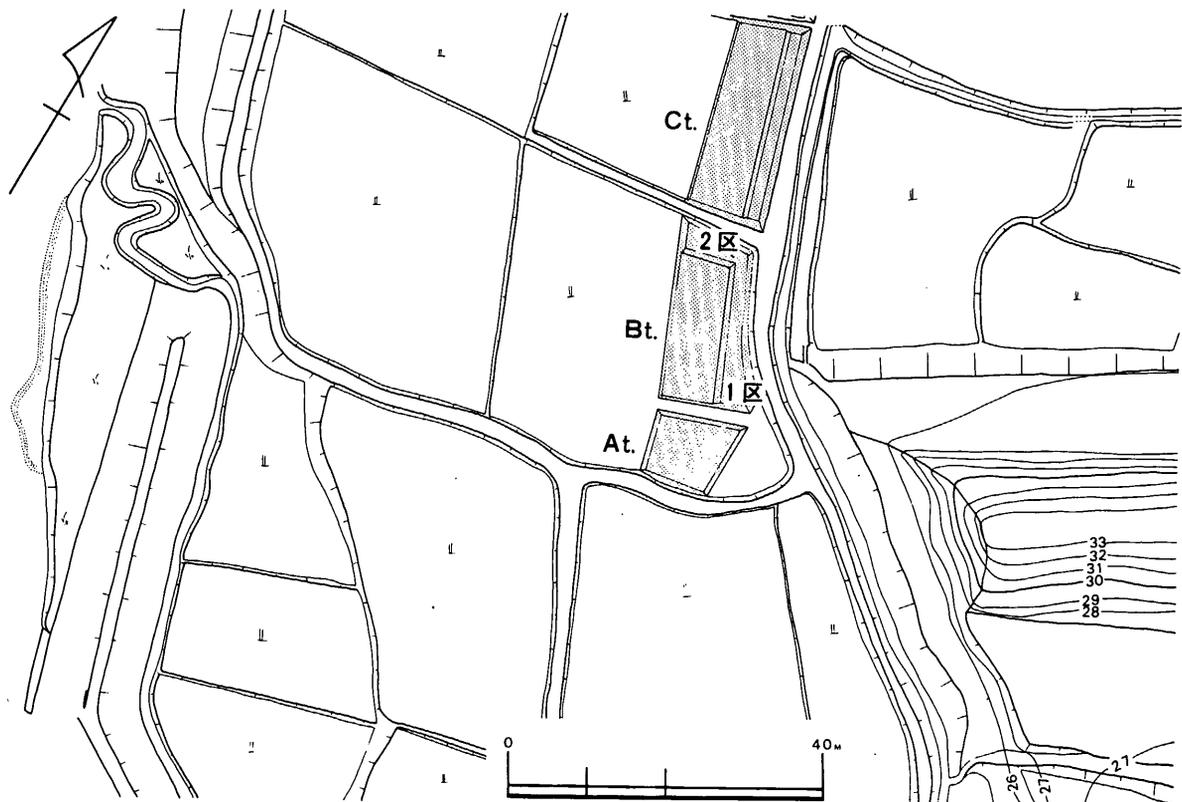
遺跡付近航空写真（A—池田遺跡，B—大曲り遺跡，C—野黒坂遺跡）一万分之一大

水城・五條地区の調査

1. 水城地区（水城跡）の調査

遺跡の位置 水城は四王寺山から延びる一支脈である丸山の麓から吉松山までの東西約10町の間にも築堤されたものである。調査地域は御笠川に接した地点で、川の東側にあたる。調査面積は約1,600㎡である。

検出遺構 調査区にA・B（1, 2区）・C 3本のトレンチを設定し発掘調査を行なった。その結果、各トレンチにおいて多量の河砂の堆積が認められ、地表下約3mの層位で竜泉窯の青磁碗を検出したことより、少なくとも御笠川は中世には現在の水城堤防切断面の真下を流れていたことが判明した。しかし、奈良期・平安期のまとまった遺構は存在しなかった。河床を検出する為にAトレンチにおいて地表約5mまで掘り下げたが、湧水と砂の陥落のために河床には達しなかった。Cトレンチにおいて同様な試みを行ったが、Aトレンチと同様河床には達することができなかった。また発掘調査と並行して水城堤防の一部実測調査を行った。出土遺物は弥生中期の土器、古墳時代の須恵器、平安時代の土師器・瓦片それに青白磁を検出した。しかし、川の流れによって運ばれて来たものであるため層位的には明らかにしえない。



水城地区地形実測図

2. 五条地区（大宰府条坊）の調査

五条地区大宰府条坊の調査は2月から約880㎡について行なった。現在も調査を継続している状況なので、ここではその概略を述べるに止める。

Aトレンチ 3区で南北溝を検出した。中世以降のものであるが、御笠川の氾濫のため他の関連遺構は確認できなかった。

Bトレンチ 南北と東西に直交する杭列を検出した。恐らく水田遺構の一部であろうか、今後の調査を待ちたい。

Cトレンチ 小柱穴を多数検出した。トレンチの範囲内で遺構の性格を即断することはできないが、西端では鉾津がかなり出土している。

Dトレンチ トレンチの中央に幅2mの南北溝を検出した。真南北にのびる溝で、平城京等の例からみて道路の側溝と考えるとよからう。**Eトレンチ**で検出した現在の道路の下に入る南北溝の間12mが道路敷と考えられる。この道路を条坊制の七坊に考える場合、大宰府政庁中軸線から710mである点、更に出土遺物がほとんど中世のものである点、この道路がどこまでさかのぼり得るか今後の問題である。遺物も溝から下駄・農具等木製品が大量に出土している。

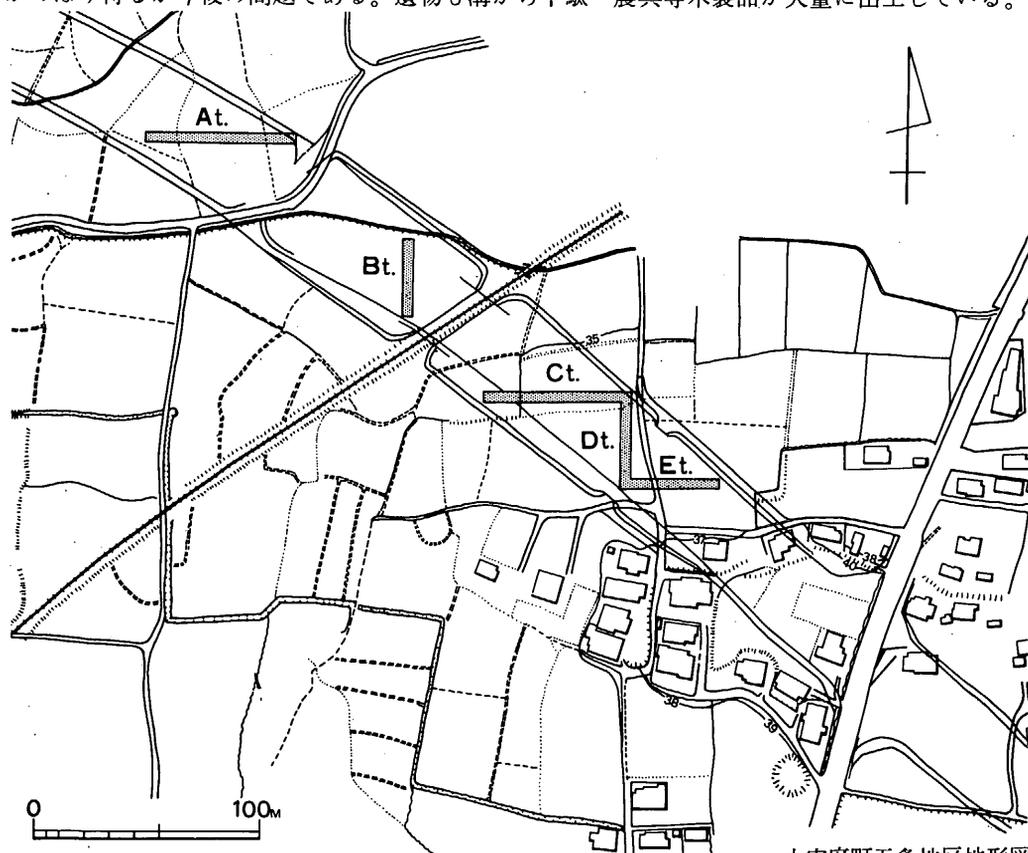


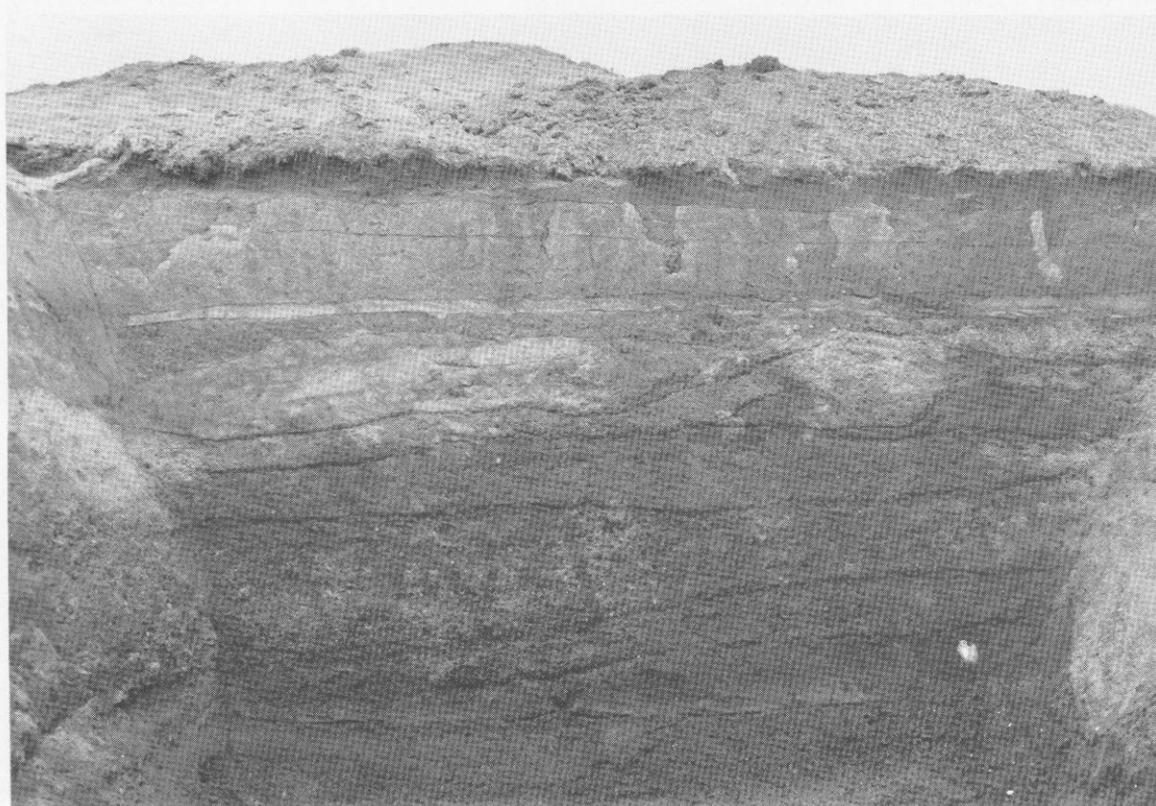
図 版



水城全景 (西南から)



(1) 水城Bトレンチ (東から)



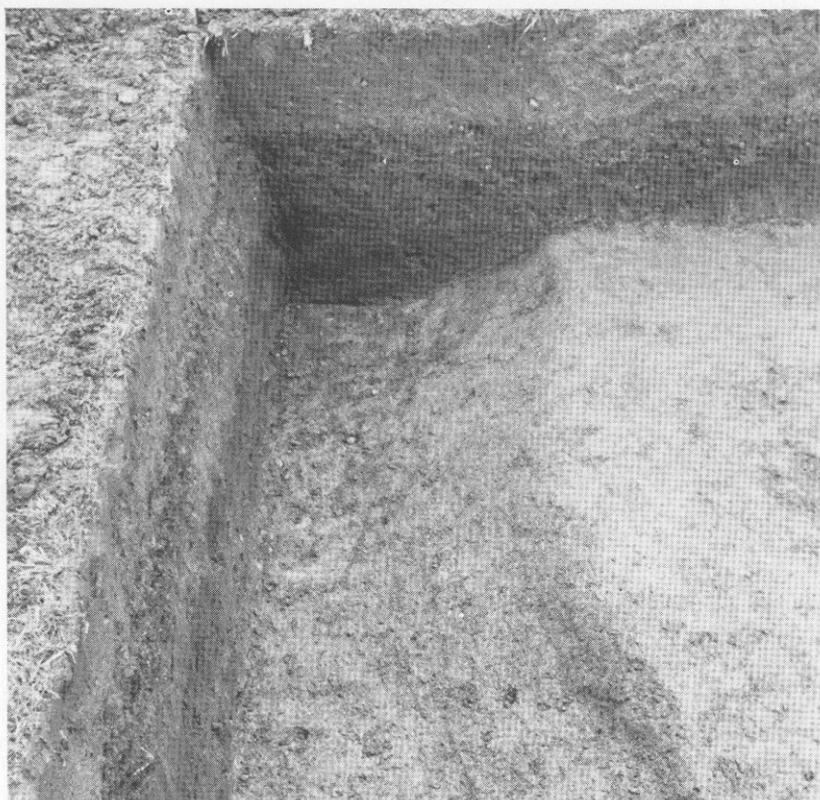
(2) 水城B 2トレンチ西壁 (東から)

(2) 同右北壁 (南から)



(1) 水城Cトレンチ (北から)





(右) (下)
同左 Bトレンチ全景(北から)
五条地区Aトレンチ南北溝





(1) 五条地区Cトレンチ桂穴郡(西から)



(2) 同上 桂穴内土器出土状態

池田遺跡

筑紫郡太宰府町所在，古墳・鉦跡・住居跡・窯跡の調査

本文目次

1. はじめに	宮小路 賀 宏	4
2. 位置と環境	前 川 威 洋	5
3. 遺溝・遺物の概要		6
1. 第1調査区		
(1) 池田古墳群	栗 原 和 彦	6
A. 第1号墳		6
B. 第2号墳		9
C. 第3号墳		11
(2) 釦 跡		14
(3) 窯 跡		16
小 結		18
2. 第2調査区		
(1) 窯 跡	宮小路 賀 宏	19
A. 第1号窯跡		19
B. 第2号窯跡		21
C. 第3号窯跡		22
D. 第4号窯跡		23
小 結		24
(2) 住居跡	前 川 威 洋	25
A. 第1号住居跡		25
B. 第2・3号住居跡		25
4. 第2調査区第1・4号窯跡出土鉄滓について	坂 田 武 彦	30

(当遺跡報告の編集は栗原が担当した。)

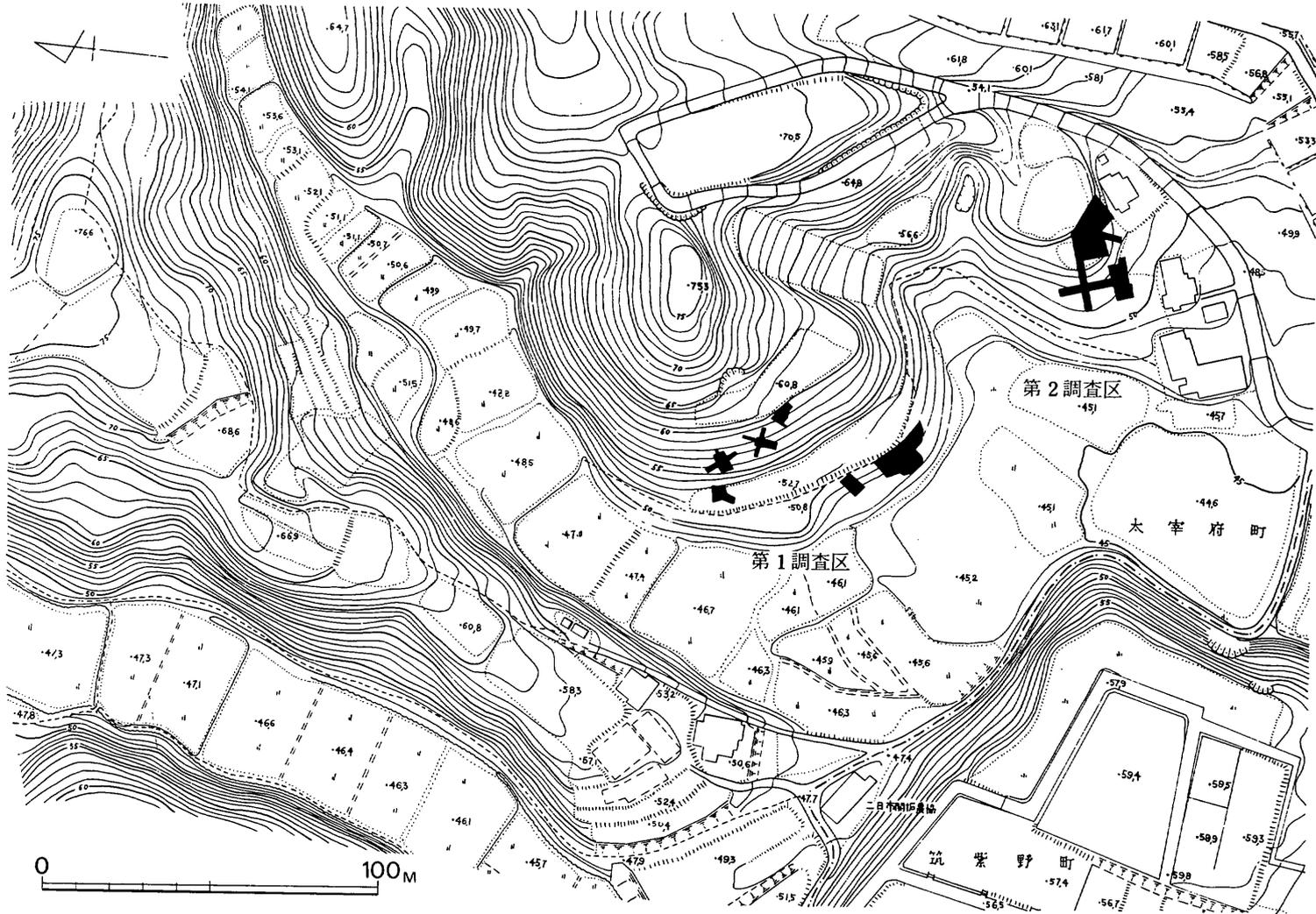
図 版 目 次

	本文対照頁
図版 1 (1) 第 1 号墳石室	8
(2) 第 1 号墳遺物出土状態及び遺物	8
2 第 2 号墳石室及び遺物	9・11
3 (1) 第 3 号墳遺存状態	11
(2) 第 3 号墳出土須恵器	11
4 (1) 鈿全景	14
(2) 鈿中心部	16
5 (1) 鈿 (鉄滓除去後の状態)	16
(2) 鈿 (溝断面の状態)	16
6 (1) 第 1・2 号窯跡全景	20・21
(2) 第 1 号窯跡舟底状窪部と燃烧孔	20
7 (1) 第 4 号窯跡全景	23
(2) 第 4 号窯跡焼成部と燃烧孔	23
8 (1) 第 4 号窯跡舟底状窪部と燃烧孔	23
(2) 第 3 号窯跡	22
9 (1) 第 1 号窯跡舟底状窪部土層	20
(2) 第 4 号窯跡舟底状窪部土層	23
10 (1) 第 1 号住居跡	25
(2) 第 2・3 号住居跡と第 3・4 号窯跡	25
11 出土遺物	27

挿 図 目 次

第1図	遺跡付近地形図（九州地方建設局原図，宮小路製図）	3
第2図	池田古墳群地形図（栗原製図）	7
第3図	第1号墳出土須恵器実測図（栗原実測製図）	8
第4図	第1号墳実測図（栗原製図）	とじこみ
第5図	第2号墳遺物出土状態	9
第6図	第2号墳実測図（栗原製図）	10
第7図	第2号墳出土須恵器実測図（栗原実測製図）	11
第8図	第3号墳実測図（栗原製図）	12
第9図	第3号墳出土須恵器実測図（栗原実測製図）	13
第10図	第3号墳出土須恵器実測図（栗原実測製図）	13
第11図	第3号墳出土耳環実測図（栗原実測製図）	14
第12図	鉦跡付近地形図（栗原製図）	14
第13図	鉦跡実測図（栗原製図）	とじこみ
第14図	弥生式土器実測図（栗原実測製図）	15
第15図	窯跡	16
第16図	窯跡実測図（栗原製図）	17
第17図	第2調査区地形図（宮小路製図）	19
第18図	第1・2号窯跡及び第1号住居跡実測図（宮小路製図）	とじこみ
第19図	須恵器実測図（前川実測・宮小路製図）	21
第20図	第3号窯跡実測図（宮小路製図）	22
第21図	第4号窯跡実測図（宮小路製図）	とじこみ
第22図	第2・3号住居跡実測図（前川製図）	25
第23図	第2・3号住居跡出土須恵器実測図（宮小路実測製図）	26
第24図	第2・3号住居跡出土須恵器実測図（宮小路実測製図）	27
第25図	第2・3号住居跡出土須恵器へう記号（宮小路手拓）	28
第26図	住居跡出土土師器実測図（宮小路実測製図）	29

なお、地形及び遺構の実測は、調査参加者全員で作成した。



第1図 池田遺跡地形図 (九州地方建設局原図)

1. はじめに

調査は昭和44年度と昭和45年度の2年度にわたり、次の4次に分けて実施した。

第1次調査（昭和44年9月29日～11月5日）

第1調査区に古墳が5基程所在するという分布調査結果にもとづき、この古墳群と周辺の遺構確認を目的として実施した。しかしながら路線内には3基の古墳と窯跡1基しか確認できなかった。

なお、鉄滓の出土する地点が路線内にあることがわかり、製鉄跡として発掘に着手した。

また、10月13日に土地所有者長岡氏から、南東方100mの丘陵で開拓中窯跡を発見した由を聞き、路線内にあることからここを第2調査区として発掘に着手した。ここからは窯跡2基と住居跡1棟を発見し、北側の窯を第1号窯跡、南側を第2号窯跡、住居跡を第1号住居跡とした。

製鉄跡の発掘は、調査員にとっては初めての経験であるので、広島大学潮見浩助教授と九州大学工学部坂田武彦助手に調査指導をお願いし、調査の万全を期した。

第2次調査（昭和44年11月20日～12月26日）

前回の調査でほぼ遺跡の所在を知ることができたが、製鉄跡周辺及び第2調査区にはなお同様の遺構が広がるのではないかと考えられたので一応調査を中止し、体勢をととのえ第2次調査を開始した。

坂田助手は、第2調査区の第1号窯跡を製鉄遺構ではないかとの意見を出された。この窯からは何らの遺物の発見もなく、特殊な形態の窯であるので、その性格の判断に大変困惑していた。すると土地所有者長岡氏からまた窯跡が近くにあったとの話しを聞き、路線外ではあるがこの窯跡群としての性格を究明する必要から、九州地方建設局の了解を得て調査にかかることとした。

第3次調査（昭和45年2月23日～3月28日）

第1・2号窯跡の東15mの地点の発掘を開始した。住居跡2棟と、窯跡2基を発見した。特に窯跡の1つは第1号窯と同形式のもので、また窯体の天井部が遺存しているようであり、この窯によりその性格が判明できるのではないかと期待が持たれた。しかしながらこの窯体の中軸に添って約2mの崖が被さっていて、陥没の恐れがあるため舟底状窪みを完掘し、窯体内の発掘は次期に延期した。したがって、残りの日程は第9地点（野黒坂遺跡）の遺構確認調査を行なった。

第4次調査（昭和45年9月25日～10月12日）

第2調査区の調査未了の窯跡(第4号窯跡)の発掘を行ない、この池田遺跡の調査を終了した。

調査関係者は次のとおりである。

調査指導員

広島大学文学部助教授	潮見 浩
九州大学工学部助手	坂田 武彦

調査員

福岡県教育委員会文化課技師	宮小路 賀宏
"	栗原 和彦
"	前川 威洋
"	柳田 康雄
"	副島 邦弘

なお、第3次調査の第9地点遺構確認調査には次の調査員の協力があった。

国学院大学大学院	鈴木 敏弘
"	下沢 公明

また、この調査には土地所有者長岡亀三郎氏や石丸洋氏及び下記の学生諸君の協力があった。

記して深甚の謝意を表する。

福岡大学 水城一俊, 桜井康治, 山崎茂孝, 肥山正秀, 長野卓司ほか。

国学院大学 赤崎敏男

熱残留磁気の測定にあたっては、

東京大学理学部教授	渡辺 直経
" 助手	鈴木 正男

をお願いした。

2. 位置と環境

遺跡は福岡県筑紫郡太宰府町大字太宰府字池田にある。北方の宝満山から南に延びた台地の端は、二日市の東南部で標高50～70mの段丘状の起伏のゆるやかな地形となる。この中に大曲り遺跡、野黒坂遺跡がある。その中を高尾川が流れ、せまい水田をつくっている。その北のやや小高い山のふもとへの入りこんだ谷のそばに池田遺跡がある。この小さな谷には現在水田が、い

となまれているが、生産性は高いとは思われず、生活の場としてはあまり良好とはいえない。この地が戦後開拓されて現況を呈したことからそのことがうかがえる。しかし、南に面し、また湧水も多く、付近の山森から薪を取ることも容易であり、工房などの立地には良好であろう。

3. 遺構・遺物の概要

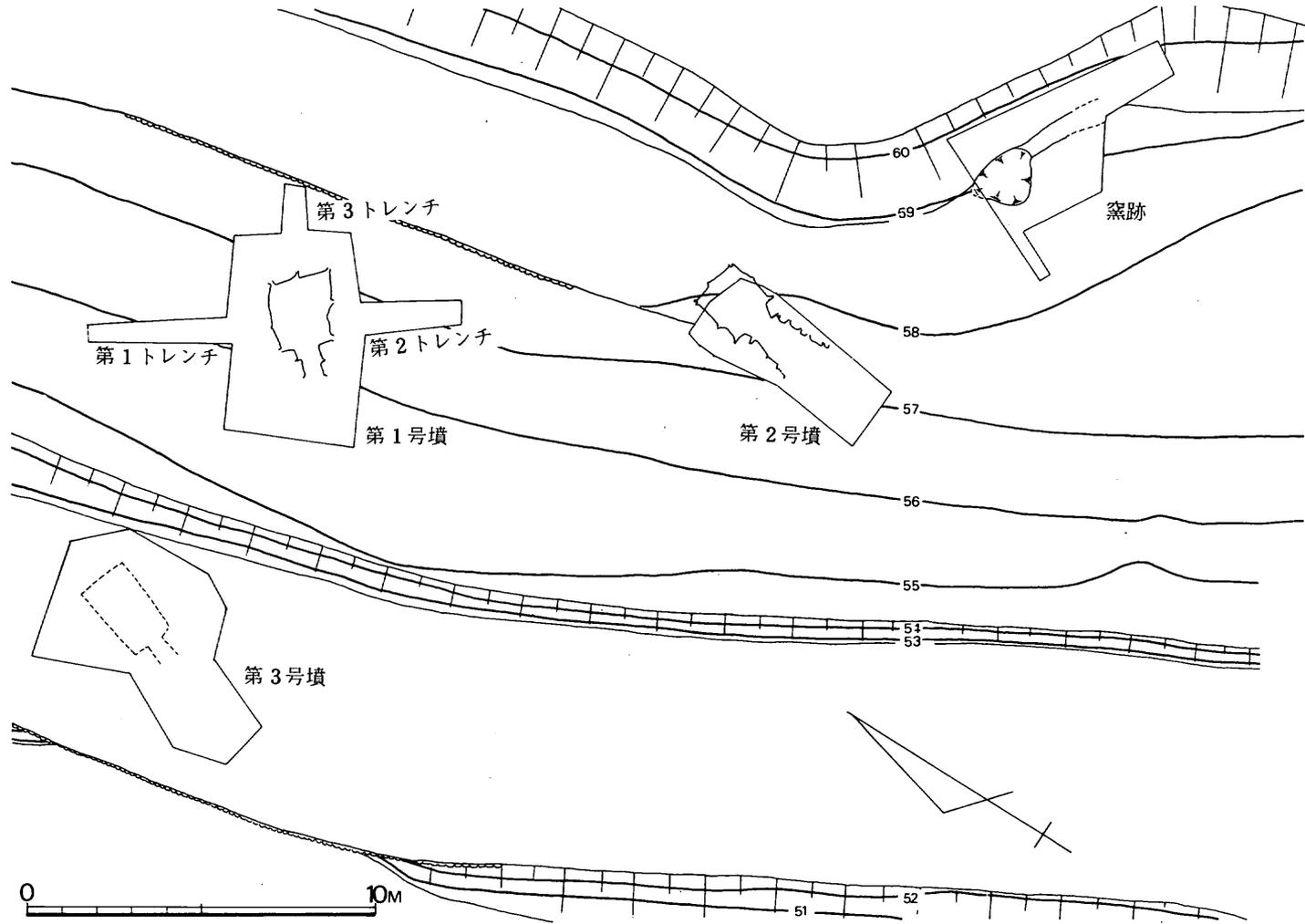
1. 第1調査区

池田遺跡のうち、北西部の丘陵の西側斜面を池田遺跡第1調査区とした。この場所は、地主長岡亀三郎氏が戦後、満州から引揚げて開拓にあられた場所で、現状は、荒地となっているが、最近まで畑地としていた場所である。この地点では、谷頭から連なる水田が北西から南東に階段状に連なり第1調査区付近で標高46m～47mである。遺跡は、この東の畑地化された部分に残存するもので、水田から丘陵に上った標高48～50mの場所に大鍛冶の跡、標高52～58mの地点で古墳3基、標高59mの地点に窯跡1基が、南バイパス予定路線内で発掘調査された。以下その概要を報告する。

(1) **池田古墳群** (第2図、図版1～3) 池田古墳群は、今回、発掘調査を行ったもの3基とこの丘陵頂上部標高75.3mの地点に1基と4基が数えられた。これらの古墳は、発掘調査時には、すでに全壊もしくは、半壊していたもので、副葬品なども持ち去られたようである。3基の古墳は、発掘調査の順に、池田1号墳・池田2号墳・池田3号墳となづけた。今回は予定路線からはずれて、破壊をまぬがれた頂上部の1基は、くずれてはいるものの石材が大きく、この付近では一番大きな古墳であると思われる。

A. 第1号墳 (第4図、図版1) 標高56～57mの丘陵西斜面に立地する。地表からは、横穴式石室の一部が見られるだけであった。調査は、まず石室の内部および石室前面の発掘からとりかかり、後に墳丘の規模、石室の構築法などを知るために側壁の左右および、奥壁のうしろにトレンチを設定した。

墳丘 墳形は、古墳自体が畑地化されてしまっていたため、断定すべき材料はなにもないが、一般的に考えるなら円墳であったものと思われる。墳丘の大きさは、第2トレンチの封土の端と考えられるところが、石室の中心から370cmほどであるので径約7～8m程の大きさと考えられようか。第3トレンチでは、石室の裏込めの土、封土を知ることが出来たが、丘陵に寄せ



第2図 池田古墳群地形図 (縮尺 $\frac{1}{200}$)

かけて築造された古墳であり、幾分短くなっている。なお、第2トレンチで古墳築造以前の落込みを、第3トレンチでも、古墳築造時又はそれ以後の落込みが見られたが、時期・性格などは不明である。

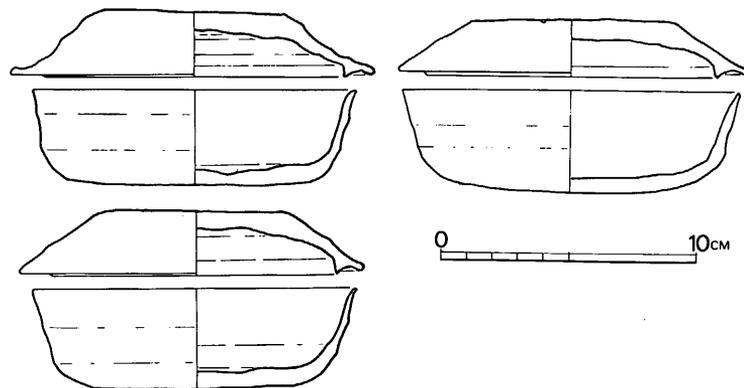
石室掘り方 第1トレンチおよび第2トレンチから横巾を見ると380cmで第2トレンチの地山からの掘り方が掘られている。第3トレンチでは石室の裏込めに互層に土を積んでいるが、第1トレンチ・第2トレンチでは、かなり簡単に裏込めをしていることが知られた。

石室 花崗岩の自然石で構築された横穴式石室は、主軸を約N51°Eにとっている。すでに天井石はなく側壁も幾段かは抜き取られたものと思われるが、床面から約1mほどまで壁を残していた。

石室の規模は、全長280cm、玄室長190cm、玄室巾奥壁で175cm、羨道長90cm、巾80cmである。玄室の石積みは、まず大きな石から横積みし、やや持送式に架構する。また、その間隙に小石をつめている。羨道部は、高さ50cm程の石を門柱状に立てて使用し、羨道前面は、2～3石を横積みしている。玄室床面は、15×15cm程の石を敷きならべているが、玄室前面は、盗掘を受けた際に抜かれたものかと思われた。なお、玄室左袖の部分から、3組の蓋杯と、や・右によった部分で鉄滓とが出土した。この鉄滓は、丘陵下段にある鉦跡出土のものを投げ込んだものと思われた。

出土遺物 (第3図) 池田1号墳の副葬品のうち、確実なものは、3組の蓋杯だけである。3組とも、一見土師器かと思わせるほど赤焼きの土器で、水洗にたえない程脆く、表面に出ている部分は6個体共通して荒れていた。蓋、天井部は、渦巻き状に中心に向かってヘラ削りをしている。体部は、内側と共通してロクロで調整されている。かえりの部分も同様に調整されているのでロクロによって引き出されたものである。かえりが非常に短かいこの種の土器としては、大きめの土器であり、つまみがあったほうが、自然ではないかとさえ思われる。

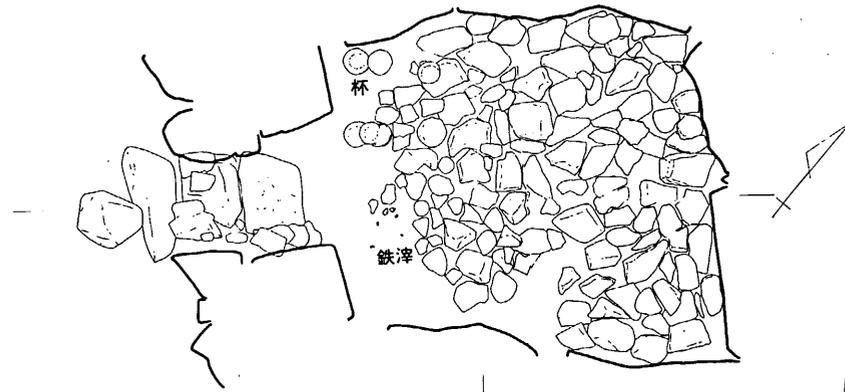
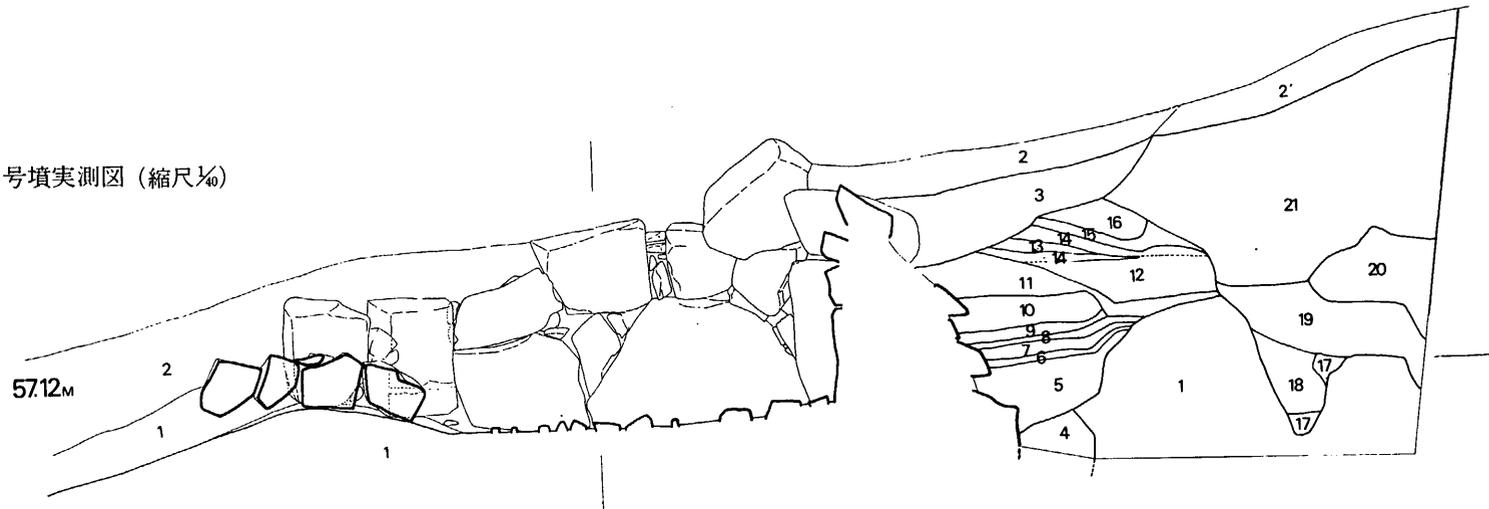
杯、外側底部はヘラ削りである。体部は、偏平な底部から外反しながら立ち上がり口唇部にいたってやや強く外面するものもある。内側は、蓋と同じようにロクロによって調整されている。



第3図 第1号墳土須恵器実測図(縮尺 $\frac{1}{3}$)

第4図 第1号墳実測図(縮尺 $\frac{1}{40}$)

- | | |
|---------------------|-------------|
| 1. 地山 | 11. 赤褐色土 |
| 2. 表土 | 12. 暗褐色土 |
| 3. 黒色土
(開拓による埋土) | 13. 黄褐色土 |
| 4. 黒褐色土 | 14. 赤褐色土 |
| 5. 赤斑褐色土 | 15. 褐色土 |
| 6. 褐色土 | 16. 赤褐色土 |
| 7. 黄褐色土 | 17. 黄褐色土 |
| 8. 暗褐色土 | 18. 黒褐色土I |
| 9. 赤斑褐色土 | 19. 黒褐色土II |
| 10. 暗褐色土 | 20. 黄褐色土 |
| | 21. 黒褐色土III |



0 1M



- | |
|----------|
| A. 地山 |
| B. 赤褐色土 |
| C. 暗褐色土 |
| D. 黄色砂質土 |
| E. 黄斑黒色土 |
| F. 茶褐色土I |

- | |
|------------|
| G. 淡赤茶色土 |
| H. 茶褐色土II |
| I. 茶褐色土III |
| J. 赤褐色砂質土 |
| K. 黒褐色砂質土 |
| L. 暗褐色砂質土 |
| M. 黄褐色砂質土 |

- | |
|-----------|
| N. 黄褐色粘質土 |
| O. 茶褐色砂質土 |
| P. 暗黄褐色土 |
| Q. 茶褐色粘質土 |
| R. 褐色砂質土 |
| S. 黒色粘質土 |

- | |
|-----------------|
| T. 赤茶色粘質土 |
| U. 灰褐色砂質土 |
| V. 淡黄赤色土 |
| W. 黄赤色粘質土 |
| Y. 黄赤褐色砂質土I |
| Y'. 黄赤褐色砂質土II |
| Y''. 黄赤褐色砂質土III |

B. 第2号墳（第5図，図版2） 池田1号墳の南東6mに池田2号墳がある。池田1号墳よりや、高い位置にあるが、1号墳同様、マウンドもなく石室天井石もなかった。

発掘調査は石室の清掃と羨道部閉塞石・墓道の1部の調査を行なった。同じような状態で出
墳丘 標高58mの等高線がわずかに弧状にまがるだけで墳形を知ることは、池田1号墳同様出来ない。

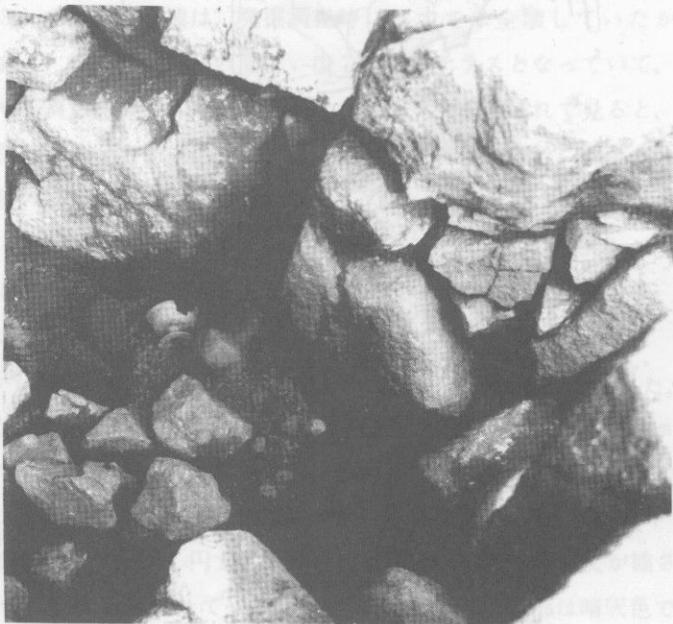
石室 花崗岩の自然石で構築された横穴式石室で、主軸は約N10°Eと南北線に近い。池田1号墳同様天井石はすべて失われているが奥壁の石積みの高さは、床面から180cm程までは、ここの古墳構築時のものであり、天井も床面より200cm前後のところと考えてよいものと思う。

石室の規模は全長334~365cm、玄室長左壁で165cm、右壁で150cm、羨道部長、左壁170cm、右壁220cmである。玄室の石積みは、いずれも横積みであるが、側壁、奥壁とも持送り式架構をとっている。

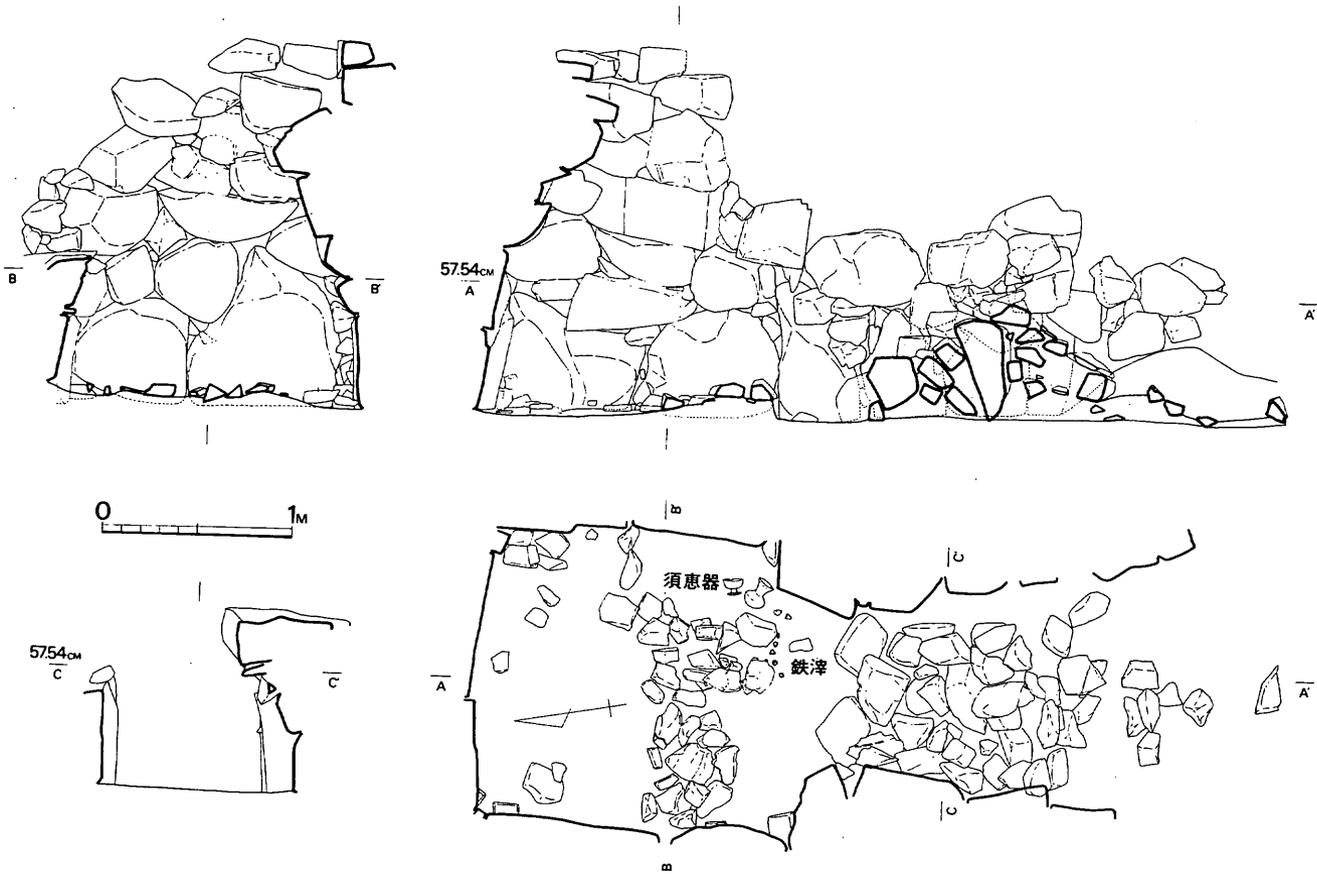
羨道部は、池田1号墳よりや、大きめの60cm前後の石を1段目だけ立てて使いその上には石は横積みにして、大きい石と石との間隙に小石をつめて積んでいる。羨道部前面は、右壁が丘陵よりになるため、墓道の東側のみ2石分だけ地山の上に石積みをしているので、左壁に比較して40cm程の高さの相異が生じている。

玄室床面は、15×10cm程から20×25cm程の石を敷いているがその3分の2近くは抜かれている。この古墳で特におもしろいと思われたのは、閉塞石の置き方である。まず30×30cm程の石を、

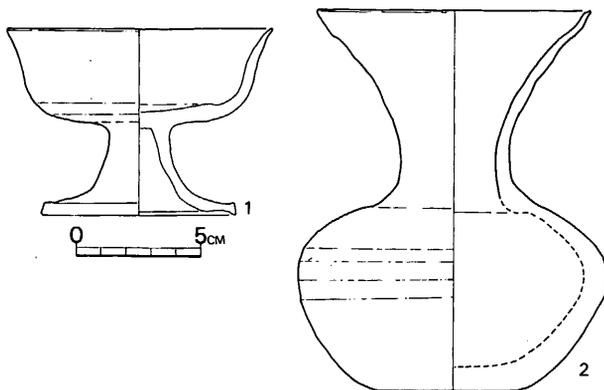
両袖石近くに置き順次石を立てかけて行き、ほぼ中央で50×60cmほどの大きさの板石を立てかけている。この板石より外側は、石がかなり小ぶりになり、板石の内側と外側とでは、最初に埋葬した時と二次的な埋葬との差があるものと思われたことであった。なお、出土遺物は、玄室右袖から須恵器が2点、小型の高杯と小型の壺が出土し、その左の部分から鉄滓が出土したが、鉄滓は池田1号墳同様、後に投げこまれたものであろう。



第5図 第2号墳遺物出土状態



第6図 第2号墳実測図(縮尺 $\frac{1}{40}$)



第7図 第2号墳出土須恵器実測図(縮尺1/4)

側接合部は、へら削りと思われた。胎土、焼きとも良くなく、淡灰白色の土器である。小型壺は、完形品で口唇部は、焼きひずんでいる。ちょっと見ると醜かと思うような形である。底は、渦巻状のへら削りをし、胴部中程までへら削りである。胴部中程では、巾7mm程の削り跡が段をなしている。頸部は内外とも横なでである。胴部内側のつくりはみられないが、頸部と胴部は、別々につくってはり合わせたものであろう。灰色の堅い焼きで、胎土に砂粒を含む。

出土遺物(第7図) 玄室
右袖で須恵器の高杯と小型の壺が、東側に倒れた状態で出土した。高杯 口径10.5cm、高さ7.4cm、杯部高3.9cmと小型である。坏部は、底部をへら削りし、体部および内側底は、横方向のなでである。体部は外反しながら立ち上がり、口唇部でや、強く外反する。

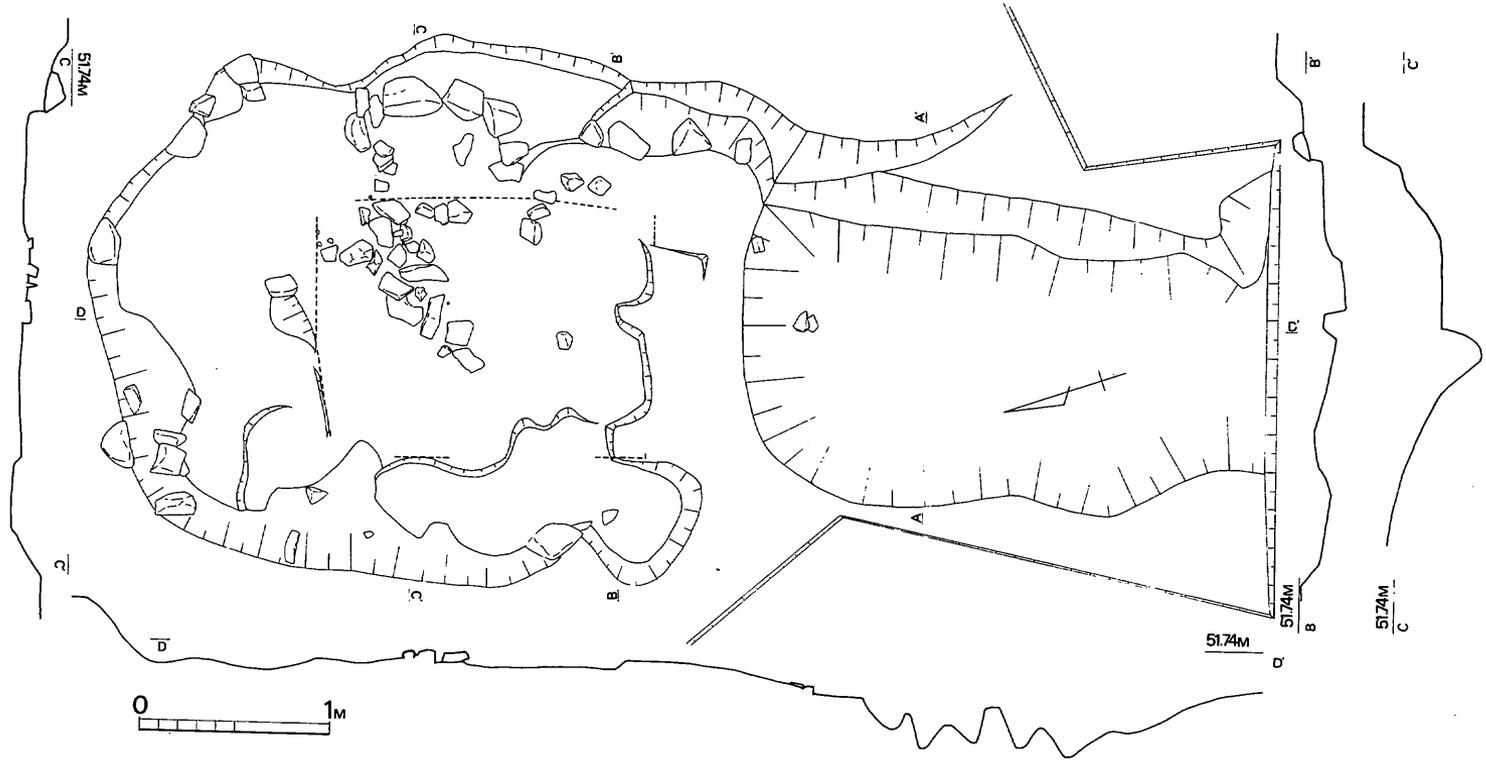
脚部は、外側は横なで、内

C. 第3号墳(第8図、図版3) 池田3号墳は、発掘調査時にはすでに全壊していたが一応の発掘調査を行ったものである。標高52~53mの間は、巾7m程のテラスとなっていて、古墳があったといわれるところで、須恵器の破片がかなり拾えた。トレンチを入れて見ると、敷石の一部と、石室裏込の石と思われるものが検出され、又、羨道部からは、すでに攪乱された状態ではあったが、かなりの量の須恵器が見つかった。

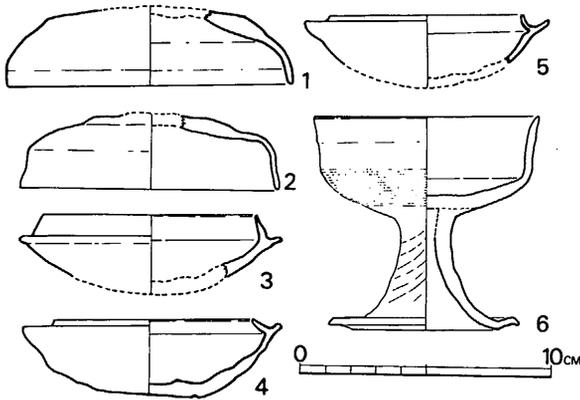
石室 池田1・2号墳同様花崗岩の横穴式石室で、主軸を約N19°Eほどにとっていたものと思われる。石材の抜き跡と思われる浅いくぼみをたよりに玄室の規模を考えるならば、玄室長175cm、玄室巾140cm程の小型の平面形をもっていたものと思われた。

出土遺物(第9・10図) 羨道部から出土した須恵器と、玄室内敷石の周囲から耳環3個が出土した。

須恵器は、甕、高杯、坏、蓋などがある。甕 器高45.4cm、胴部最大巾40.6cm、口縁径22.3cm 頸部から口縁までの高さ5cm程の大きさである。胴部外側は、平行叩板で割合いに丁寧に叩かれた後、2cm巾ほどの間隔でハケ目が施されている。頸部より上は、横なでである。内側は、胴部中程より上は、同心円文、胴部下半は、同心円文に、平行叩目に近い小さな叩打文が施されている。首・胴、底と別々に作ってはりあわせているものである。頸部、胴部は暗灰色で底部は、黄赤色で焼き胎土共に良い。高杯 高さ8.4cm、口径8.9cm、坏部高3.4cmほどの小型のものである。坏部外側下半は、ハケで仕上げられ、他の部分は横なでである。脚部外側には、



第8図 第3号墳実測図(縮尺 $\frac{1}{40}$)

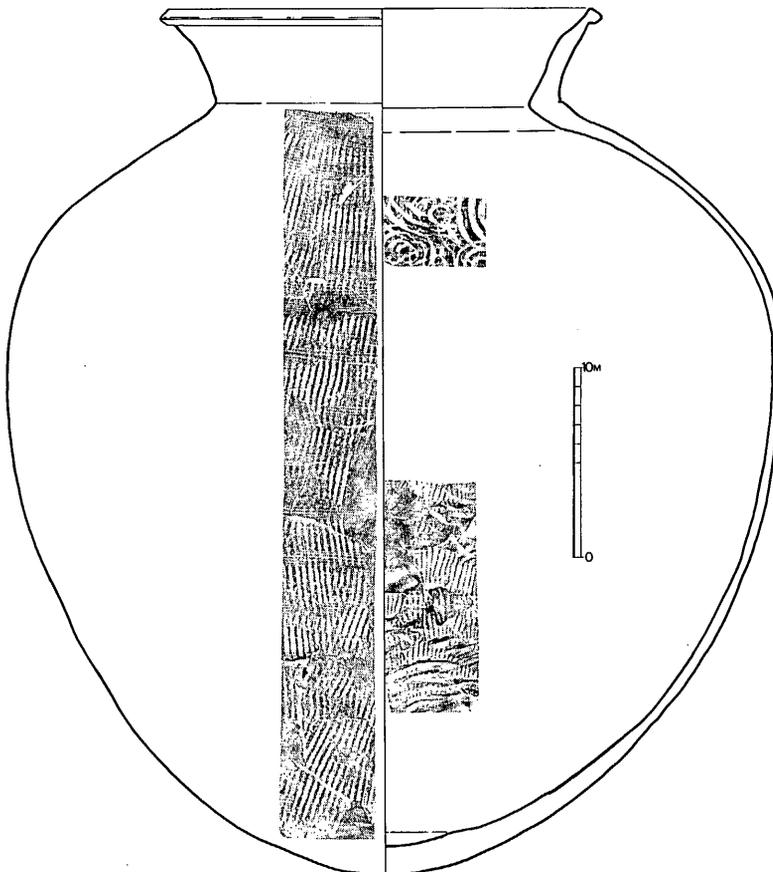


第9図 第3号墳出土須恵器実測図（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）

しぼりのあとがある。灰色で、焼は脆く、胎土も砂粒を含む。坏の蓋，身は，点類は10点近くあったが測ることができるものは，蓋2点，身3点ほどであった。蓋1は，口径11.4cm，高さ3.2cm程で，2は，口径10.2cm，高さ3cm程のものである。どちらも天井部は，渦巻状のへら削り，体部は横なでである。1・2とも，焼，胎土とも良く，暗灰色の土器で堅い。身

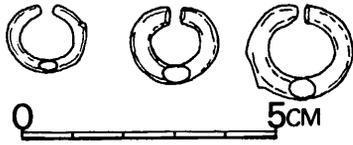
は，3がやや，4・5と異なる。すなわち3は，4・5に比して口縁部の立ち上がりが大きく，蓋受けもやや古い形を示している。4・5は，口縁と蓋受けの部分の高さが，ほぼ同じくらいに退化している。3点とも焼はよく暗灰色で堅い。

耳環，3点のうち，大きいほうの2点は，金環である。小型の1点は，青く錆びついていて金環，銀環とも



第10図 第3号墳出土須恵器甕実測図（縮尺 $\frac{1}{4}$ ）

区別はつかない。断面は、3点に共通して、楕円形である。



(2) 鋤跡 (第14・15図, 図版4・5)

第11図 3号墳出土耳環実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$)

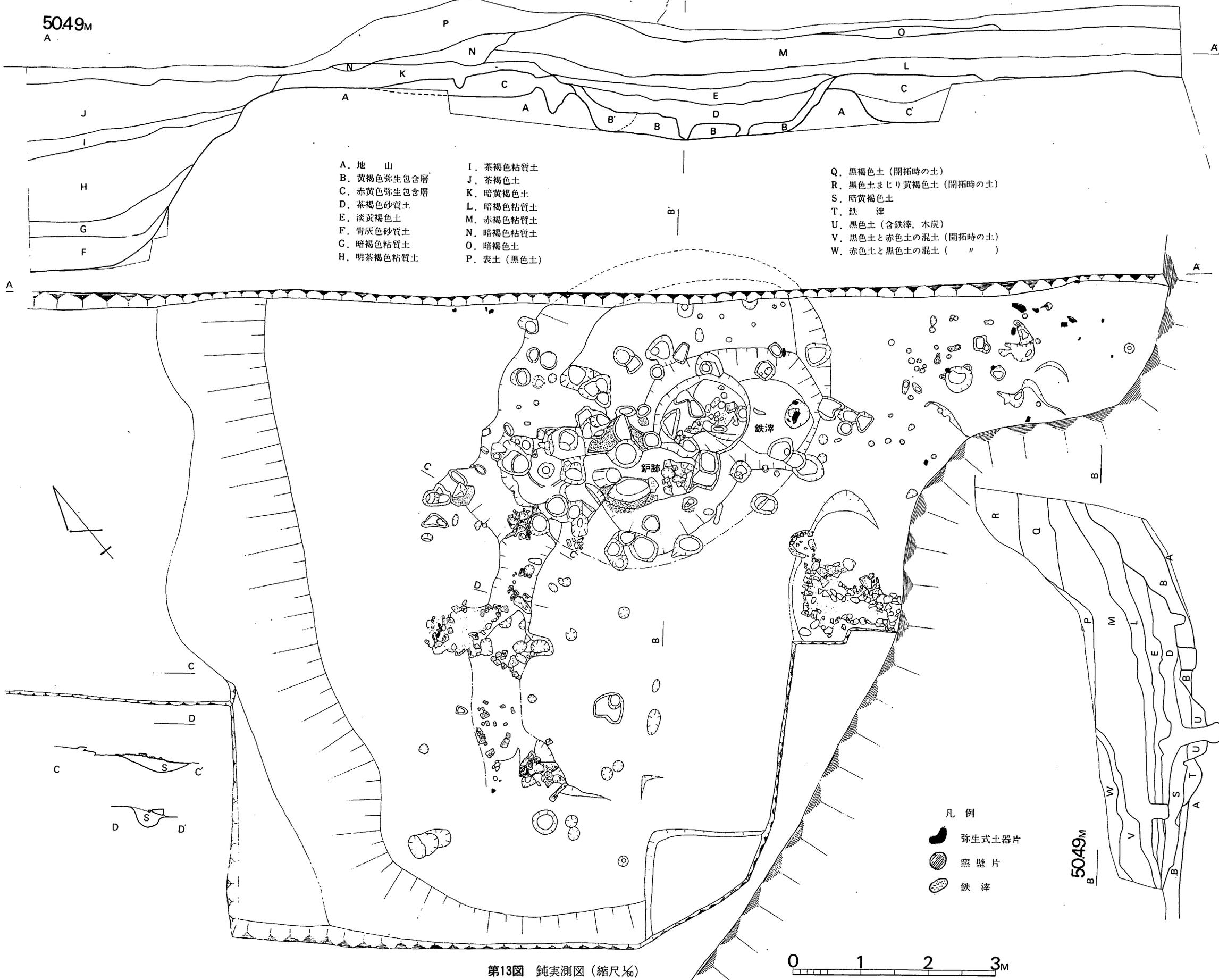
イ. 立地 池田古墳群の南で、丘陵の裾が西から南にまわり込むあたりで、スラッグが多量につまれている場所があった。

これは、土地所有者の長岡氏ご一家が満州引揚げ直後に、ツルハシとスコップ、リヤカーで開拓された折に出土したものであった。長岡氏のご教示にもとずき巾2m、長さ10m程のトレンチを設定し、発掘調査を開始した。このトレンチで、遺構のあることが認められたので、土層図作成後、北側に巾2mを拡大したが、さらに遺構の拡がりが見られたので、こんどは、トレンチの南側、北側を、土層図用の畦畔のみを残して拡大して見た。この結果、



第12図 鋤跡付近地形図 (縮尺 $\frac{1}{400}$)

5049M



- A. 地 山
- B. 黄褐色弥生包含層
- C. 赤黄色弥生包含層
- D. 茶褐色砂質土
- E. 淡黄褐色土
- F. 青灰色砂質土
- G. 暗褐色粘質土
- H. 明茶褐色粘質土
- I. 茶褐色粘質土
- J. 茶褐色土
- K. 暗黄褐色土
- L. 暗褐色粘質土
- M. 赤褐色粘質土
- N. 暗褐色粘質土
- O. 暗褐色土
- P. 表土 (黒色土)

- Q. 黒褐色土 (開拓時の土)
- R. 黒色土まじり黄褐色土 (開拓時の土)
- S. 暗黄褐色土
- T. 鉄 滓
- U. 黒色土 (含鉄滓, 木炭)
- V. 黒色土と赤色土の混土 (開拓時の土)
- W. 赤色土と黒色土の混土 (")

- 凡 例
- 弥生式土器片
 - 窯壁片
 - 鉄 滓

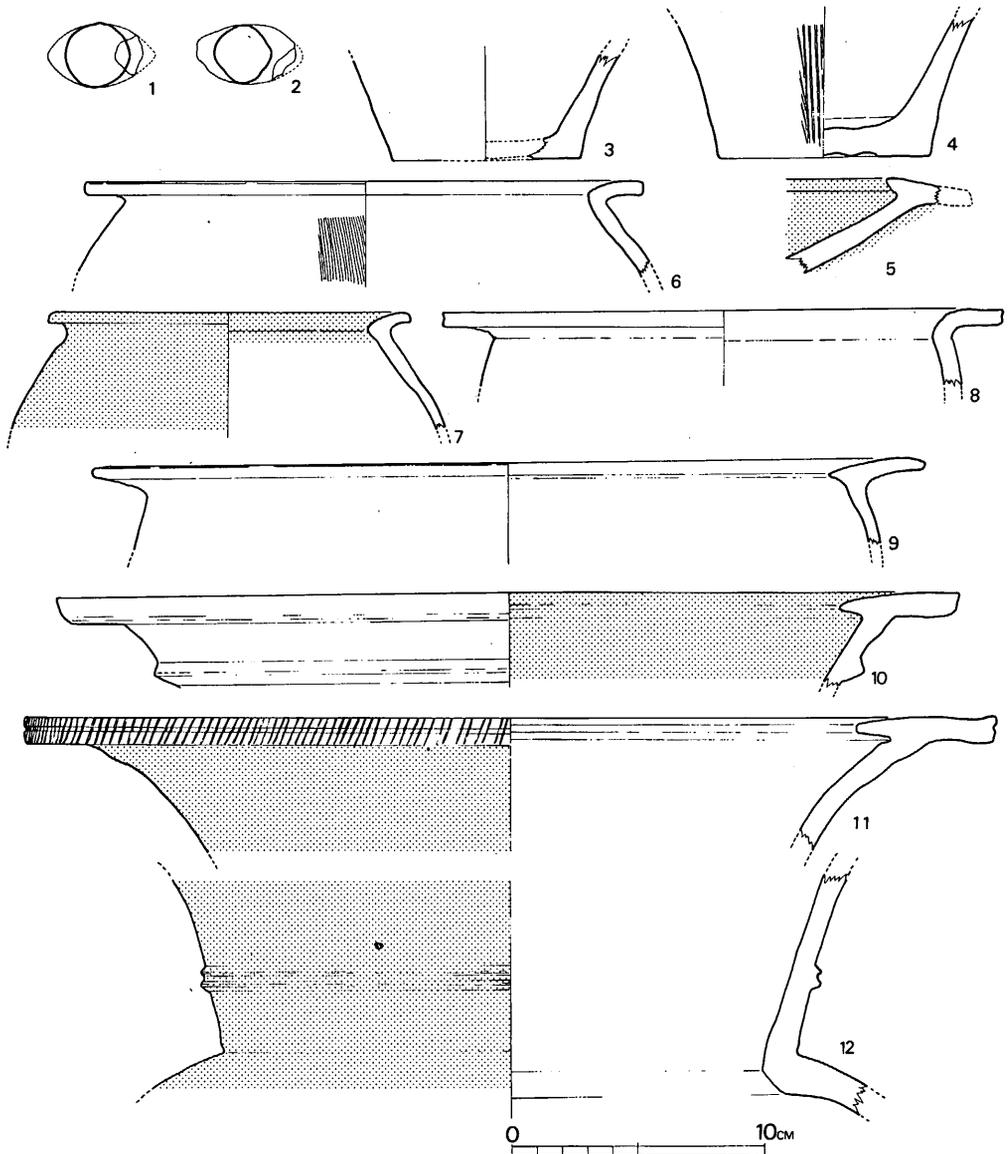
第13図 鈍実測図 (縮尺 $\frac{1}{60}$)

0 1 2 3M

5049M

製鉄所の範囲のほとんどがはっきりしたこと、製鉄所跡の立地する場所が現在の地形と異って舌状にはり出した台地の突端部にあることなどがわかった。

現状では、標高47~50mまでの等高線が西斜面では、3m~4mの間隔で、南斜面では、1m程の間隔でまわっている。製鉄所跡の検出されたトレンチでは、南側は、3m程の傾斜面であり北側は、現地表よりも2.8mほど深い谷になっていることが発掘により知られた。このため



第14図 鉦付近出土弥生式土器実測図（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）

8 m北に、4×6 mのトレンチを入れたが、このトレンチからは製鉄所跡の北側の谷が続いていることがわかりさらに地形測量によってこの谷は、2段上の自然地形の残っている雑木林の中に浅い谷となって残っていることがわかった。この谷の埋められた時期は、不明であるが、北側のトレンチで地山直上から弥生式土器の出土があったので、それ以後の埋没としてよい。製鉄所跡は、この舌状の小丘陵の上端部を1部カットして作られたものである。

ロ. 鉦の構造 鉦の本体は、長軸520cm、短軸420cmほどの楕円形の平面の中にあったものである。この周囲からは、多量の木炭片と、鉦の窯壁、鉄滓など、リング箱にして10杯以上がみつまっている。これらのものを排除すると径100cm、深さ40cmほどの大きな穴と、径10cm～30cm程で深さ40cmほどの穴とが複雑に重なり合ったような状態で見つまっている。穴どうしの新旧の関係は、明らかに新しい穴とわかるものもあるが、多くの穴は、同時のものと考えられた。これ等の穴は、弥生式土器の包含層を、掘り込んだもので、や、西寄りの部分では、包含層および地山が赤く変色している部分があった。この部分の上に鉦がきずかれたものだろうか。この部分の西から、西南方向にかけて、巾40cm、深さ20cm程の溝があり、鉄滓を流し出すための溝かと思われた。この溝は、すでに裾の部分は開墾によって削平され、途中で消えている。

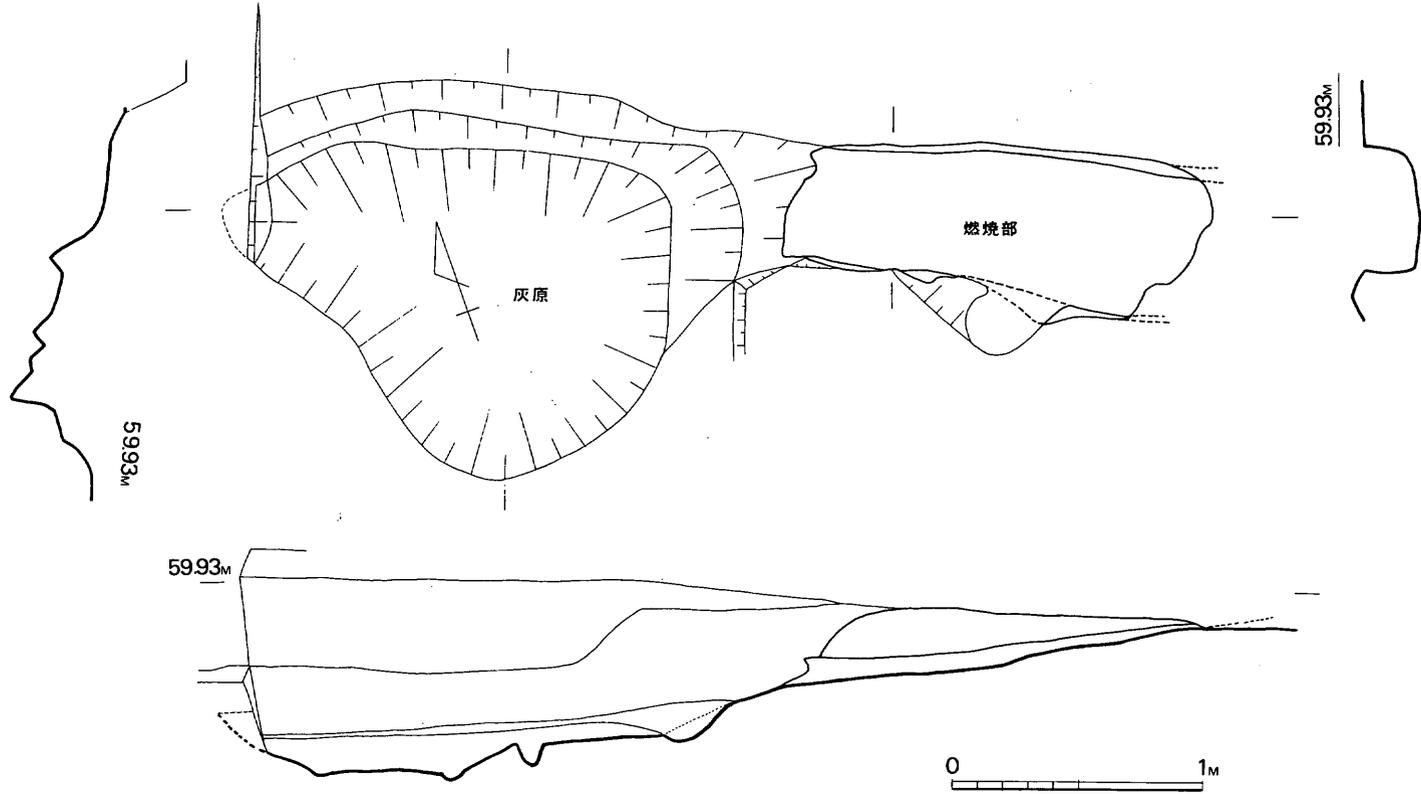
ハ. 遺物 (第16図) 鉦の窯壁・鉄滓・弥生式土器片などがみつまっている。窯壁は、赤灰色に変色し、内にはスサが入っている。鉄滓は、リング箱10杯以上あり、径1cmほどの小さなものから径40cmほどの大きなものまである。弥生式土器は、鉦の穴の中から出土したものがあるが、いずれも同時期のものであろう。第14図の1・2は投弾、5は高杯で表裏が朱塗されている。6・7・8・9は、甕、10・11・12は壺である。これ等のうち、7は外側と内側口縁の周囲、10は内側だけ、11・には外側および平らな口縁部の上面に赤塗されている。

(3) 窯跡 (第15・16図)

池田2号墳の東6 m程のところに登り窯が1基みつまっている。



(2)(丸) 池田2号墳土器出土品 第15図 窯跡



第16图 窑迹实测图

わずかにせまく、小さな灰原と窯の1部を残すだけであったが、これは焚口部と燃焼部と考えてよいだろう。主軸の向きは約N-69°-Wで、燃焼部の巾は45cm程で、約12°の傾斜をしている。出土遺物は灰原でも出土せず、登窯の時期、性格などは不明である。

小 結 池田遺跡第1調査区で、発掘調査した遺跡は、横穴式古墳3基、登窯1基、製鉄所跡1ヶ所である。このうち、登窯1基については、破壊がひどく、時期、性格などについてのべることは出来ない。ここでは3基の横穴式古墳および製鉄所跡について若干、ふれておきたい。

池田古墳群のうち、1号墳・2号墳の石室の石積の特長は、大きな石を横積みにし、持送式に使用し、羨道部のみ石をたてて使っている。

1号墳・2号墳・3号墳から出土した須恵器を比較すると、1号墳の蓋杯の天井部および底部・2号墳の小型壺の底部、3号墳の杯の蓋の天井部に共通して、渦巻状のヘラの目が見られることなどから、3つの古墳ともかなり接近した時期に構築されたものと考えられる。たゞ3号墳だけは、杯の感じから若干、古いのではなからうか。これらの須恵器は、お・よそⅣB期7世紀前半と見ることが出来よう。

⁽¹⁾ 製鉄所跡は、多量の鉄滓を出しながらも、鉄製品を作ったと考えられる要素は、なにもないので砂鉄から、原料鉄を生産したものと考えべきで、大鍛冶の跡と思われる。原料鉄の生産にあたっては、近世の鉦に見られるように、多量の木材、木炭により、鉦を築くための床作りが必要とされる。これは鉦が、湿気を極端にきらうためといわれている。今回の調査で大小様々な穴が見つかったが、⁽²⁾ 径10cm～30cm、深さ40cm程の穴には、木炭片がかなり入っていた。これらの穴は、鉦を築くための床の役をしていたのではないだろうか。又、径1m程の穴は東南部で3つ重なっていた。この中には、鉄滓は、かたまって入っており、少量の鉄滓をかきだすためのものであったかもしれない。鉦の本体は、弥生包含層および地山の焼けた部分から一応推定し得るが、鉄滓の量、径1mほどの穴が重なっていることから考えると、数回使用された可能性がある。又、鞆口が、1点も出土していないことは、自然通風によったためであろうか。

鉦の時期については、弥生式土器の包含層から出土する土器と、なんらかの時に、鉄滓にまじり込んだ土器との間に差はなく、弥生式土器が、中期中葉、須久式であるので、それ以後ということが言えるが、いつの時期と断定できるものは、なにもない。鉦が使用された時期については目下、熱残留磁気の測定中であり、結果をまちたい。

註1. 小田富士夫・真野和夫・柳田康雄「野添・大浦窯跡群」福岡県文化財調査報告書第43集。

註2. 島根県教育委員会「菅谷釜」昭和42年。

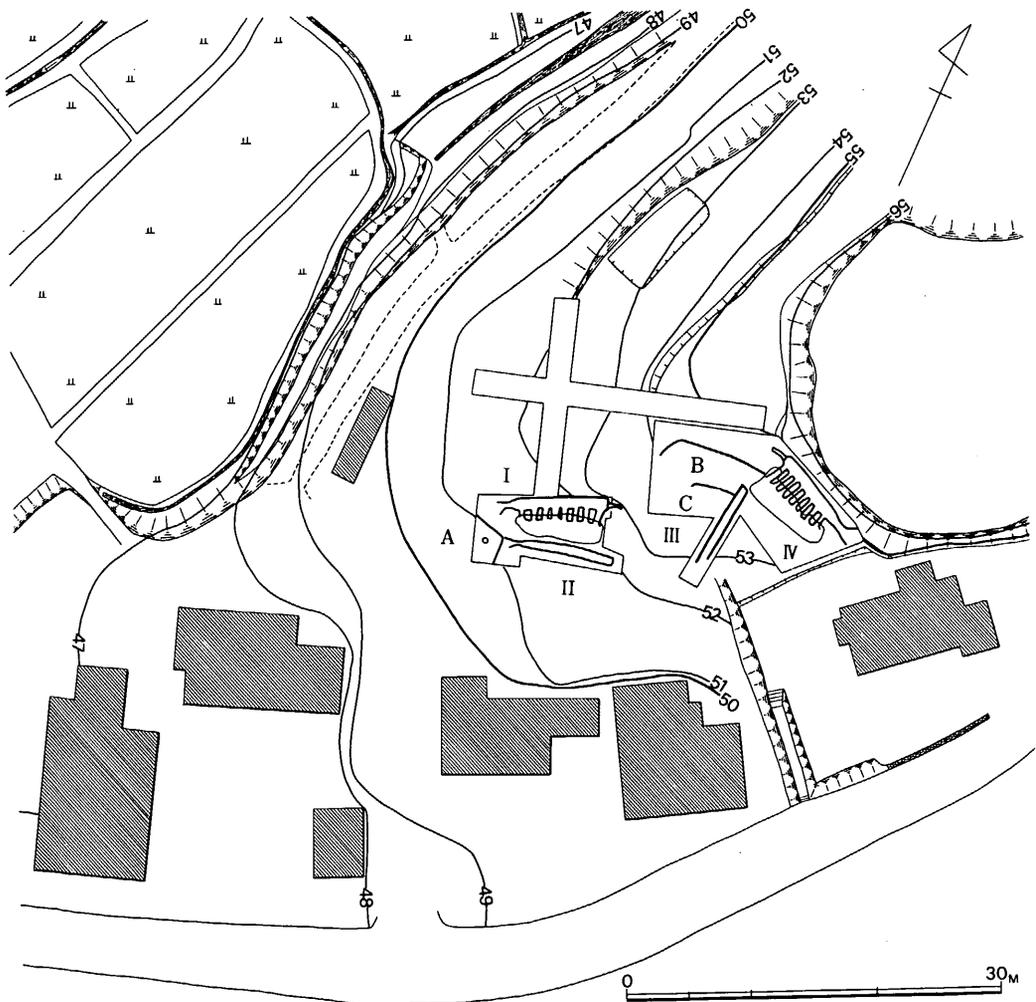
2. 第 2 調 査 区

第2調査区は、第1調査区の南東約100mの地点である。この調査区からは、窯跡4基と住居跡3棟が発見された。住居跡は古墳時代のもので、窯跡については、窯の形態・築造年代・窯業目的に種々の問題を持つものである。

(1) 窯 跡

A. 第1号窯跡

〔立地〕(第17図) 東から西に傾斜する斜面に平行するようにつくられた窯である。緩ら



第17図 第2調査区地形図 (ローマ数字は窯跡番号, アルファベットは住居跡をさす)

かな斜面ではあるが、中軸を稜線からはずし、等高線とも直交しないような地形をとっている。意識的に緩らかな傾斜を求めている窯である。

〔窯の構造〕 (第18図) 窯体の天井部は遺存していないが、ほぼ全容を知ることができる。この窯が特殊であるのは、窯体に添って長楕円形プランの舟底状落込みがあり互いに8本のトンネル状燃焼孔で連絡された形式の窯であることである。窯体及び燃焼孔の壁面には粘土による成形はなく、花崗岩風化土壌の地山が熱を受け約3cmの厚さに焼け固まり、壁の様相を呈している。削りぬき地下式の登り窯である。窯体の中軸は、若干くの字に変形するがほぼN66°Eで、窯床面の傾斜は11°で、焚口から煙道までの長さ9.4mを測る。

灰原における上層は第2号窯跡及び第1号住居跡との関係を第1号住居跡→第2号窯跡→第1号窯跡と示していた。

前庭部 焚口部から前庭部に至る南側壁面は、南にカーブして広がりながら急速に低くなり、楕円形のピットにつながる。この楕円形ピット内には小さな炭を混えた灰以外は遺物の出土はない。長さ1.5m、巾1.2m、深さ33cmを測る。また、このピットと相対する北側壁面は底面より一段高く削りこみ部があるが性格は不明である。

焚口 最も巾が狭く、50cmを測る。この焚口部分はトンネル状燃焼孔に比べ壁面の焼けは少ない。

燃焼部 床面は若干へこむがほぼ水平に近い。巾60cmで、側壁のカーブから天井を復元すると高さ60cmかと思われる。この部分も焚口部と同様に焼けは少ない。

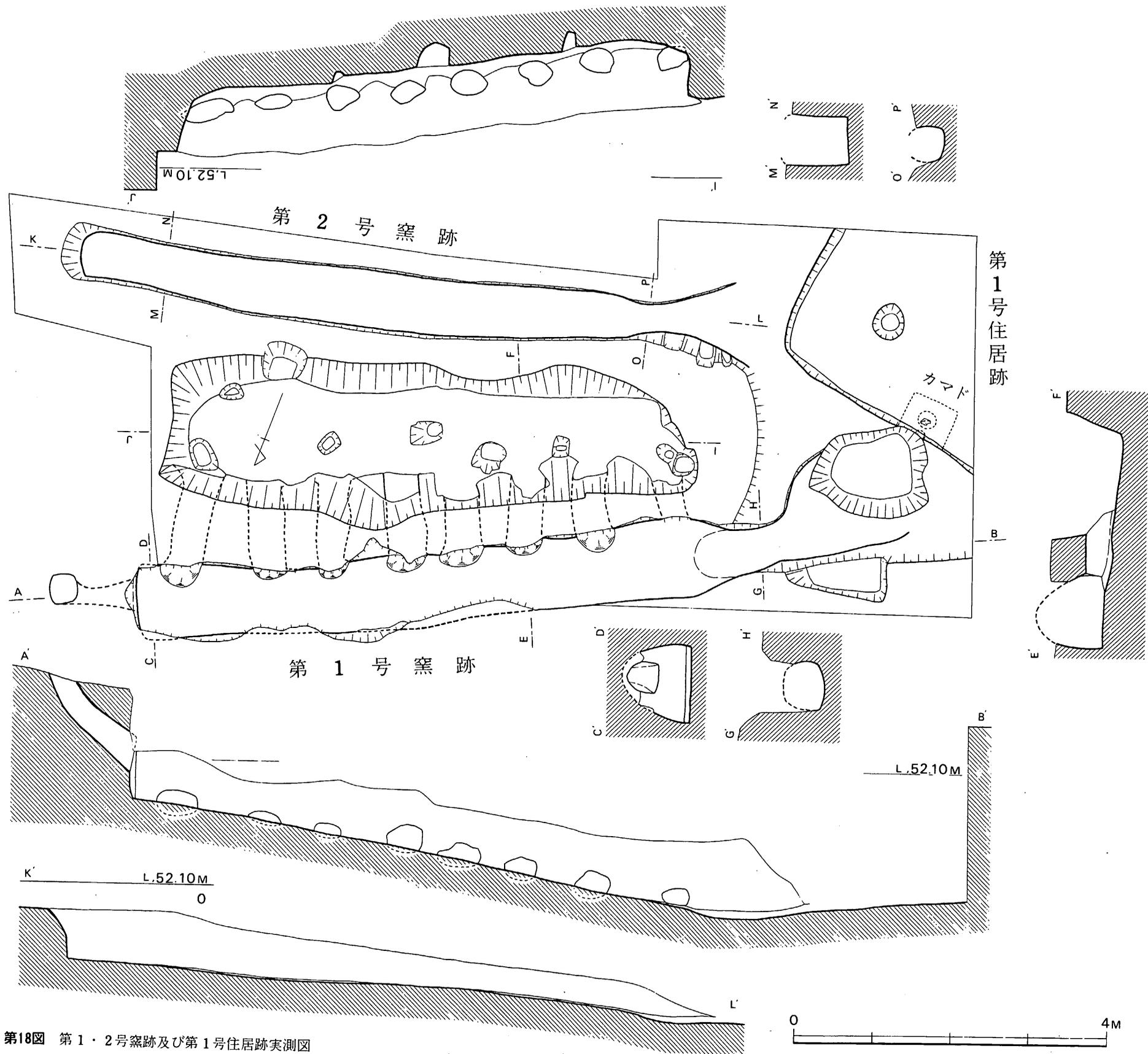
焼成部 窯の大部分を占め、煙出しまでの長さ7.6mを測る。巾は必ずしも一定しておらず、82cmから96cmの間にある。焼成部の横断面形には、最上端部において復元すると、頂部が尖り気味の蒲鉾状をしていたと考えられる。

上半部の床面には、1~1.5cmの厚さの炭塵層があり、非常に固く、表面は若干の光沢を帯びるほどである。下半部にも同様に敷きつめられていたものと思われる。この焼成部の南側壁には床面に接して8本の燃焼孔が付設されている。

舟底状窪部 この1号及び2号窯を探索するために設定したトレンチは、両窯跡の中間に灰を混じえた落込みを発見した。この落込みを発掘することによって1号窯が特殊な窯であることを知ることができたのである。

舟底状窪は焼成部にほぼ等しい長さで6.8m、巾は約1.8m、深さ約76cmである。

床面の傾斜は約7°である。床面は火を受け花崗岩風化土の地山が白く変色している。この焼けは下端にゆくほど強い。舟底状窪部の土層断面(図版9-1)は、7層程の流入土による層が認められ、この流入土の中には窯とは無関係の須恵器・土師器等の破片が若干数発見された。最上層の混炭灰層は燃焼孔から南壁にかけてレンズ状に厚く認められる。この混炭層中には遺物は全くない。



第18図 第1・2号窯跡及び第1号住居跡実測図

燃烧孔 窯本体と舟底状窪部を結ぶ孔を燃烧孔と仮称した。8本の燃烧孔は窯床面のレベルより若干低くなる。孔壁は非常に火を受けている。燃烧孔内には径約30cm、長さ10cm内外の木炭が遺存していることが多い。下端から3番目の燃烧孔内から小指先大のスラッグが一点発見された。燃烧孔の径は破損のため不揃いであるが40cm内外と考えられる。長さも不揃いで60cm～1.2mの間にある。下端の孔が最も短かく、上端が最も長い。

煙道部 焼成部の先端が垂直に終り、床面から高さ34cmのところから煙道がはじまる。約40°の傾斜で上方に登るが、約1m行って急にカーブしながら垂直になりはじめる。

煙道には土地所有者の開墾により一部破かいされているが、30cm大の花崗岩で塞がれていたらしくてその石が発見された。その石には煤が付着してした。

B. 第2号窯跡（第18図，図版6）

〔立地〕 第1号窯の南に接し平行して発見された。地形の取り方は全く第1号窯と同じである。

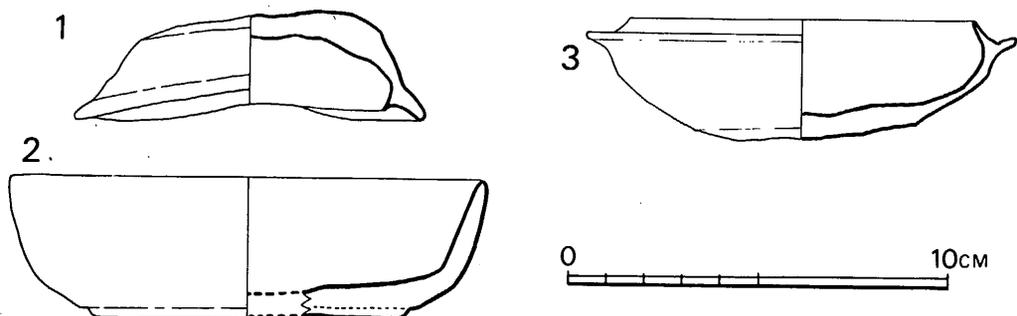
〔窯の構造〕（第18図） 天井部及び煙道部は破かいされている。

現存長8.8mを測る。現存部は地山を切っているが、削りぬきしたものか半地下式であるかは判断できない。くの字形に変形しているが、中軸はN76°Eで床面の傾斜は5°である。壁面は第1号窯と同様に粘土による成形はない。

前庭部 床面は水平で何らの施設もない。前庭部床面の下部には第1号住居跡が発見され、住居跡に流入した土砂の中から須恵器（第19図）が発見された須恵器は前庭部床面のすぐ下層であることから住居跡にともなうものではなく、この窯にともなうものでもない。須恵器は、第Ⅳ形式である。

焚口 燃烧部からラッパ状に広がる部分で床面は水平である。地山を切り下げている。

燃烧部 最も巾が狭く、36cmで、壁のカーブから天井を復元すると高さ48cm程で、横断面形は床面は丸味のある水平に近い床で、壁・天井は丸く円形に近い。



第19図 須恵器実測図

床、壁面は茶褐色に焼けている。

焼成部 本窯の大部分を占め長さ7.3mを測る。巾は一定でなく、上・下部分が狭く56cm、中央部が広く74cmを測る。焼成部の壁は、水平な床面から垂直に立上っている。最も残りの良い所で高さ70cmである。

煙道部 欠失している。なお、この窯跡からは遺物の発見はない。

C. 第3号窯跡（第20図、図版8）

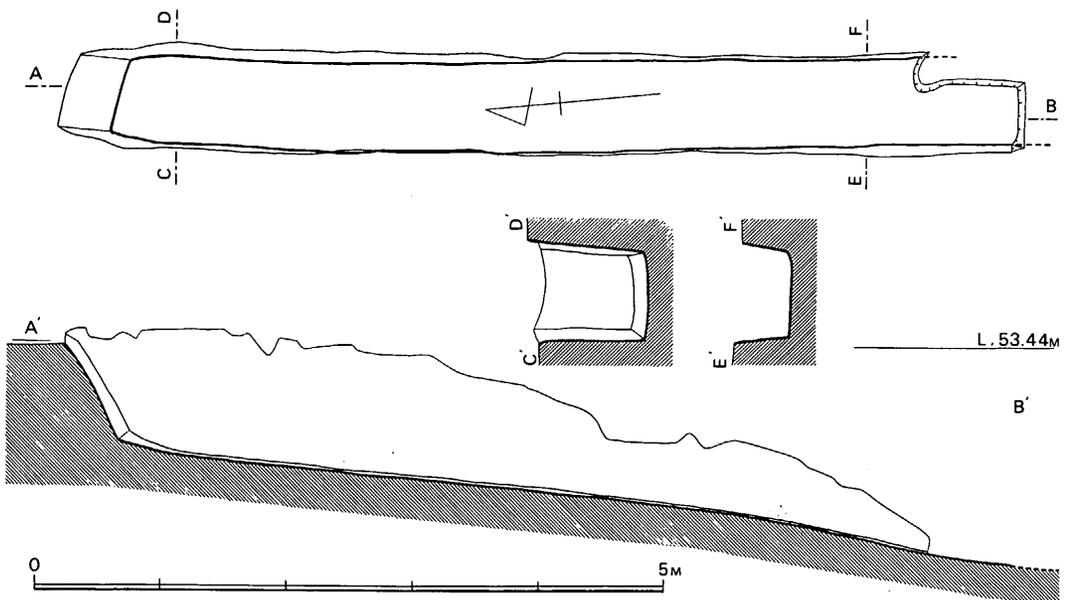
〔立地〕（第17図） 第1・2号窯跡の東7mの地点で発見された。窯の中軸は53mの等高線に若干斜めに交差する。

〔窯の構造〕（第20図） 窯の天井部及び焚口の部分は破損している。現存長7.6mを測る。現存部は地山を切っているが、削りぬきであるか半地下式であるかは判断できない。第2号窯と同形式のものである。窯壁は粘土による成形はない。中軸はN7°Wで、床面の傾斜は5°である。

焼成部 長方形プランである。水平な床面に垂直に壁が立ちあがるのは第2号窯と同様である。壁は遺存の良い所で96cmの高さを測る。

床及び壁面は第2号窯ほどは焼けてなく、煤が付着してないところは白く変色している程度である。床面には10cmの厚さに炭化した小枝が一面に堆積していた以外は何ら遺物の発見はない。

この窯は第1・2号住居跡を切って築造され第4号窯に煙道部分を破かいされている。



第20図 第3号窯跡実測図

D. 第4号窯跡(第21図, 図版7・8・9)

〔立地〕(第17図) 第3号窯跡と同様に稜線の直斜面に位置し, 第3号窯跡と直角に東西西方向に位置している。等高線に平行している。

〔窯の構造〕(第21図) 第1号窯跡と同形式の窯である。当初この窯は天井部が陥没してないのではないかと期待されたのであるが, 残念ながら窯の上端の一部だけが遺存していただけであった。

窯本体の中軸はN63.5°Wで, 焚口から煙道までの現存長8.06mを測る。窯床面の傾斜は10°である。

前庭部 第1号窯では焚口からの壁の裾が舟底状窪みの側に広がったのに比べ, この2号窯では反対になる。この裾部はなお続くのであるが, 上部の堆積土が厚く調査出来なかった。

未調査の部分には第1号窯と同じに楕円形プランのピットが確認できたかも知れない。この前庭部には厚さ20cm程の灰が堆積していて, この灰中から小指先大のスラッグ1点が発見された。

焚口 地山を切り窪めた焚口の中は64cmである。燃烧孔に比べ焼けは少ない。

燃烧部 最も巾が狭く巾54cm, 長1.2mを測る。床面は丸味を帯び, 復元すると高約50cmと思われる。燃烧孔に比べ焼けが少ない。

烧成部 窯の大部分を占め, 煙道までの長さ7mで, 巾は74cmから1mの間にあり, 中央部が巾広い。天井までの高さ76cmで, 1号窯の横断面形とは若干異なり丸味を帯びた方形である。また, 1号窯床面にみられた炭塵層は, この窯にはみられない。この烧成部の南側壁には床面に接して8本の燃烧孔が付設されている。

舟底状窪部 烧成部にほぼ等しい長さで6.8m, 巾は約1.5m, 深さ約60cmを測る。

床面の傾斜は11°である。床面は火を受けている。舟底状窪部の土層断面(図版9-2)は4層に分けられ, 上3層は流入土である。最下層の混炭灰層は燃烧孔から南壁にかけてレンズ状に厚く認められる。舟底状窪からは須恵器, 土師器の破片が発見されたが, 第2・3号住居跡を切ってこの第4号窯が造られたことを考えれば混入するのは当然である。その土器の示す時期も住居跡と一致する。

燃烧孔 8本の燃烧孔は, 65cm間隔に削りぬかれている。底面は窯床面より若干下がる。孔の径はほぼ等しく20cmから25cmの間にある。長さは最下部が短かくて1.12m, 最上部が最も長く1.76mを測る。上端部で第3号窯と接しているが, ここで第3号窯を切ってこの第4号窯が造られていることを確認した。

煙道部 烧成部の先端が垂直に終り, 床面から16cmのところから煙道がはじまる。約25°の傾斜で登る。煙道内には30cm大の花崗岩が1個遺存していた。石には煤が付着している。

小 結 第2調査区における窯跡は以上の4基である。これら4基の窯は全て地形の取り方に一致するものがある。窯の傾斜を築造当初から考え、緩らかな斜面を選ぶことに心が配られている。

第1・4号窯は同形式の窯である。その一致する特徴は、窯体に添って舟底状の窪みを持ち、互いに8本の燃烧孔で連結されているという形態の窯であることである。舟底状窪部は第1号窯では窯の右側に、第4号窯では左側に付設されているが、このことは、舟底状窪部がオープンであり、窯が削りぬき式であるからで斜面の低い側にこの舟底状窪部を設定するものと思われる。しかも、本来の焚口よりも燃烧孔からの熱の注入が多い。したがって窯の中がおのずから限定されることがわかる。

この2つの窯からは、小指先大のスラッグ各1点が出土したほか何ら遺物の発見はない。したがって窯業目的が何であったか見当がつかないが、第1号窯床面の炭塵層中には鉄分が含まれているという。しかしながら今この窯が製鉄に関係するものであると断定することは、危険と考える。なお類例の発見を待ちたいと思う。

この窯跡の築造年代については、土器等の遺物が発見されていないことから決定することはできないが、第1号住居跡と第2号窯跡との中間から発見された須恵器から、第2号窯跡が7世紀初頭より新しいものであり、両窯跡の灰原の重複関係から第2号窯よりも第1号窯がさらに新しい時期の築造であるという上限を知り得るだけである。坂田武彦先生に放射性炭素による年代の測定を願って年代を出していただいたが、少し古すぎるようである。なお、渡辺直径教授に熱残留磁気の測定をお願いしているが、今測定されているとのことで、追ってお知らせしたいと考えている。

第2・3号窯は形式的に同一のものである。床面の傾斜も互いに5°である。前記のとおりこの窯も遺物がなく、年代の決定ができないし、窯業目的を知ることもできない。

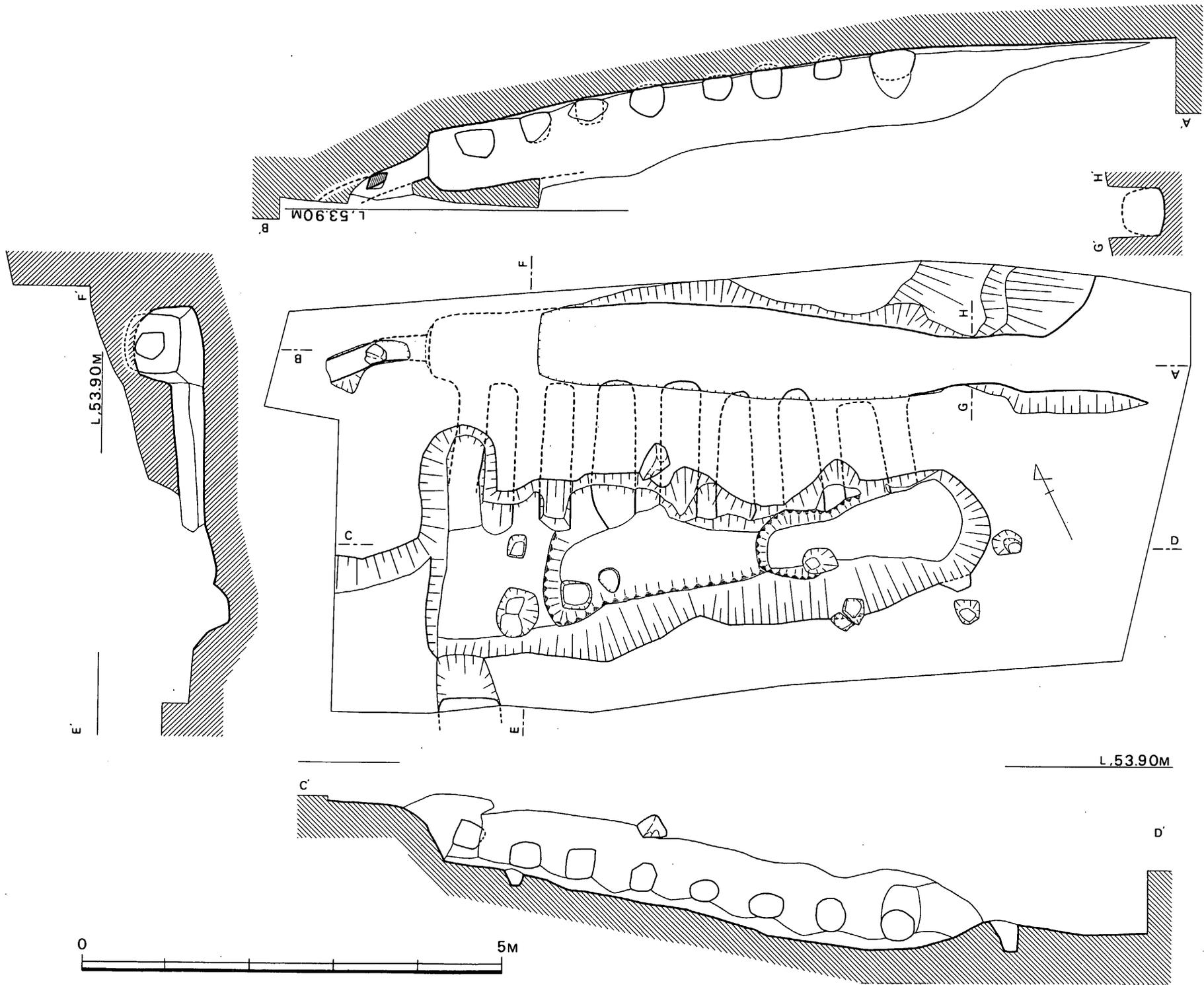
ただ、第3号窯には、床面に炭化した小枝が堆積して発見された。窯壁面の焼けは第2号窯よりも少なく、炭の堆積状態は比較的やわらかである。築造を終り、窯体内を乾燥させるために火を入れた段階で何らかの事故のために放棄したものかも知れない。

第1・4号窯の部分で「燃烧孔」「舟底状窪部」と名称を付したが、今回便宜上付したもので、窯の性格が判明した時には適当な名称にしたいと考える。なおこの形式の窯に類似するものが2例発見されている。その1は、京都府所在長岡京跡内で発見されている。燃烧孔が7本である。その2は、三重県四日市において4本の燃烧孔を持つ窯跡が発見され、瓦、須恵器を焼いたものと考えられているようである。

註1. 全長6mほどの、ほとんど傾斜のない窯で右端に7つの穴があき、土器片が出土したと言う。渡辺正気、栗原和彦、前川威洋が小林清氏等の好意により実見してきた。

註2. 岡山古窯跡群発掘調査概要（三重県四日市市教育委員会 1970.3）

この概要中の7号窯は全長7mの窯で、焼成部左壁には、等間隔に径40cm～60cmの半円形の孔をもっている。



第21图 第4号窠迹实测图

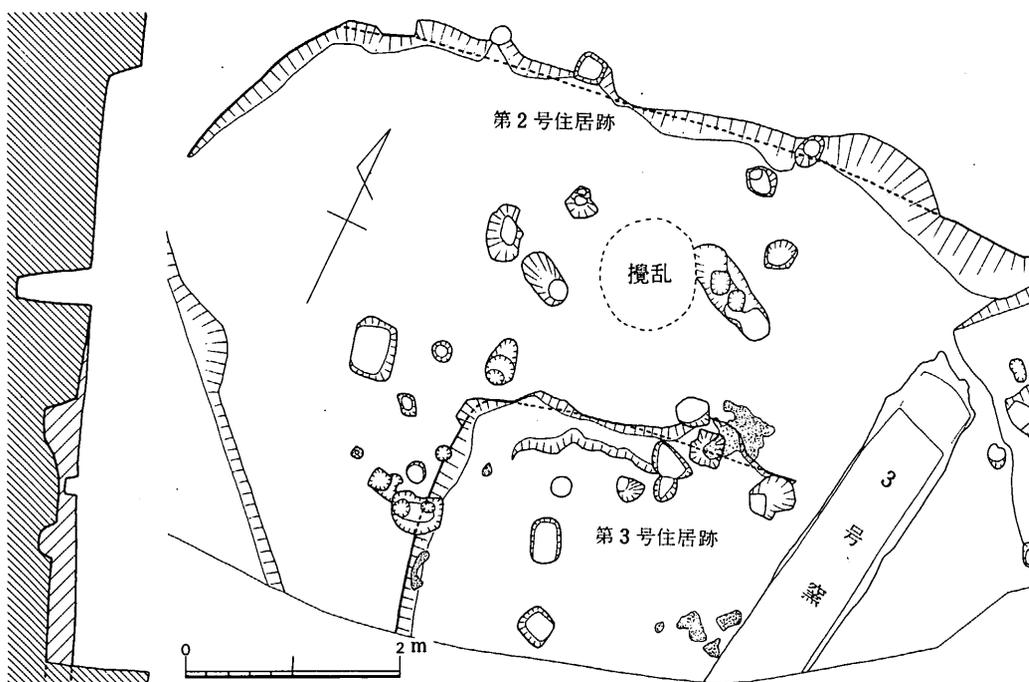
(2) 住居跡

A. 第1号住居跡 (第18図, 図版10)

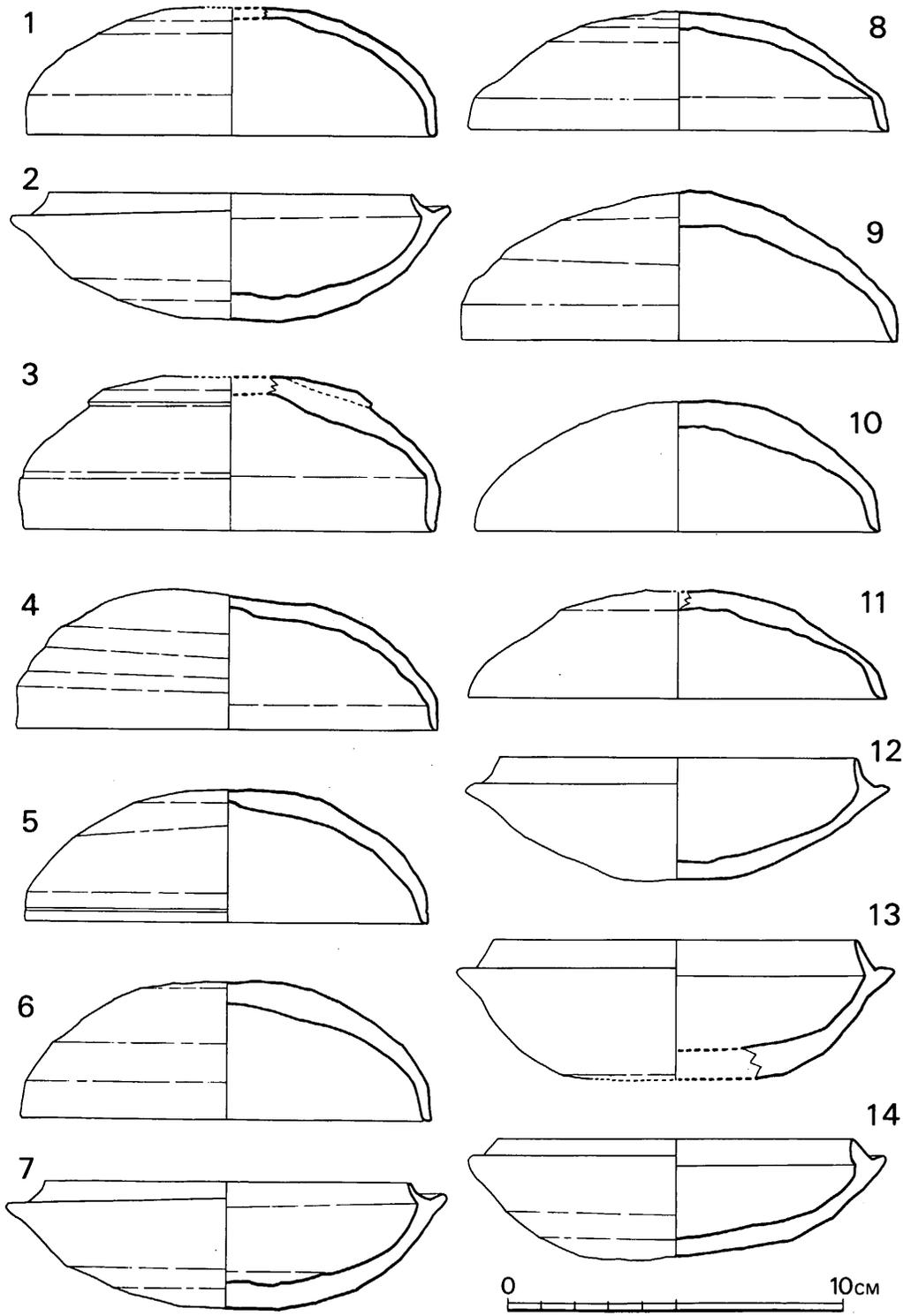
第2調査区の2号窯の焚口前面において、方形住居跡の一角が発見された。その大きさは不明であるが、後述の柱穴やかまど跡の位置から推定して、その一辺は4.3m前後になりそうである。柱穴は1個のみしかみつかっていないが、おそらく計4個あるものとおもわれる。北壁にかまど跡があり、石製支脚が残存し、その上に土師甕がかけられた状態で残っていた。この住居跡からは須恵器の出土がなく、時期の決め手に欠くが、住居跡より上層に7世紀初頭の須恵器が出土していて、下限がわかる。おそらく古墳時代後期の住居跡であろう。

B. 第2号・3号住居跡(第22図) 第2調査区の1号窯より1段高い、第3・4号窯の横に住居跡が発見された。しかし南側は畑地にするため削平され、東側は第3・4号窯で切られ、また住居跡自体の保存状態も悪いため、その全体を明確に把握することはできなかった。

第2号住居跡は南に面し一辺6m以上の方形の住居跡で、焼土はみられるが、確実なかまど跡などは発見できず、柱穴も不明である。



第22図 第2・3号住居跡実測図

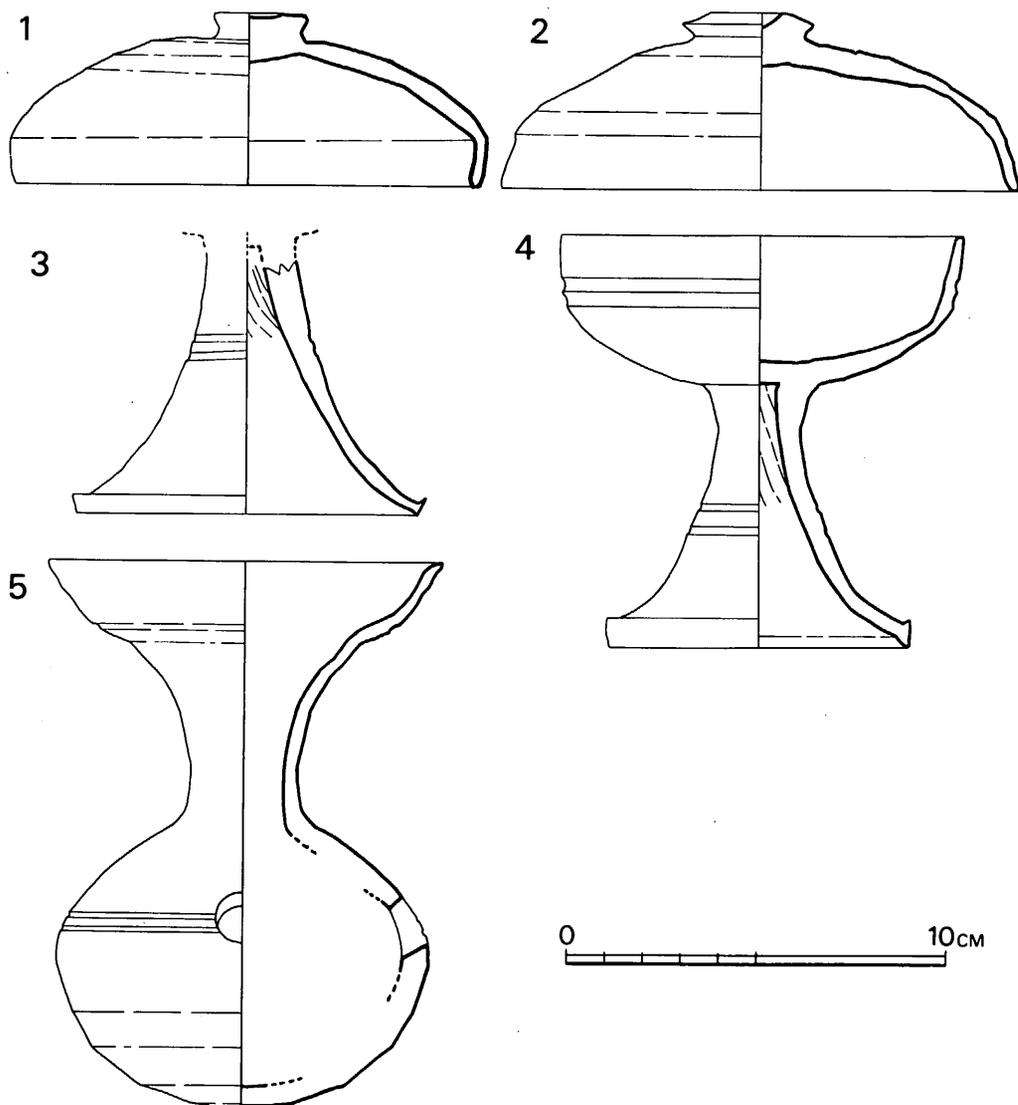


第23図 住居跡出土須恵器実測図(縮尺 1/2)

第3号住居跡は第2号住居跡の床面下に発見され、住居の方向も第2号住居跡とほぼ同じで、規模、かまど跡、柱穴などは不明である。

遺物としては須恵器（第23・24図）、土師器（第26図）、鉄斧片などがあるが、第2号・3号住居跡の時期的な差はほとんどみられないため、一括して説明したい。

須恵器 蓋（第23図1, 3～6, 8～11）は、径12.1～13.1cm、平均12.5cmで、器形は全体に丸い感じで、口縁部が直立する傾向をもつ。全体はよこなで調整があり、天井部内側だ



第24図 住居跡出土須恵器実測図（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）

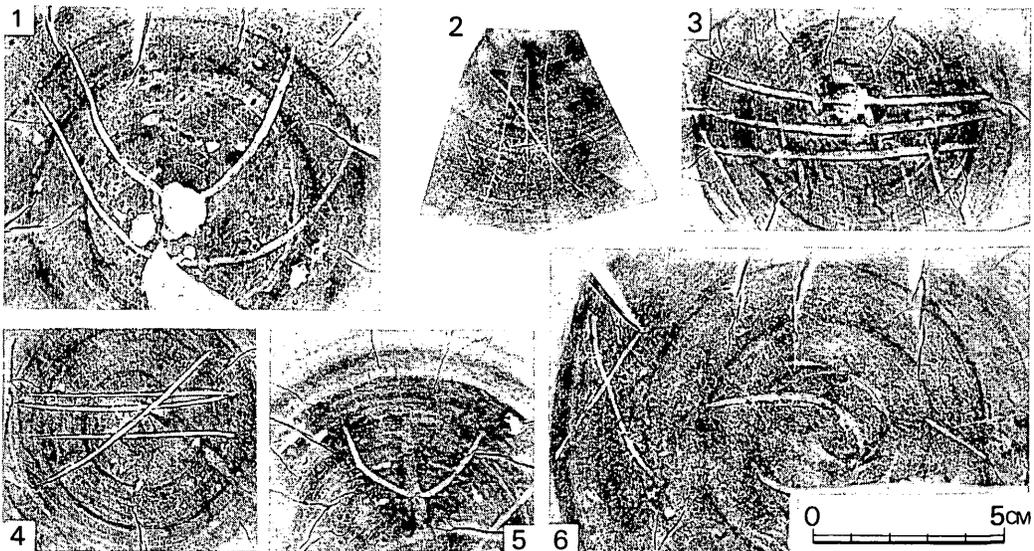
けはたてなでである。また天井部にはへら削り痕を残し、へら記号のあるものが多い。杯身(第23図2, 7, 12~14)径12.5~13.3cm, 平均12.8cmで、蓋受け部の立ち上がりが低く、内傾度も大きい。全面によこなでがあり、底部内面のみたてなでである。底部はへら削り痕があり、へら記号がつけられている。

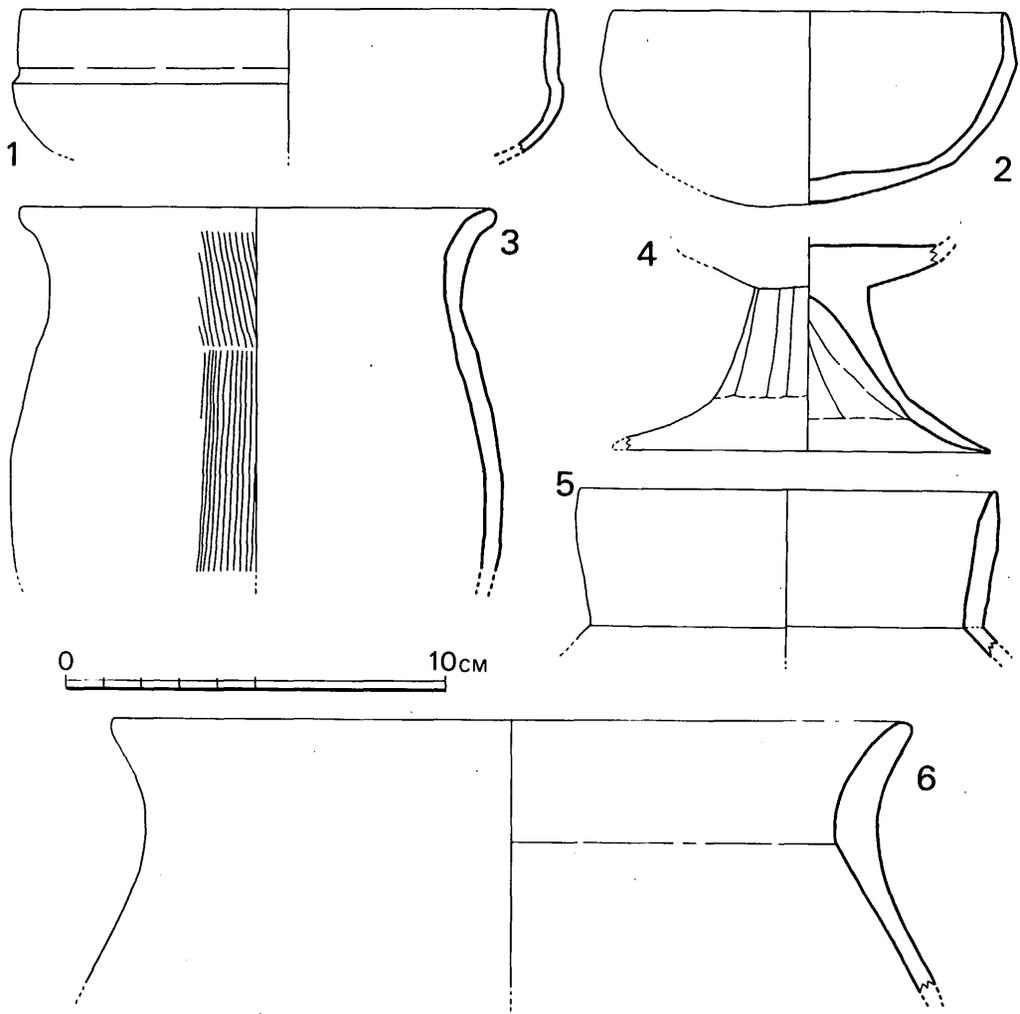
甗(第24図5)は口縁部は丸味をもって大きく開き、沈線で区割された細い頸部へと続く。この頸部にはひねりの痕がある。球状をなす胴部には2本の沈線がまわり、頸部から胴部にかけて横走る荒い刷毛目が残っている。底部はへら削りされ、へら記号が残っている。高杯蓋(第24図1・2)は中央がくぼむつまみをもち、口縁部がやや直立する傾向をもつ。天井部にはへら削り痕を残している。2は1より古い様相をもっている。高杯(第24図3・4)杯部と脚部に2本の沈線があり、脚部にはひねりの痕が残っている。

なおこれらの須恵器の多くにへら記号があり、第25図のような種類がある。1は杯身1個、2・4は杯蓋9個、杯身1個、高杯1個、3は杯蓋1個、5は杯蓋2個、6は杯身1個、そのほかの1種には杯と甗が各1個ある。

土師器(第26図)粗製の甗(3・5・6)把手付土器、精製された胎土をもつ高杯(4)、椀形土器(2)、杯(1)がある。甗は大形と小形があり、内面はへら削りで調整している。外面には荒い刷毛目をもつものである。高杯は脚部の内外面をへらで調整している。

以上の土器から、これらの住居跡は6世紀末から7世紀初頭にかけてのものであろう。なお第3・4号窯はこの住居跡の後に築造されたものであり、その年代の上限がおきえられる。





第26図 住居跡出土土師器実測図（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）

4. 第2調査区第1・4号窯跡出土鉄滓について

釜の側壁には八ヶの空気の吸気孔が設けられていた、発掘時にこの空気の吸気孔より木炭と混入して、製鉄を行なうことによるのみ生成する珪酸鉄が出土した、この珪酸鉄はこれまで数多くの古代製鉄跡より出土したものと全く同様の化学組成を示している。

珪酸鉄の生成機構について、珪酸鉄はその化学組成上、 $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ なる記号で記されるが、この珪酸鉄という化学組成の生品を我々はカナクソまたは鉄滓という。

これは製鉄時に、製鉄の原料である鉄鉱石（砂鉄）が、高温の炉内において炭来により砂鉄が還元されることにより（ $\text{Fe}_3\text{O}_4 + \text{C} \rightleftharpoons 3\text{FeO} + \text{CO}$ ）碎鉄鉱より酸化第一鉄が生成される、この生成した酸化第一鉄が赤熱されている炉材の成分である珪酸 SiO_2 に接することにより 1080°C において次の反応が行なわれる。（ $2\text{FeO} + \text{SiO}_2 \rightleftharpoons 2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ ）すなわち、砂鉄を還元して金属鉄を生産する行程において、一部の還元された酸化第一鉄は赤熱、炉材の SiO_2 と化合して和鉄製法としては、還元不能の珪酸鉄を生成する、これと古代人達はカナクソと呼んだらしい。

このカナクソは古代の製鉄跡より良く出土するものである。

鬼面の上り釜の吸気孔の中から当時の木炭に混入して珪酸鉄が出土したということは、この釜には古代砂鉄と木炭を装入して、砂鉄を還元していたということを、吸気孔より出土の珪酸鉄は古代の釜の歴史を物語っている。

以上の結果により冶金学的には、砂鉄を還元した登窯であることが主證される。

古代は、一応昇り釜にて砂鉄の還元を行ない、不完全ながら海綿鉄の生産を行なったらしい次に大鍛冶場にこれを運んで轆を用いて金属鉄と酸化鉄との吹き分け分離を行なったらしいという一連の古代製鉄が考えられる。

鬼面の現状から上り釜と大鍛冶場との間に約100m位の距離のあったことも、還元炉の還元初期は多量の還元ガス（CO）を発生するためにこれを避けるために両者間にこれだけの距離を設けたものと考えられる。

還元用昇り釜の炉内反応について、

還元用の木炭の比重は2.0内外であって、結晶形のものに比べて比重は小さく、また硬度も低い、しかしながら、化学的には結晶形のものよりもはるかに活発であって、 $8,000\text{ cal/g}$ 内外の大きな燃焼熱を示す、また木炭は多孔性であって大きな囁看能力を持っている、木炭の酸化状況は $\text{C} + \text{O}_2 = \text{CO}_2 + 9,600\text{ K cal/mal}$ （酸化発熱反応）、次に炭酸ガスと炭とを熱すれば、 $\text{CO}_2 + \text{C} \rightleftharpoons 2\text{CO} - 4,100\text{ cal/mal}$ （還元吸熱反応）この反応は可逆的であって右の方向に進行する時には熱を吸収するから温度が高い程右に片寄る、たとえば1気圧のもとにおいて、 450°C では、 CO_2 98%、CO 2%割合であるものが 700°C においては CO_2 42%、CO 58%となり、

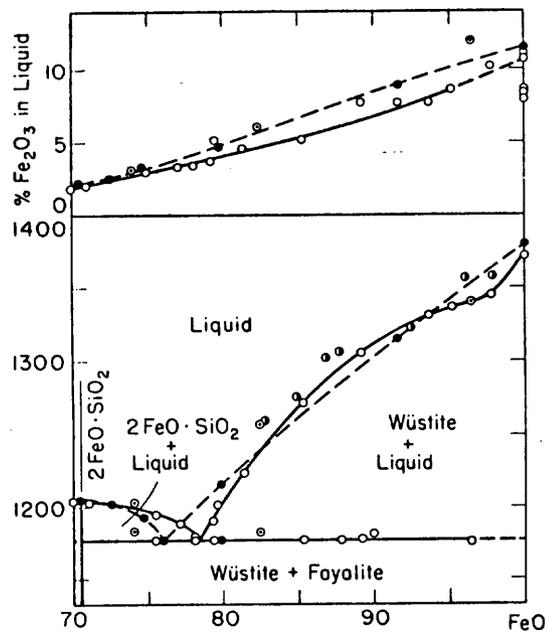
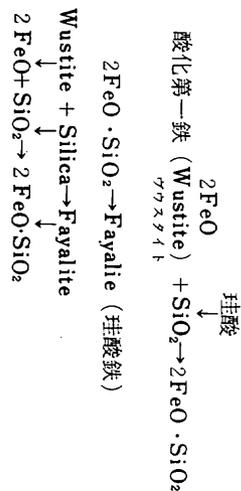


FIG. 81.—System $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ - FeO .

W. C. Allen and R. B. Snow, *J. Am. Ceram. Soc.*, 38 [8] 268 (1955).
 ○ = N_2 atmosphere; ○ = CO/CO_2 atmosphere;
 ● = Bowen and Schairer, *Am. J. Sci.*, [5th Series], 24 [141] 177 (1932); ● = R. Schuhmann, Jr., and P. J. Ensio, *J. Metals*, 3 [5] 401 (1951).

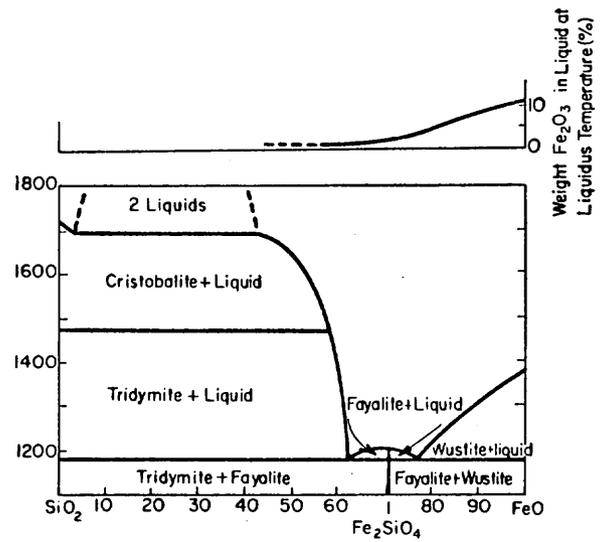
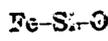
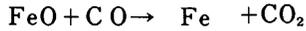
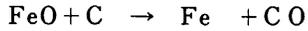
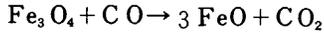


FIG. 80.—System $\text{FeO}-\text{SiO}_2$.

N. L. Bowen and J. F. Schairer, *Am. J. Sci.*, 5th Ser., 24, 200 (1932).

1000℃においては、CO₂1%、CO99%になる。炉内の



赤熱の炭素または一酸化炭素によって還元が進行する、吸気孔では外部より空気を吸入して本炭の燃焼が行なわれ、CO₂の発熱反応が行なわれるが炉内においては、充滿されている木炭のためにCO₂+C→2CO-4,100Kcal/malの吸熱反応が行なわれ、炉内温度の上昇は送風量によって或程度の調節は可能であるが赤熱木炭の吸熱反応が行なわれるので炉内温度を1,300℃以上に保つとは容易でない、但し空気を吸入する吸気孔の温度は1,400℃まで位上昇させることができる。

近代冶金学においても、珪酸と主成分とする炉体を使用し、この中に木炭と砂鉄とを入れて風を州れば、炉中の砂鉄は木炭によって一部が還元される、還元された酸化第一鉄は赤熱の炉材中の珪酸と1080℃で化学反応を行なって珪酸鉄になってしまう、よってこの珪酸鉄を造ることは容易であるが金属鉄をつくるには一考を用するのである。古代人達はいかにして金属鉄を化告的に合理的に製錬したかなどもっともっと研究する必要がある。

なお、池田遺跡第2調査区第1号窯跡の放射性炭素による年代測定の結果は、

A. D. 387年±30

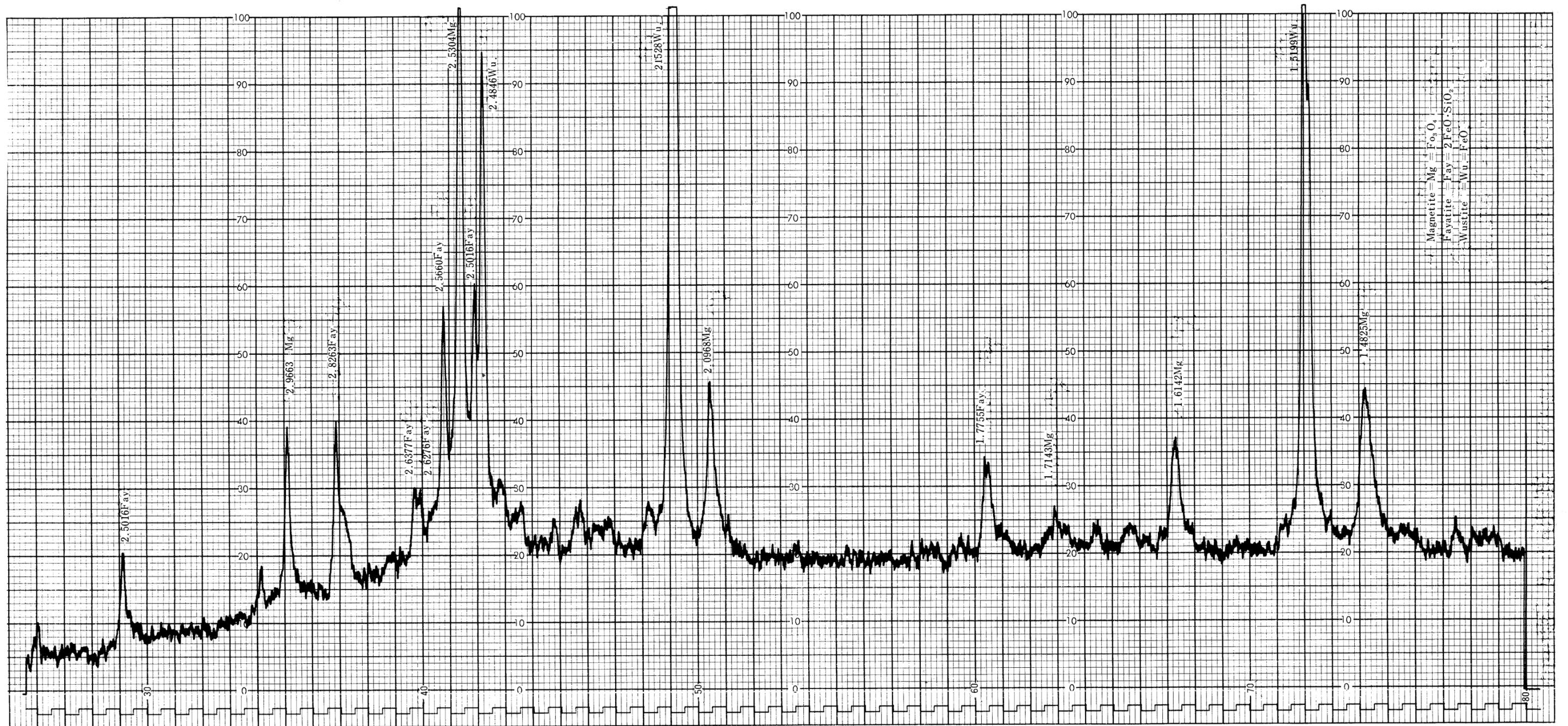
であった。

鉄滓化学成分

T. Fe	51.80%
SiO ₂	21.40%
TiO ₂	1.20%
Al ₂ O ₃	1.80%
CaO	2.10%
P	0.08%

顕微鏡観察所見

地はFageliteにWustiteの折出を認むSiO₂の砂をかんでいて普通の出土の鉄滓と異なる点なし。

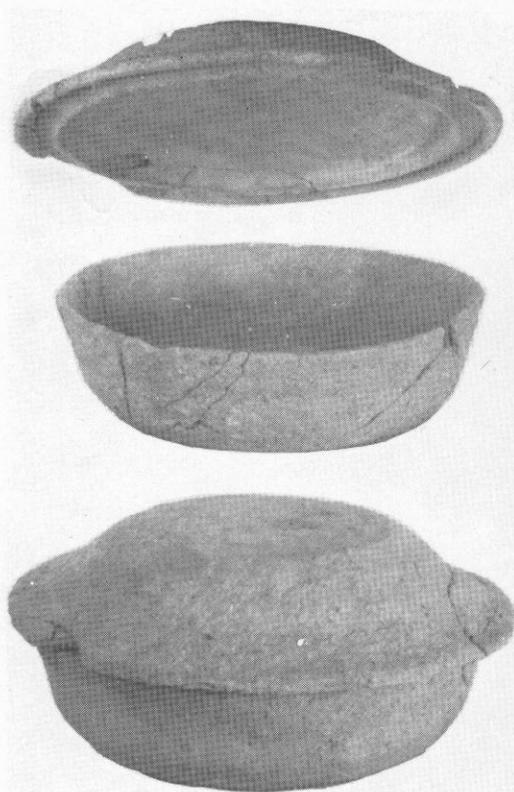


池田遺跡第2調査区1号窯跡出土鉄渣X線回析表

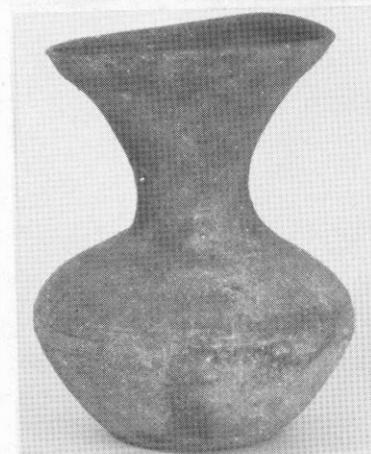
図 版



(1) 第1号墳石室

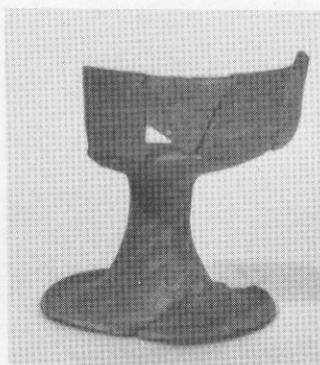
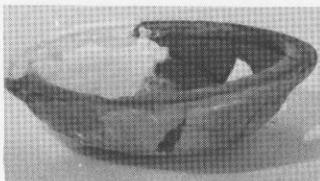
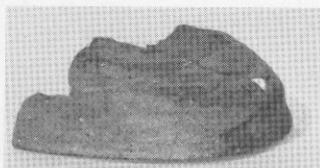


(2) 第1号墳遺物出土状態及び遺物



(上) 2号墳閉塞石の状態
 (下右) 2号墳閉塞を除去した状態
 (下左) 第2号墳出土須恵器 (高杯、小型壺)

(1) 第3号墳遺存狀態



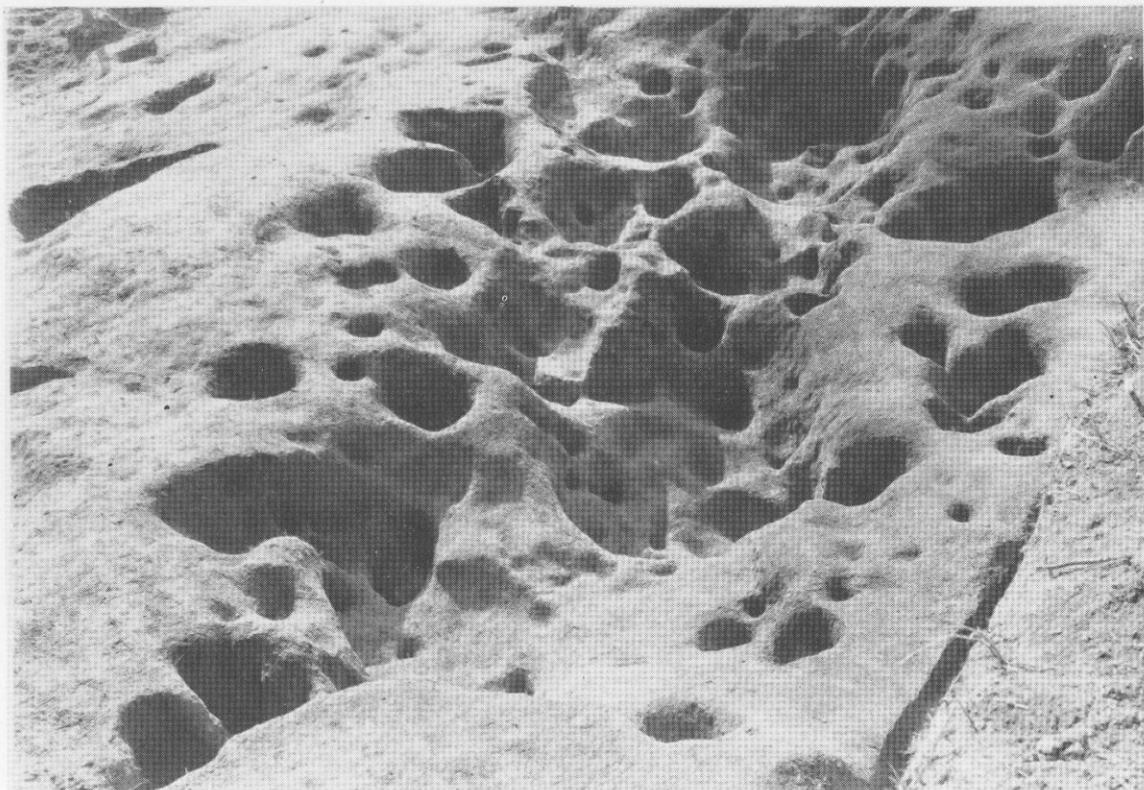
(2) 第3号墳出土須惠器（甕、杯蓋、杯身、高杯）



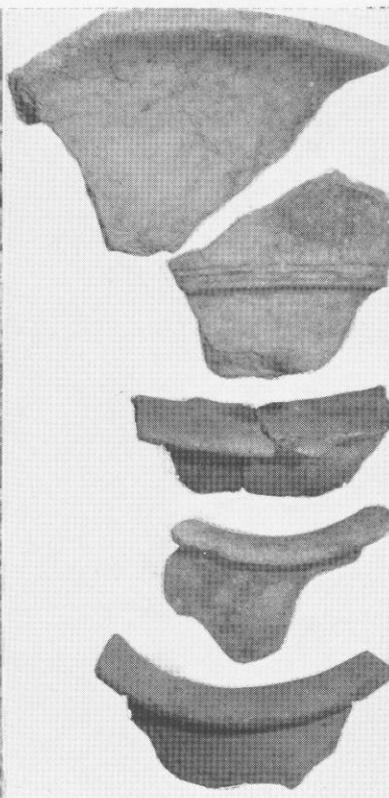
(1) 鈎全影



(2) 鈎
中心部



(1) 鈺 (鉄滓除去後の状態)



(2) 鈺 (左) 溝 (右) 鈺付近出土弥生式土器



(1) 第1・2号窯跡全影



(2) 第1号窯跡舟底状窪と燃烧孔



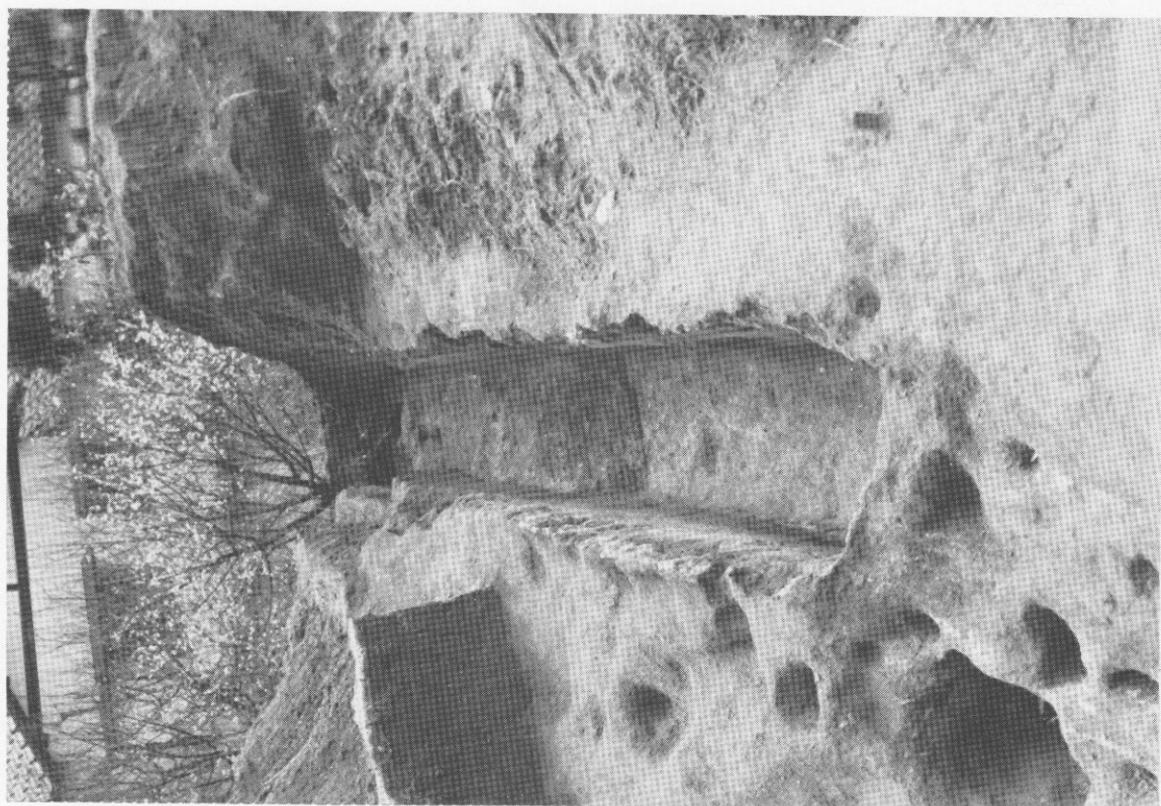
(1) 第4号窯跡全影



(2) 第4号窯跡焼成部と燃烧孔



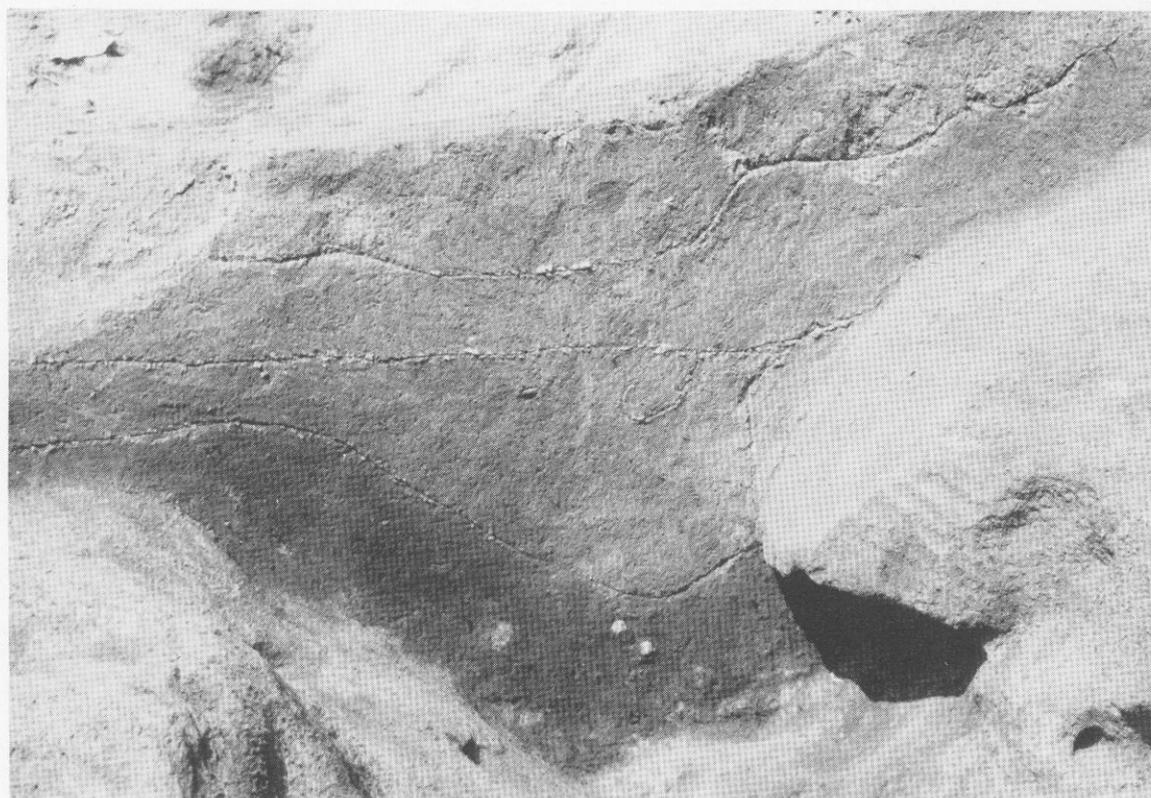
(1) 第4号窯跡舟底状窪と燃烧孔



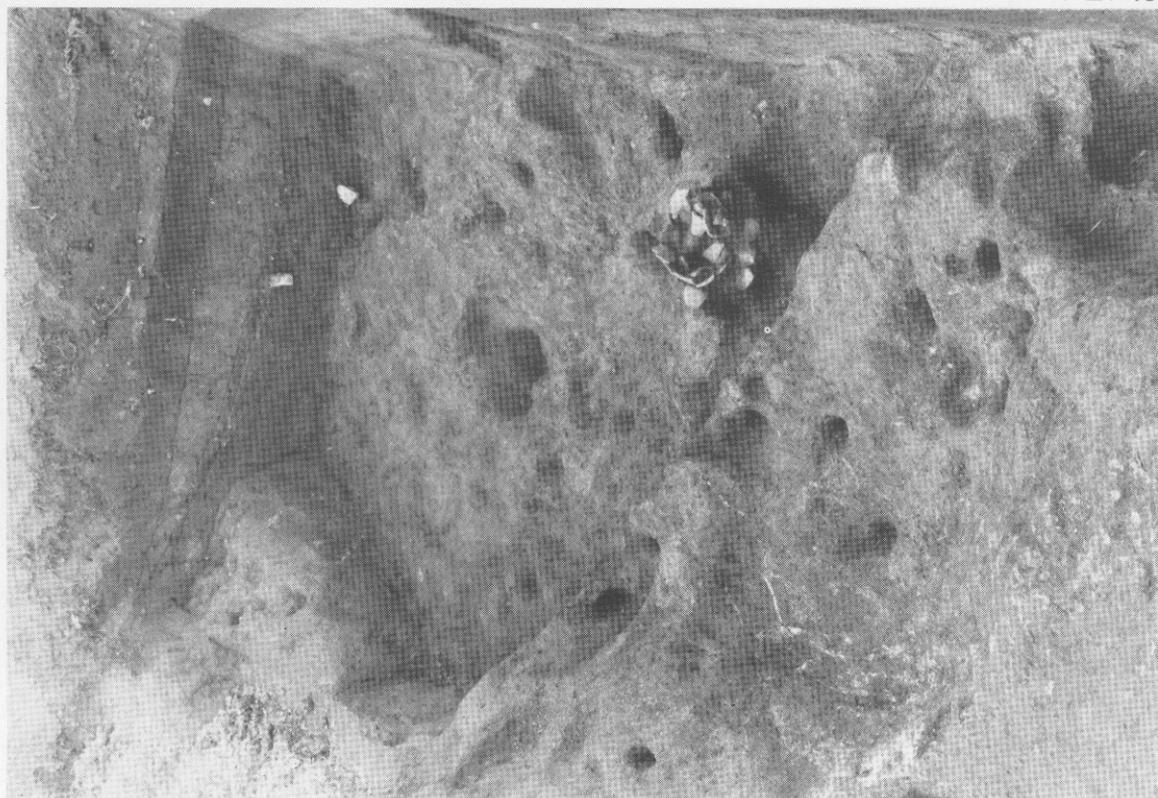
(2) 第3号窯跡



(1) 第1号窠跡舟底状窪土層



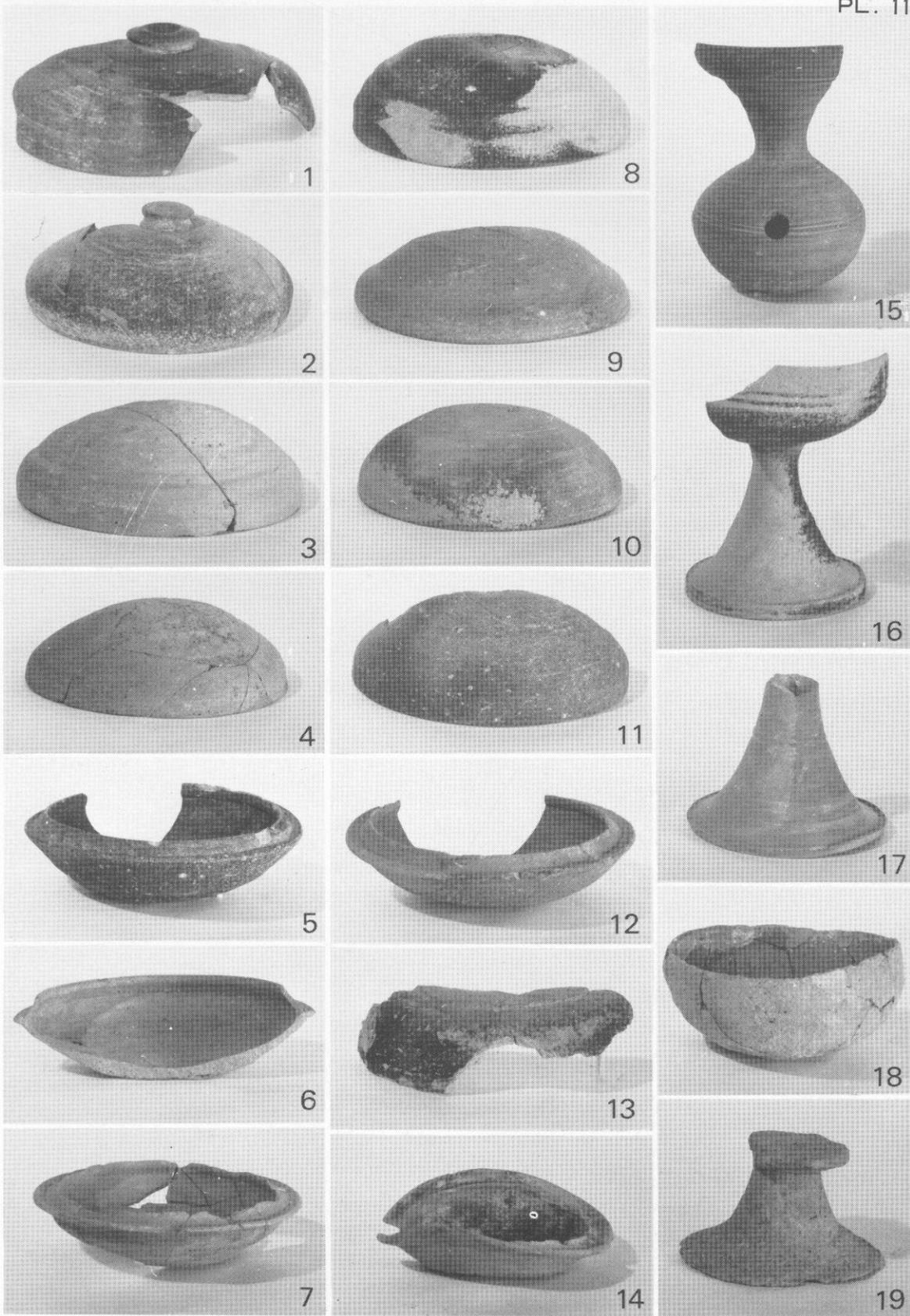
(2) 第4号窠跡舟底状窪土層



(1) 第1号住居跡



(2) 第2・3号住居跡と第3・4号窯跡



出土遺物（7・13・14は第2号窯跡前面出土，他は2・3号住居跡出土）

大 曲 り 遺 跡

筑紫郡筑紫野町所在住居跡群の調査

本文目次

はしがき	34
1. 調査経過	35
2. 立地	37
3. 遺構	39
第1次調査	
(1) 竪穴住居跡	39
(2) ピット類	45
第2次調査	
(1) 竪穴住居跡	47
(2) ピット類	47
4. 遺物	48
5. 考察	64
むすび	70

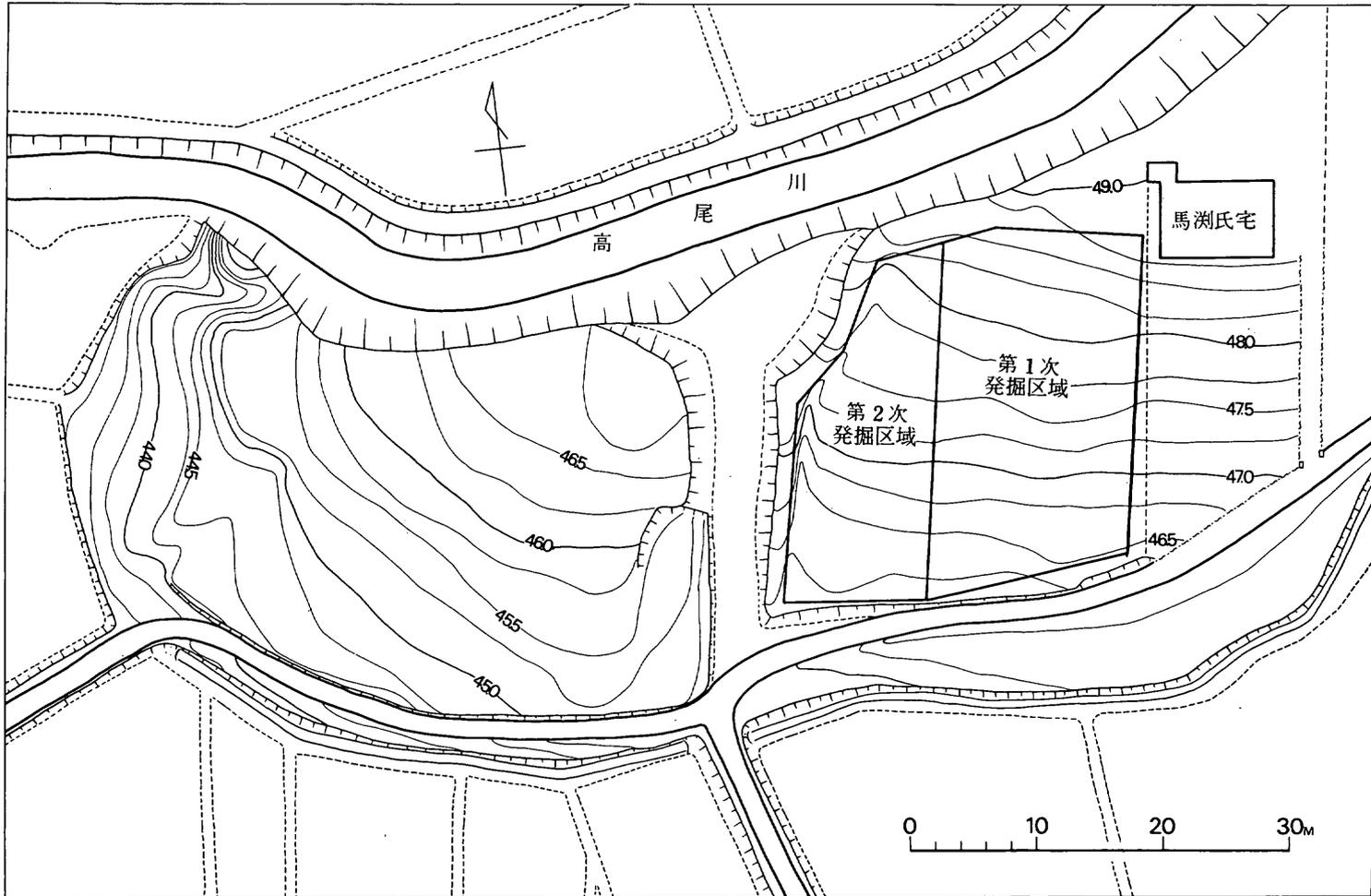
なお、この報告は、伊藤玄三、近藤喬一、寺島孝一、田中勝弘の共同執筆である。

図 版 目 次

		本文対照頁
図版 1	(1) 発掘地遠景	37
	(2) 第 1 次調査区全景	37
2	(1) 第 1 号住居跡	39
	(2) 第 1 号住居跡カマド	39
3	(1) 第 2 号住居跡	40
	(2) 第 2 号住居跡カマド	40
4	(1) 第 3 号住居跡	40
	(2) 第 3 号住居跡土器出土状態	41
5	(1) 第 3・5・6・7 号住居跡	40・41・43・45
	(2) 第 5 号住居跡カマド	43
6	(1) 第 6 号住居跡カマド	44
	(2) 第 7 号住居跡カマド	45
7	(1) 土師器壺を出土したピット	46
	(2) 須恵器杯出土状態	46
8	(1) 第 2 次調査区全景	47
	(2) 第 8 号住居跡	47
9	第 1・6・7 号住居跡床面出土土器・鉄器	48・55
10	第 2 号住居床面出土土器	49
11	第 3 号住居跡床面出土土器	52・54
12	出土土師器	56
13	出土土師器	56
14	出土土師器	57
15	出土土師器	57
16	出土須恵器	58・60
17	出土須恵器	58
18	出土須恵器	60・61・63
19	縄文式土器・弥生式土器・砥石等	61・63・64

挿 図 目 次

第1図	大曲り遺跡付近地形実測図	33
第2図	大曲り遺跡発掘区域図	とじこみ
第3図	第1号住居跡実測図	とじこみ
第4図	第2号住居跡実測図	41
第5図	第3・7号住居跡実測図	42
第6図	第5号住居跡実測図	43
第7図	第6号住居跡実測図	44
第8図	壺を出土した小ピット	46
第9図	第8号住居跡実測図	47
第10図	第9号住居跡実測図	48
第11図	第1号住居跡出土遺物実測図	49
第12図	第2号住居跡出土遺物実測図	50
第13図	第3号住居跡出土遺物実測図	51
第14図	第6・7号住居跡出土遺物実測図	52
第15図	大曲り遺跡出土土師器実測図(その1)	53
第16図	大曲り遺跡出土土師器実測図(その2)	54
第17図	大曲り遺跡出土須恵器実測図	59
第18図	大曲り遺跡出土石器・縄文土器・砥石実測図	62



第1図 大曲り遺跡付近地形実測図

は し が き

九州地方建設局は、福岡市南部から筑紫郡筑紫野町にかけての国道3号線交通量緩和のため、この地域間における3号線東側に福岡南バイパスを設けることになった。福岡県教育委員会は、この路線予定地にかかわる遺跡10箇所を発掘調査することとなった。遺跡数が多いなどの点から、これらの調査の一部は他の機関にも委嘱実施することになり、そのうちの福岡南バイパス第8地点の調査を我々の平安博物館に委嘱してきた。平安博物館では、この依頼に基づき調査を受諾実施し、後述するような成果をあげたので、ここにその報告をする。

本調査の委嘱については、つとに福岡県教育庁文化課杉原信彦課長より、京都国立博物館考古課鈴木博司室長へ依頼があり、鈴木室長より平安博物館へ意向打診があった。平安博物館では、考古第二課を中心としてその調査実施を検討した。昭和44年9月下旬、杉原課長と鈴木室長が平安博物館に来訪され、正式に調査依頼をされた。その後の諸連絡は、県教育庁文化課藤井功主査と平安博物館伊藤玄三の間でとり、11月初旬発掘現場の予察を行なった。予察の結果は、第8地点から第10地点までが県教委の依頼希望地点である由であったけれども、スタッフの点などより第8地点のみの調査を引き受けることになった。

この第8地点は、表面調査の結果では、弥生式土器・土師器・須恵器の破片が採集されており、立地などから考えて弥生時代の遺跡や古墳時代の住居跡などの発見が予想された。その点でも、この地域での注目すべき調査資料の得られることが予測されたので、調査には期待がもたれた。

発掘の結果は、本遺跡の主たるものは古墳時代後期の6世紀末から7世紀初頭にかけての頃の竪穴住居群であり、この時期の住居跡6軒を明らかにした。また、5世紀後半にさかのぼる竪穴住居跡1軒も明らかとなった。出土遺物の点では、旧石器時代後期の石器、縄文晩期初頭・弥生などの土器を少量発見し、竪穴住居群に伴う土師器・須恵器を多量に得ることができた。土師器・須恵器は、この地域での編年研究上にも注目すべき資料が含まれており、有意義な成果をあげることができたといえよう。

本調査を行なうに際しては、福岡県教育庁文化課の諸氏には種々お世話になった。特に、宮小路賀宏・栗原和彦・前川威洋の三氏には我々の調査の準備から一切のお世話を頂いた。深く感謝する次第である。また、調査の作業には草場製陶所をはじめ針摺地区の方々の御苦勞を頂いた。発掘地点に隣接していた馬淵静氏の御一家、宿舎を提供された大西富右衛門氏御一家には一方ならぬお世話を頂いた。明記して厚く御礼申し上げる次第である。

なお、報告書作成に当っては、遺物撮影・写真作成等の点で平安博物館臈谷寿・大槻雅生・吉田玄一の各氏に協力を頂いた。遺物整理に際しては山本忠尚・松浦俊和両君も参加している。

1. 調査経過

本遺跡の調査は、2回にわたって行なわれた。第1次調査は昭和44年11月20日から同12月20日まで約1ヶ月間を要し、第1次調査は昭和45年3月14日から同3月27日まで行なった。

調査の主体は福岡県教育委員会であり、調査の担当は次のような調査団によって行なった。

第一次調査団団長	平安博物館館長	角田文衛
副団長	京都国立博物館考古室長	鈴木博司
調査主任	平安博物館考古二課	伊藤玄三
調査員	〃	近藤喬一
〃	〃	寺島孝一
調査補助員	京都教育大学学生	林和広
〃	竜谷大学学生	松井忠春
〃	京都教育大学学生	松浦俊和
第二次調査団団長	平安博物館館長	角田文衛
副団長	京都国立博物館考古室長	鈴木博司
調査主任	平安博物館考古二課	伊藤玄三
調査員	〃	近藤喬一
〃	〃	寺島孝一
調査補助員	京都大学大学院学生	山本忠尚
〃	京都教育大学学生	田中勝弘
〃	竜谷大学学生	松井忠春

調査に際しては、第一次調査前の予測からして竪穴住居跡や墓地などの発見される可能性を考慮しながら、グリッド方式を採用することにした。調査範囲は、バイパス路線幅28mの内側において遺跡検出の可能性のある部分は極力発掘することを目指し、当初予定された斜面の全域にわたらすように努めた。ただし、斜面の下方の一部分では腐植土の堆積も厚くなり、住居跡などの検出も明瞭を欠くものと考えた事と、道跡の遮断を避けるために、この部分は発掘しなかった。

グリッドの設定は、バイパス路線の中央線を基準にして、その左右に4 m 方形のグリッドを作るという方法を取り、第一次調査の折には中央線東側に4×7のグリッドを設けた。これらグリッドの発掘に際しては、各グリッド間に幅40cmのあぜを残し、層位観察にそなえた。このあぜは、調査の中頃において撤去し、究極的には全面発掘とした。

発掘の状況を概述すると、ほぼ発掘区域の全域で表土が厚さ30cmほど認められ、斜面の下方では若干厚く堆積していた。この表土は、上層は以前耕作土であったが、調査の時点では荒地となっており、一面に葛の葉におおわれていた。表土中からは、古墳時代後期の土師器・須恵器が破片となって発見されている。この表土除去作業は、6日間で終了し、以後表土下の黄褐色土層中の竪穴住居跡並びにピットなどを追求した。竪穴住居跡は、調査後6日目に表土除去後の検討で発見された。発見の順序に従って号数を附している。最初に見出された第1号住居跡は、土器片の発見が多くなった6日目に、黄褐色土の中で若干黒色を帯びる部分があることが注意されたことに端を発している。その後、四壁の土層変化を追ってこの住居跡のプランを明らかにした。かようにして12月初旬を過ぎた頃、即ち調査日数20日過ぎになって、竪穴住居跡6軒を明らかにすることができた。この間、第3号住居跡は他のものより古い様式の土師器を出土するものであることが知られ、5世紀後半までさかのぼるものと推定された。他の住居跡では、第1号・第6号・第7号が各々北西壁に竈をもちながら同方向で切り込まれ、しかも切り合っていた。また、第2号・第5号は竈を西壁に有する同方向の住居跡であった。これら5軒の竪穴では、特に著しい遺物上の差を指摘することはできず、むしろかなり近接した古墳後期のある期間の住居跡であろうと推定された。12月の中旬には、これらの住居跡の検討・写真撮影などを行ない、第一次調査は12月20日に終了した。その間、調査終末期に九州大学工学部建築学科山本氏等4名が来訪され、第1号住居跡内における垂木などの炭化材を見られた。また、九州大学文学部考古学科より岡崎敬助教授・小田富士雄助手等が学生と共に見えておられる。県教育委員会文化課のメンバーも随時来られ、九州地方建設局所長も訪ねられている。これら福岡県在住の方々以外にも、東京教育大学増田精一助教授・広島大学潮見浩助教授等も見学に見えられている。

第二次の発掘調査は、翌昭和45年3月14日より開始した。前回の調査で、この第8地点のバイパス中央線西側が未調査であったので、その部分における竪穴住居跡等の遺跡を明らかにする目的であった。調査方法としては、既に前回の経験で層位的状況も知られているので、今回は4 m 四方のグリッド杭を打ちながらも、表土は全面的に除去する方針をとった。グリッドは、西側の崖に災されて不整となったが、20区設定した。

表土除去後の状況では、第二次の調査区域では出土遺物も余り多くなく、予想に反して竪穴住居跡も2軒を明確にしたのみであった。他に南東部で竈跡らしきものもあり、住居跡が推測されたが、プランは明らかではなかった。その西側でも、焼土の集まりが2ヶ所ほど認められ

ているけれども、それ以上に明らかとなることはなかった。第二次調査は、第一次調査の結果から予測されたところに反して遺物なども少なかったが、3月27日には埋め戻しも完了して本遺跡の調査を終了したのであった。

本遺跡の二次にわたる発掘調査によって、我々の調査し得た範囲は約700㎡であった。この調査範囲では、主体的な遺跡は古墳時代後期の堅穴住居跡であり、九州方面では比較的多くの住居跡が知られた例として注目されるものであった。

2. 立地

本調査遺跡は、福岡県筑紫都筑紫野町針摺569の11及び同17番地に所在し、通称大曲りと呼ばれているところである。調査地点は、福岡南バイパスが北より南へ幅28mで通過する予定となったが、舌状丘陵の中央部を横断することになるとすれば、完全に切断掘削される状況にある。

この附近の地形を見ると、北方に鬼ノ面の集落を望む間に水田平地を介し、西方では遺跡の所在する丘陵の先端が延びて、幅60mほどの低地をはさんで若葉団地の北端部の丘陵と対している。南側には入江状の低地が見られ、東方から東南方、さらに南方へと丘陵が連なっており、この入江状の低地は、二日市方面から溯ってくる高尾川沿いの平地が、この部分で入り込んだものと知られる。このように、遺跡の所在する丘陵は、東から西へ向って低地へ張り出したものであり、北・西・南を低地で囲まれている。しかし、この三方を囲む低地はそれほど広くはなく、北側の低地が二日市方面に延びて広がるのが見られるだけである。

遺跡の認められる丘陵は、北東方に連なる山並から派生して延びる丘陵の一つが、針摺地区で南西方向に走る途中で分出した小丘陵である。主丘陵は、この第8地点の東方の分出部分で50mを越している。主丘陵から分出した本丘陵は、西方へ約150mほど延びる舌状の小丘陵となっており、やや南へ外弯している。発掘地点の標高は、高い部分で47mを示し、丘陵縁は41mである。

丘陵は、遺跡の部分では北側に高尾川の削った比高約8mの崖となっているが、南側は約6度ほどの緩斜面を示している。東から西へかけては、更に緩やかな傾斜を示して丘陵が延びている。この丘陵をとり囲む低地は、標高41m前後の現水田となっており、この丘陵斜面が往時は比高3～5mの住居地であったことを示している。

現在、この丘陵は、発掘地点の西側で幅5mほどの切通しがあり、かつてこの切り通しが鬼ノ面方面に向う旧道であったと聞いている。また、遺跡の南側、即ち斜面の南側裾近くには幅

2.5mの道路が通じている。さらに、東北部の高所に隣接しては、馬淵氏の家がある。この馬淵氏の宅地造成に際しては特に遺物の発見は注意されなかったようである。

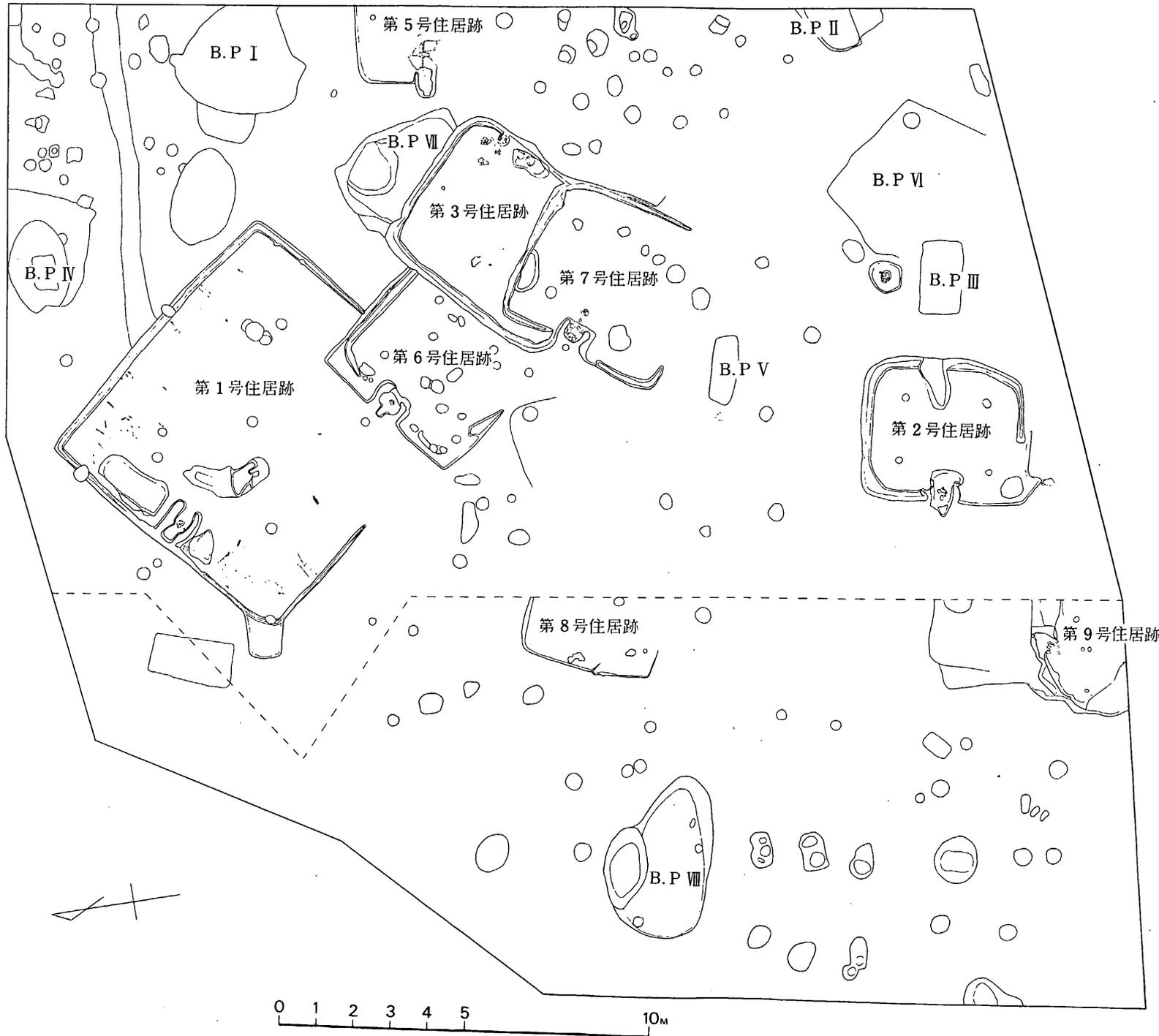
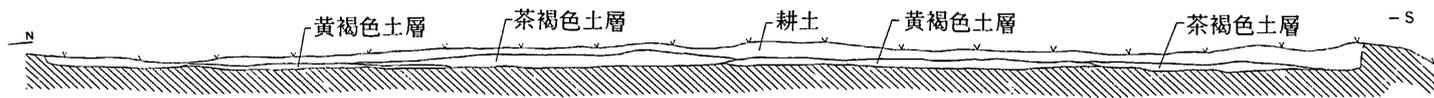
この発掘地点付近における遺物出土の状況を見ると、発掘区域から東方、更にその東方の主丘陵にかけて、特に南側及び東側の斜面に土師器・須恵器破片が見られている。この小丘陵分出部の民家においても須恵器壺が所蔵されているのを実見している。このような遺物散布状況からみて、主丘陵を含むこの付近の南側斜面には、かなり広く遺跡が発見されるものと推測される。

発掘地点では、竪穴住居跡は、斜面の上から下方にかけてそれぞれ認められたが、中腹より上方に顕著だといえるようである。斜面下方では、腐植土中に営まれたものもあるのか、プランの不鮮明なものがある。縄文土器は、斜面の上部にも下部にも少量認められた。又、旧石器も発見されているが、これらの古い時代の遺跡は不明であった。

このような立地や遺跡・遺物散布の状況から判断して、この小丘陵は眺望も良い恵まれた環境であり、水の点でも北側崖下の高尾川を利用して極めて適した地であったと推測される。しかも、後期旧石器時代以降そこは長く住居地として利用されてきたのであったと知られるのである。

この部分の地層は、北側崖面の観察では、基盤に礫岩が見られ、その上に約2mほど黄褐色土層が堆積している。この黄褐色土は、火山灰堆積層と思われる。この層の直上に表土の腐植土層がある。即ち、古代における生活面は、ほぼこの黄褐色土の上部から展開するものであろう。古墳後期の竪穴住居跡は、この黄褐色土の上部に切り込んで営まれていた。

ともあれ、この舌状小丘陵の南側斜面を利用した古代の集落の一端が今回の調査で明らかとなったわけである。



第2図 大曲り遺跡発掘区域図

3. 遺 構

— 第 1 次 調 査 —

(1) 豎 穴 住 居 跡

第 1 号住居跡 本遺跡中で最も大きな住居跡である。北東辺8.3m，北西辺7.8mの長方形をなす。黄褐色土中の掘り込みは、最も深い西北壁で55cm，南にゆくに従って浅くなり，南西壁は周溝を残すのみである。南部では，第6号住居址を埋め床を張っている。柱穴は，野生するヤマイモを掘った穴が多いため判別しにくい，西部（P₄深さ45cm），北部（P₁深さ21cm）が確認された。南部のピットP₃は深さ70cmあり柱穴とは認めがたい。P₂は深さ28cmで多分柱穴と考えられる。豎穴中央にも深さ16cmのピット（P₅）があるが，あるいは柱穴であるかもしれない。

周溝はほぼ全周を回っているが，南部端で消えている。溝幅は広いところ（東北部）で約25cm，狭いところ（南西部）で10cm程度である。溝の深さは全体に5～6cmである。周溝の中にピットがかなり見られる。北辺，北西部にあるやや大きなピットはイモ穴と考えられるが，西側角周辺の小ピットは，壁体を構成する小柱の痕跡であるかもしれない。

北西壁中央部にはカマドがある。奥行1.1m，最大巾96cm，間口26cmを計る。床面からの現高は約20cmである。中央部でやや内側に張り出している。カマドを作った土は黄色粘土で，赤褐色に焼けてしまっている。特に焚口付近は赤褐色に固く焼けている。カマドの中には，土師器の底部破片が落ち込んでいた。煮炊用に使用していたものであろう。灰の堆積は約8cmである。煙出しの穴は確認できなかった。

床面は，中央部で黄褐色の張り粘土が厚さ5～6cm程に密に敷きつめてあり固い。周辺部ではやや薄くなり，周溝近くなると張り粘土は全く見られない。

カマドの右側に2.0×0.8m，深さ30cmの長方形貯蔵穴があった。内部から獣顎骨が一片出土したが，非常に脆く種類は判定できなかった。他には土師器の小片が数点出たのみで，遺物は極めて少なかった。カマドの左側にも不定形の小ピットがあったが，2・3点の土師器片が出たのみで，性質は不明である。

カマドの前の張り粘土を掘りさげたところ浅い不定形のピットになった。ピット内からは5世紀後半位に相当する土器片が出土した。

豎穴の周辺部には炭化材がかなり認められた。太いもので径12cm，細いもので5cm程度で，豎穴の中心に向いてたおれ込んでいる。屋根を構成した垂木の焼け落ちたものと考えられる。また東北辺に二ヶ所，南西辺に三ヶ所，中央やや南寄りに一ヶ所，焼土層が見られた。炭化材

と同位置にあることから、これと関連があるものとも思われるが、赤褐色に良くやけしまっている点から考えて、この住居跡が焼ける以前にすでに形成されていた。炉のような遺構であるかも知れない。

また、西の角に長さ1m、巾90cm程の張り出しが作られていた。ここからは遺物は全く発見されていない。本遺跡の他の住居跡においては、この種の遺構は見出されていない。

第2号住居跡 カマドが西に向いている二つの住居跡のうちの一つである。東西3.9m、南北4.4mの隅丸方形をなす竪穴である。掘り込みの深さは、最も深い北壁で35cm、南では壁はほとんど検出されない。周溝は、ほぼ全周を回っているが、南西の角では検出されなかった。周溝の幅は、最も広い北西隅で約45cm、最も狭い南辺で12cmであった。深さは北部で10cm程度、南では5cm程であった。

柱穴は各コーナーごとに計四つ発見された。径は20cm前後、深さはそれぞれ25cmほどであった。

カマドは西壁中央部に位置する。大きさは奥行、幅ともに約1m、焚口の幅は46cm、床面からの現高は10cm、内部は床面を15cm程掘り込んでいる。黄色粘土を積んで作られており、良くやけしまつて焚き口付近では、赤褐色を呈している。焚き口の両側には礫を各1個据え、カマドの構造の強化をはかっている。カマド内部の灰の堆積は著しく、灰層は15cm以上にも及ぶ。土師器の底部が2個体分発見されたが、一つは灰層上部に、他の一つは灰層最下部にまとまって存在した。煙出しの穴はくずれ落ちていた。

床面にはやはり粘土を5cm程度張ってある。中央部では硬くふみしめられているが周辺部では、張り粘土も薄くなりまた軟い状態であった。南西隅に径60cmの浅いピットが存在した。ピット内からの出土遺物はなかったが、貯蔵穴であろうか。

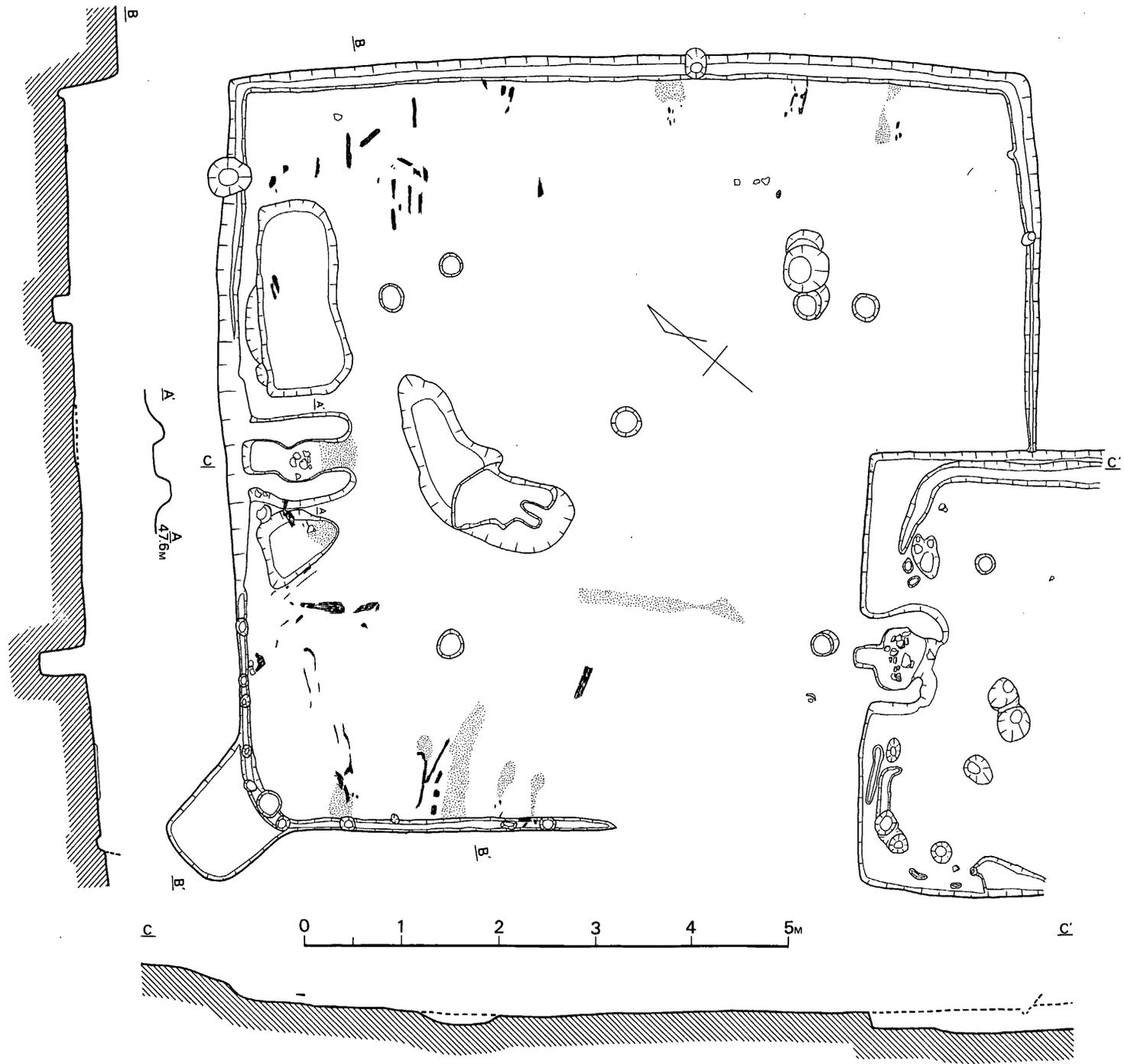
東側には長さ1m、幅90cmの土の流れ込みがみられた。表面には2～3cmの厚さで砂が敷かれており、あるいは入口であるのかもしれない。なお、周溝はこの下にも回っていた。

第2号住居跡の床面出土遺物としては、カマドの周囲から土師器片、砥石など、北西部から北部にかけて、土師器、小形土製品などが出土している。

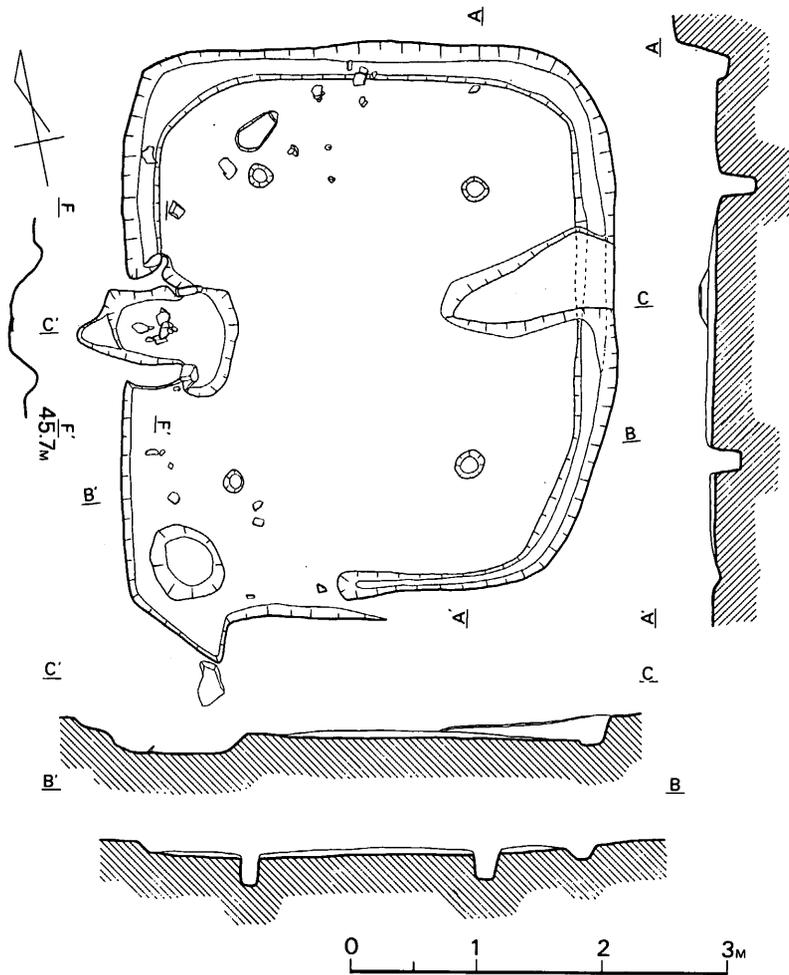
第3号住居跡 本遺跡中最も古い時期に相当する住居跡である。向きは第1号住居跡と同じく、軸線が南北から約44°振っている。南半分を第7号住居跡によって切られているか、北東近4.5m、北西辺5.4mを数え、隅丸の長方形住居跡であると推定できる。掘り込みの深さは北角において45cmで、かなり深いといえる。

柱穴は確認できなかった。

周溝は、東南壁の多数の土師器と粘土魂の出土した一角を除いては全周を回っている。各コーナーでやや幅広く、5cm位、狭いところで約5cmであった。溝の深さは全周とも5cm程度であった。



第3图 第1号住居跡实测图

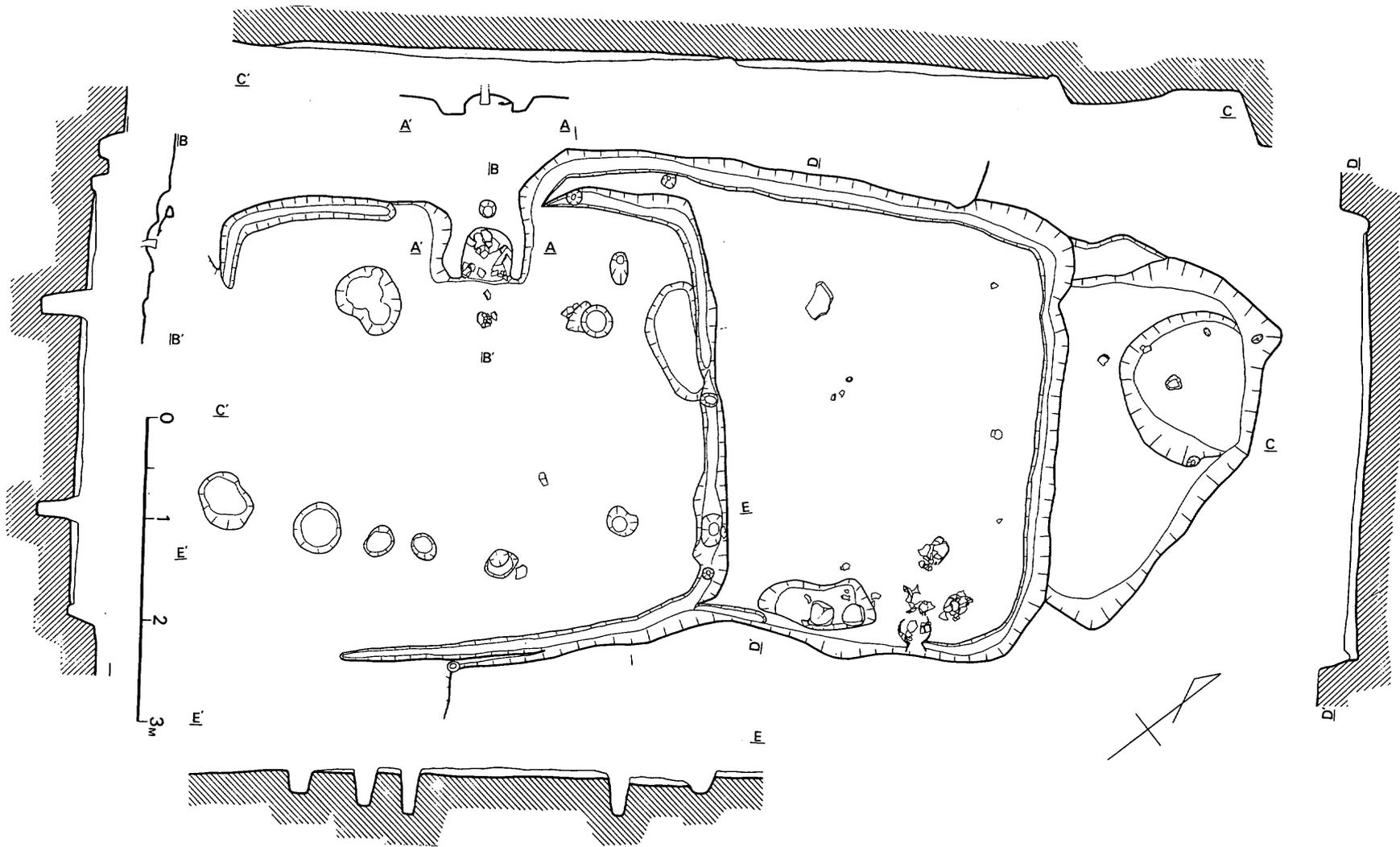


第4図 第2号住居跡実測図

本住居跡ではカマドは作られていなかった。床面出土の土師器からみても、九州において住居にカマドが作りつけられる以前の竪穴である。

南東壁北寄りに、復元可能な土師器が4個体（高坏1，壺3）また、北東壁中央部近くで完形の小形壺が出土し、そのうち、南東壁に接して出土した壺には良質の、やや青みのかかった黄灰色粘土がつめてあった。南東壁中央部には1.1×0.45mの浅いピットが掘られており、そこには、同じ粘土が二かたまり置かれていた。粘土を取り除いてみると、下に土師器壺片がかんでおり、これらの粘土塊もはじめは壺に収納されていたものであると推定できる。工器などの材料として、良質の粘土が大切に保存されていたのかも知れない。

第5号住居跡 発掘区域の東端に発見された。この住居跡は第2号と同様カマドが西側を向いている。東半分が民有地にかかるため全掘はできなかったが、4m四方ほどの隅丸方形にな



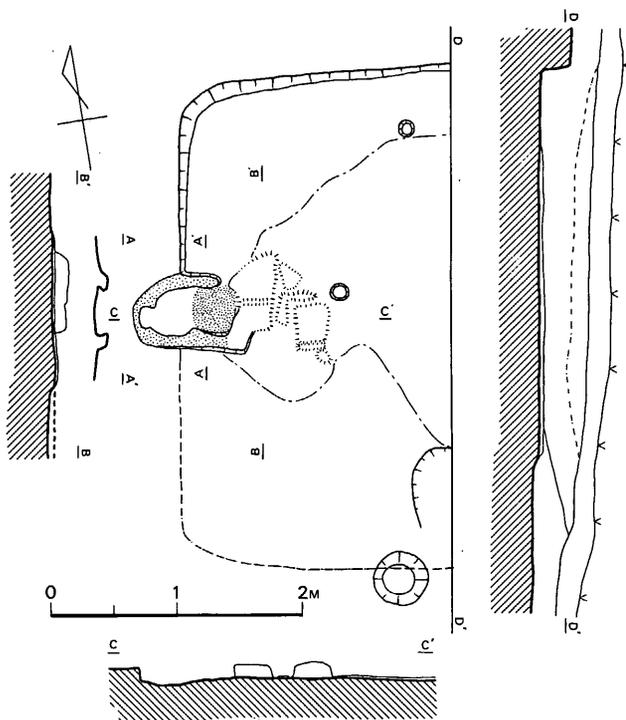
第5图 第3号·7号住居实测图

ると推定できる。掘り込みの深さは北部で23cm，南部では傾斜のためか確認できなかった。

竪穴内北部に径12cm，深さ17cmの穴，南部に径53cm，深さ42cmの穴があったが，いずれも柱穴とは認められない。

周溝は確認できなかった。

カマドは西壁中央部に作られ，奥行70cm，幅60cmである。また焚き口の幅は32cm，床面からの高さは8cmであった。黄色粘土を積みあげて作られており全体に赤く焼けしまっている。焚き口付近の土が良く焼けており，赤褐色を呈している。灰の堆積はさほど厚くなく2～3cm程度である。



第6図 第5号住居跡実測図

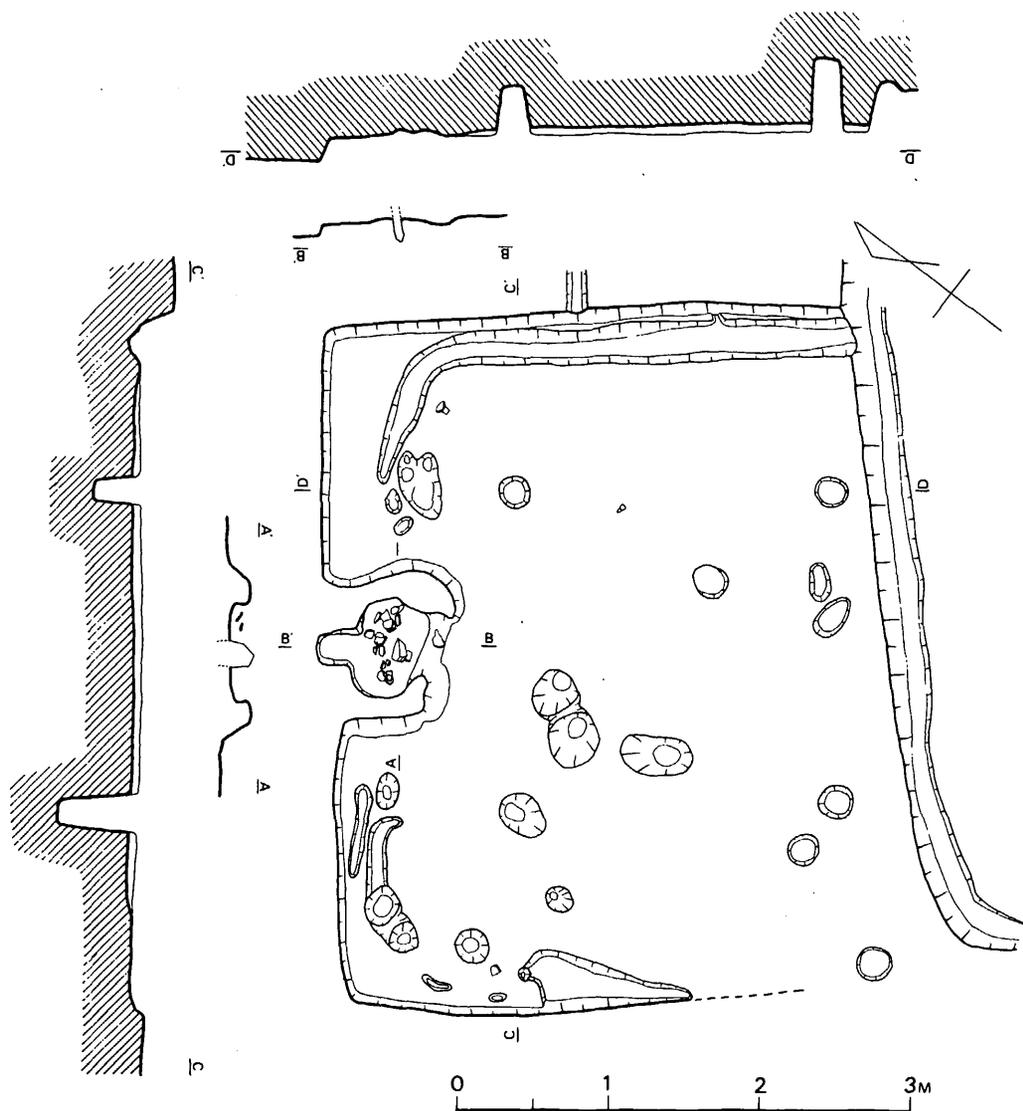
カマドの前部に黄色粘土塊がかなりの量落ち込んでいた。これは，カマドの上部構造に用いられた粘土がくずれ落ち，そのまま残ったものと考えられる。この粘土には著しく炎を受けた痕跡は見られない。

この住居跡においても，黄褐色土の地山の上に褐色の粘土を張って床とし，用いている。

第6号住居跡 この住居跡は軸線が南北に対して40°程傾いている。3号住居跡と切り合っているため東北辺の長さは不明であるが，西北辺で4.5mである。方形または隅丸方形をなす住居跡である。掘り込みは最も深い東北辺で約23cmである。南にゆくに従い，地形の傾斜のため掘り込みは浅くなり，最南端では壁は検出されなかった。

この竪穴には，ヤマイモを掘ったと考えられる穴が多く，柱穴の発見は困難であったが穴の位置，形状から，四つの柱穴をほぼ確認することが出来た。北の柱穴は径21cm，深さ40cm，東は径19cm，深さ44cmであった。西の柱穴はやや不整形をなすが，柱穴の上からヤマイモ穴を掘ったと考えられる。径28cm，深さ54cm。南には二つ並んで穴が有るが東側のものは深さ10cmしかなく，径19cm，深さ22cmの西側の穴が柱穴と考えられる。また本住居跡最南端に径23cm，深さ5cmの円形ピットが確認された。このピットには焼土がつまっていた。住居跡との関係は不明である。

周溝は北東壁沿いに確認された。幅は最大部で26cm、深さは7cmほどであった。北コーナーで曲がり、カマドに向かって次第に消えてゆく。南・西部では、はっきりとした周溝は確認できなかった。北西壁沿い、南西壁沿いに、一部壁に沿った細長いピットがあるが、周溝の一部であるとも考えられる。



第7図 第6号住居跡実測図

カマドは北西壁中央部につくり出されている。やはり黄色粘土を用いている。奥行65cm（煙出し部を含めると95cm）幅115cm、焚口の幅30cm、床面よりの高さ20cmである。粘土は焚口付近でよく焼きしまり、赤褐色を呈しているが、壁ぎわではほとんど焼けていない。焚口付近の床上也良く焼けしまっている。径20cm程の煙出し孔があったと考えられるが、煙道は落ち込んでいた。

他のカマドの例と同じく、内部に土師器片がかなり落ち込んでいた。灰層は5～6cmである。また、このカマドでは、中心部に巾1cm、厚さ5cm、長さ25cmの平らな石が、支柱として据えてあった。カマドにかけた土器の安定を保つためのものであろうか。

床面は、周溝のすぐ内側から黄褐色の粘土がびっしりと張ってあった。張り床の状態は本遺跡の竪穴の中で最も良好で、よく踏みしまっていた。

この住居跡の床面からは土師器片はカマド内以外では2点しか出土していないが、鉄器が出土しているのが注目される。

第7号住居跡 第3号住居跡をきってつくられている（第5図参照）。4.8×4.2mの隅丸方形をなす。掘り込みの深さは南東壁北部で22cm、第3号住居跡床面からは約10cmである。傾斜のため南壁は確認されなかった。柱穴は第6号住居跡などと同じく、ヤマイモ穴のため判別が困難であったが、北、東では確認できた。北の柱穴は径30cm、深さ48cm、東の柱穴は径26cm、深さ40cmであった。南隅にはピットが四つならんでいるがそのうち北から二つめのピット（径28cm、深さ36cm）が柱穴であるらしい。西コーナーの柱穴相当部分には不定形のピットがあるが、ヤマイモ穴によって柱穴が破壊されたものと考えられる。

周溝は、カマドの両わきから、全周を回っていたと考えられる。溝幅は最大部で28cm、狭いところで12cmほどである。溝の深さは10cm前後であった。傾斜した地形のため、周溝も南の部分は確認ができなかった。

カマドは、第3号住居跡の南西壁のコーナーを利用して、北西壁中央部に作られていた。奥行64cm、幅97cm、焚口38cmでやや幅が広い。床面からの現高は16cmであった。やはり黄褐色の粘土を用い、全体に良く焼けしまっていた。床面からの現高は約19cmであった。煙出し孔はカマド奥の開口部で径8cm、出口で径15cmのものが確認された。カマド内部の灰の堆積は約9cmで、灰の堆積の上面と最下部で、それぞれ土師器の底部の破片が発見された。またカマド前方の床面でも土師器の底部がまとまって出土した。第6号住居跡と同じく、カマドの中央部に、約8cm角、長さ20cm程の石材を立て支柱としていた。

床にはほぼ柱穴の内側の範囲に粘土を張り、中央部では良く踏みしまっていた。

(2) ピット類

B・PⅣ 第2号住居跡東側に住居跡とも考えられる竪穴が発見されたが、住居跡であるかどうか確認できなかった。竪穴は第1号、3号、6号、7号と同じく、軸線が南北に対し45°程

度の傾きを持つ。大きさは北東辺で3.4m、他は計測不能であったが方形ないし隅丸方形を呈すると考えられる。北部コーナーに顕著な焼土層があった。焼土層の下に黒色を呈する土層があったが、これを追ってゆくと、床面と考えられる張り粘土（厚さ7～8cm）の下にもぐり込んでゆく。もともとピットであったものがある時期に平らに床を張り、住居としたのかもしれない。柱穴、周溝、カマドなどは発見されなかった。遺物は、床面ないし床面直上で須恵器杯、砥石、土師器などがかなり出土した。

B・P I 第1号住居跡東側、第5号住居跡の北側に、最大形3m、深さ約50cmの不完形のピットが検出された。出土遺物はほとんどない。何であるかは判別できなかった。

B・P II B・P IVの東側に位置し、やはり不完形のピットである。これもB・P Iと同じく、出土遺物はなく、何であるか不明である。

B・P III B・P IVの西に接して掘られている。内部の土の色からみて、近世の土壌であることは間違いない。（長辺2m、短辺1.1m、深さ10cm）

B・P V 第7号住居跡の南に位置する。長辺1.8m、短辺70cmのほぼ長方形をなし、これもB・P IVと同様近世の土壌である。

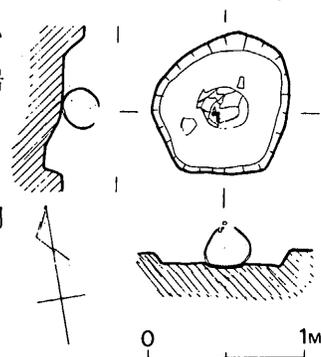
B・P VI 第1号住居跡の北東部に位置して、B・P Iとよく似た形状を持つピットが確認された。最大径3mでやはり不完形である。深さはB・P Iよりやや深い。出土遺物としては土師器片、須恵器片が数点出土したのみで、性格は不明である。

土師器壺の入った小ピット 第2号住居跡の東側、B・P IIIの北に土師器壺の入った小ピットが発見された。径85cmのほぼ円形で、深さは約10cmであった。壺は北西に口を向け横になって座っていた。壺の内部には、土が流入していたのみであった。また壺の横に、土師器高杯の脚部が出土した。

その他の遺構 第1号住居跡北東壁中央部から、ほぼ東西に浅い溝が走っていた。幅は50～60cm、深さは4～5cmであった。性格は不明である。

B・P VII 第3号住居跡に接してB・P I、IVなどと同じようなピットが掘られていた。長径3.5m、短辺2.1mの不完形をなし、北西に向って深く下っている。出土遺物（須恵器片、土師器片）、層位から考え、第3号住居跡の後に掘られたものと考えられる。

また、第6号住居跡の南に、住居跡の一角らしき遺構が発見されたが、北部の一端を残すのみで、南の大半が流されていた。周溝柱穴と考えられる遺構はみられなかった。



第8図 壺を出土した小ピット

— 第 2 次 調 査 —

(1) 竪 穴 住 居 跡

第 8 号住居跡 第 2 次発掘区中央部東端に発見された。トレンチ壁のため全掘は出来なかったが、東南辺壁は斜面で流れて不明と見られた。西辺は約 3.6m、隅丸方形をなすと考えられる。掘り込みの深さは西壁で 18cm 程である。ピットが三つあったが、柱穴は認定できなかった。同溝は認められない。

西壁中央部に焼土塊があった。40×20cm 程の範囲で床面よりの高さ 12cm、不完形をなす。形状からしてカマド跡と考えることはできないようである。第一次調査で発掘された各住居跡と同じく、南端は壁を確認できなかった。軸線はやや西北に傾斜を持つ部類に属する。

第 9 号住居跡 南東隅に住居跡と考えられる遺構が確認された。掘り込みは複雑で、不完形をなす。ピットが 5 つ検出されているが、いずれも柱穴とは見做し難い。周溝も認められなかった。床面には粘土が張られていた。北壁に焼土塊が見出された。長さ 50cm、幅 20cm であり、高さは 17cm で、西側では 10cm 程浮いていた。この焼土の西側には土師器片がかなり多数出土した。この土師器の散布状態と、焼土の形態から、これをカマド跡と考え、焼土をカマドの右半

分の残欠をみると、第 9 号住居跡を一辺 3.5~4 m の円形または隅丸方形のものと考えることができよう。そのように想定すると、この住居跡ではカマドが北にあることになり、本遺跡では唯一の例となる。

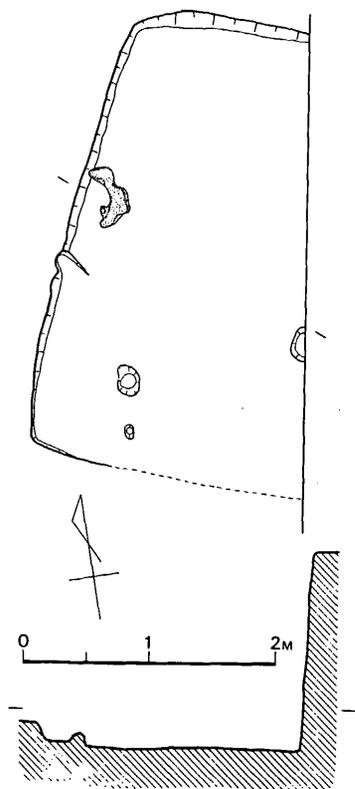
この住居跡の北に接して、住居跡と思われる遺構があったが、はっきりと確認できなかった。

(2) ピ ッ ト 類

B・P VIII 中央部に B・P I, VI, VII と同じような形態を持つピットが現われた。4.7×2.3m のほぼ楕円形を呈する。北に向って深くなっており、最深部で約 50cm 程であった。

B・P IX 第 1 号住居跡の西側に位置する。東西 1 m、南北 2.1m の長方形で、深さは最も深い北部で約 50cm、南部で 33cm であった。このピットも、B・P III, V と同様、近世の土壌である。

これらのほかに、1・2 次の調査で多くの小ピットが発見されたが、特に柱穴などとみ得るものは無く、平地住居などは考えられなかった。また、この区域では、ヤマモ掘りの穴が多いので、柱穴の判定も難しかった。



第 9 図 第 8 号住居跡実測図

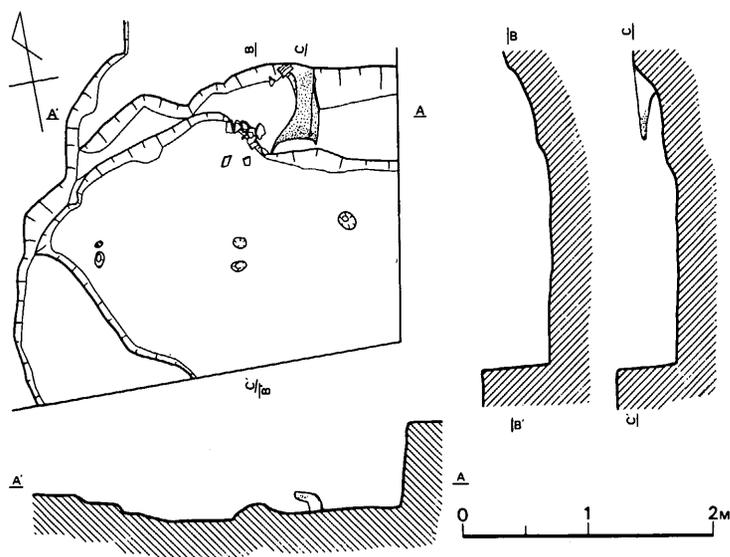
4. 遺物

(1) 第1号住居跡出土遺物(第11図, 図版第9-1~4)

杯(1) 竈跡の東側の貯蔵穴から出土したもので、土師質である。口縁部径14.9cm, 器高6cmである。口縁部はわずかに外方へ弯曲する。内外面とも横ナデで整形している。体部はほとんど胴張りがなく、ただちに底部へ向って弯曲している。底部は丸底で、外面に、胴部中程から施されている篋削りによる整形痕が見られる。また、体部内面は刷毛目をつけているが、底部まで及んでいないようである。色調は黄褐色を呈し、質は細砂を含んでいて、胎土良好である。

碗(2) 土師器で、竈跡西脇の出土品である。口縁部径14cm, 器高6.6cm, 口縁部は内方へわずかに弯曲している。外面口縁部上端直下に、かすかに、一条の沈線がめぐっている。体部は、口縁部下端から直ちに、内側に向って弯曲し、肥厚した底部となる。整形は、口縁部内外両面を横にナデ、体部及び底部の外面を篋で削り、内面を刷毛でなでている。刷毛目は、体部が横方向に、底部が縦方向に施されている。色調は、全体的に黄褐色を呈するが、口縁部内外面は赤味を帯びている。器肉はやや灰色を呈している。硬質で細砂を含んでおり、胎土良好である。

壺(3・4) 共に土師器である。3は碗と同じ貯蔵穴内から出土している。口縁部は短かく外反し、上端は断面を丸く仕上げている。外面は横ナデし、内面は横方向に刷毛目をつけて整形している。頸部内面には、口縁部の接着部をナデで消した跡が見える。体部外面は、刷毛目を縦方向につけて整形している。口縁部径15.4cm。なお、口縁部内外面及び体部外面に煤が附着している。4は竈跡内出土物である。口縁部は、体部からわず



第10図 第9号住居跡実測図

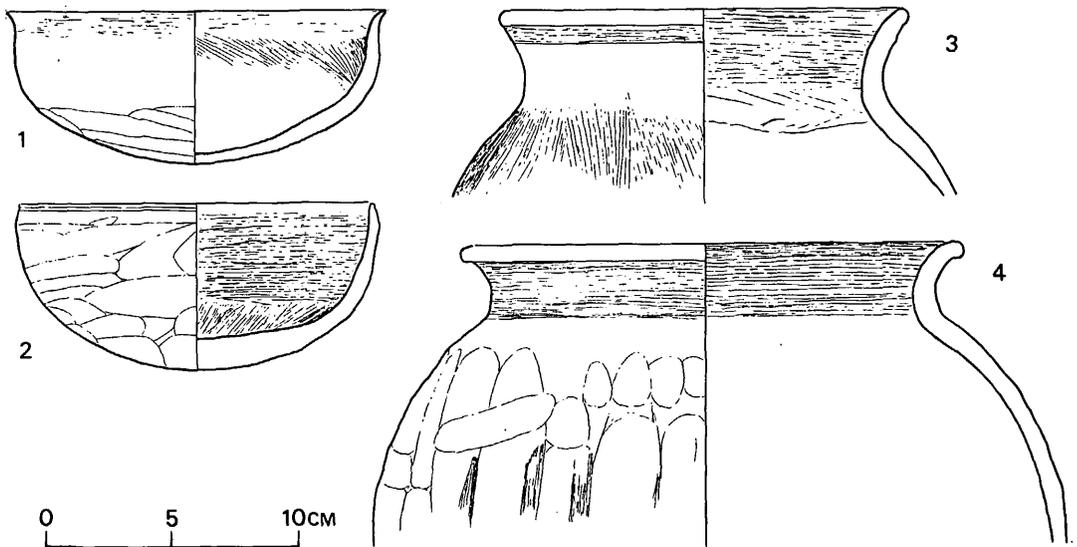
く外反し、上端は断面を丸く仕上げている。外面は横ナデし、内面は横方向に刷毛目をつけて整形している。頸部内面には、口縁部の接着部をナデで消した跡が見える。体部外面は、刷毛目を縦方向につけて整形している。口縁部径15.4cm。なお、口縁部内外面及び体部外面に煤が附着している。4は竈跡内出土物である。口縁部は、体部からわず

かに内方に入り、中程から大きく外上方に弯曲する。口縁部径は18.4cmである。体部は肩部の張りがなく、なだらかな曲線を描いて下方に開く。口縁部内外両面は横にナデて整形し、体部は篋削りで整形している。色調は茶褐色で、胎土は粗い粒子を含んでいて、比較的硬質である。

(2) 第2号住居跡出土遺物(第12図, 図版10-1-8)

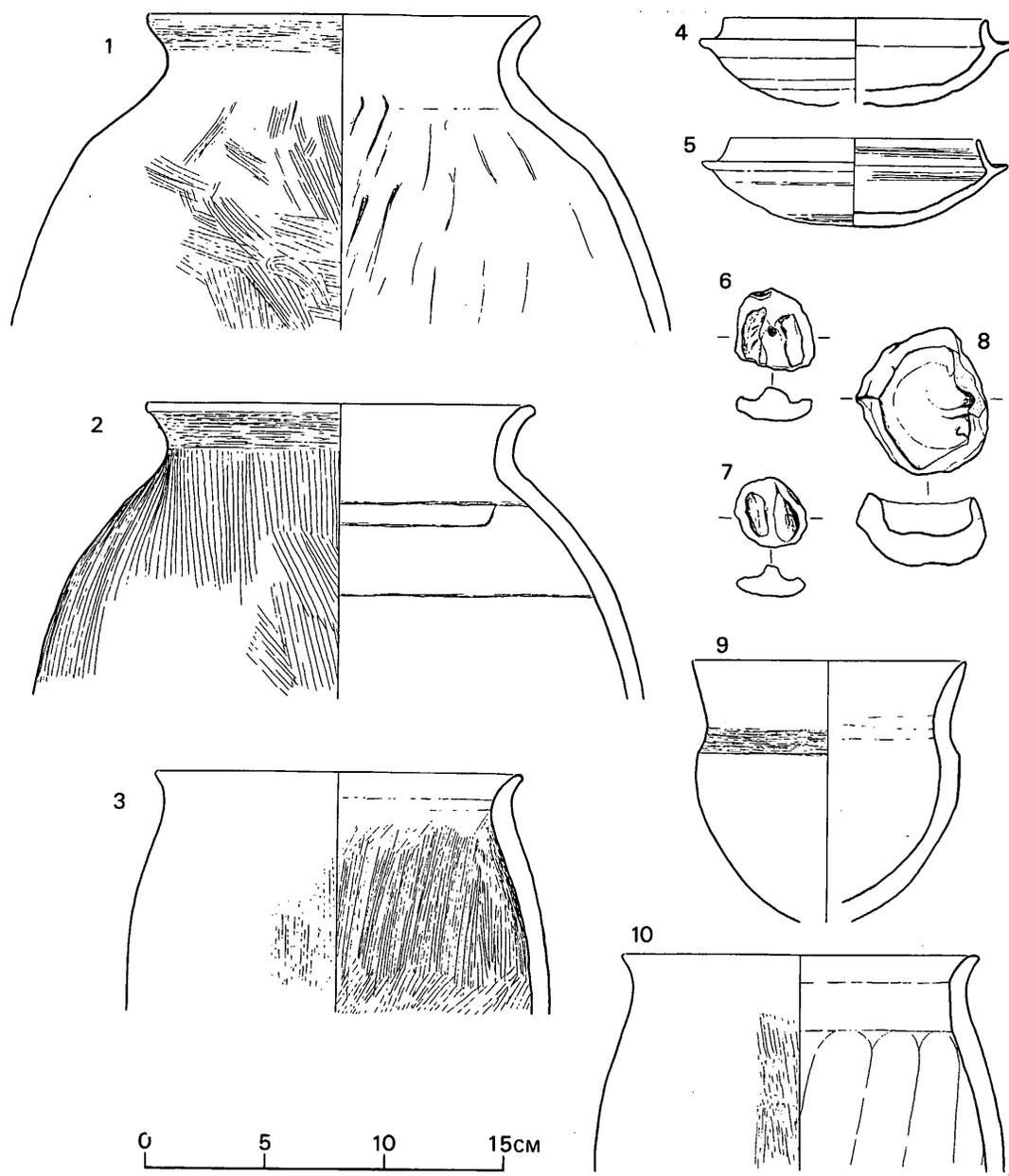
壺(1・2・9) すべて土師器である。1は口縁部が短かく外反し、上端部の断面を丸く、外面を刷毛で横ナデして仕上げている。口縁部の径は16.4cmある。体部は、わずかに段をつけて肩部とし、後は、軽く外下方へ開けて胴部としている。体部外面は刷毛で整形しているが、その方向が一定せず、内面は粗く篋で削っている。色調は黄褐色、粗い粒子を含み、比較的硬質で胎土良好である。胴部に煤が附着している。2は、口縁部径16cmで1とほとんど変わらない、内外面とも横ナデして整形し、短かく外反した口縁部をもつ。体部は、1のような段がなく、なだらかに外弯する。外面は縦方向に刷毛目をつけた整形痕が見られ、内面には、口縁部の接合痕及び体部の粒土紐の巻上痕と思われる痕跡が認められる。黄褐色の色調を呈し、細かい粒子を含んだ胎土で、焼成良好である。9は、口縁部径11.4cm、器高約11cmの小形壺である。色調は茶褐色を帯び、胎土は細砂粒を少量含む砂まじりで、焼成良好である。器形は、口縁部がわずかに弯曲しながら外反し、肩部から直ちに底部に内弯した体部をもつ。口縁部外面は横ナデしているが、外面及び体部内面には篋削痕が認められる。体部外面は不明瞭であるが、一部篋削りの跡が見られる。

甕(3・10) 3・10とも非常に短かく外反し、上端部断面の丸い口縁部をもつ。3の口縁



第11図 第1号住居跡出土遺物実測図

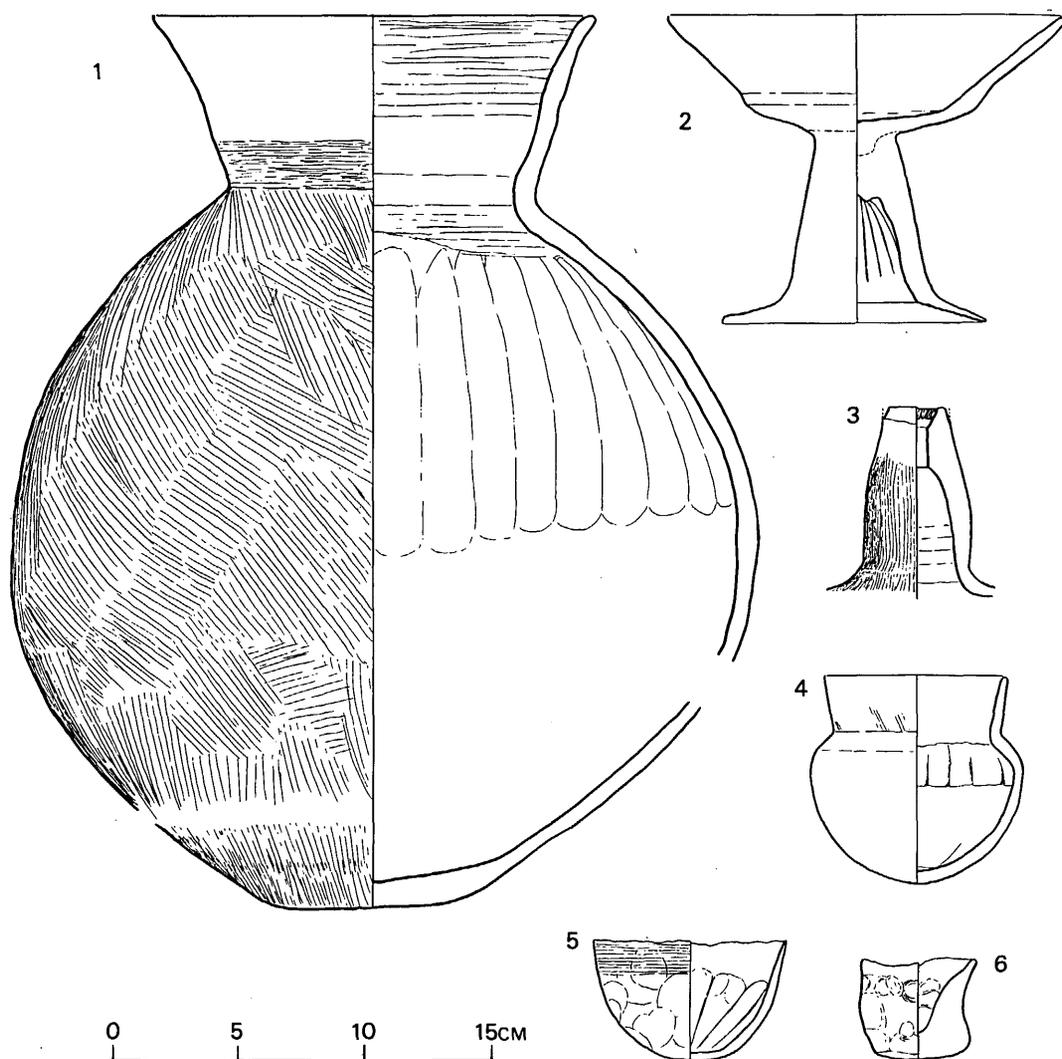
部径は15.2cm、10は14.5cmで、大きさも大差ない。3の体部の内外面は、ともに刷毛目をつけて整形している。10は外面のみ刷毛目をつけ、内面は篋削りをしている。また、頸部内面は、ナデて巾2cm程の面をつくっている。10の内面は全体が黒くこげ、煤が附着している。ともに土師質である。



第12図 第2号住居跡出土遺物実測図

杯身（4・5） 須恵器である。4の口縁部は内傾して、立ち上りは短かく、外上方に弯曲する。受部は外延せずまるく底部に至っている。やや厚手だが、特に底部は肥厚している。外面は篋で磨いて丁寧仕上げている。口縁部径10.8cm、器高約3.9cmである。5は、内傾し、短かく立つ口縁部をもつ。受部は外延せずまるく底部に至っている。4に比べて薄手である。仕上りは丁寧である。口径10.2cm、器高3.6cmである。4・5ともに堅緻な質である。

手づくね土器（6・7・8） 6・7は円形の土坂の一面をつまみあげて中央に盛り上り



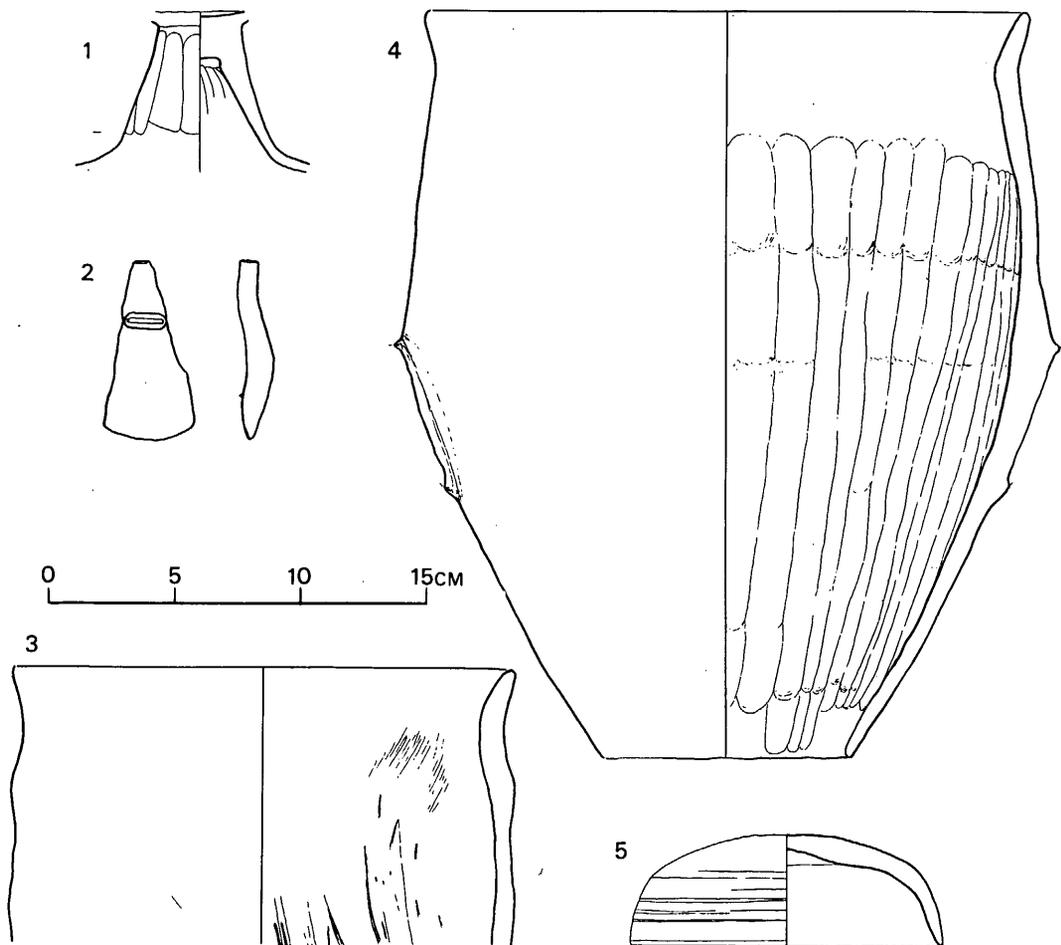
第13図 第3号住居跡出土遺物実測図

をつくったもので、つまみ付きの蓋状品である。7は椀形品で、内面には、器壁を盛り上げた指頭痕らしきもの残っている。いずれもミニチュアの製品であろう。

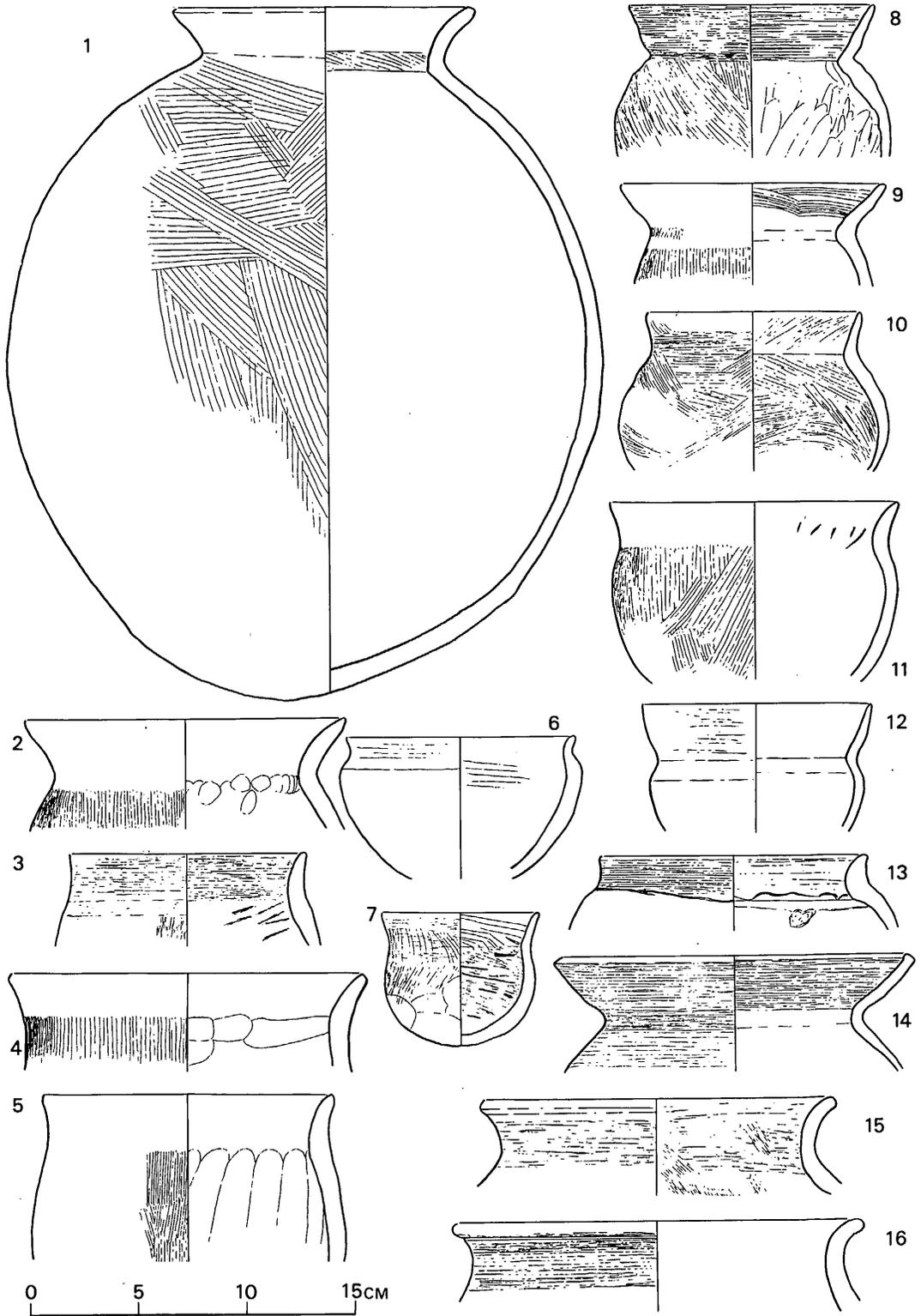
(3) 第3号住居跡出土遺物(第13図, 図版11-1~7)

すべて土師器である。

壺(1) 図示したものは、口縁部径17cm, 器高約35.2cmである。口縁部は長く、外上方に開くが、一度わずかに内弯させている。内外面とも横にナデ、上端部断面を丸くして仕上げている。体部は、中程で胴部最大径(29.5cm)となり、球状の器形をなす。外面は刷毛目による整形を行ない、内面は、その上半部を篋削りしている。底部は平底であり、径約7cm程で、不安定である。刷毛による整形を及ぼしている。色調は茶褐色を呈し、胎土に少量の細砂粒を含んでいる。



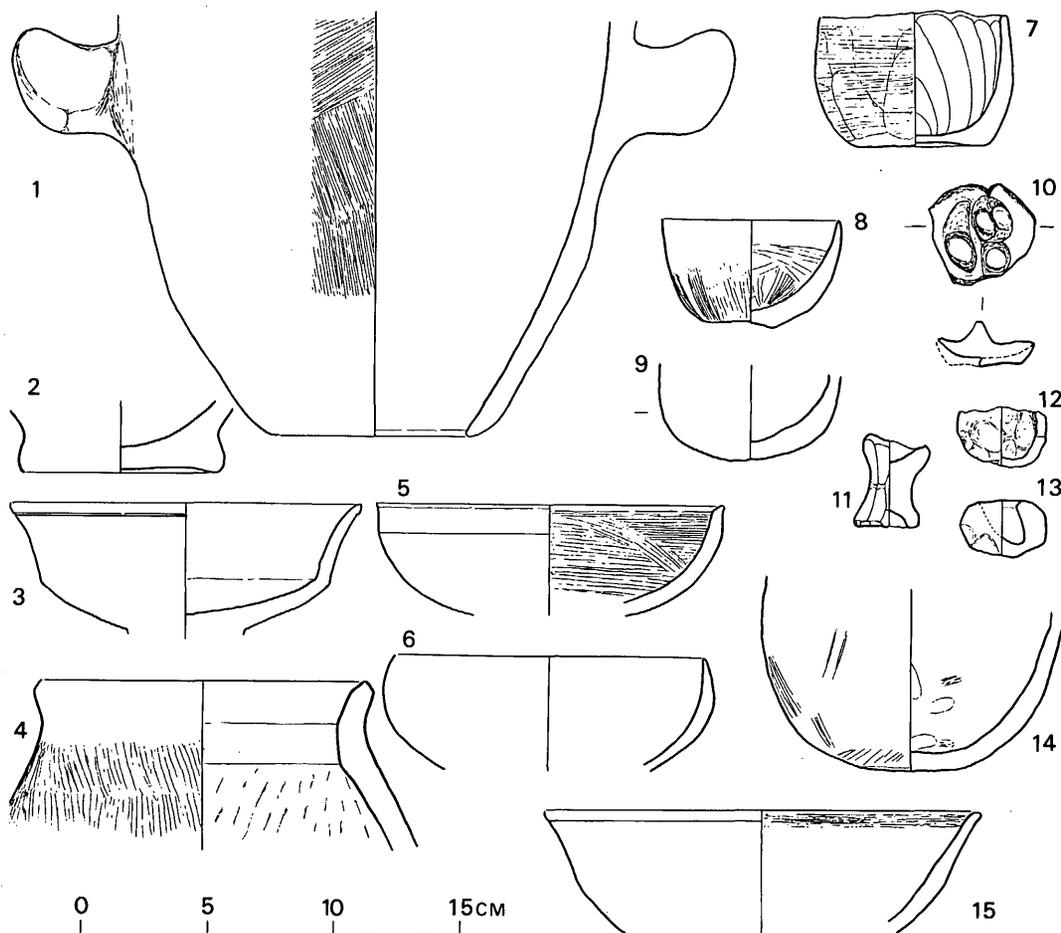
第14図 第6・7号住居跡出土遺物実測図



第15図 大曲り遺跡出土土師器実測図(その1)

第3号住居跡からは、他に2個の壺（図版11-2・3）が出ている。ともに、図示したものより小形で、薄手である。また、ともに口縁部は短かく、丸底であり、内外面に煤が附着している。

高杯（2・3） 2は口縁部径15.4cm，器高12.3cmである。杯部は浅く，底部はわずかに彎曲し，稜をつけて外上方に広く開く。脚部は柱状部の中程でわずかに張りながら下方に開き，やがて急に外方へ広がり裾部をつくる。杯部と脚部とでは，脚のつけ根で色調が異なり，杯部は暗茶褐色，脚部は茶褐色を呈している。また，杯部内底面中央に若干の穿入が認められ，両部が別々につくられ，後に接合されたものと考えられる。なお，柱状部内側には，柱状部をすぼめた時のシワを消すために篋で縦にナデている。3は張りのある柱状部をもつ高杯である。柱状部と裾部に刷毛目を施して整形している。また柱状部内側には，篋を横に回して，柱状



第16図 大曲り遺跡出土土師器実測図(その2)

部をしぼめた時のシワを消している。この高杯の杯部は脚部との接合面から剥がれたものと思われ、柱上部上端部内側に巾2mm程の凹みを中央に向けてめぐらせており、杯部との接合を良くする工夫を施しているものと考えられる。

小型丸底壺（4） いわゆる埴である。口縁部径6.8cm、器高8.2cm。口縁部はわずかに外上方に直線的に開く。体部は、高い位置で肩が張り、最大径（8.4cm）をなす。肩部からは直ちに内弯して丸底の底部をつくる。口縁部は外面上半部及び内面を横にナデ、外面下半部を斜方向の刷毛目で整形している。体部内面の肩部付近には縦方向の篋削り痕が見え、底部にも5方向の篋削りがなされている。なお、外底面から体部にかけて煤が付着している。

小型埴形品（5） 貯蔵穴脇から出土したもので、手づくね土器であるが、内面を篋で削り、口縁部外面を横ナデして整形している。しかし、口縁部上端は凹凸があり、高さが一定していない。体部から底部にかけては手づくね痕を残したままである。

手づくね土器（6） 周溝から出土した。手づくねのミニチュア製品である。用途、器形等不明である。

(4) 第6号住居跡出土遺物（第14図，図版9-5・6）

高杯（1） 色調黄褐色，器肉灰黒色を呈し，土師質である。脚の柱状部と裾部の一部を残すのみである。柱状部はわずかに内反しながら下方外側に開く。外面は篋による整形がなされ、巾は一定しないが14面を数える面取りがなされている。内側にも、柱状部をしぼめた時のシワを消すために、縦方向に篋削り痕を残す。

不明鉄器（2） 底辺が弯曲した三角形の平面をもつ。錆が生じているため明瞭でないが、弯曲した底辺が刃部であろうと思われる。用途は不明である。

(5) 第7号住居跡出土遺物（第14図，図版9-7～9）

甗（3・4） 3は西北部の柱穴内から出土している。口縁部径19.6cm。胴部から口縁部に向って内弯させた後、口縁端に向って軽く外反させた口縁部をもつ。体部は、残存部では円筒形を呈している。内面は篋で縦方向に削り、整形している。外面は不明瞭であるが、刷毛目を施した様である。色調は、黄褐色を呈し、内面には全体に煤が付着している。4は、竈跡より出土したもので、口縁部径23.2cm、器高29.5cm、蒸気孔径9.4cm。口縁部はくの字形に短かく外反する。体部は、口縁部下端から直ちに開き、中程で把手をつけた後、蒸気孔に向ってすぼむ。底部は平坦で、蒸気孔は内方から穿っている。体部内面には縦方向の篋削り痕が認められ、又煤が付着している。全体の色調は黄褐色で、細粒子を含んだ比較的良好な焼成をなす。

杯蓋（7） 灰白色を呈した軟質の須恵器である。底部から丸味をおびた稜を境として、下方に広がる口縁部に至る。

その他、竪穴住居の竈跡からは、壺の底部かと思われるものが1点出土している。

(6) その他の出土遺物

A. 土師器

壺(第15図, 1~16, 図版12・13) 1は、短かいが急角度に外反する口縁部をもつ。口縁部内外両面は横にナデ, 上端部は断面丸く仕上げているが, 内面頸部付近には斜方向の刷毛目がつく。体部は, 肩の張りがなくなだらかに壺曲し, 中程で胴部最大径をなして底部に向う。底部は丸底で, 全体的に夕円球状である。体部外面は刷毛目をつけて整形している。器面の色調は灰褐色を呈し, 器肉は灰黒色である。口径13.4cm, 器高31.8cm, 胴部最大径27.6cm。2は比較的急角度で外反する口縁部をもつ。頸部内面に指頭状の押さえ痕が見え, 体部外面に縦方向の刷毛目がつけられている。3・5は, 短かくわずかに外上方へ壺曲する口縁部をもち, 内外両面を横にナデ, 上端部を断面丸く仕上げている。また, 3・5とも体部外面に刷毛目をつけて整形しているが, 内面は, 3が横方向の篋削り, 5が縦方向の指頭状のナデにより整形されている。4は, 口縁部が上方へ短かく外反し, ならかに壺曲する体部に続く。口縁部内外両面を横ナデし, 体部外面を刷毛でナデて整形している。また, 体部内面には横削りの篋痕が見える。

6~12は小形の丸底壺である。6は, 口縁部を非常に短かく外反させ, 口縁部下端下方約5mm程のところで肩を張らせた後, 底部に向って内弯させている。底部外面に篋削り痕が見られる。口縁部径10.3cm, 器高約6.9cm程である。7は, 口縁部径7.4cm, 器高6.1cmで, 短かく外上方に開いた口縁部をもつ。体部の張りは弱く, わずかに外弯した後, 底部に向って弯曲する。口縁部内面に刷毛目をつけ, 底部外面を篋で削って整形している。8は, 口縁部が下端でしまり, 内面に明瞭な稜をつけて, 外上方に開く, 体部はならかな弯曲線を描くが, 口縁部より広く開く。口縁部内面及び体部外面を刷毛で整形し, 体部内面を篋削りしている。また, 口縁部内外面と体部外面に煤が付着している。9は, 外上方に大きく開いた口縁部をもち, 外面を横にナデ, 内面を横方向に刷毛目をつけて整形している。体部は張りが弱く, 外面を刷毛で, 内面を篋で整形している。10は, 短かく外反する口縁部と球状の体部をもつ。器の内外両面を刷毛で整形している。11は, 弓状に外弯した口縁部と張りが弱く, 口縁部径とほぼ同じ規模を有する体部をもつ。体部外面は刷毛目をつけ, 内面は篋削りして整形されている。11の口縁部は軽く内弯して外上方に開く。体部は丸い肩部をつくった後, 底部に向って内弯する。硬質, 薄手で焼成は良好である。13は, 肥厚した非常に短かい口縁部をもつ。口縁部内外両面は横ナデされ, 体部内面は篋削りされていて, ナデと篋削りの境は稜をなす。14は, 胎土, 焼成とも12とほとんど同じで, 色調も黄褐色であるが, やや灰味をおびている。口縁部は頸部でしまった後, すこし内弯しながら外上方へ大きく開く。上端部はナデて面をつくり, 内側に少し張り出している。15・16は甕かとも思われるもので, 外上方に弯曲した口縁部である。ともに, 上端部断面を丸く仕上げ, 内外面を刷毛で整形している。

甗（第16図1，図版15-4） 内方へすぼむ体部は，把手下方部中程で軽い稜をつくってさらに内反する。底部は径7.4cmの蒸気孔を設け，体部下端を丸く仕上げている。把手は基部の巾とほぼ同じ長さである。

他に把手だけが数点出土している（図版15-1～3・5・6）。

高杯（第16図3・15，図版14-15） 杯部の口縁部は外弯しながら開き，外面の上端下方4mm程のところになんかの沈線をめぐらしている。口縁部から底部へは明瞭な稜をつくって移行している。底部は内弯している。色調は赤味をおびた褐色で，器肉は黒色である。15は，弯曲しながら外上方へ開く口縁部をもつ。口縁部上端は断面丸く仕上げ，内面に刷毛目がつけられている。

甕（第16図4・14，図版14-4・10） わずかに外反する短い口縁部をもつ。体部外面に刷毛目をつけ，内面を篋で削って仕上げている。14は外面に粗い刷毛目をつけ，内面を指で削って整形している。刷毛目は外底面に及んでいない。

杯（第16図5，図版14-3） 口縁部外面はナデで直立させ，上端部を面取りしている。体部は口縁部から直ちに底部に向かって弯曲させている。体部内面には横方向の刷毛目をつけられ，丁寧に仕上げられている。口縁部内外面及び体部内面には煤が付着し，口縁部の器肉は黒色を呈している。

壺（第16図6，図版14-6） 口縁部内面は直立するが，外面は内弯し，体部から底部へとスムーズな曲線を描いている。

埴形品（第16図7・8・9，図版14-1・7） 7は平底であるが，わずかに内弯し，体部は中程で軽く張っている。内面は口縁部上端から底部中央に向かって右巻に指頭によるナデで整形している。体部外面は横方向に刷毛目をつけ，外底面は篋削りによって仕上げている。口縁部径6.8cm，器高は，口縁部上端が粗雑に仕上げられて一定しないが約5.2cmある。8も平底で，刷毛によって整形されているが，外底面には及んでいない。外底面から体部にかけて，巾2.5cm程の帯状に煤が付着している。口縁部径7cm，器高4.1～4.3cmである。9は手づくねで，外底面にススが付着している。

手づくね土器（第16図10・11・12・13，図版14-5・8・9） いずれも手づくねのミニチュア土器である。10は指でつまみ上げてツマミ状部をつくり，貼りつけて反対面をつくっている。11は器台あるいは高杯かと思われるもので，一部分に煤が付着している。12・13は埴形品で，13は，粘土塊に指を差し込んで作り上げただけのものである。12の外底面には編物様の圧痕が認められる。

土器底部（第16図2，図版14-2） 体部は底部に向かって内弯するが，底部で外弯し，下端に至る。外底面は内弯している。内底面も弯曲している。器形は不明。

B. 須恵器

今回の発掘では、第2号住居跡床面で2点の坏が出土した他は、床面出土の良好な資料はみられなかったが、表土・第1層から多数の須恵器が出土している。器形は、坏、坏蓋、高坏、高坏または台付壺の蓋、甗、埴、甕腹などである。

坏身（第17図13・14・23～34，図版17）

破片が多数出土したが、実測できるものは14点ほどであった。最も古いと考えられるものは14で、立ち上がりが高く(16mm)整形、焼成とも良好で比較的薄手である。表面は灰色で、断面の色調はやや黒みがかっている。

他の大部分は胎土に少量の砂を混ざるものもあるが、緻密で良好なものが多い。焼成にはかなり差異がみられ、黒灰色に固く焼きしまっているもの(25・27等)、良く焼けており表面が赤褐色を呈するもの(24・29)、灰色のやや軟質のもの(14)、灰白色の軟質のもの(32・34)などがある。また26は生やけで、表面は淡茶褐色を呈している。

23は立ちあがりと蓋うけ部の境界に条線を施し、立ちあがり部先端はやや立ちぎみになっている。器壁は薄い。27・31・34はこの種のものである。

24は立ちあがり部と蓋うけ部がなだらかな曲線でつながっており、境に条線がない。

25・26・29・33などはこの種に属する。

28はやや小形の杯で、立ちあがりは短かくまっすぐに内傾している。また底部は平らで「X」形と推定されるカマじるしがある。体部はやや外反している。この杯はやや時期が下る可能性がある。

ほとんど全ての杯にへら削りのあとがみられ、13の右まわり、24の左まわりがはっきりと確認できる。またカマじるしとしては「X」形の他に「◇」形のものが1点出土している。

坏蓋（第17図8～13，図版16-6～13）

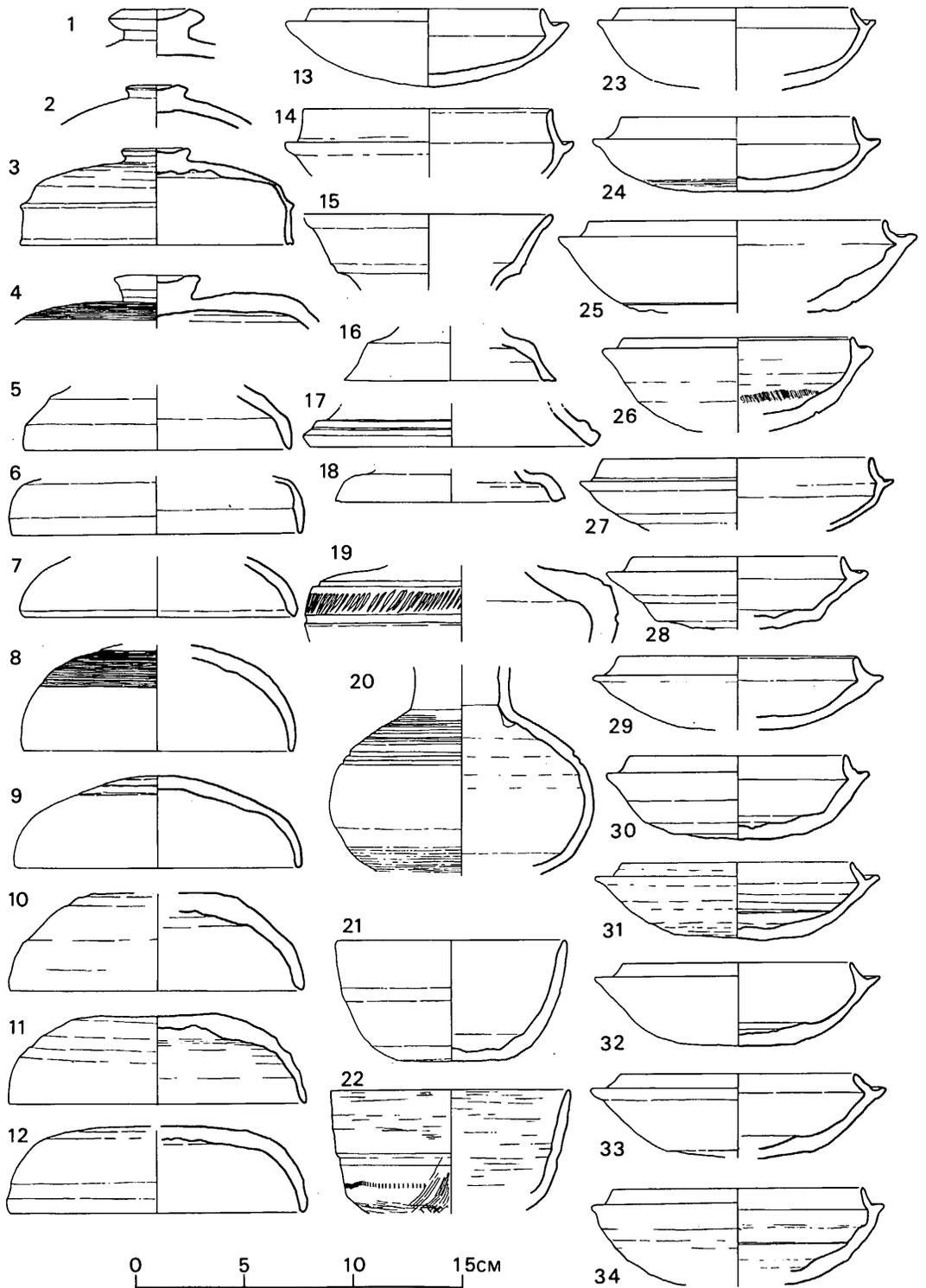
完形に近いもの2点(10・12)、半個体分のもの1点(13)、破片数点が出土している。

11は径13.7cm、高さ4.1cmで、本遺跡出土の杯蓋としては大形に属する。胎土は少量の砂が混入しているが緻密である。焼成は良好で、表面は黒色ないし黒灰色、裏面は灰色をしている。表面には左まわりのへらけずりの跡がみえる。裏面は、らせん状の整形の跡がはっきりと認められる。

12は径、色調は11と同じであるが、立ちあがりがややきつくなり頂部は平らである。やはり左まわりのへらけずりがみられる。焼成はやや甘い。また頂部にカマじるしがある。

9は径13.4cm、高さ4.2cmで、前2点に比較してやや小形である。立ちあがりはなだらかで、頂部まで勾配が続く。表面には左まわりのへらけずりがある。胎土は大粒の砂を含んでいる。色調は表裏とも灰色である。裏面には回転整形の跡とともに布状のもの擦痕が見られる。

8・10はこれと同じ系統に属するが、焼成は悪く軟質で、灰白色である。



第17図 大曲り遺跡出土須恵器実測図

8は径12.8cm、復元高約5cmで径のわりに深く作られている。中央部から頂部にかけて、沈線が回っている。胎土は緻密で、整形、焼成とも良好である。これらの点から、杯蓋ではなく高杯などの身であるとも考えられる。

つまみつき蓋（第17図1～4、図版16-1～5）

1はつまみ部のみの破片で径4.4cm、高さ1.5cmで、上面中央は凹み、その深さは5mmである。つまみ部基底に貼りつけのあとが鮮明に見られる。胎土は砂の混入もほとんどみられず良好であるが、焼きはやや悪く、灰色をしている。

2はつまみ部径2.8cm、高さ6mmで凹みの深さは2mmである。1に比べ作りが雑で、凹み部の稜線ではっきりしていない。焼成は生やけで、灰白色を呈している。

3は第1号住居跡埋土内出土でほぼ完形に復元することができた。器壁は非常に薄く、繊細な作りである。径12cm、高さ4.5cmで、つまみ部は径3.2cm、高さ6mm、凹みの深さは約2mmで、凹み中央でやや高くなっている。肩部に細い張り出しを巡らし、肩から口縁まで、ほぼ垂直に立っている。口縁部はやや厚みを増し、下端面には一本の条線が施されている。また肩部からつまみ部にかけて右回転のヘラけずりがある。胎土は良好であるが、焼成はやや悪く、色調は灰色である。

4はつまみ部径4.0cm、高さ1.2cm、凹みの深さは約3mmである。蓋部上面に巾4.5cmにわたって櫛目状の沈線が施されている。内面は、整形後布状のもので表面をなでた痕跡がある。胎土、焼成とも良好である。

高杯（第17図16～18、図版16-2～6）

杯部1点、柱状部1点、裾部3点が出土している。

杯部は受け口を持つもので、その立ちあがりには内傾して短かく、本遺跡出土杯のうち主体をなすものと大差ない。胎土は緻密で焼成は良好である。底には巾3cmにわたって、細い沈線が回っている。柱状部に稜を部分で欠けているが、あまり太い脚にはならない。

柱状部（図版18-6）は現高約6cm、柱の最小径8.4cmである。胎土は砂を含まぬ良好なもので、整形・焼成ともに良い。わずかに残る杯部にはヘラけずりがみられる。16は一担立ちあがったのち、平坦面を作り、柱状部に続く。18もほぼ同様の作りであるが、やや低く、器壁は厚い。両者とも下端に面どりがしてあるが、後者は外陵が浮く。17は縁が2段に作られており、平坦面を作らず、直に柱状部に移ると推定される。下端には面どりがあがる。ただ、立ちあがりがかなり急になっており、壺などの口縁部であるとも考えられる。

塊（第17図21・22、図版18-9・10）

2点が出土している。

21は径10.7cm、高さ5.5cm、胎土には大きな砂粒を含むが焼成は極めて良好である。器壁は底部で5.5mm、口縁部で3.5mm程度である。底部には左まわりのヘラけずりがみられる。22はこれ

よりやや大きく、径約11cmで、器壁はほぼ垂直に近く立ちあがっている。胎土、焼成とも良好である。体部中央に巾8mmの凹線が回っている。この壺は底部を全く欠いており、脚が付いた可能性も考えられる。

甗（第17図15・19・20図版18-1・7・8）

口縁部1点、体部2点が出土した。

19は体部の肩の部分に2本の沈線を巡らし、その間に斜行沈線を施している。頸部は体部と接合した面で剥がれ欠けている。器壁は厚く、最大10mm、最も薄い部分でも6mmをかぞえる。

20も体部であるが、19が肩が張っているのに対し、肩は張らず中央からやや下部にかけて最大径がある。肩部に2本の条線を巡らし、肩から頸部にかけてと下半部に細い楯目状の条線を何本も施している。器壁は前者に比べかなり薄く、4～5mmである。

15は甗の口縁部と推定される。口縁上端でやや外反し、頸部にかけては段がつけられている。以上3点とも胎土、焼成とも良好で黒灰色または灰色を呈している。

砥石（第18図6～9図版19-4～10）

砥石5点砥石と推定されるもの2点が出土した。

6(図版19-5)はB・PⅣ内出土で、一端を欠き現長7.8cm、最大幅4.5cm、クビレ部は3.0cmである。三側面はよく使いこまれ、また上面も使用され、平らになっている。一側面は、わずかに使用の痕跡が残っている。石材は多孔質で、白色を呈する。図示していないが5と同様一端を欠き現長5.7cm、最大巾5.2cmのものがある(図版19-4)。これも三側面がよく使いこまれ、次いで上面、一側面は原石面を多く残している。石質も5と同じく白質の多孔質岩である。

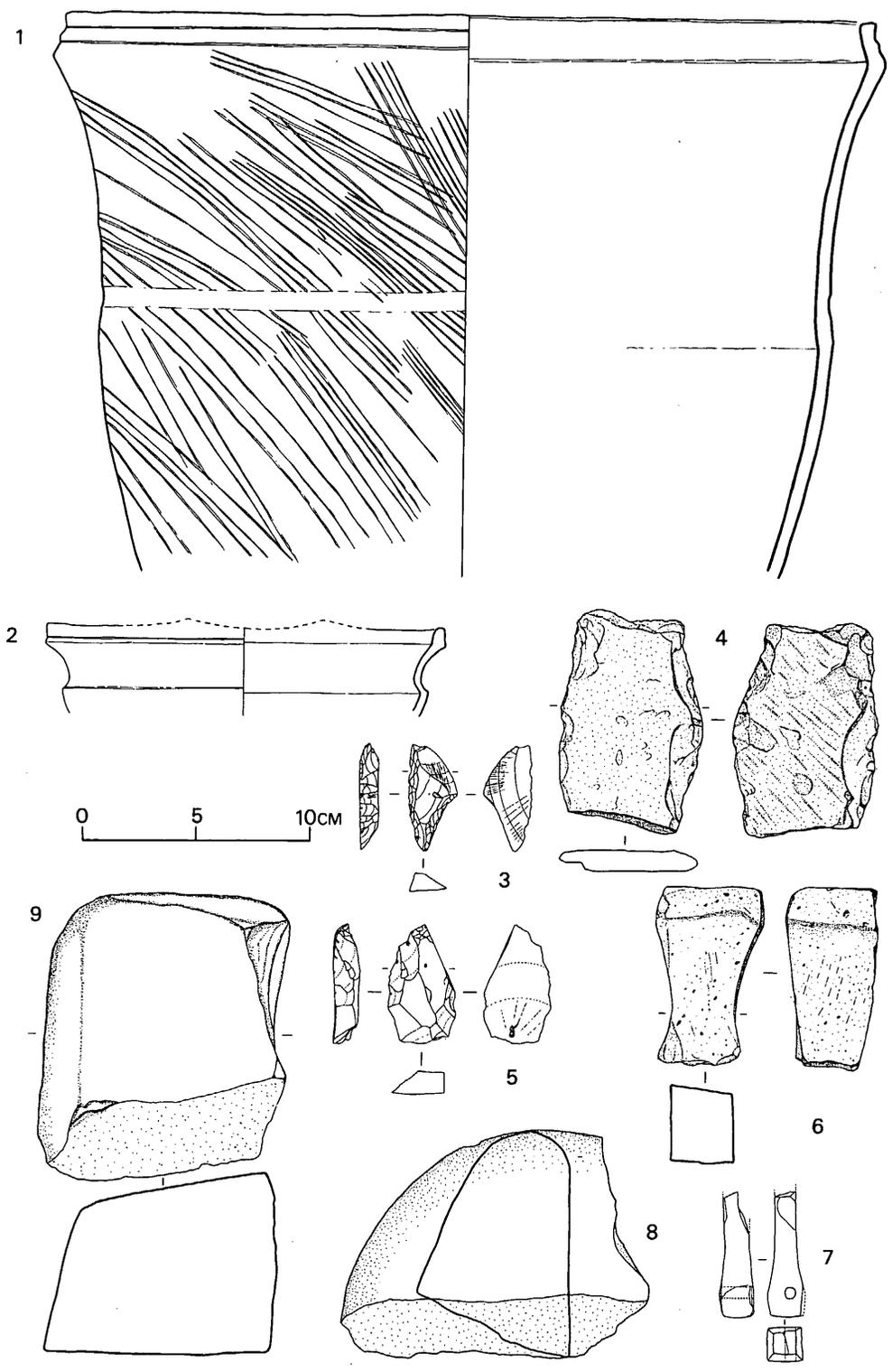
図版19-6は表土出土、前二者のような長方体をなさず、偏平な口の表裏両面を多く使用している。長さ9.0cm、巾6.5cm厚さは最大部で5cmである。一面はよく使用され中央部が1cm以上も凹んでいるのに対し、他の一面(写真表面)はほぼ平坦である。また、写真右上、下も平坦に磨かれている。石材は4・5と同じであるが、砂粒を多く含み、やや黄色を帯びている。

図版19-7は不定形の石材の二面を使用している。全長7.2cm。写真右の面はよく使われ中央部で約6mm凹んでいる。左面はほぼ平坦である。この二面以外は全て原石面をそのまま残している。石材は黒灰色を呈し、石質は前三者に比べ硬質である。

7(図版19-8)は第3号住居跡埋土内出土。棒状の小形砥石で、頭部に直径4.5mmの穿孔がある。下半部を欠き現長5.4cm、頭部巾1.6cm、中央部巾0.9cmである。四側面ともよく使い込まれ中央部が凹んでいる。頂部は平らに整形されているが、研磨に使用された痕跡はない。石材は7と同じである。

8(図版19-9)は第1層出土。最大長14cm。河原石の破片で、平坦面に表面を磨擦した痕跡がみられる。石材は花崗岩である。

9(図版19-10)は第2号住居跡床面より出土した。河原石の断片で、12.5×10.5cm、厚さ



第18図 大曲り遺跡出土石器・縄文土器・砥石実測図

9 cmの砂岩である。顕著な人工のあとは見られないが、砥石に使用の目的で住居址内に搬入されたと推定される。

C. 石 器

切出し形ナイフ（第18図3） 表土より出土。長さ4.7cm，巾2.1cm，厚さ0.8cm，黒耀石製である。両面ともに横剥ぎで，両サイドに入念なりタッチが施されている。また，刃部の中央から先端にかけては顕著な刃こぼれがみられる。

黒耀石のフレイクは他に数片表土より出土しているがいずれも小形で，石器と認められるものはなかった。

スクレイパー（第18図5） 第1層出土。長さ5.2cm，3.0cm，厚さ1.1cm，サヌカイト製である。裏面は縦剥ぎされているが，表面の剥離の方向ははっきりしない。右側面の一部に原石面を残し，原石面以外の側面にはリタッチが施されている。表面の風化はさほど見られない。スクレイパーまたはその未成品と考えられる。また，この種のサヌカイト石の石器未成品が他に数点出土している。

不明板状石器（第18図4） 比較的硬質の粘板岩系の石材を使用し，両側面を互に他の面から剥離している。下部を欠いており，現長9.7cm，巾7.3cm，厚さ0.9cmである。用途，時期は不明である。

D. 縄文式土器（第18図1・2，図版19-1・2）

1は大形の甕の上半部で，第一層下部より出土した。復元口径は35～40cmである。口縁は「く」の字形に内弯し，2条の沈線が外面に施され，また，上面には縄文が施文されている。頸部でやや内弯し，口縁より13cm程の部分で肩になっている。肩の張りはさほど強くない。またこの部分には2本の凹線が巡らされている。上部の凹線ははっきりとしているが，下部の線はかすかにつけられている。

胎土は白色の砂を多く含み，下半部はもろくなっている。色調は，外面は赤褐色を呈するが，下部は一部黄褐色の部分もある。内面は全体に灰褐色であるが，口縁部近くは黒色がかっている。

頸部から胴部にかけての外面には全体に斜行沈線が施されている。内面には多少の凹凸の他に施文は見られない。

2は第1層出土の浅鉢で復元口径は17.5cmである。胎土は砂粒を多く含んでおり，焼成は良好で表面は滑らかである。外面は黄褐色，内面は灰褐色を呈している。口縁部は「く」の字形に内弯し，外面に1本の条線が認められる。一端でやや口縁が高くなっており，数個の突起を持つ山形口縁の土器である。

縄文土器は，他に口縁部が4点出土しているが（図版19-2），いずれも前者と同系統のもので，口縁の条線が1本のもの2点，2本のもの2点である。

以上いずれも後期末から晩期初頭のものである。

E. 弥生式土器（図版19-3）

口縁部から頸部にかけての破片で、現高6.7cmである。胎土は砂粒を含み焼きは軟かい。色調は淡黄褐色を呈し、内面の一部には黒色の付着物が見られる。頸部は垂直に立ち、複合口縁を持つ弥生式又は古式土師器と考えられる。

5. 考 察

(1) 竪穴住居跡について

本遺跡においては、竪穴住居跡のプランの明確なものが8例知られ、他にプランなどを明確にし得なかったものが2・3ある。これらの内、明確となった竪穴住居跡における顕著な特徴をあげて考察を加えておきたい。

九州地方では、これまで竪穴住居跡の知られた例が少なかったようであるので、本調査の時点においてはこの遺跡の如く8例にも及ぶ住居跡の判明した例は珍しかったようである。しかし、その後の各地での発掘によって、最近は何例かが加えられたようである。それでもなお、本遺跡の例は、竈の付設などの問題で重要な発見例であると思われる。

本遺跡の竪穴住居跡の構造で注目されたのは、第1に竈の付設であった。発見された住居跡8例の中、竈の認められるものは5例あり、他の2例は焼土の存在が見られながらも不鮮明としたものである。竈の認められないものは、第3号住居跡である。この住居跡からは、明らかに5世紀後半頃の土師器のセットが発見されており、他の例とは時期的にも区別されるものであった。即ち、5世紀後半のこの地域の竪穴住居では、末だ竈が付設されることがなかったようである。関東方面の例では、5世紀後半には竈の付設はスタートするようであるが、九州地方では一段階遅れるものであろうか。

竈の明確な竪穴住居跡5例では、住居内における竈の位置によって大きく二分される。それは、竪穴住居跡の方位とも関連している。一つは、竈を北西壁に有するグループであり、他は西壁に有するものである。前者には、1・6・7号が属し、不鮮明な8号もこのグループと考えられる。これらの住居跡は、竈の位置が西北壁に認められるように、その主軸の方位は北40°～50°西である。それに対して、後者にほぼ主軸を西方（北81°西）に向けている。その例は2号と5号である。この2号と5号は、竈の位置や方位から考えて、恐らく同時性を有するものと考えられる。2号住居跡からは、土器類も発見されており、その時期は6世紀末葉から7

世紀初頭頃であろうと判断された。

前者のグループ、即ち西北壁に竈を有する1・6・7号は、各々切り合い関係にあるので、3例間で時期差があるといえる。その時期差は、6→7→1号の順に新しくなるものと推測されている。6号住居跡は、5世紀後半に属する3号を切っているもので、それ以降の年代が与えられるものとなる。ただし、これら3例の住居跡では顕著な時期差を示すような出土品が床面から見出されていないので、厳密には時期がきめ難い。けれども、遺跡全体における土器の時期から考えて、後者の例に近い時期のものと考えられる。特に1号住居跡出土品中の土師碗などの特徴から見ると、或いはこれらの時期は6世紀の中で考えられるものかと思われる。

竈の構造についてみると、すべて竪穴住居を掘り込んだ後に粘土を用いて築かれたものと知られた。中でも、2号と5号の例では、粘土の竈体が見られ、5号では砂礫を混じた青灰色粘土で作られた竈天井部が竈跡の全面に潰れた状態で見られ、珍しい遺存例を知ることができた。他の例では、黄褐色粘土を用いたものであった。この竈の煙道については、良く知られなかった。7号例でも、予測に反して長い煙道は見られず、竈の奥部から間もなく煙出しが抜けていた。他の例でも、長い煙道があったという証跡はたどり難く、恐らく煙道は短いものであったろうと考えられる。とすれば、これらの煙道は、竪穴住居の屋外まで延びていたかどうかは疑問となる。しかも、竈の位置が住居の北から西に向けての方向にあるのは、その方向からの風との関係からみて余り好ましいものとも思われないので、場合によっては煙道を屋外まで延ばさず、屋内に止めていたのではないかと考えられる。

竈の内、2号の例では焚口の両側に石を立ててあり、焚口部分を強化していた。他例ではそのようなことはなく、粘土のみで作られていた。

また、竈内に支柱を有するものがあった。支柱の材料は角柱状の石であり、竈にかけられる甕の支えとされている。知られた例は、6号・7号である。これらの各竈では殆んどすべて、竈内に甕乃至甑の破片が残されていた。

竪穴住居跡では、1号例で明確な貯蔵穴が見られたが、内部には著しい遺物は認められなかった。竪穴の多くには周溝が認められている。周溝の内、1号例では周溝内に小穴を穿っているものがあり恐らく住居の壁体構造と関連する小穴かと考えられた。

構造上の問題では、1号住居跡で炭化材が発見されていることが注目される。これらの炭化材は、床面直上にあり、特に西北壁よりで多かった。炭化材の内、太目のものは直径12cmをばかり、住居跡の主軸方向に見られた。中でも、西南壁から約2mの位置で、壁に並行している炭化材は長く延びており、上屋構造の棟木の遺残と考えられた。これに対し、やや細目の炭化材が直角方向に認められ、特に東北壁と西南壁近くで多かった。これらの炭化材は、細かい点、数が多い点で垂木の可能性があると考えた。この想定に基づいて上屋を考えるならば、この第

1号竪穴住居は竈を西北とする主軸方向に棟木を有し、その左右に垂木をおろす骨組の建築であつたろうと思われる。

以上のような本遺跡の竪穴住居跡の様相は、多くの点で良く知られている関東方面の竪穴住居跡と共通なものがあり、それ自体では顕著な地方差も見出し得ないものであるといえる。九州地方での竪穴住居跡が明らかになりつつあるので、今後の発見でその具体的様相がより明確となるものであろう。

(2) 第3号竪穴住居跡出土の土器について

本遺跡の出土品のうち、多くのものは古墳時代後期の土師器および須恵器であつた。ただし、第3号住居跡出土の土師器は、形態上極めて特色あるものであり、それら古墳時代後期のものをさかのぼるものであつた。この種の土器は、ほぼ他地域では5世紀後半頃に位置づけて考えられるものであるが、九州方面では我々の調査時まで余りまとまった資料が発見されていないと小田富士雄氏に聞いた。そこで、この第3号住居跡出土土師器について述べておこうと思う。

第3号竪穴住居跡は、前述したように竈を有しない竪穴であつた。その床面からは、密着した状態で壺3個、高坏1個、埴1個が発見された。その外、やや床面から浮いた状態で甕・壺・坏の破片が若干発見されている。

床面出土の壺3個は、大きさに差があるが器形の上ではほぼ同様のものである(第13図1)。典型的には図示したものに知られるが、僅かに上下に長い球状の体部、不安定な丸味を帯びる底部、長目の口頸部が特徴的である。口頸部は、頸部のくびれまで8cmの長さを有し、一般的な壺の口頸部としては長目である。しかも、この口頸部は、単に長目であるだけでなく、頸部のくびれ近くで僅かに外部へ張り出す傾向がある。それに応じて、内面もくぼむ。このような口頸部の特徴は、他の壺の例でも共通であつた。同様の口頸部は、第15図8の、3号床面やや浮き気味に発見された広口の壺でも認められ、この竪穴出土品に共通な作りと考えられる。口頸部は、内外共に横ナデが多く、体部の外面は縦乃至斜めの刷毛目があり、体部内面上半には篋削りが下から上に認められる。

高坏(第13図2)は完形品であり、良く年代的特徴を示している。坏部はやや大きく外に開き、一段を形成している。脚の柱状部は裾に向つて次第にひろがるが、その度合は強くない。坏部と柱状部の接合関係は、第13図3に見られるように坏部の凸出部を柱状部中央の孔に一致させたものと推定される。3の例では、柱状部上面の剥落部に、接合のための刻目がある。高坏の裾部は、外側に屈折して開いている。この高坏の特徴は、最も5世紀代後半の特徴を示すものであろう。3の例は、3号住居跡東南壁下の貯蔵穴内で見出された脚部破片であるが、柱状部にやや張りが見られ、外面に縦の刷毛目が認められる。

小型の埴(第13図4)は、住居跡北東壁近くに発見された。直立気味でやや外に開く口頸部は、球形の体部に接する頸部で強く「く」の字状に屈折している。底は丸底である。外面、特

に頸部では僅かに刷毛目が見られ、体部上半の内面には縦の篋の整形痕があり、底部内面にも篋痕が認められる。第15図12は、3号住居跡の床面上でやや高く発見されたものであるが、体部が小さく、口頸部が比較的大きいという点では前例と似ている。共に、口頸部の特徴などからみて埴としては新しい形態を示しており、高坏などと良く一致する年代のものと見ることができる。

この住居跡の床面では、密着した状態での坏の発見は見られなかったが、やや浮いた状態で第16図5・6が見出されている。5は口縁部で小さな屈折が見られる坏である。底部は丸底であろう。内面に細かな刷毛目がある。6は、内弯した口縁部の埴である。体部の状態は5と近い。この2例は、床面直上ではないが、特徴的にも他の3号住居跡出土品の時期に近いものと見ている。

このほかに、3号住居跡からは小形の手捏ね土器（第13図5・6）が見出されている。又、床面直上ではないが甕が1点出土している（第15図4）。しかし、この甕は、床面出土品と同様に考えることは若干ためられる。

以上のような3号竪穴住居跡出土品を通じてみると、土師器のセットが知られる。これらのセットの最大の特徴は須恵器を伴わず、土師器のみであることである。これらのセットの土師器では、壺などでは球形のものが顕著であり、口縁部がやや大きく、若干ふくらみをもつものがあり、底部は丸底と見られる。高坏は、坏部の稜が既に弱くなり、脚部の柱状部分は円筒状に近くなり、裾が屈折して広がっている。同時期と見られる坏では、やはり丸底で、内弯の埴形も含んでいる、このような土師器の特徴は、古式の土師器の中では新しいグループに属するものであり、祭祓的性格を離れて実用的な側面を強くしてくる段階での土師器であると推測できる。

この土師器は、既にふれてもきているように5世紀後半頃の年代を与えうものと考えている。福岡県方面でも、良好な土師器のセットは多くない由であるが、本遺跡例で5世紀後半の土師器セット例が提示できることは幸いである。

(3) 主要土師器と須恵器について

本遺跡からは、多量の土師器と須恵器が発見されている。その中の一部分には、前述した第3号竪穴住居跡出土品のようなまとまりを示すものもあるが、他には第2号住居跡出土品が若干のまとまりを示す以外には、表土下の層から採集されたものが殆んどである。この主要な遺物は、第2号住居跡出土品も含めてほぼ同様の特徴を示すものと見られた。ここでは、それらを通じて本遺跡出土品の主要な遺物を取り扱いたい。

本遺跡では、須恵器と共に多量の土師器も得られた。土師器の器形には壺、甕・甑・高坏がある。壺には、第2号住居跡で良好な例が見られた。頸部が強く外弯しており、比較的大形の壺があり、体部は球形を示すものようである。いうまでもなく、3号住居跡出土壺よりは長

目となり、高さの比が増すものと推測できる。

甕は、良好なものが少ないが、幾つかの例からみて、口頸部の屈曲が弱く、胴部の張りの少ないものであり、長胴形を示すものであらうと思われる。底部は、丸底の例もありそうであるが、平底が多くなる。

甑は、甕形の器形のものやや口が広いものであり、向い合せに体部中程に把手が付される。底部は単孔であり、多孔式のものは見られなかった。この種の甑の把手の出土は比較的多かった。甑かと思われる土師器破片中には、かなりの厚さを示すものがあり、中には土製竈の一部かと思われるものもあった。

高坏は、脚部破片から判断されるところでは、高さの少ないものとなってきており、柱状部も裾広がりであり、裾部へ広く連なっている。良好な例はなかった。

この土師器の器形の種類の中では、坏は殆んど見ることが無かった。

須恵器には、蓋・坏・甗・高坏などがある。蓋には、大きく二つの種類があり、一つは、坩をふせた形のものであり、他はつまみを有するものである。前者の蓋は、受け部のある坏とセットとなる蓋坏の蓋である。後者のつまみある蓋では、つまみの形が円形中凹みのものであり、中には上面に顕著にロクロ整形の痕を止めるものもあった。このつまみある蓋の中には、高坏などの蓋であったかと推定されるものもあり、蓋坏の場合とは若干異なるものがあると思われる。

坏は、殆んどすべて短い受け部を有する坏であり、底部は丸味を帯びるよりも平坦になっている傾向がある。受け部の立ち上がりが少ないことも特徴である。坏の出土は、須恵器中では最も多いが、特徴上での変化は少なかった。

甗は、大きく口縁を開き、稜を有する口縁部破片と、体部の破片が認められる。体部破片には2本の凹線間に刺突文の見られた例もある。

高坏は、脚部裾の部分が段状に屈折しているものが数例あった。坏部は明らかでなかった。

坩は、やや深目のものが発見されている。坩形の一つの例は、或いは高坏の深目の坏部破片ではないかと思われる。

このほか、甕や壺と思われる破片があるが、形状を知り得るほど良好なものは見られない。この種の破片には、外面に条線叩き目、内面に円形乃至青海波文の叩き目を有するものがある。

以上の土師器・須恵器は、共伴して出土しており、本遺跡の多くの竪穴住居跡とも関連のある遺物と考えられるものである。特に、第2号竪穴住居跡出土品などから考え、これらの土師器・須恵器をまとめて考えることが可能であらうと思われる。

これらの土器のうち、最も年代的特徴が著しいものは坏であらう。蓋坏の形態上の特徴を見ると、まづ受け部の立ち方、内傾の度合などは、北九州における須恵器の偏年上ではⅢ式より新しくなるものであり、Ⅳ式に相当するものと考えられる。このⅣ式については、塚ノ谷窯跡

群（八女市教育委員会『福岡県八女市塚ノ谷窯跡群』昭44）調査報告の場合では十分な類例もなく、ブランクであったが、『野添・大浦窯跡群』（福岡県文化財調査報告書第43集，昭45）の偏年表ではそれが具体的に示されている。本遺跡の例は，そのⅣ式に比定できるが，蓋坏以外の器形では必ずしもすべて類例があるわけではない。しかし，高坏の脚部などは，破片ではあるけれども，この時期に比定して良いものである。それ故，ほぼ前述した須恵器は，この九州の須恵器偏年上のⅣ式と考えて良いと思う。

これらの須恵器に伴う土師器は，土師器自体での特徴は顕著とはいいがたいが，口縁部の屈折の少ない長目の甕の存在などは，球状の体部を有する壺との伴出関係などより，球形壺の新しい時期のものとも見ることができる。高坏の脚部の様相は，柱状部が充実して短くなる時期よりも古いものである。把手付甕の多い点なども，地域的な性格を考慮しながらもこれらの時期が，前述の須恵器偏年Ⅳの時期と差異なきものであろうと推定できる。

このような土師器・須恵器の様相からみて，ほぼこれらが須恵器偏年Ⅳ式のものとするれば，その実年代は6世紀末葉から7世紀初葉頃において考えることができるであろう。このような年代考定をしてみると，本遺跡の遺物によって，十分とはいえないとしてもこの時期の土師器と須恵器の共伴関係も明らかにし得ると思われる。この共伴関係で最も注目されるのは，甕・壺・甗などの形態は土師器に見られるが，坏は殆んど全く須恵器であるということである。他に須恵器には高坏・甗・埴などがあるが，住居跡出土品の量からみれば決して多くはない。むしろ，特殊な機能をもつそれらの須恵器とは違って，須恵坏は，土師器の日常用具と伴って重要な機能を果していたものであり，極めて有機的なセットとしての関連を有したものと理解できる。

このような共伴関係から，本遺跡の調査を通じて，6世紀末葉から7世紀初葉にかけてのこの地域での土師器，須恵器利用の関係の一端も知られるし，このセット関係も幾分明らかにし得たと思う。

む す び

以上、前後2回にわたって行なった福岡市バイパス第8地点「大曲り遺跡」の発掘調査の報告をし、若干考察を加えた。その結果、九州地方では類例の余り多くない古墳時代の竪穴住居跡の例を明らかにすることができた。竪穴住居の構造などの点では、これまで多く知られている東国地域の例と殆んど同様のものが認められ、しかも、今回は竈を付設した例が多く見出され、この種の例に、屋形原遺跡の2例（藤井功氏等調査）と共に新しいものを加え得た。しかも、第3号竪穴住居跡の存在によって、この地域では5世紀後半には未だ竪穴住居に竈の付設をしていないことも確実となった。この意味では、竈の付設は6世紀に入って本格的となるものと理解される。

なお、出土遺物の点では、第3号竪穴住居跡出土品によって5世紀後半の土師器のセットが知られた。この地域での土師器偏年研究上にも有益な資料を提示できたと思う。又、古墳後期の資料としては、多量に得られた土師器・須恵器から九州地方須恵器偏年のⅣ式に相当する土器が知られ、6世紀末葉から7世紀初葉にかけての土師器・須恵器が明らかとなってきた。そして、その共伴関係において、須恵器の坏の存在が注目されることも指摘しておいた。これらのほかに、後期旧石器のナイフや縄文晩期初頭頃（御領式）の土器なども発見されているが、それらについては報告のみに止めた。

これらの結果については、更に今後検討を加え、本報告で意を尽せぬところを別の機会に補っていきたいと思う。

図 版



(1) 発掘地遠景（南より，背後に見えるのが宝満山）



(2) 第1次調査区全景



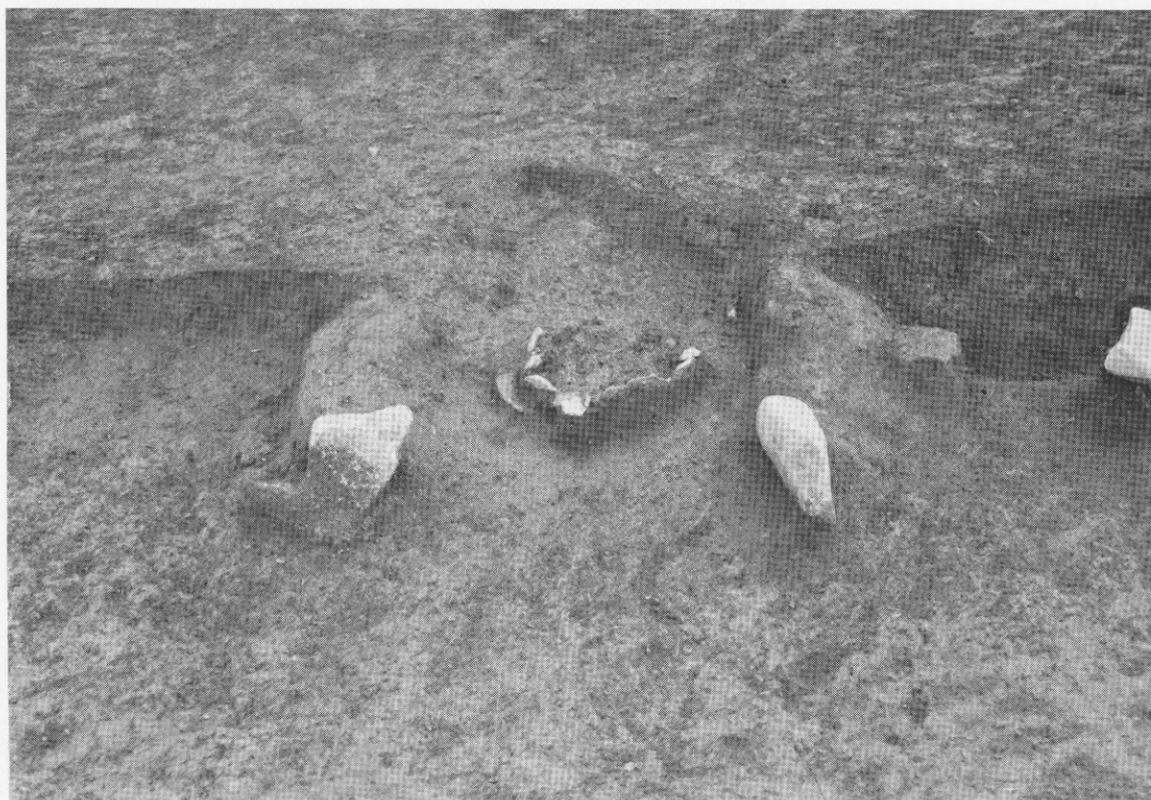
(1) 第1号住居跡



(2) 第1号住居跡カマド



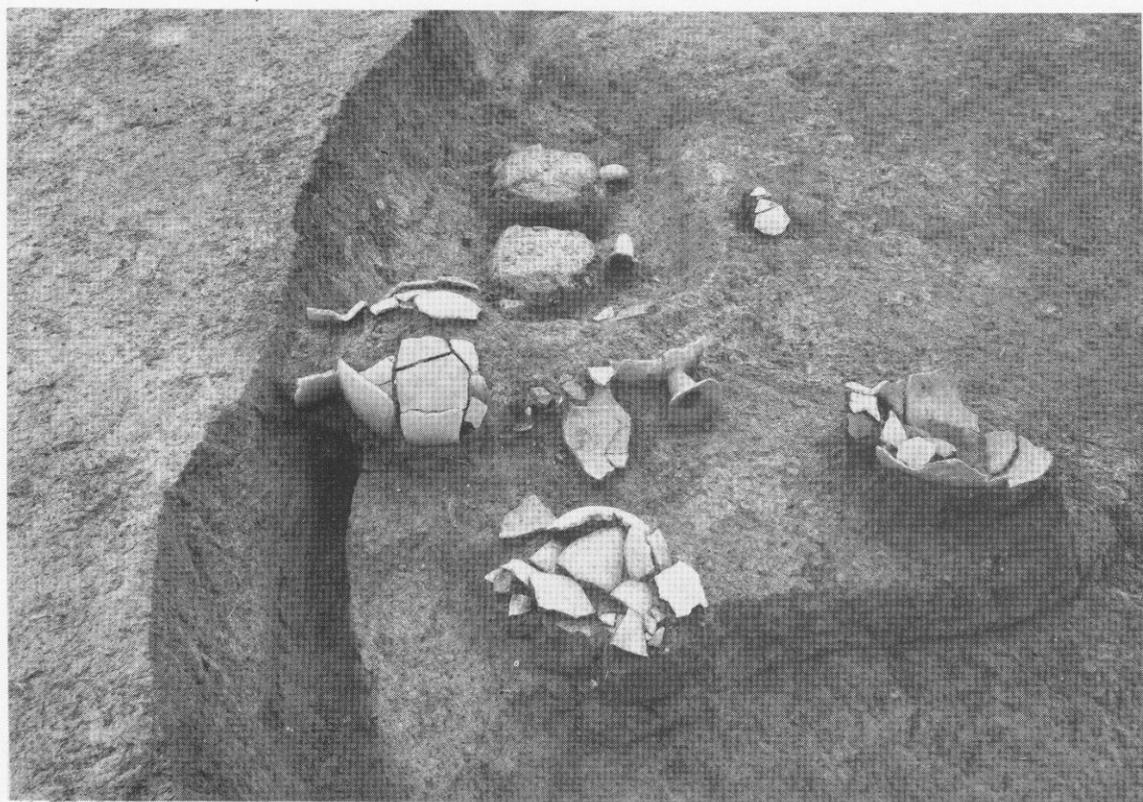
(1) 第2号住居跡



(2) 第2号住居跡カマド



(1) 第3号住居跡



(2) 第3号住居跡土器出土状態



(1) 第3・5・6・7号住居跡



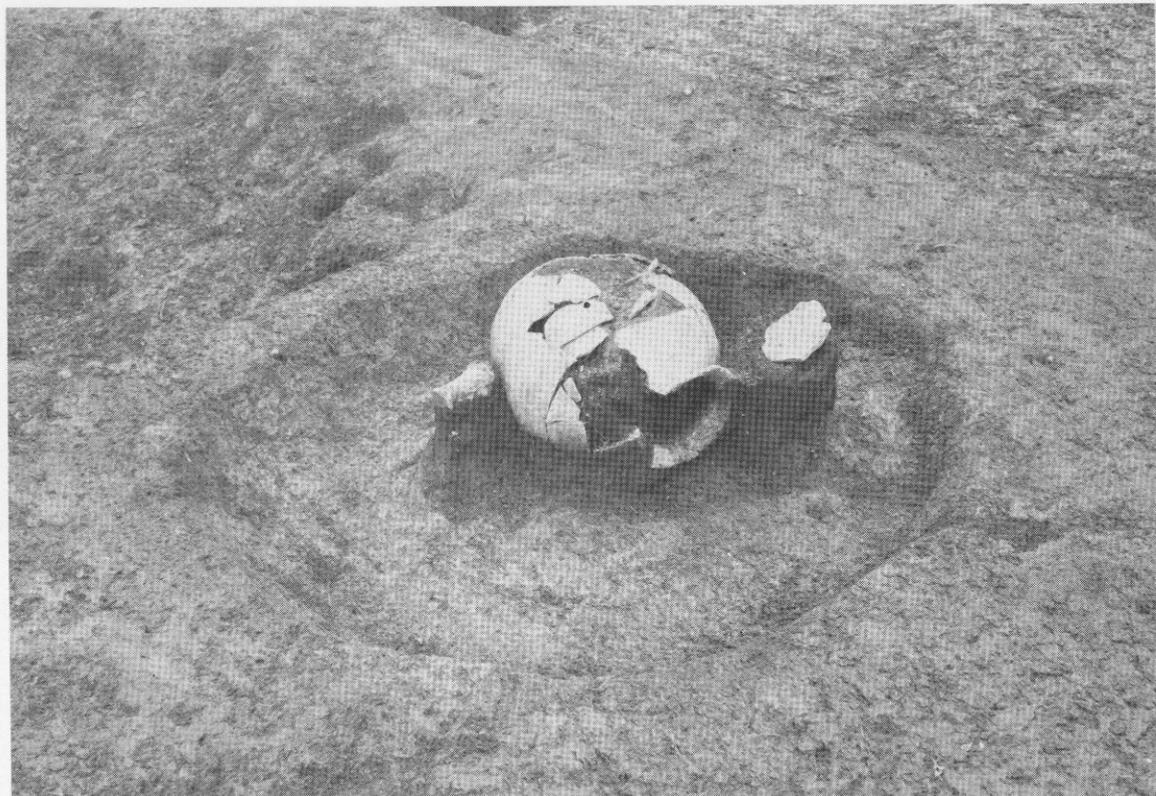
(2) 第5号住居跡カマド



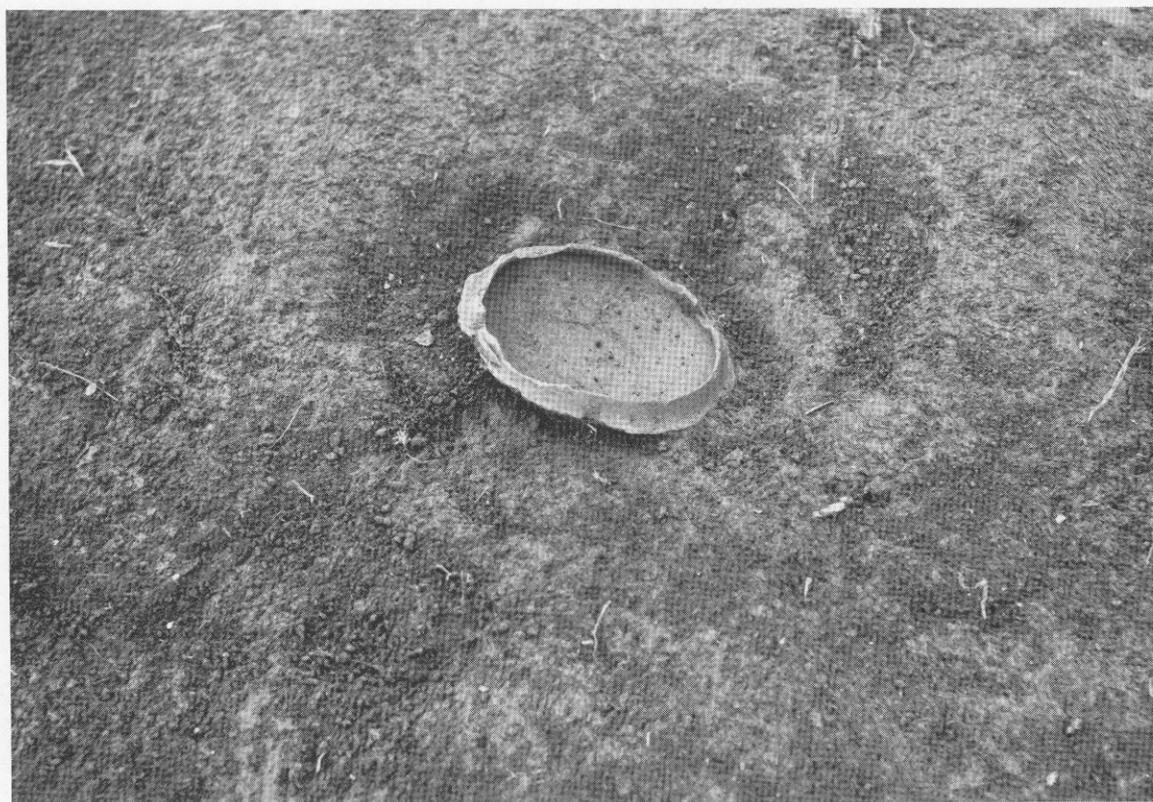
(1) 第6号住居跡カマド



(2) 第7号住居跡カマド



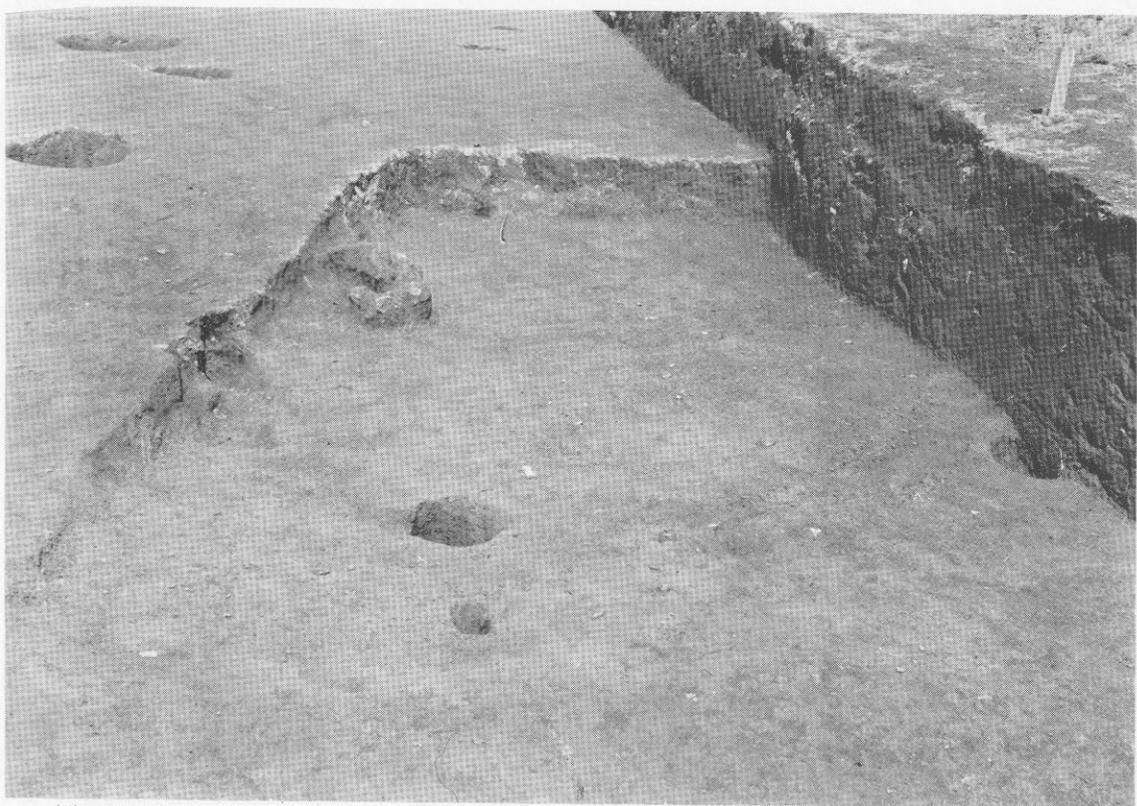
(1) 土師器壺を出土したピット



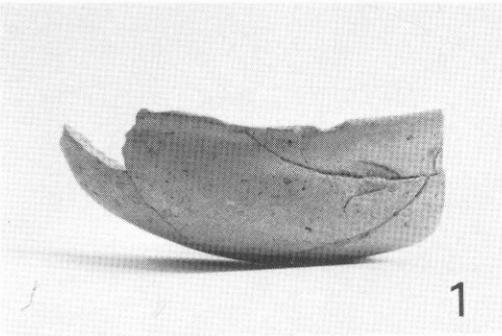
(2) 須恵器杯出土状態



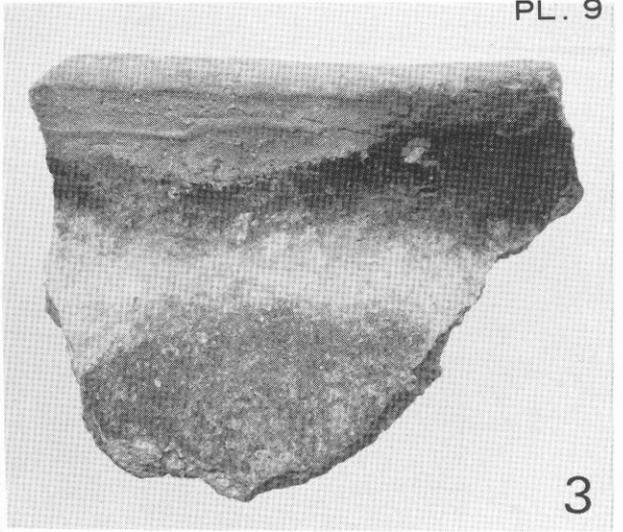
(1) 第2次調査区全景



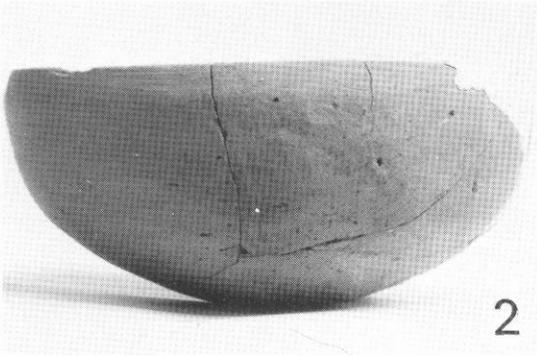
(2) 第8号住居跡



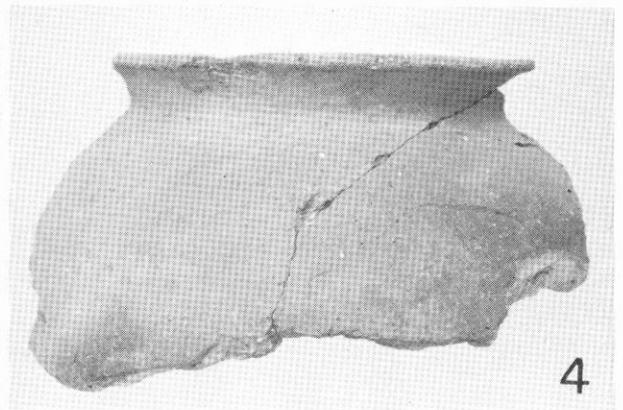
1



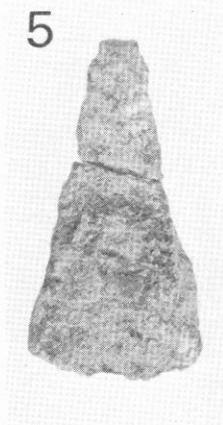
3



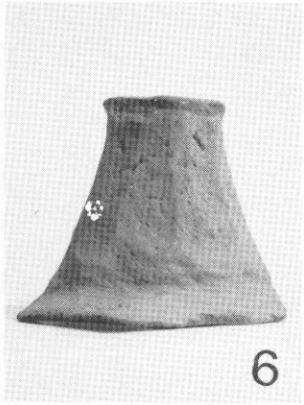
2



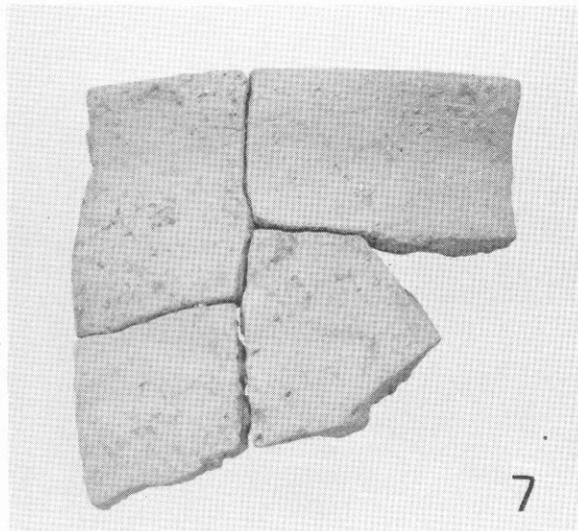
4



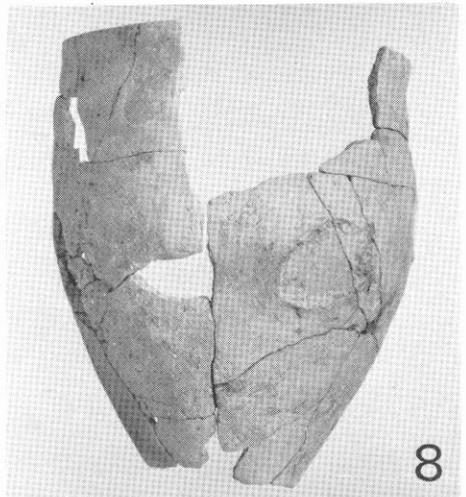
5



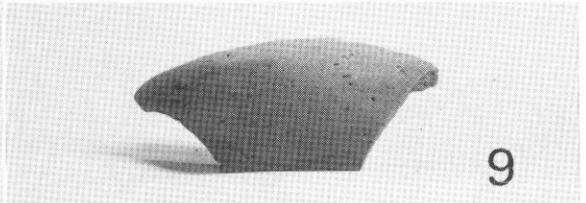
6



7

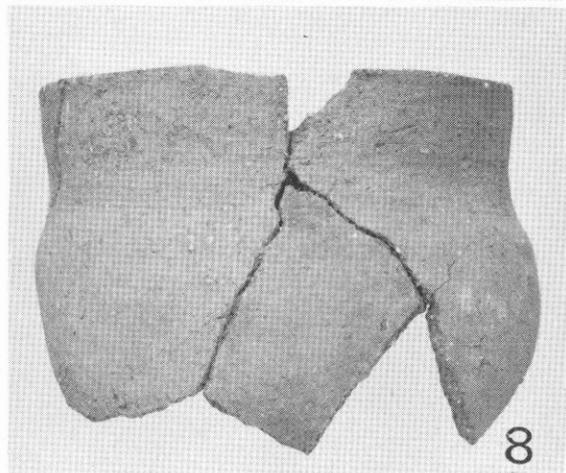
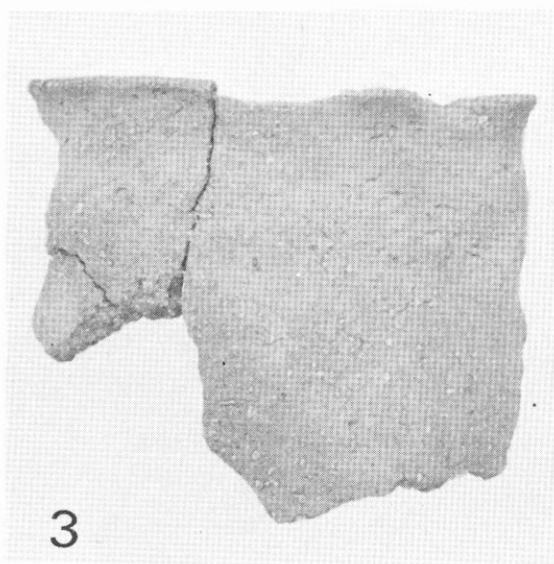
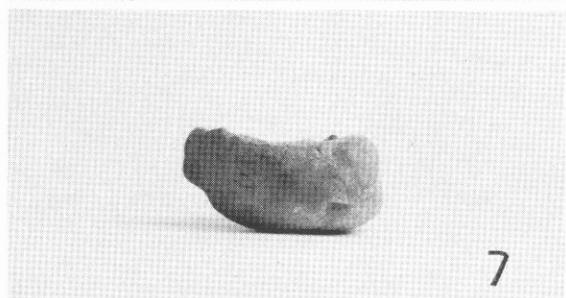
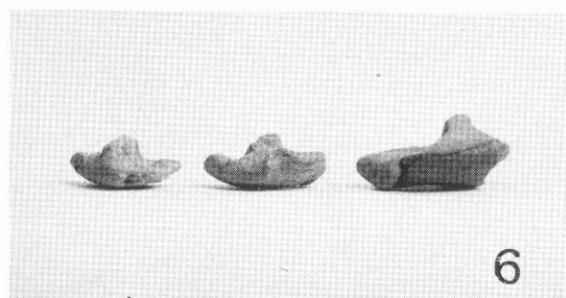
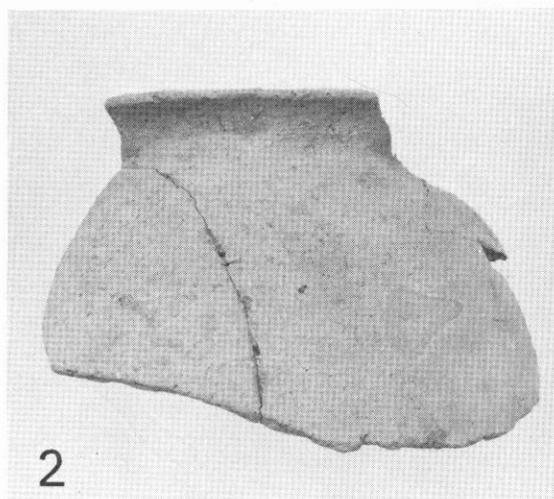
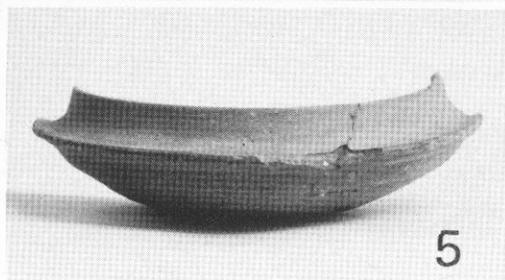
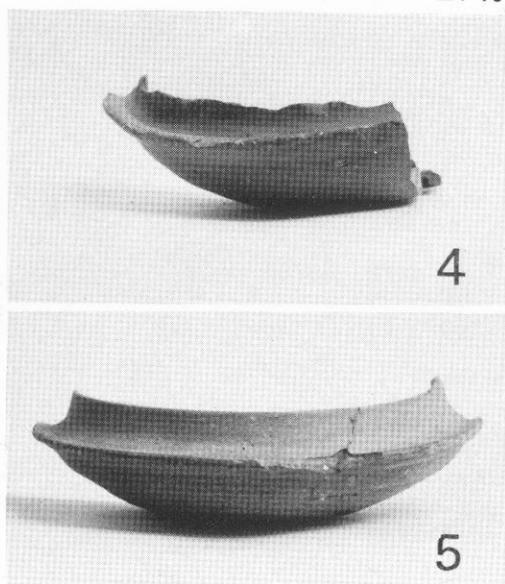
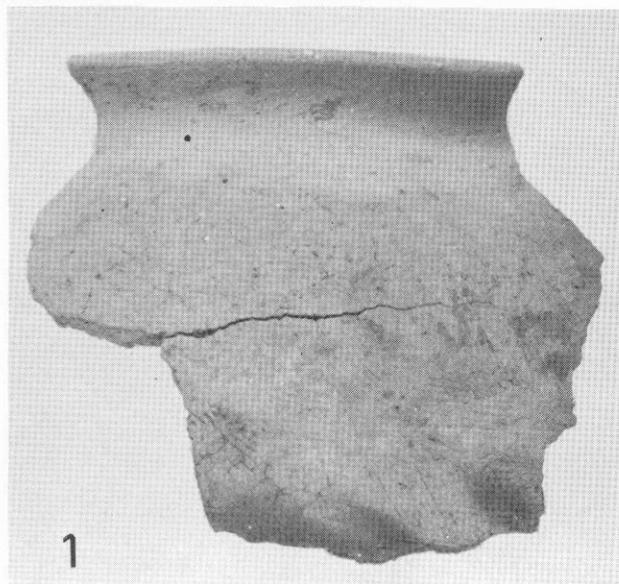


8

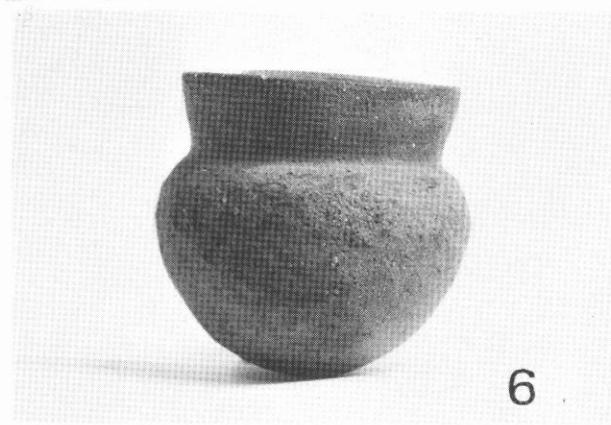
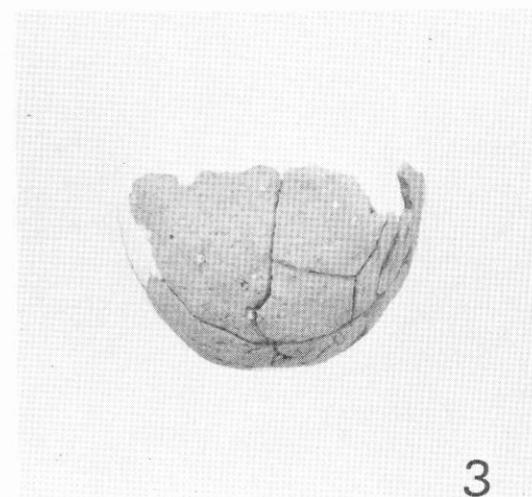
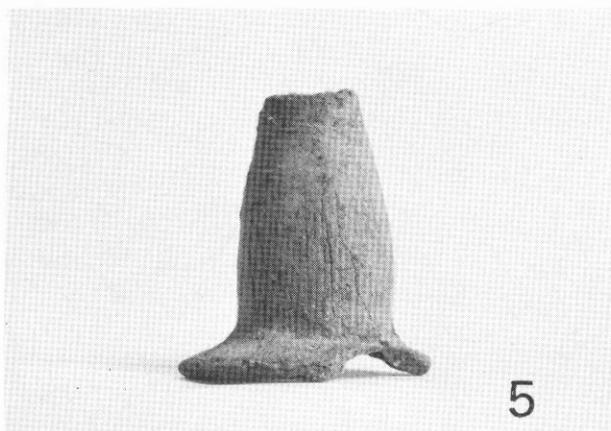
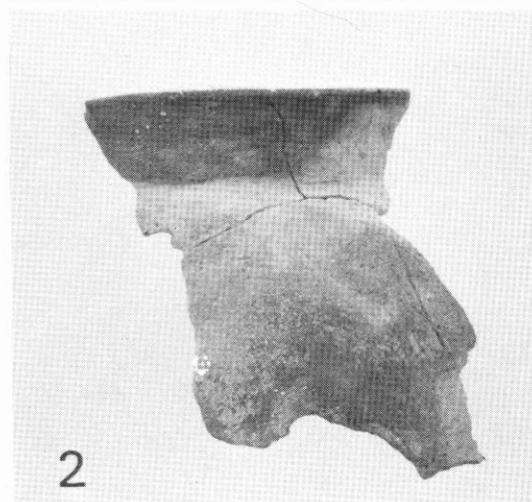
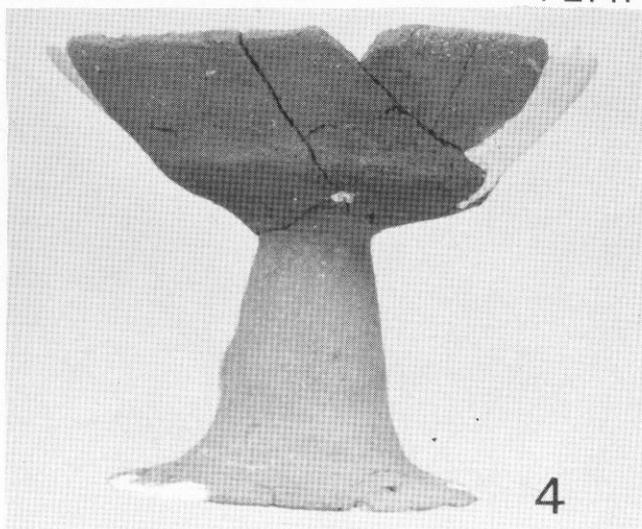
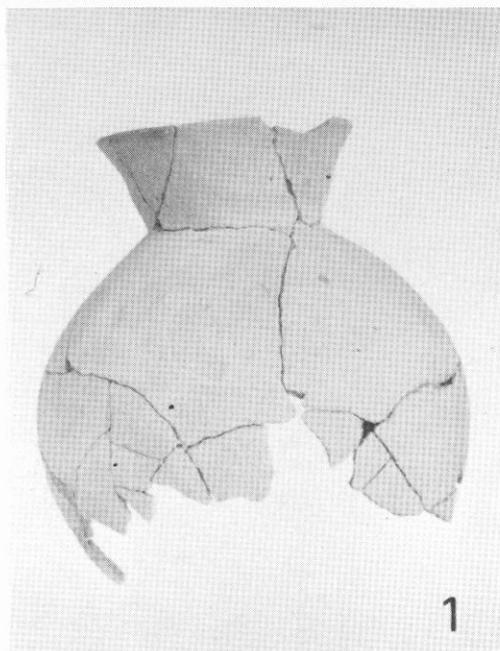


9

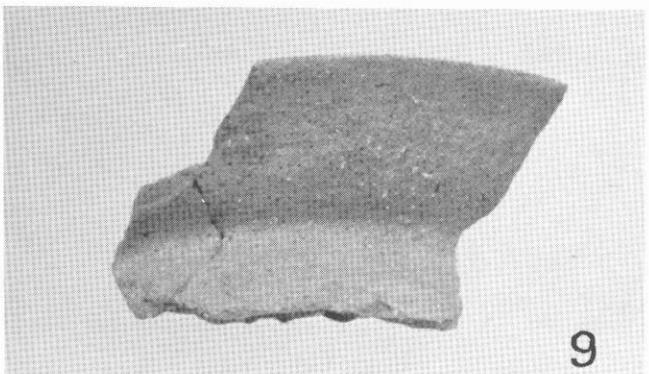
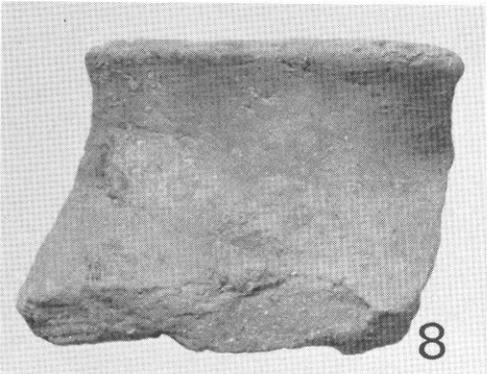
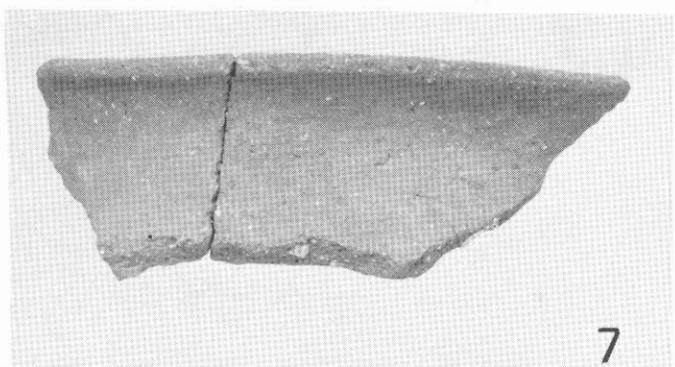
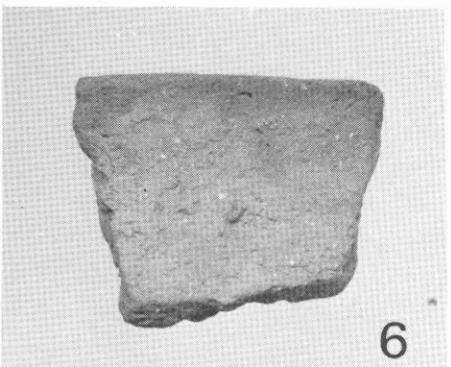
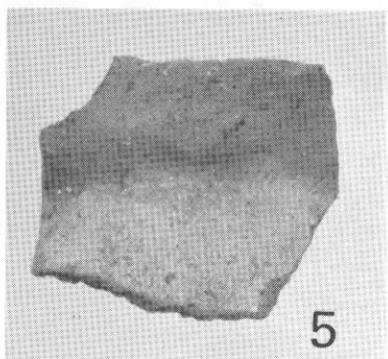
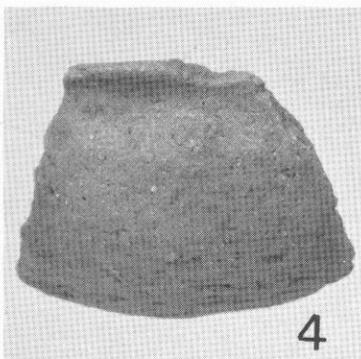
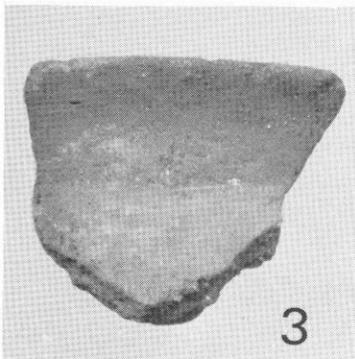
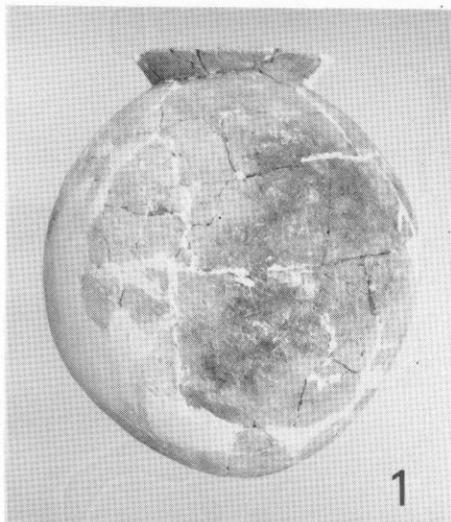
第1・6・7号住居跡床面出土土器・鉄器



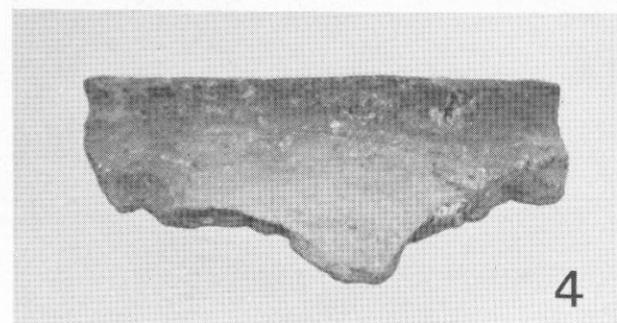
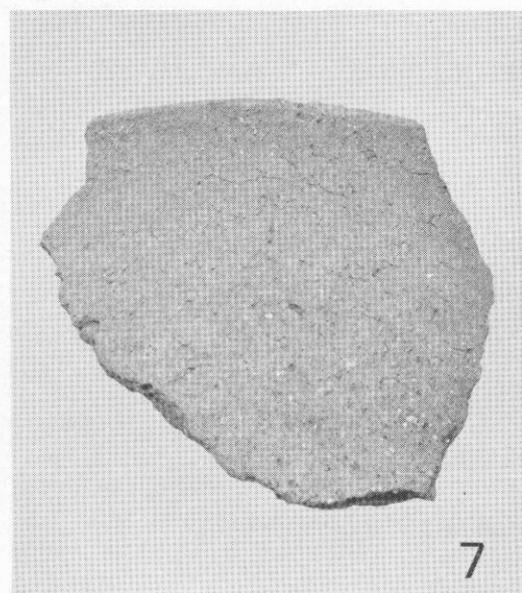
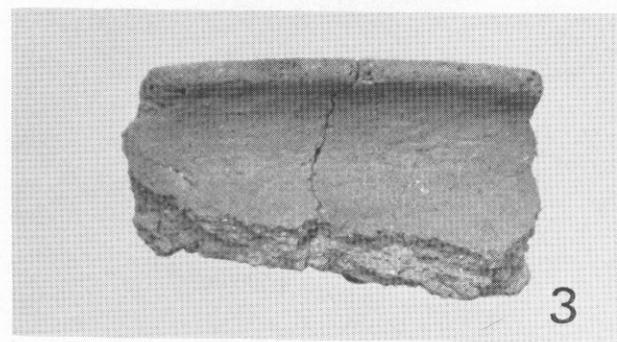
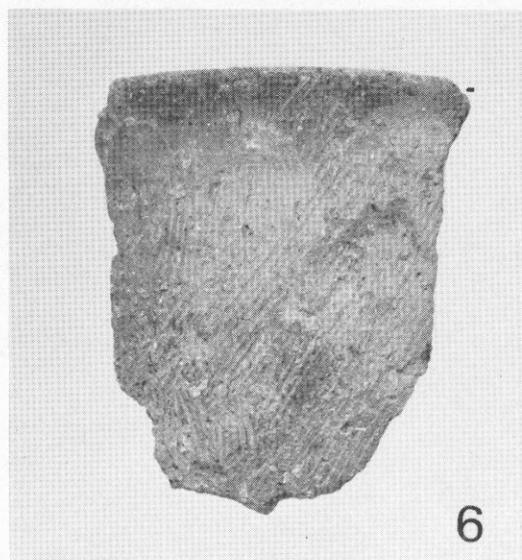
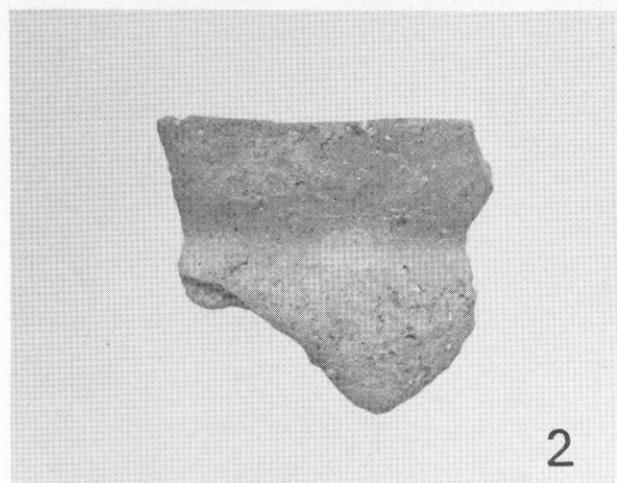
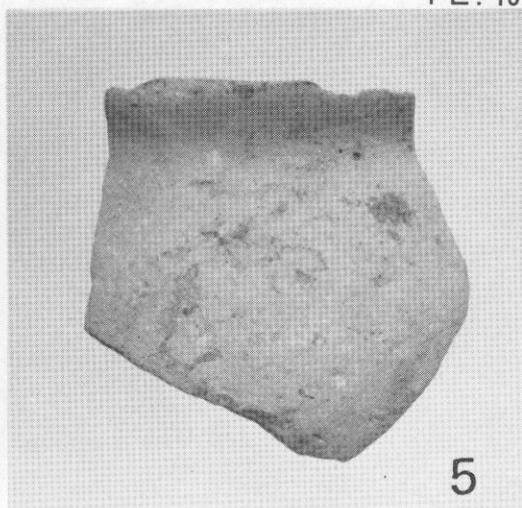
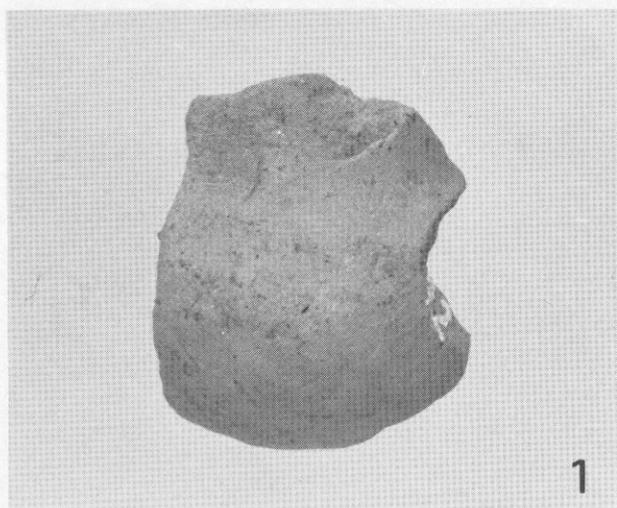
第2号住居跡床面出土土器

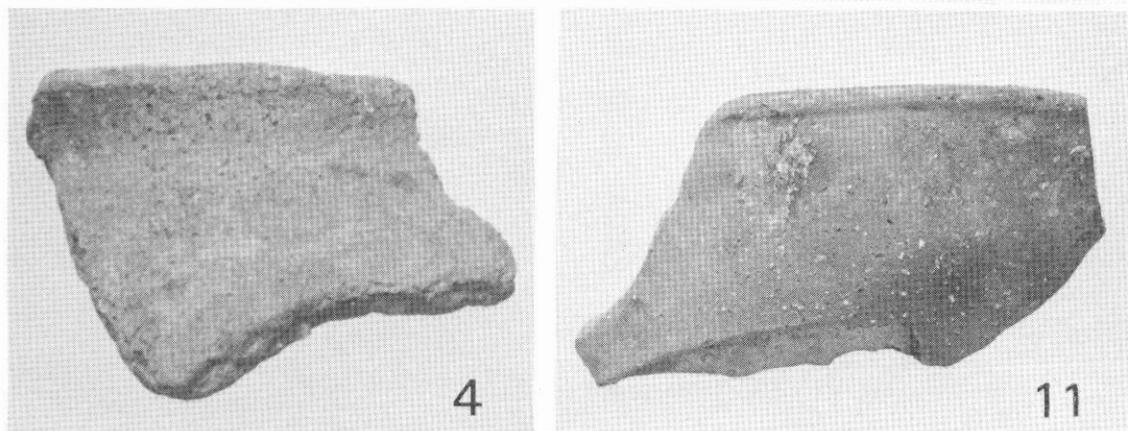
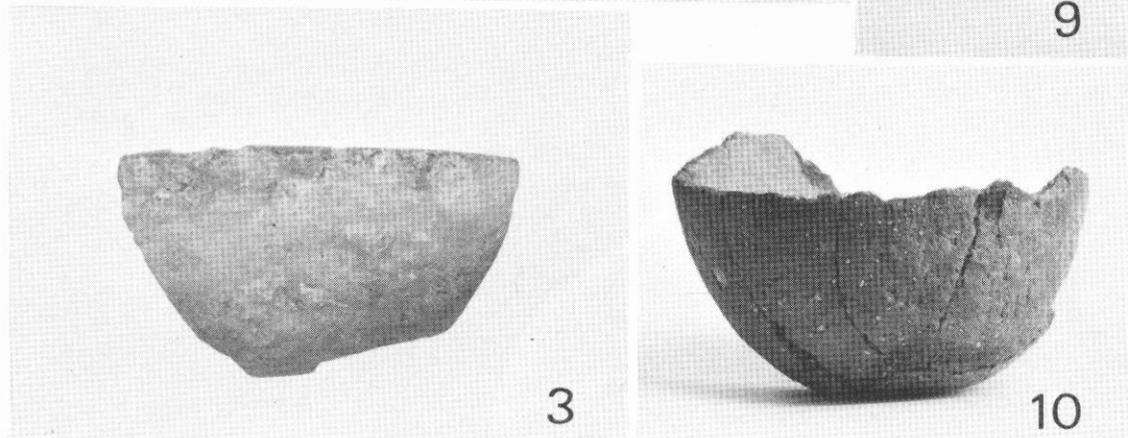
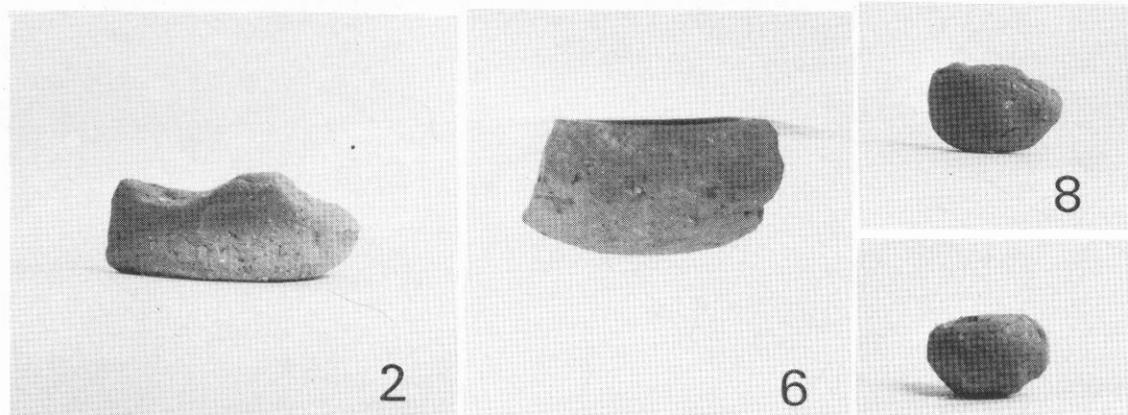
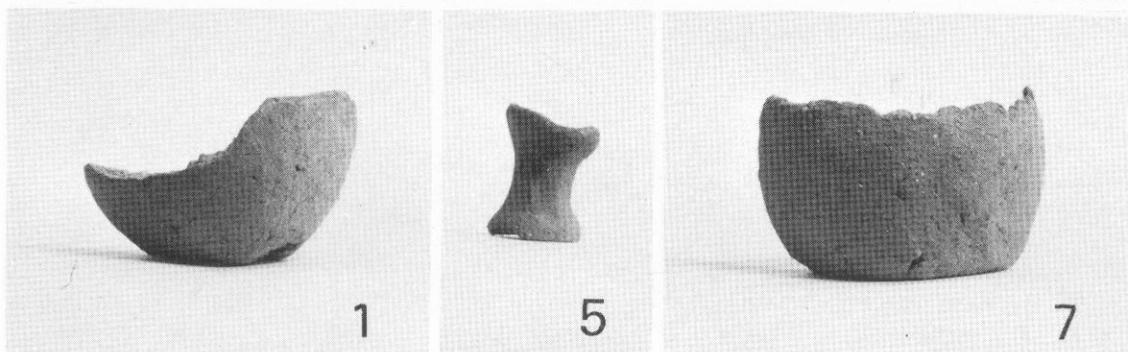


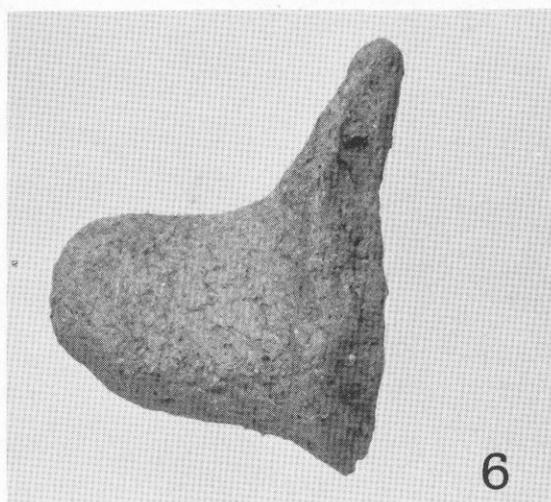
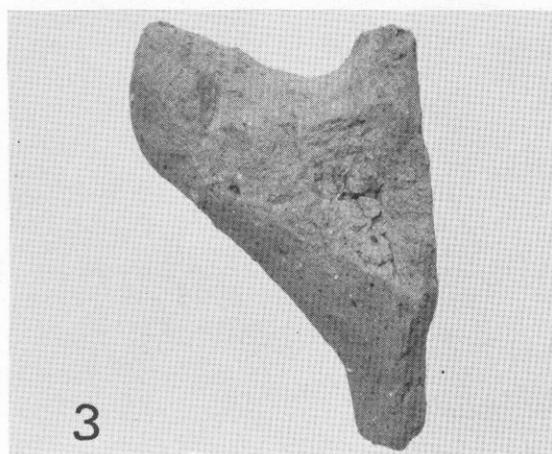
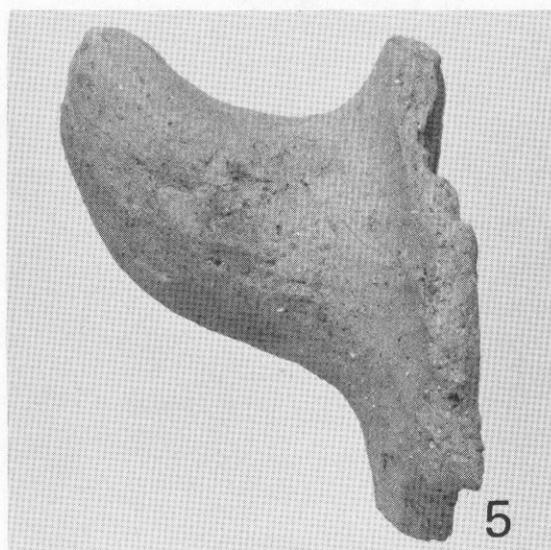
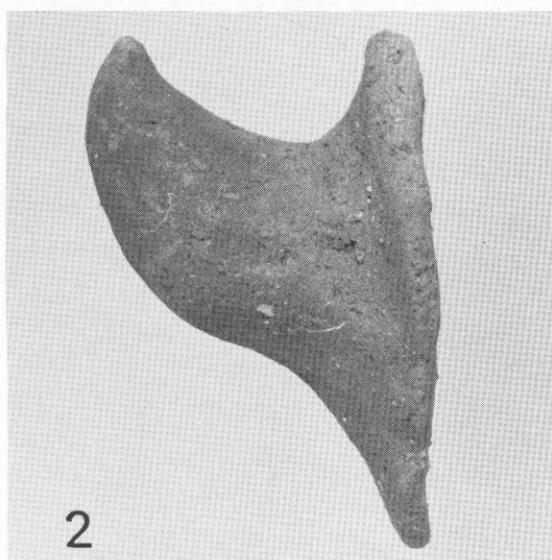
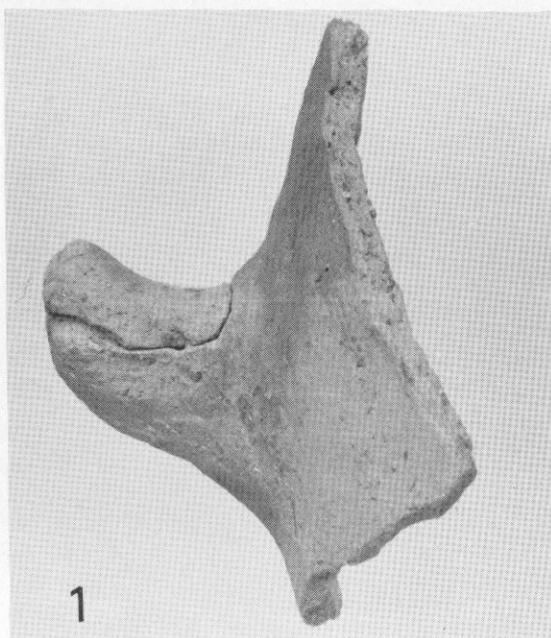
第3号住居跡床面出土土器



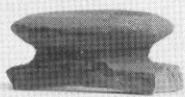
出土土師器







1



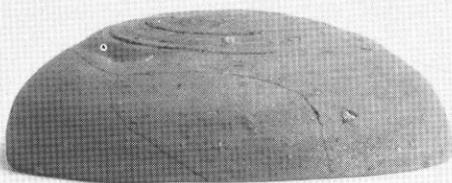
6



2



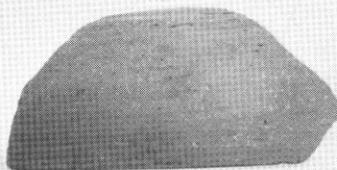
7



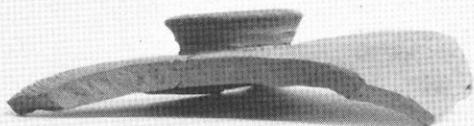
3



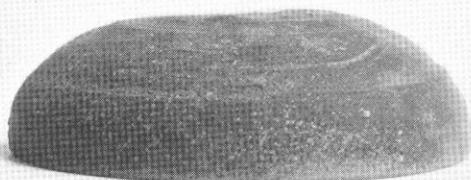
8



4



9

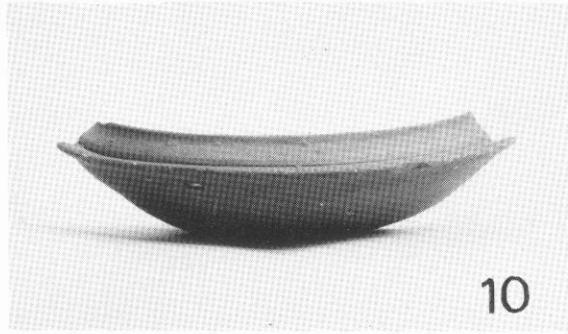
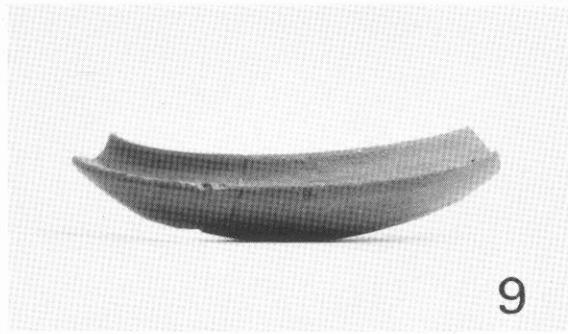
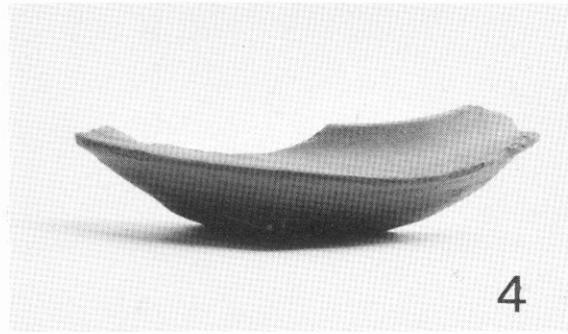
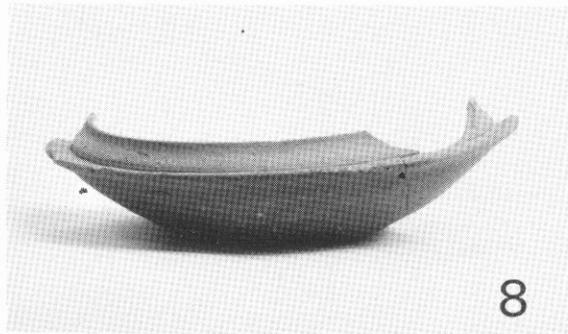
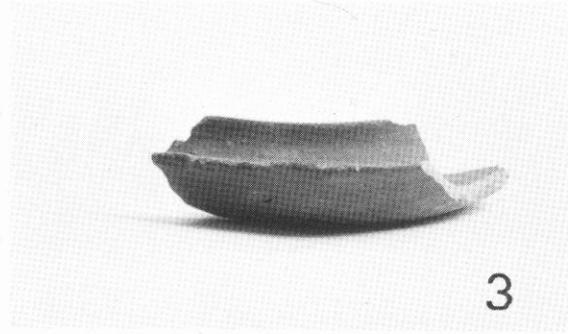
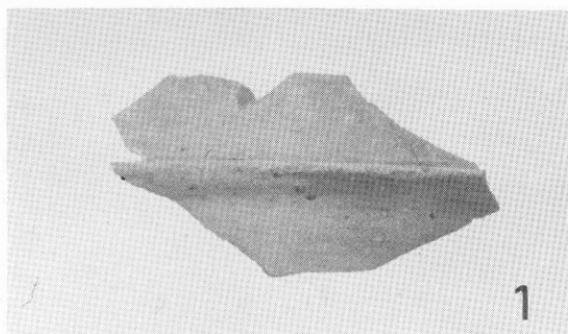


5

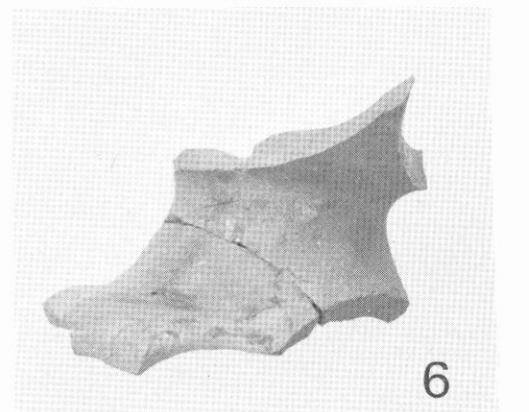
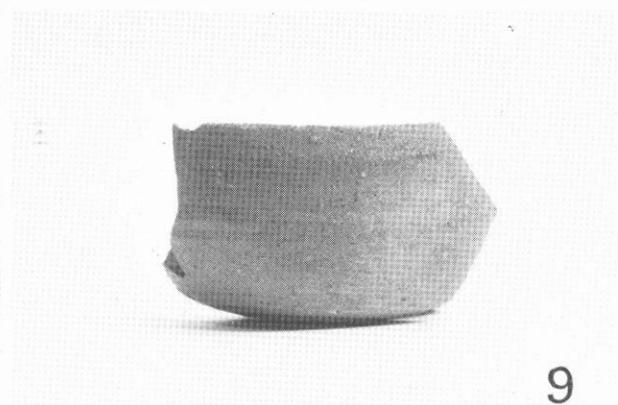
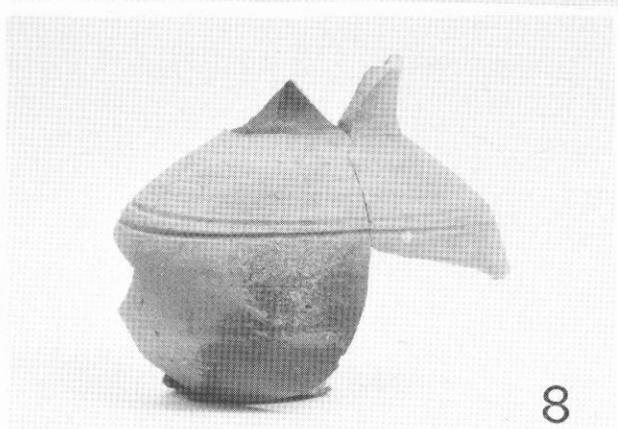
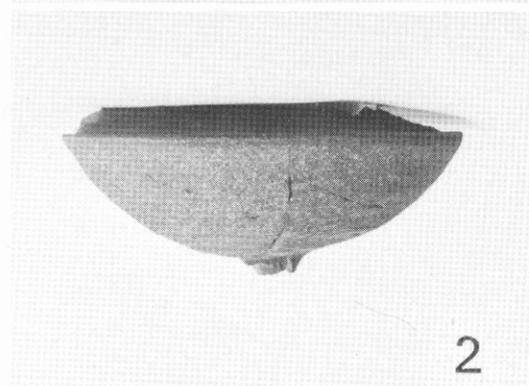
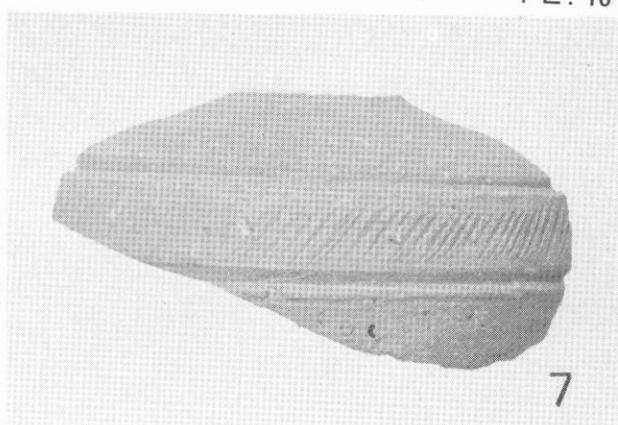
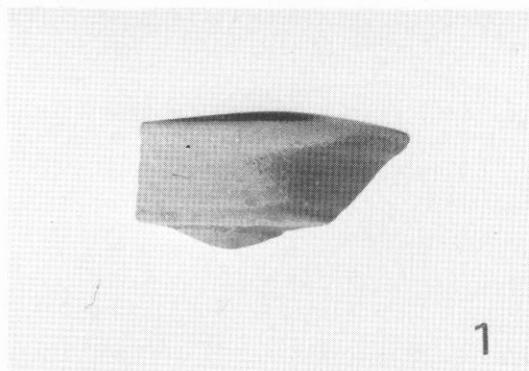


10

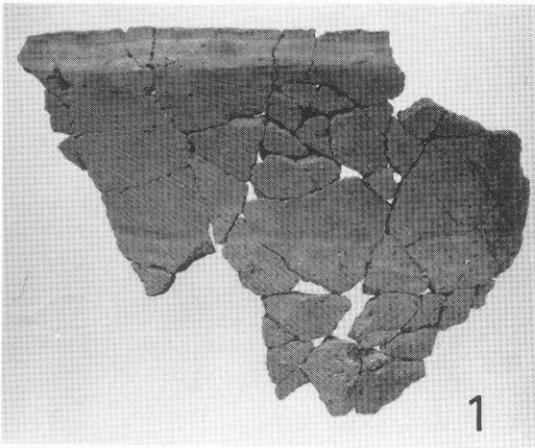




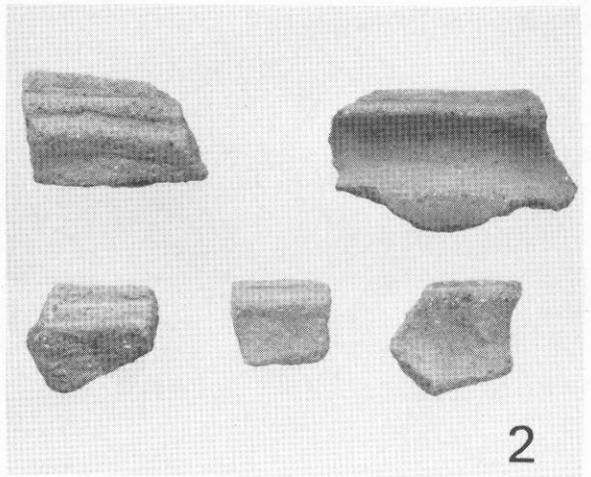
出土須恵器



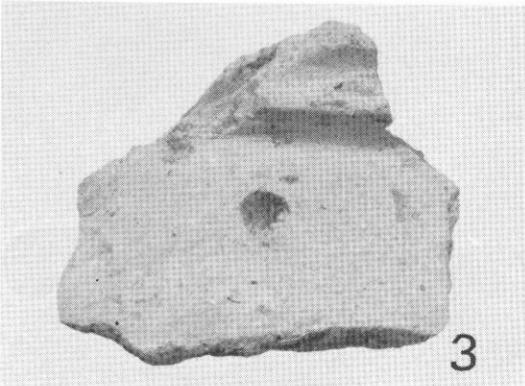
出土須恵器



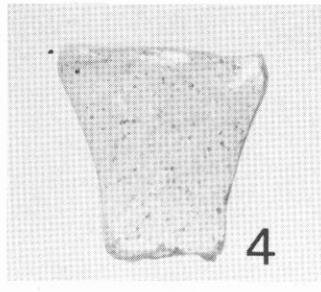
1



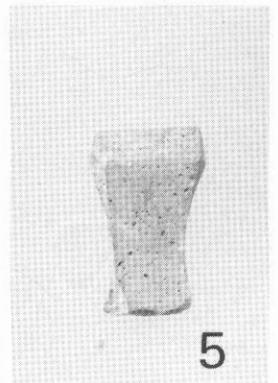
2



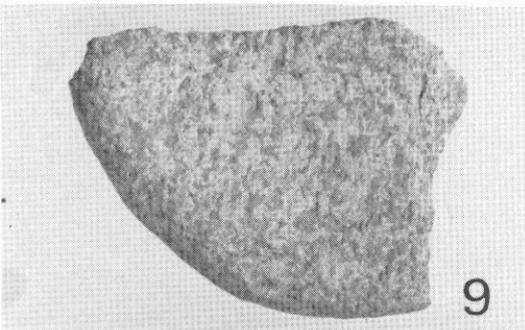
3



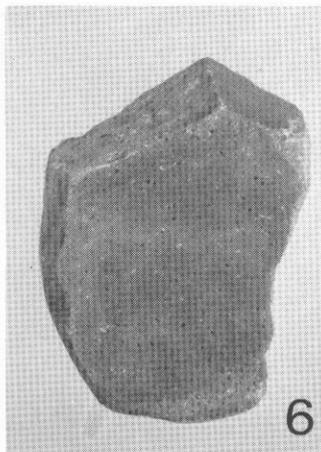
4



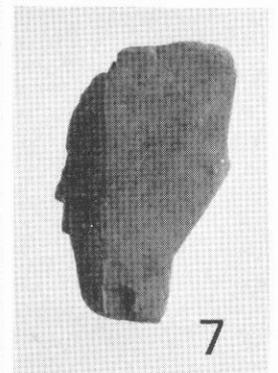
5



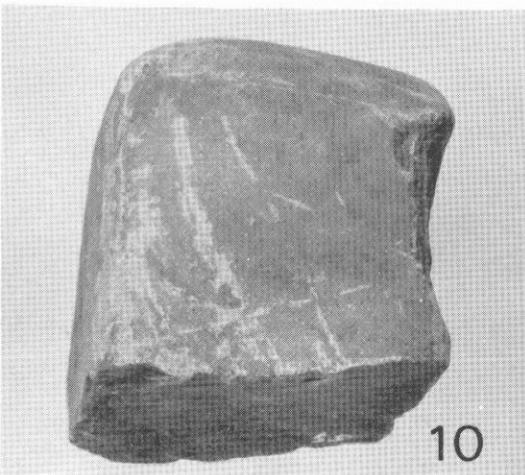
9



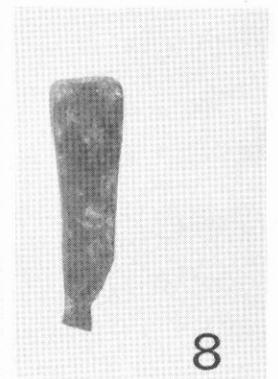
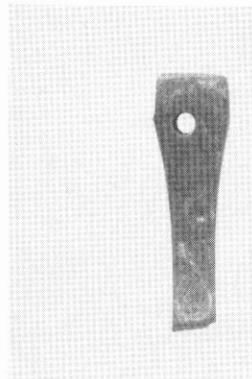
6



7



10



8

繩文式土器・弥生式土器・砥石等

野 黒 坂 遺 跡

筑紫郡筑紫野町針摺所在住居跡群の調査

本文目次

はじめに	71
1. 位置と地形	73
2. 調査概要	73
(1) 南区	73
(2) 北区	74
3. 遺構と遺物	76
(1) 旧石器時代	76
(2) 縄文時代	81
(3) 弥生時代前期(その1)	83
(4) 弥生時代前期(その2)	85
(5) 弥生時代中期(その1)	89
(6) 弥生時代中期(その2)	91
(7) 弥生時代後期(その1)	93
(8) 弥生時代後期(その2)	94
(9) 古墳時代前期	95
(10) 古墳時代後期(その1)	95
(11) 古墳時代後期(その2)	100
(12) 古墳時代後期(その3)	108
4. 結語	105

図 版 目 次

		本文対照頁
図版 1	(1) 北から見た野黒坂丘陵	73
	(2) 西から見た野黒坂丘陵	73
2	南区航空写真	73
3	(1) 北区北斜面全景（大曲遺跡・池田遺跡を望む）	74
	(2) 北区北斜面遺構群	74
4	(1) 北区西南斜面遺構群	74
	(2) 南区東側住居跡群	73
5	(1) 南区第3層ナイフ型石器出土状況	76
	(2) 同 上	76
6	(1) 南区トレンチ全景	76
	(2) トレンチ内土層	76
7	(1) 南区出土ナイフ型石器・台形様石器	77
	(2) 北区出土ナイフ型石器・台形様石器・尖頭器・石核	77
8	(1) 尖 頭 器	80
	(2) 石刃・使用剥片・彫刻刀様石器	80
9	(1) 細 石 核	80
	(2) 細 石 刃	80
10	(1) 南区出土石匕	81
	(2) 北区出土搔器（スクレイパー）	81
11	(1) 南区出土十字形石器	81
	(2) 打製石斧および打製石器	81
12	(1) 北区出土石鏃	81・83
	(2) 南区出土石鏃	81・83
13	(1) 磨製石斧と磨製片刃石斧	83・85・89
	(2) 磨製石鏃と磨製石剣	83・85・89

図版14	(1) 紡 錘 車	83・85・89・100
	(2) 玉類と土製模造鏡	93・100
15	(1) 10・11・12・13号住居跡	91
	(2) 10号住居跡内弥生土器群	92
16	(1) 北区頂上部全景	89
	(2) 17号住居跡	89
17	(1) 17号住居跡内弥生土器	89
	(2) 同 上	89
18	(1) Pit 15 遺物出土状況	91
	(2) Pit 15 磨製石剣出土状況	91
19	(1) Pit 17・18 袋状竪穴	85
	(2) Pit 18 袋状竪穴 上部土器出土状況	85
20	(1) Pit 18 袋状竪穴 沈下した旧地表部	85
	(2) 同上内部全景	85
21	Pit 18出土弥生土器 (1)	85
22	Pit 18出土弥生土器 (2)	85
23	Pit 18出土弥生土器 (3)	85
24	(1) 31号住居跡	89
	(2) Pit 22 (手前) ・Pit 23 袋状竪穴	89
25	(1) Pit 29 袋状竪穴	83
	(2) 同上出土弥生土器	83
26	(1) Pit 33 袋状竪穴	83
	(2) 同上出土弥生土器	83
27	(1) Pit 33 出土弥生土器	83
	(2) 同 右	83
28	(1) Pit 25 袋状竪穴	83
	(2) 同上出土弥生土器	83
29	Pit 25出土弥生土器	83
30	(1) 36号住居跡	93
	(2) 40号住居跡	95
31	(1) 39号住居跡	94
	(2) 同上出土土製柄杓	94

図版32	(1) 45号住居跡	85
	(2) 46号住居跡	85
33	(1) 14号住居跡	102
	(2) 15号住居跡	100
34	(1) 20号住居跡	102
	(2) 同上カマド	102
35	(1) 24号(手前)・25号住居跡	102
	(2) 27号(右)・28号住居跡	102
36	(1) 30号住居跡	97
	(2) 同上埋土出土須恵器高杯	97
37	(1) 34号住居跡	100
	(2) 同上土器出土状況	100
38	(1) 34号住居跡カマド	100
	(2) 同上右側土器出土状況	100
39	34号住居跡出土土器	100
40	(1) 41号住居跡(東から)	102
	(2) 41号住居跡(北から)	102
41	(1) 41号住居跡出土土製陶具	102
	(2) 43・44号住居跡	95

挿 図 目 次

第1図	野黒坂遺跡付近地形図(九州地方建設局原図)	72
第2図	南区土層模式図	77
第3図	旧石器(1)(清水測)	78
第4図	旧石器(2)(清水測)	79
第5図	1類土器(柳原拓)	81
第6図	2類土器(1) Pit 25出土	82
第7図	2類土器(2) Pit 33出土	83

第8図	46号住居跡	84
第9図	31号住居跡(八尋, 大西測)	85
第10図	3類土器(1) Pit 18出土	86
第11図	3類土器(2) Pit 18出土	87
第12図	17号住居跡	88
第13図	4類土器(1) 17号住居跡出土	89
第14図	4類土器(2) Pit 15出土	90
第15図	10号住居跡と1号掘立柱群(T-1)(平面図)	91
第16図	5類土器 10号住居跡出土	92
第17図	6類土器 36号住居跡出土	92
第18図	36号住居跡(上村, 新原測)	93
第19図	硬玉製棗玉	94
第20図	7類土器 39号住居跡出土	94
第21図	8類土器 40号住居跡出土	95
第22図	43・44・45号住居跡	96
第23図	9類土器 43号住居跡出土(1・2-須恵器)	97
第24図	30号住居跡	98
第25図	9類・10類土器 30号住居跡出土(1~8-須恵器)	99
第26図	34号住居跡	とじこみ
第27図	10類土器(1) 34号住居跡出土(1~9-須恵器)	101
第28図	20号住居跡	とじこみ
第29図	10類土器(2) 20号住居跡出土	103
第30図	10類土器(3) 41号住居跡出土	104
第31図	11類土器 32号住居跡出土(1-須恵器)(森田測)	104
第32図	41号住居跡(新原, 宮原測)	とじこみ
第33図	野黒坂遺跡遺構配置図($\frac{1}{300}$)	付図

はじめに

野黒坂遺跡は昭和45年3月の予備調査に続き、本調査を昭和45年5月25日より12月20日までの期間で行ない、その発掘面積は約9,000㎡におよんだ。

発掘および出土品整理にあたっては、下記各位の協力を賜った。

別府大学考古学研究室

武蔵野女子大学歴史研究部

近畿大学建築学教室

立正大学考古学教室

国学院大学考古学教室

福岡女子大学

九州大学建築学教室

学習院大学理学部

福岡県立朝倉高等学校郷土部

熊本県天草郡五和町文化財保護委員 柳原高太郎

なお、旧石器に関して実測には清水宗昭氏、製図は別府大学考古学研究室にご協力を賜った。その他特記しないものに関しては、実測、製図、写真、本文執筆、編集を松岡史、前川威洋、副島邦弘が担当した。



第1図 野黒坂遺跡付近地形図（九州地方建設局原図）

1. 位置と地形

遺跡は筑紫郡筑紫野町大字針摺字野黒坂にある。

福岡平野と筑後平野の接点にあたり、宝満川、山口川の合流点に面した標高50m前後の緩やかな丘陵群が展開している。この丘陵群は東縁に大塚山丘陵を置いて万葉に名高い阿志岐野に対し、福岡・筑後両平野の分水地点でもある。

南北約300m東西200mの野黒坂丘陵は全くこの分水点に位置し、北斜面の水は玄界灘に、南斜面は宝満川・筑後川を経て有明海に注ぐ。両側は石崎・松の台の丘陵を控え、南に低地を隔てて針摺微高地をもち、その南は山口川に面している。まわりを囲まれ、足下に水田をもつこの丘陵は数ヶ所の湧水池をもち、生活環境としては好適の地であったことは、現在住宅地として再開発され、特に井戸水は良質であることから推察される。

丘陵自体は開折の進行した洪積世段丘であり、南区頂上部で標高49m、北側はそれよりやや高い。その層序については旧石器の項で述べる。

2. 調査概要

南北に長い野黒坂丘陵の西寄りに予定された道路の幅員約40mについて、発掘調査を実施した結果、その全域にわたって各種の遺構を検出した。便宜上調査区域を南北に分け、各々を北区、南区とした。これは丘陵が北の高い部分と南のやや低い部分からなり、その中間に鞍部があり、これにより遺構の不連続が認められたためである。

(1) 南区

円形に近い丘陵の平坦な頂部の中央部を除く東西南の三方向に弥生期・古墳期の住居跡群と、このうち弥生前期住居に伴なう貯蔵竪穴群が検出された。

また、これら遺構群の間に乱されていない第3層（暗黄褐色土層）からサヌカイト製ナイフ形石器・黒耀石製台形石器・同剥片が検出された。

弥生期住居跡は板付式土器を伴なう前期の方形住居跡（45号・46号）・中期前半と考えられる円形住居跡（37号・38号）が見られ、これらの住居跡の周囲に多数の袋状竪穴・長方形小竪

穴が散在しているが、丘陵頂部中央から北西方向にかけては広場をなし、遺構は存在しない。この広場は弥生期初頭頃はかならずしも平坦ではなく、恐らく何らかの植生もなく、雨水により侵蝕が進み、多少の凹凸があったらしく、袋状竪穴を作る際に出る多量の粘土を、この凹凸の部分に入れて、平坦化していることから、意識的に村の広場として作られたものと考えられる。この広場の開口部は北西方向に開き、その直下、つまり丘陵下には湧水池があり、当時の水汲場であった。

古墳前期になると、長方形竪穴住居跡（40号住居跡）が一棟見られる以外他になく、次に生活が営まれる古墳時代後期初頭に至って方形竪穴住居跡（41・42・43・44号住居跡）が見られ特に44号が拡張されて43号になっている。これらのことから人口の増大が考えられる。古墳時代以降は近世墓地が営まれ、現存する石碑は明和・享保等の紀年銘があり集落は営まれず、山林と一部の耕作地が現在までの野黒坂南区の景観を占めていた。

(2) 北 区

今回の調査開始前は雑木林であり、その一部が宅地であった。調査は平均1mの表土を除去した後始めて遺構を検出した。

丘陵地の北斜面、頂部の中央部、西南斜面と道路予定地内全面にわたって、弥生～古墳期の遺構が見られた。

旧石器時代遺物は攪乱層中からナイフ型石器、台形様石器等が検出されたが、確実なこの時代の未攪乱包含層は見られなかった。

縄文期の遺物も僅かに検出されたが、これも旧石器時代遺物と同様、攪乱層の中に見られた。

弥生期になると小形方形竪穴住居跡（16・23・26・27・29・31・32号）・袋状竪穴（Pit 9・17・18・20・21・22・23）が見られるが、南区程は密集せず、西南斜面の水場に面する地域に見られ、袋状竪穴は住居跡より高い位置に作られている。これは貯蔵用とすれば当然のことであるが、ある期間使用した後使用に不都合を来たした場合、新たに設ける場合は、すぐその横に近接して作られている。

弥生中期になると、北区中央部の高位置に径7.6mの円形竪穴住居跡（17号）や、これよりやや小さい11・24号や方形18・19号等が、土器溜と考えられる壙と溝とを伴って営まれ、この少し後の中期中葉頃に10号隅丸長方形竪穴住居跡が、前者の斜面下方に11号を切って営まれている。弥生期は中期迄は生活を営み、この時期以降は何らの痕跡も見受けられない。この中断する生活は、はるかに後の古墳時代後期に至って再び開花する。南区に較べて、はるかに多くの方形竪穴住居跡が弥生期の遺構を切って作られ、その規模も大小様々である。北区住居跡群の特徴は斜面に階段状に住居跡が営まれ、大部分が粘土でカマドを壁際に設けることである。保存状態の良好なものも3基（15・20・34号）あり、カマド中央部の土器をのせる部分に立石また

は粘土柱を立てて土器がカマド内に落下するのを防止している。この立石に石皿状の砥石を転用したものも見受けられた（7号）。34号住居跡は火災に遭ったらしく、床面に相当数の炭化物が遺存し、カマドの上には甕形土器が載り、左右には須恵器、土師器等の食器類が比較的整然と置かれたまま遺存していた。当時の厨を如実に示す好資料と言えよう。また、15号住居跡は2×3m程度の方形住居跡で、その北東隅にカマドをもち、1人か2人程度の居住者しか考えられない小形住居であり、これは集落中の別火生活を必要とする特定の人、つまり婦人のための他火小屋であったことも考えられる。

これら住居跡群から検出された遺物は、土器が最多数を占め、生産用具としては石製または土製の紡錘車、砥石、9号住居跡からは鉄鎌が検出された。

次に、住居跡の内外において、滑石質の石製勾玉（13号）・白玉・平玉・管玉（28号）の玉類、土製鏡・手づくねの小土器からなる祭祀用器が散在して出土したことは、集落内において何らかの祭祀が行われたことを物語っている。また12号住居跡から土師蓋坏内にベニガラを入れたものが遺存した。

西南斜面の一角に、1×2間の柱間約1.9mの掘立柱からなる建造物跡を検出したが、この柱は前記の古墳期住居跡を切って作られているが、年代の上限は判るが、その下限は不明としか言えない。しかしながら、北区における遺構群は、時代の判明できるものは古墳時代後期を下限とし、それ以後は現代のものばかりであることを思い、さらに古墳時代住居跡も、その出土遺物に多少の時間差が見られることから、全てが同時に存在したものではないことは明らかである。したがって、この掘立柱建築は柱根を深く設置していることから考えて、一部の住居跡を切っただけで、野黒坂集落の高床の穀物倉と考えるべきであろう。

今回の調査が道路建設予定地内に限定されている関係上、野黒坂における集落の形成の発展その終末についての決定的な調査結果を得ることは困難である。地形的に、また遺物の散布から遺構の存在が考えられる面積は、発掘調査区域の3ないし4倍に達するであろう。一応調査区域内の遺構・遺物の状態から集落としての生活の不連続が看取されたのであるが、これは未調査部分を調査することによって、はじめて解明されるものであろう。

3. 遺構と遺物

当遺跡は、面積も広く立地条件もよいことから、各時代を通して生活の場として使用され、遺構、遺物の量も多い。それで当遺跡を概略的に把握するために、各時代の代表的遺構を抽出し、その説明をしていきたい。

(1) 旧石器時代 (第3・4図)

野黒坂丘陵が開折の進んだ洪積世の堆積物からなる丘陵であり、従来一部の研究者の努力により、旧石器が附近の丘陵地から採集されていたことから、今回の調査において旧石器を検出する可能性を期待していた。調査の進展にともない攪乱層に各時代の遺物に混って黒耀石・サヌカイト・硅化木等の石材から製作されたナイフ型石器・台形様石器・三稜尖頭器・細石刃・細石核・使用痕ある剥片・石屑等が発見されるに及んで、これ等の文化層の確認が急がれるに至った。従来福岡地区においては大宰府町大字水城字成屋形遺跡において、確実な文化層を確認していたのみである。

層序 (第2図)

確認された文化層は南区頂上部南辺にあり、古墳期・弥生期両遺構群の調査完了後に地表下3.6mまで掘り下げて層序を調査した。

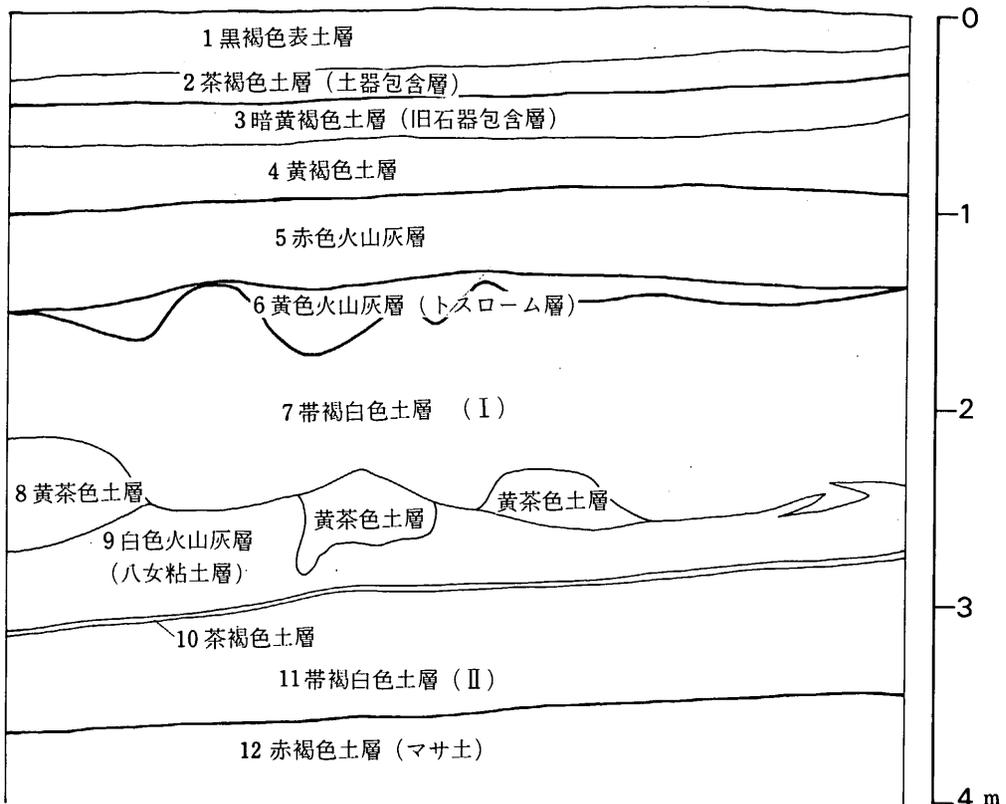
これら堆積層は表土及び第2層茶褐色層が攪乱層であり、縄文期以降の攪乱を受けている。第3層暗黄褐色土層はローム質で、この層は堆積当時のままであった。文化層としてはこの層までであり、以下の層は自然堆積層と考えられるが、只第11層帯褐白色土層(II)に多数の石英破砕礫また剥片状のものを含み、一部はローリングを受けている点に注意をひいた。

第5層と第6層は不整合であり、第7層は水成層と考えられ、第7層と第9層は間にレンズ状に第8層を挟み、不整合面が看取された。第9層と第11層の間には錆色のマンガン層を挟み、第9層が水平に堆積したことを示している。

遺物包含状況

第3層暗黄褐色土層は平均10cmの薄層であり、この層中にサヌカイト製ナイフ型石器・黒耀石製トラピーズを検出した。これ以外には相当数の剥片が同時に見られたが、何れも密集することなく散在していた。元来稀薄な包含層と言える。

この点に関しては、前述の成屋形遺跡層序も同様で、厚さも相似たものであり、遺物についても全く同じ事が言える。



第2図 南区土層模式図

遺物 (第3・4図)

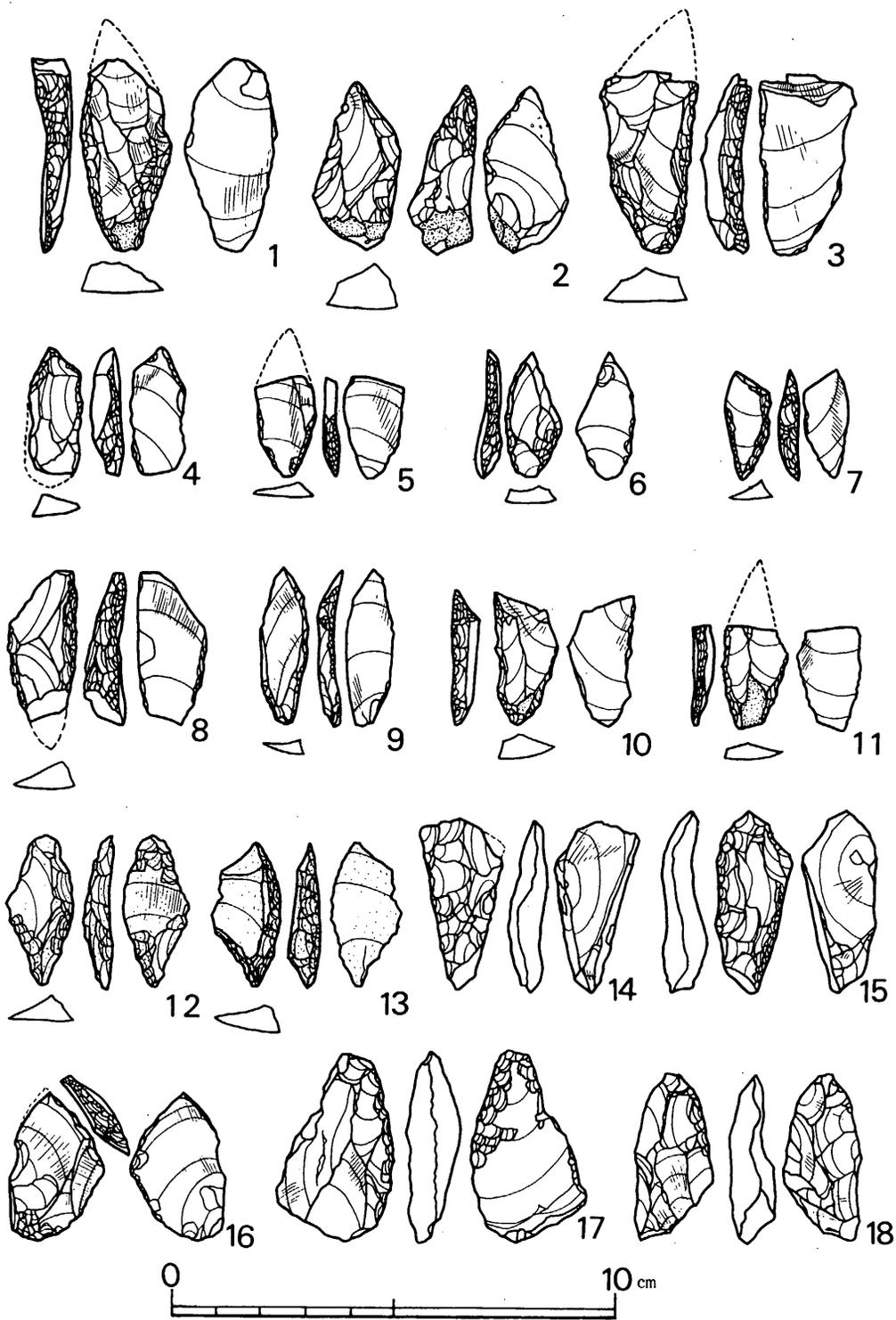
ナイフ型石器 24個検出したうち使用材質から、黒耀石製とサヌカイト製に分れ、石刃状剥片の基部と側面を刃潰加工を施す典型的なものと、翼状剥片から製作されたものからなる。

前者については打剥部を加工して基部を作るものと、その反対側に基部を作るものがある。完形品は少なく僅かな破片からそれと判明するものもある。何れも剥離面の風化が認められ、縄文期以降の剥片のそれとは明瞭に識別される。

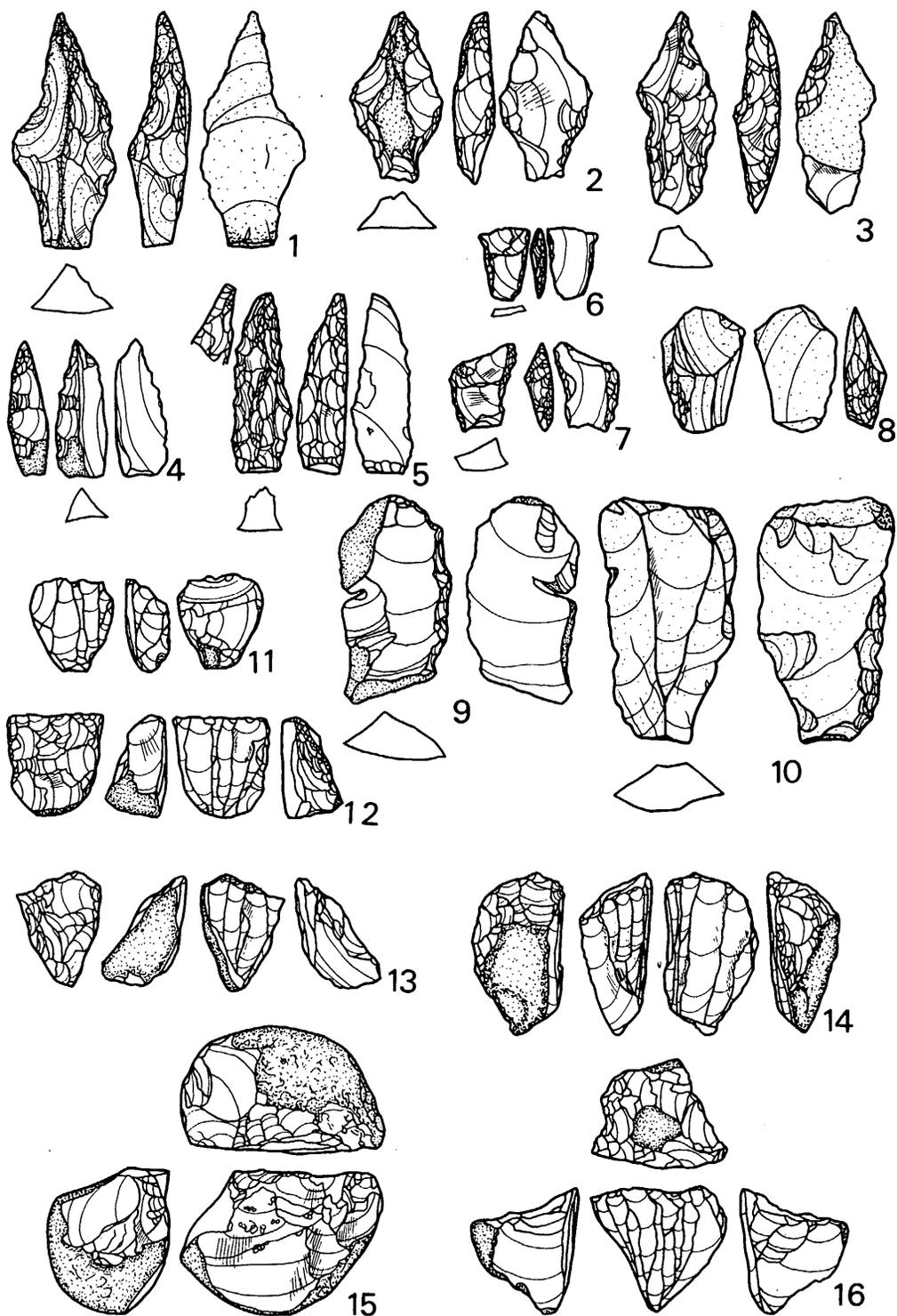
切外型石器 3個検出し、何れも黒耀石製である。ナイフ型石器と明瞭に区分することは困難であるが、刃部の形態及び背面加工の仕方は第一次剥離面から直角に刃潰加工を施すナイフ型石器と異なり、剥離面に平行に近く押圧剥離を施している。

台形石器 5個あり、黒耀石製2個、サヌカイト製2個、チャート質1個である。

黒耀石製は何れも石刃状剥片を主軸に対して直角方向に側面加工を施し、第一次剥離面の刃部を活用する様に整形としている。サヌカイト製及びチャート質の両者は第1次剥離面の刃部が



第3図 旧石器 (1) 1~13 ナイフ型石器 14・15 切出し型石器 16 搔器
17・18 使用剥片 (清水測) (%)



第4図 旧石器(2) 1~5 尖頭器 6~8 台形様石器 9・10 刃器
 11~14・16 細石刃核 15 石核 (清水測) (2/3)

活用できる剥片を選び、刃部に対する左右何れかの片面のみを加工し、他方は第1次剥離面をそのまま活かしている。

尖頭器 三稜型と紡錘形の二種からなっている。

三稜型尖頭器	黒耀石製	4
	サヌカイト製	1
紡錘型尖頭器	黒耀石製	2
	サヌカイト製	1

三稜ポイントのうち、黒耀石製1点を除き横剥ぎの剥片を用いて第1次剥離面から背稜部に向けて側面加工を施しているが、背稜部からの再加工は見られないので、ナイフ型石器に分類すべきかも知れない。

サヌカイト製は縦剥ぎ剥片をもちい第1次剥離面からと背稜部からの加工を施したものである。

紡錘形ポイントは、サヌカイト製は先端部を残すのみで両面加工を施し、断面は紡錘形を呈している。黒耀石製は完形で両面加工の尖頭器である。

石 刃 サヌカイト・黒耀石製の2点があり、何れも打面を残し、刃部に使用痕を留め、共に剥離面のPatinaの発達を見る。

彫刻刀様石器 典型的な彫刻刀は見られないが、石刃の打面と先端に再加工し槌状剥離を施したものの、横剥ぎの翼状剥片の片側に再加工したもの、尖頭器の先端に再加工したもの等が見られる。石材はサヌカイト及び黒耀石を用いている。

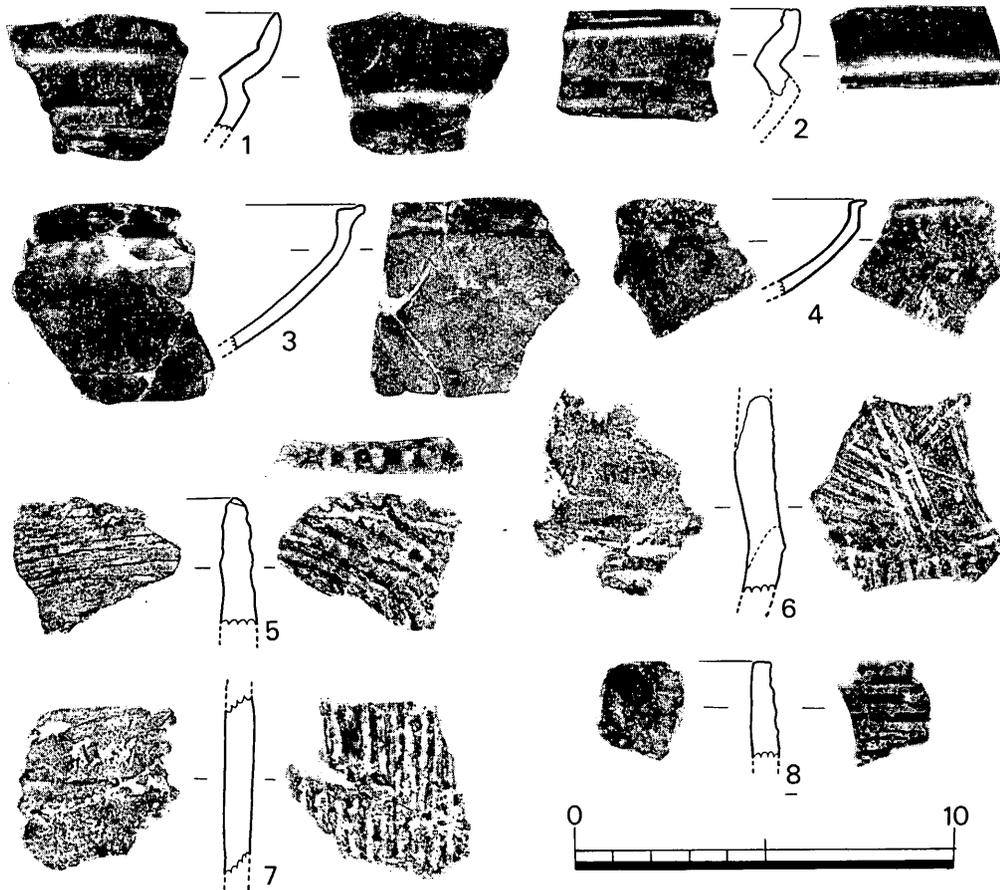
細石刃 黒耀石製の細石刃で長さ2～3cmのもので通常多く見られるタイプのものである。

細石核 黒耀石製細石核が5点発見された。その2個は舟底型石核の一種と考えられるが、舟底部からの修整加工は見られない。打面調整は細石刃を取るための槌状剥離面の上部にのみ施している。他の3個は槌状剥離面の上方・側方から打面調整をなし、この打面が槌状剥離面に対して側面から見た場合鋭角をなしている。

石 核 黒耀石礫の非常にローリングを受けたものからその一部に打面を作り剥片を剥ぎ取ったもので不整形石核と言えるものと、石英質の原石で硅化木とも思われる石材を周囲から打ち剥がした石核が見られた。

使用剥片 前に述べた石器又は石核以外に使用痕を留める剥片が多数出土した。

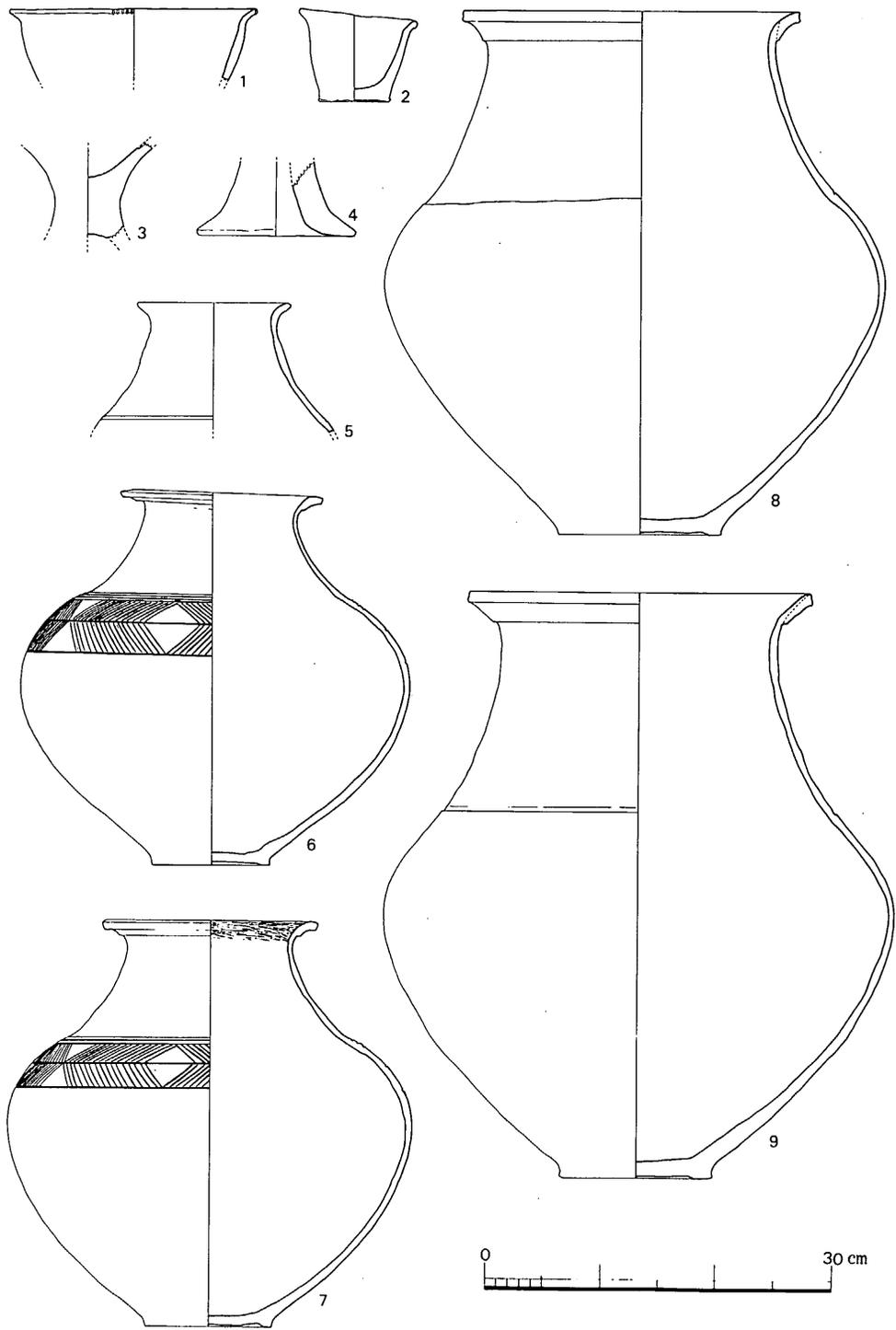
以上のとおり各種の石器等が出土した包含層は比較的薄く、これらの石器相互の層序的編年について、この包含層を詳細に検討した結果、層序区分はつけられなかった。前述の石器類は相互に接近した時期に位置するものと考えられる。



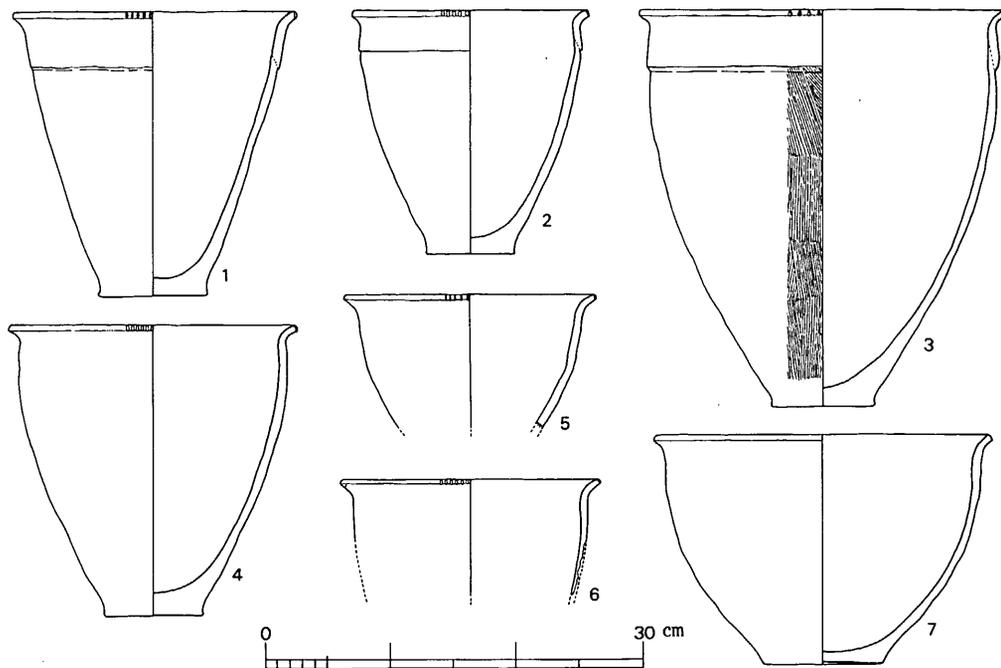
第5図 1類土器 (柳原拓) (1/2)

(2) 縄文時代 1類土器 (第5図)

縄文時代の遺構は全く検出できなかったが、遺物は散発的に表土および他の遺構の埋土から発見された。その大部分は石器であり、石鏃、石匕、搔器、打製石斧、蛇紋岩製磨製石斧、それに縄文後期末とおもわれる打製十字形石器などがある。土器としては、鉢、皿などの精製土器と表面に貝殻条痕がつけられている深鉢形粗製土器があり、後者には口唇部に刻目をもつものもある。時期としては縄文時代晩期後半に編年されるものと思われる。出土地は南区が主で、北区でも少量発見された。



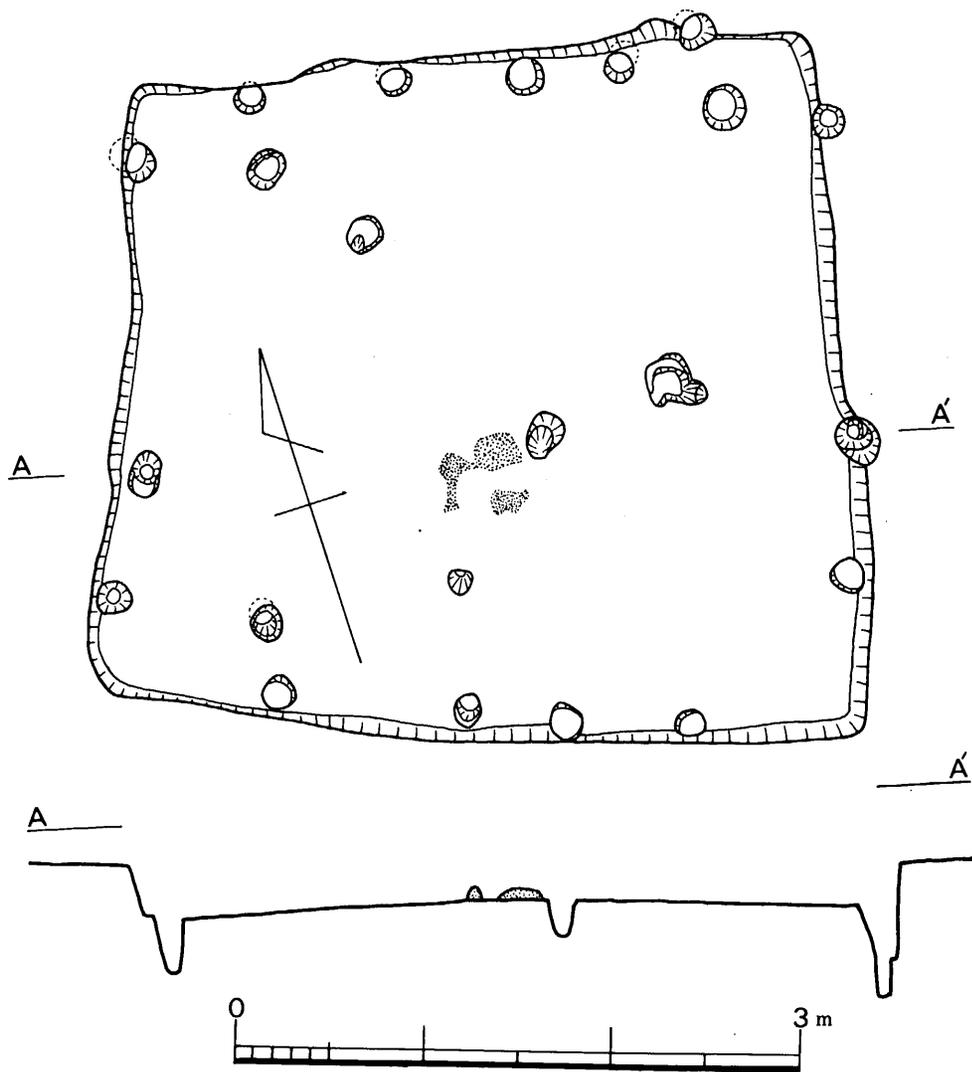
第6圖 2類土器(1) Pit 25出土 (1/6)



第7図 2類土器(2) Pit 33出土 (1/6)

(3) 弥生時代前期(その1) 2類土器(第6・7図)

南区の頂上部には数多くの弥生前期袋状竖穴(貯藏穴)があり、その一つであるPit 25は広さ2.9×2.4m、深さ1.8mの大形のもので、底面の形はいくつかの辺をもつ円形に近い形(これを多边形と仮称しておく)で、方形から派生したものであろう。さらに一部に張出し部分があり、Pit 41にも同様のものが認められ、入口等の用途に使用されたものであろう。このPit 25は、人為的に埋め戻しがされ、下部層である白色土が穴の上部にみられた。遺物としては大型壺2個、綾杉状の文様を有する壺2個があり、後者のうちの1個には、口唇部および頸部上端に4本、肩部沈線間、胴部綾杉文間に丹の彩色線が認められる。その他の器形としては、小形甕、高杯片、口唇部全面に刻目を入れた甕片がある。また土器群の付近には丹の塊も発見された。Pit 33は底面の広さ2.3×2.3mでやはり多边形である。ここからは甕形土器が多数出土したが、壺形土器はない。甕は肩の継ぎ目に段を有するものが特徴で、やや小さな刻目が口唇部全面につけられている。この種の土器はPit 28から、貝殻で口唇部と肩部の段に刻目をつけたものも出土している。また肩部に段を有しないものもあり、口唇部全面に刻目を入れている。鉢形土器は表裏両面とも研磨されている。以上のような土器を2類土器として分類したが、弥生時代前期後半の時期と考えられる。



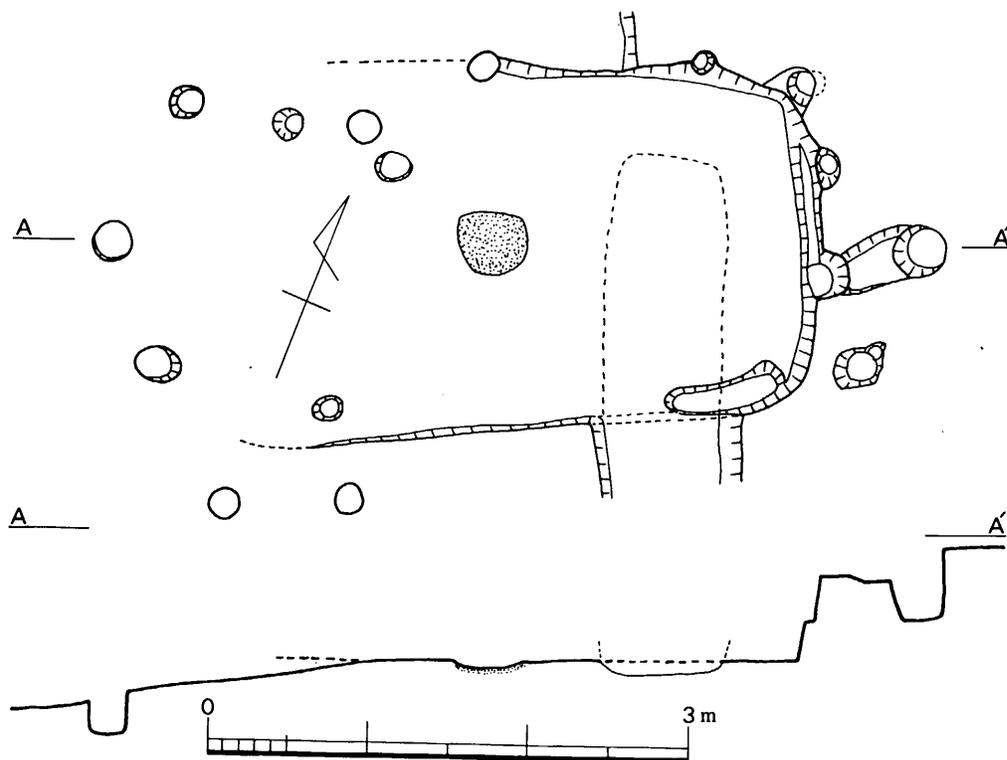
第8図 46号住居跡

この2類土器を出土する竖穴はすべて南区に限られ (Pit 25~Pit 52), その形状も, 方形・長方形・隅丸方形・胴張方形などさまざまである。とくにPit 28は長方形の底面に, 壁にそって6個の小柱穴が認められた。またPit 29のように, 袋状竖穴が完全な形で残っていたものもある。Pit 43・Pit 50は長方形の小袋状竖穴で, 土器の出土量も多い。またPit 25でみられる人為的埋め戻しは, 他の多くの竖穴にもあり, 埋め土の層序は, 地層と逆転していることから, 袋状竖穴を新しく作る時, 古くなった穴に掘り土を埋めたものであろう。

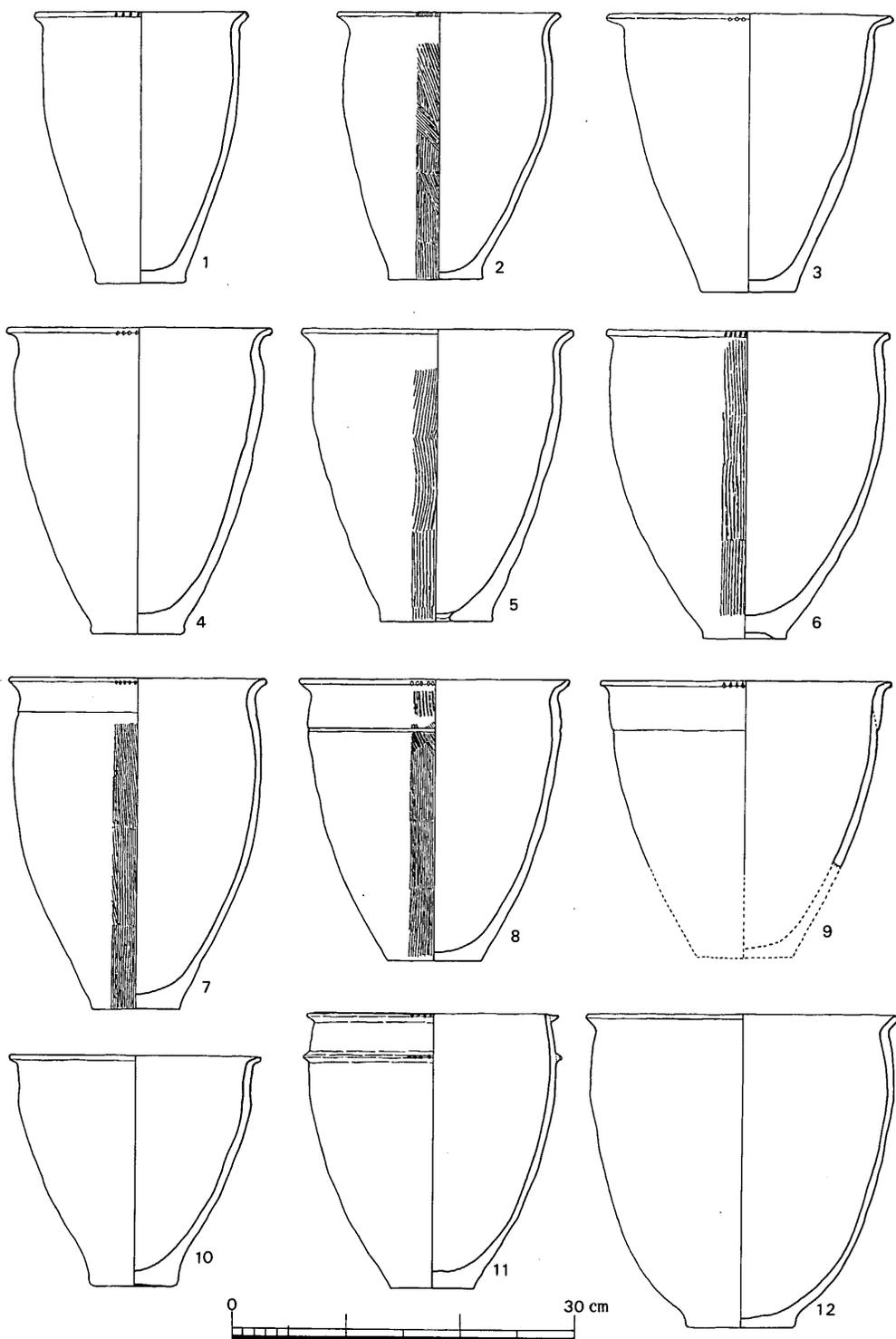
ところでこのような貯蔵穴をたくさん作った人々の住居とはどんなものであろうか。45号住居跡(第22図)は6.5×7.1mの小形のもので、柱穴は住居内外とも不明である。住居中央近くに方形の掘りくぼめた炉がある。46号住居跡(第8図)は3.9×3.5mのややゆがんだ方形で、壁際にならぶ穴が柱穴らしく、やや内傾している。中央近くに焼土がみられ、炉の跡と考えられる。

(4) 弥生時代前期(その2) 3類土器(第10・11図)

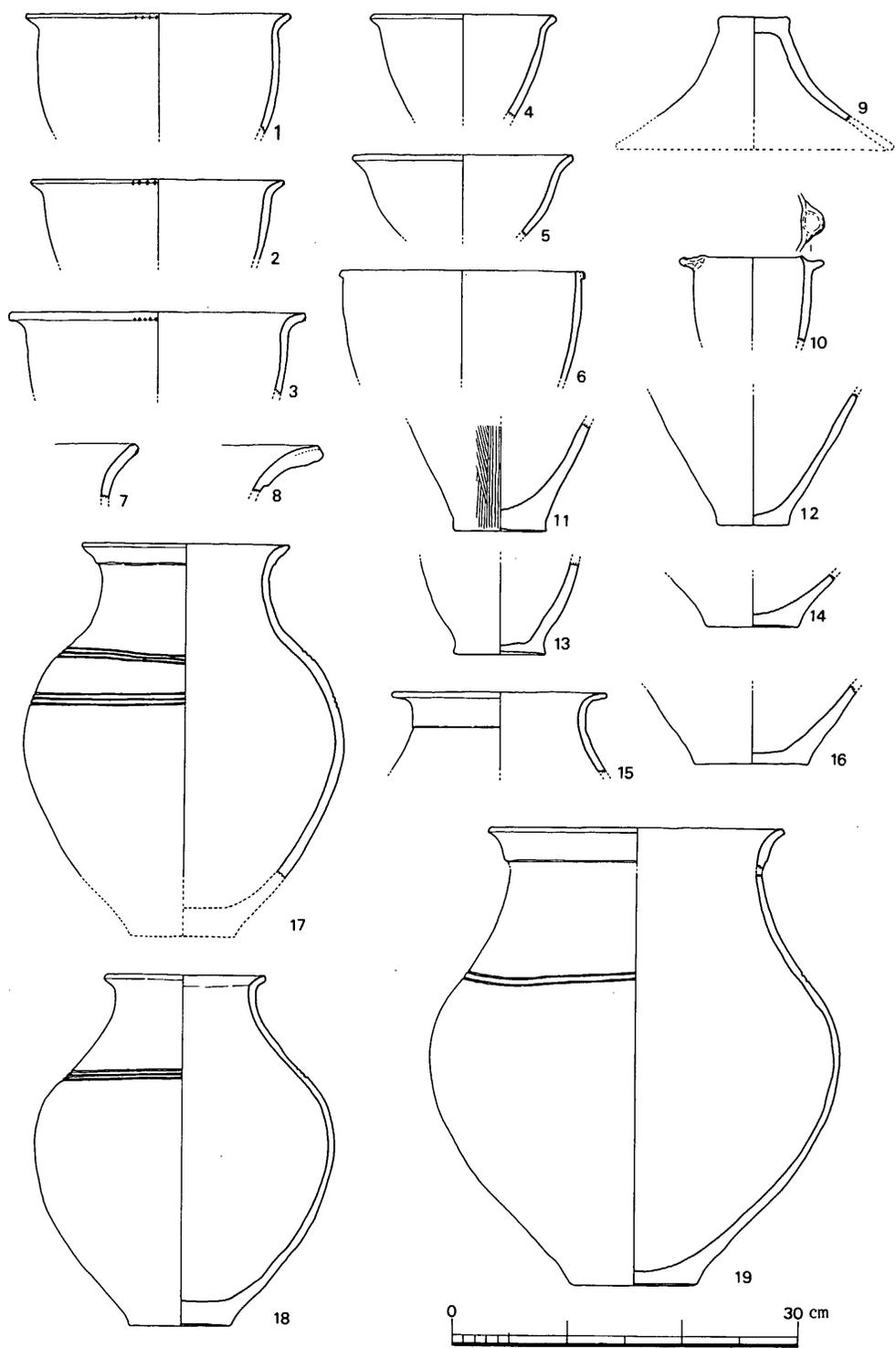
Pit 17・Pit 18・Pit 32からは多くの土器が出土している。そのうちPit 18出土土器を標式として3類土器とした。甕形土器は細かい刻目を口唇部全面に入れるものもあるが数が少ない。大半は口唇部下部に刻目を入れている。肩部に段のつくものもあるが、2類土器にみられるような高く明確なものではなく、また沈線で段をつけたものや、一本の線をつけたものなどがある。そのほか口縁部に上下2段の刻目突帯をつけたものもある。底部は2類土器より薄くなり、やや上げ底気味になるものもあり、なかには穿孔して甑として使用されたものもある。器



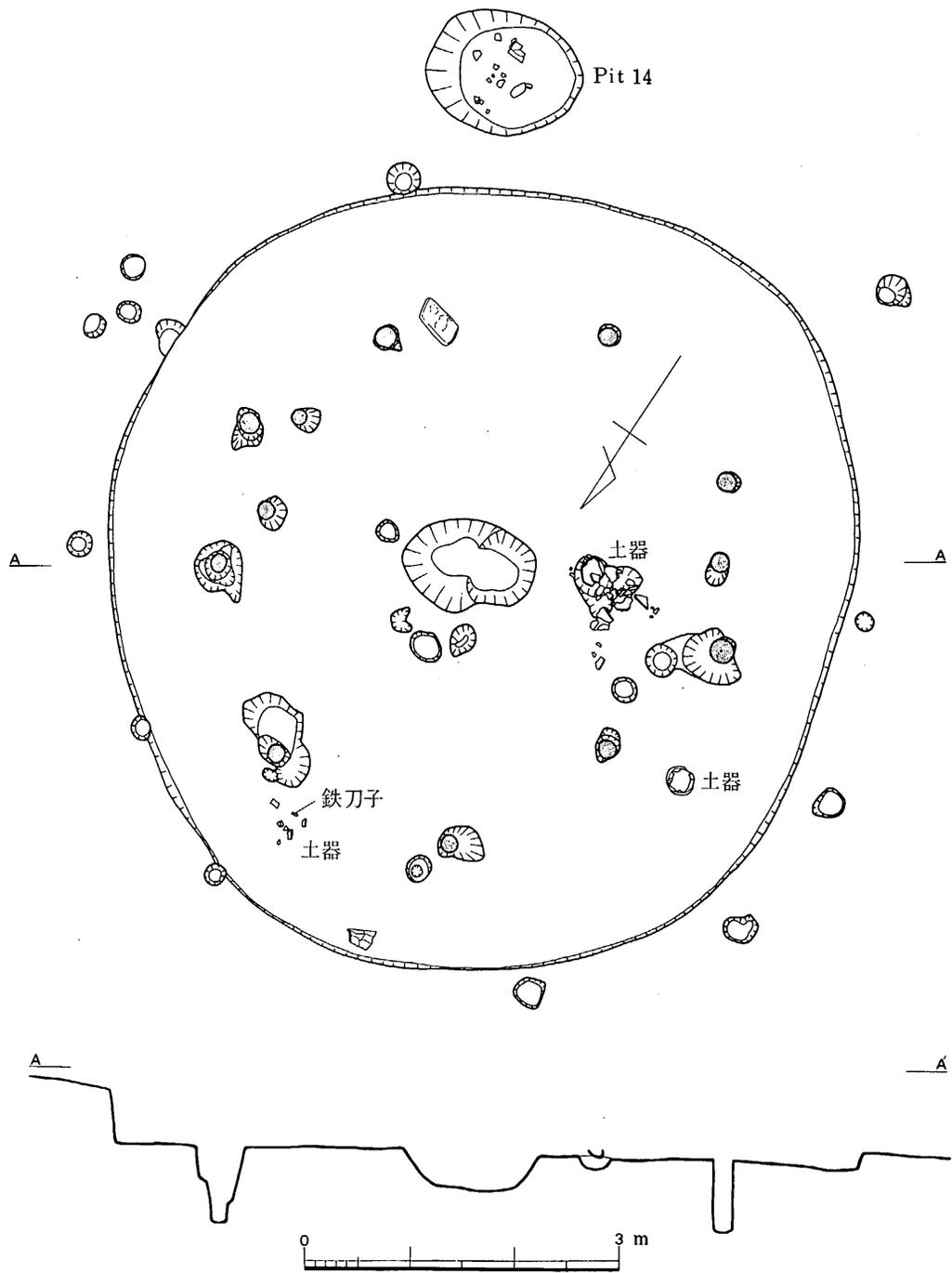
第9図 31号住居跡 (八尋、大西測)



第10図 3類土器 (1) Pit 18出土 (1/6)



第11圖 3類土器(2) Pit 18出土 (1/6)



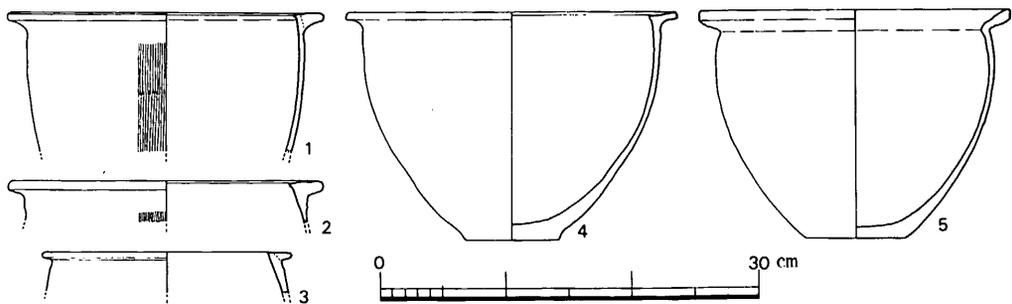
第12図 17号住居跡

形は全体的に胴のふくらみが大きくなっている。壺は胴のふくらみが小さく、球状をなし、頸部と胴部との境が明確でない。文様としては2～3本の平行沈線のみである。特異なものとしては対称的に口縁部に小さな突起をつけた小形の把手付土器がある。以上のような3類土器は弥生時代前期末に編年されよう。このPit18の底面は2.0×1.5mの長方形で、深さ約2mであるが、入口部は竖穴の中心ではなく、やや片寄って設けられている。Pit17は多辺形で、Pit18と同様の土器が出土したが、その中の壺形土器に丹を入れていた痕跡のあるものがあった。この3類土器を出土する竖穴はPit9・17・18・20～23で北区の南半に限られるようである。

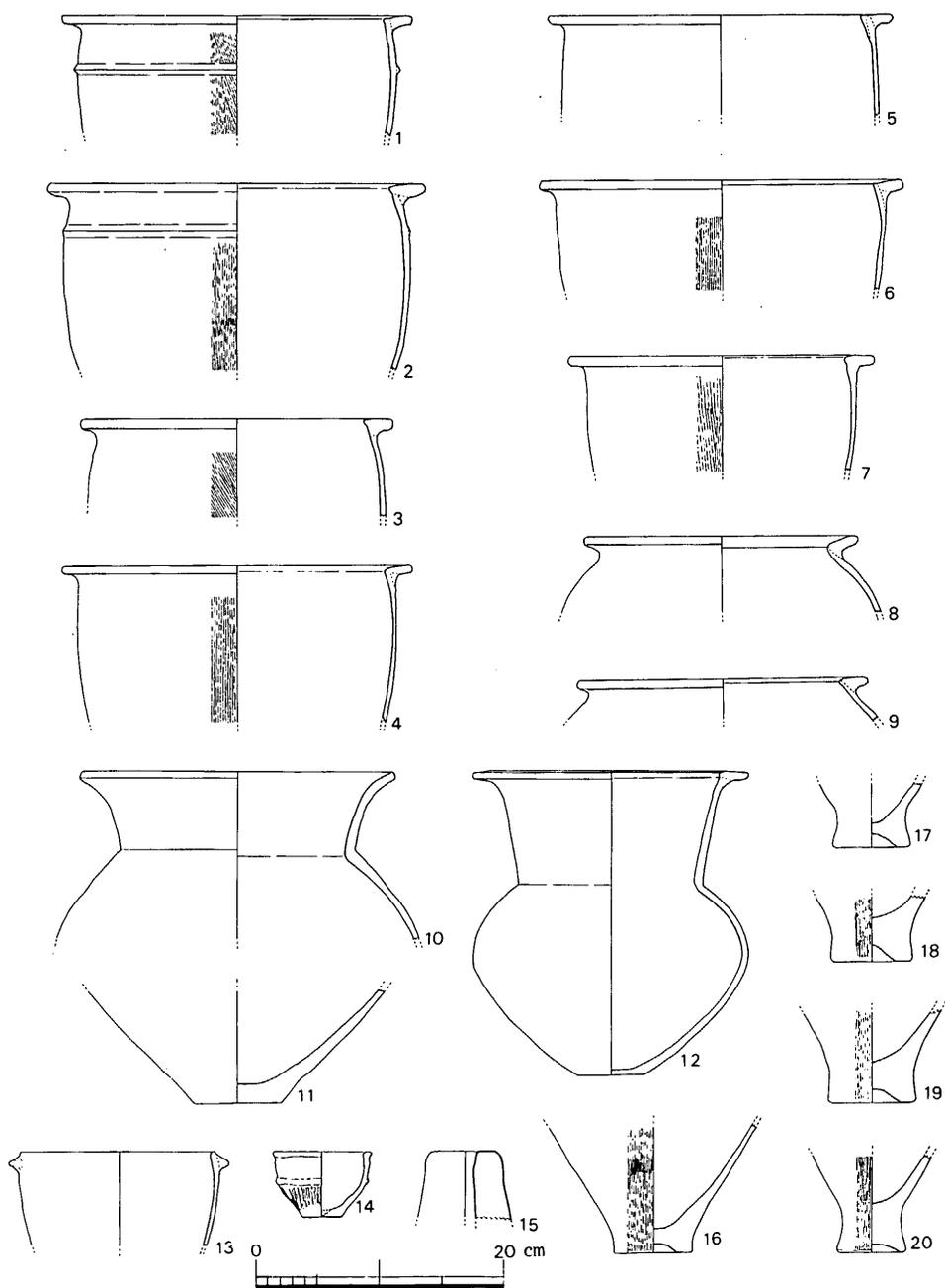
この時期の住居跡としては16・23・26・27・29・31・33号があり、やはり北区南半に限られ竖穴群と一致する。形は隅丸の長方形で、住居中央に方形の掘り込み炉がある。柱穴は大部分の住居跡において不明確であるが、31号住居跡（第9図）では、壁にそった穴が柱穴であるらしい。

(5) 弥生時代中期（その1） 4類土器（第13・14図）

北区の最も高い場所に位置する17号住居跡（第12図）は径7.6mの円形で、中央に方形の掘り込んだ炉があり、南東部に作業台と思われる平石を据えている。遺物は埋土から磨製石剣片、住居跡にともなうものとして扁平大形磨製石鏃、鉄刀子、土製紡錘車などが出土している。柱穴は壁にそってならんでいるが、そのうち一段内側の対称的柱穴を主軸とすれば、北側に5個南側に4個の柱穴がならぶことになる。同様な24号住居跡では、一段内側の柱穴を結んで主軸とすれば南北両側に4個ずつの柱穴がならぶことになる。ところで17号住居跡からは鉢と甕が出土しているが、口縁は張りつけ突帯で、断面が三角形に近いものや、小さな突帯をもつものがある。



第13図 4類土器 (1) 17号住居跡出土 (1/6)

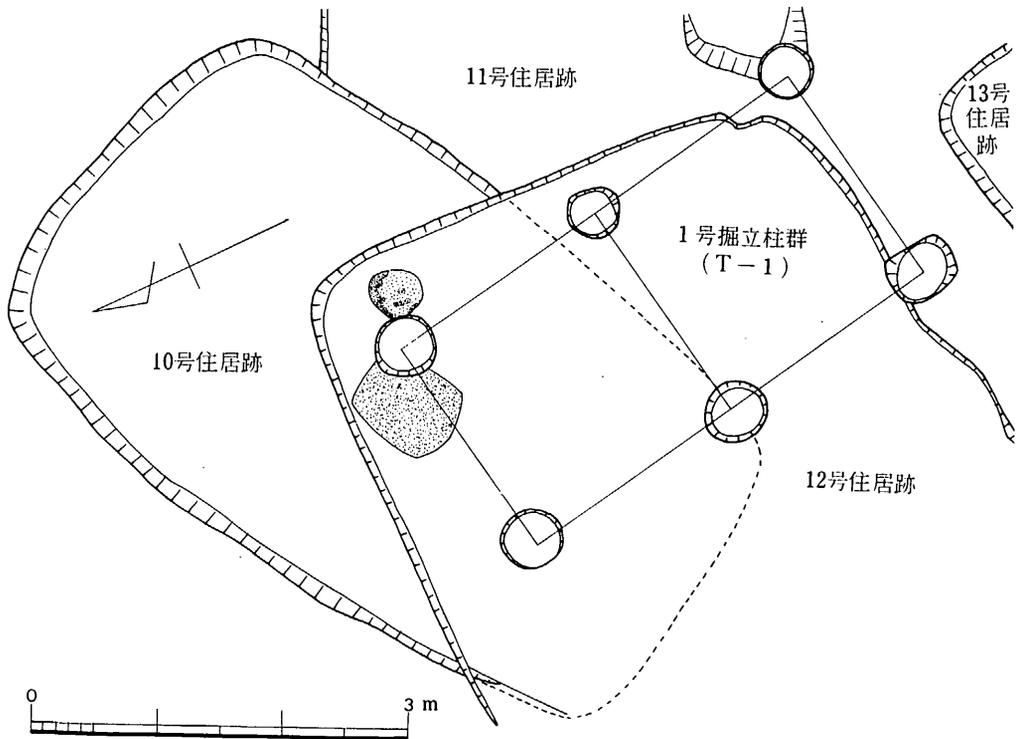


第14図 4類土器(2) Pit 15出土 (1/6)

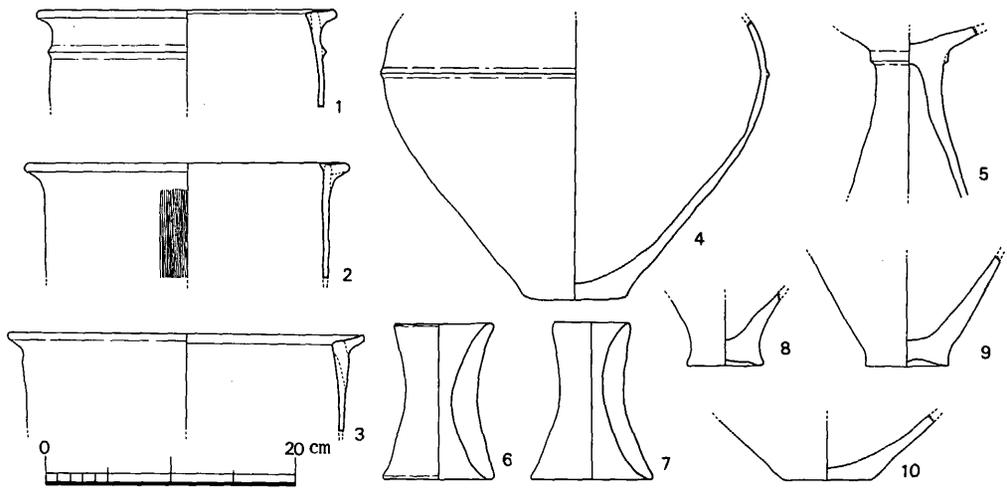
これと同様の土器を出土しているPit15からは基部にえぐりのある磨製石剣とともに甕、壺など土器が多量に発見され、甕形土器には口縁下に突帯をもつものもある。底部は比較的厚く、下からのくり込みが大きい。そのほかには先述のPit18にもみられる把手付土器があり、突帯のついた小形土器もある。この4類土器は、弥生時代中期初頭に編年できそうである。17号住居跡の付近には長方形ないし不定形の小穴が散在し、土器が出土するが、貯蔵穴に使用されたとも思われず、用途は不明である。なおこのうちのPit16からは今山玄武岩製の磨製石斧が出土した。この17号住居跡と同様の円形住居跡はほかに11・24・37・38号と合計5軒あるが、そのいずれも丘陵の陵線近くに位置するという特徴があり、11・17・24号はたがいに等距離にあり、おそらく同時存在であったであろう。ところで18・19号住居跡はこの時期の住居跡と考えられるが、他と異なり方形であり、また保存状態も悪く、出土遺物も少ないので、ここでは一応参考程度にとどめたい。第2溝とよんだ溝状の遺構からも、土器片の出土をみた。全体的にこの時期の遺構は北区全域と南区北東部に分布している。

(6) 弥生時代中期 (その2) 5類土器 (第16図)

10号住居跡 (第15図) は5.7×3.3mの隅丸長方形で、中央に方形の掘り込み炉がある。柱穴



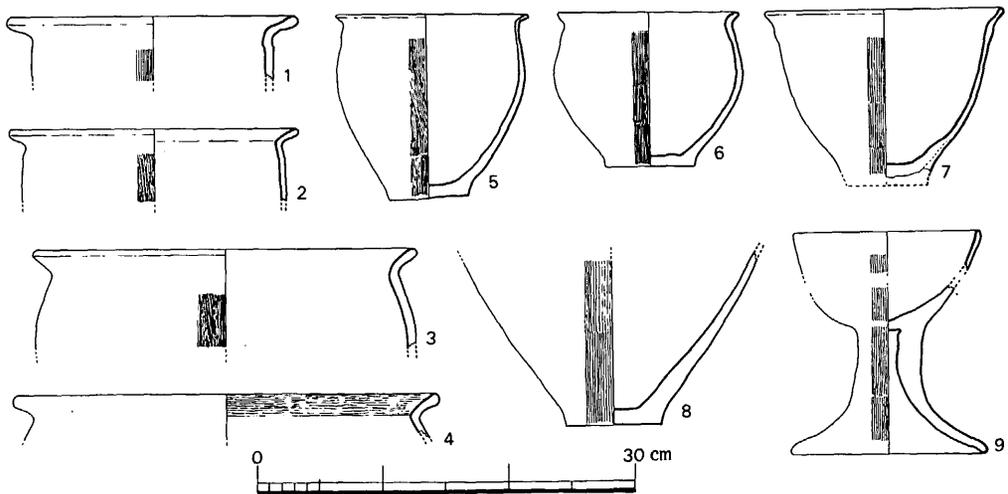
第15図 10号住居跡と1号掘立柱群 (T-1) (平面図)



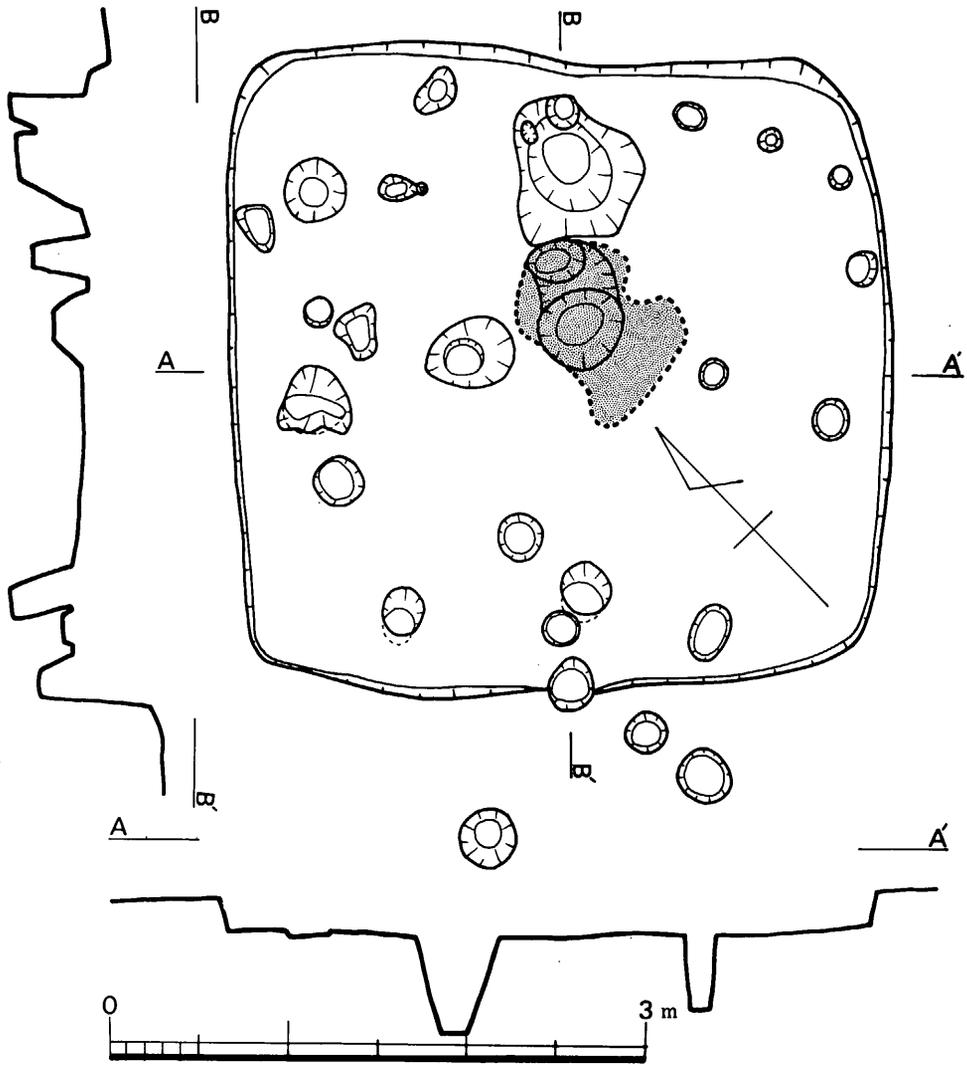
第16図 5類土器 10号住居跡出土 (1/6)

は探索したが床面にも、壁の外にも発見できなかった。11号住居跡を切っているところから、円形住居跡より後出の住居形式であろう。土器は4類土器に似た、口縁下に突帯をもつ甕や、胴部に突帯をつけた壺・高杯・円筒形の器台などがあり、甕の底部における下からのくり込みは大きくない。弥生時代中期中葉に編年できよう。

この時期の遺構はこの10号住居跡だけでなく、弥生時代前期後半から中期前半まで盛行した集落の急速な衰退がうかがえる。



第17図 6類土器 36号住居跡出土 (1/6)



第18図 36号住居跡 (上村、新原測)

(7) 弥生時代後期 (その1) 6類土器 (第17図)

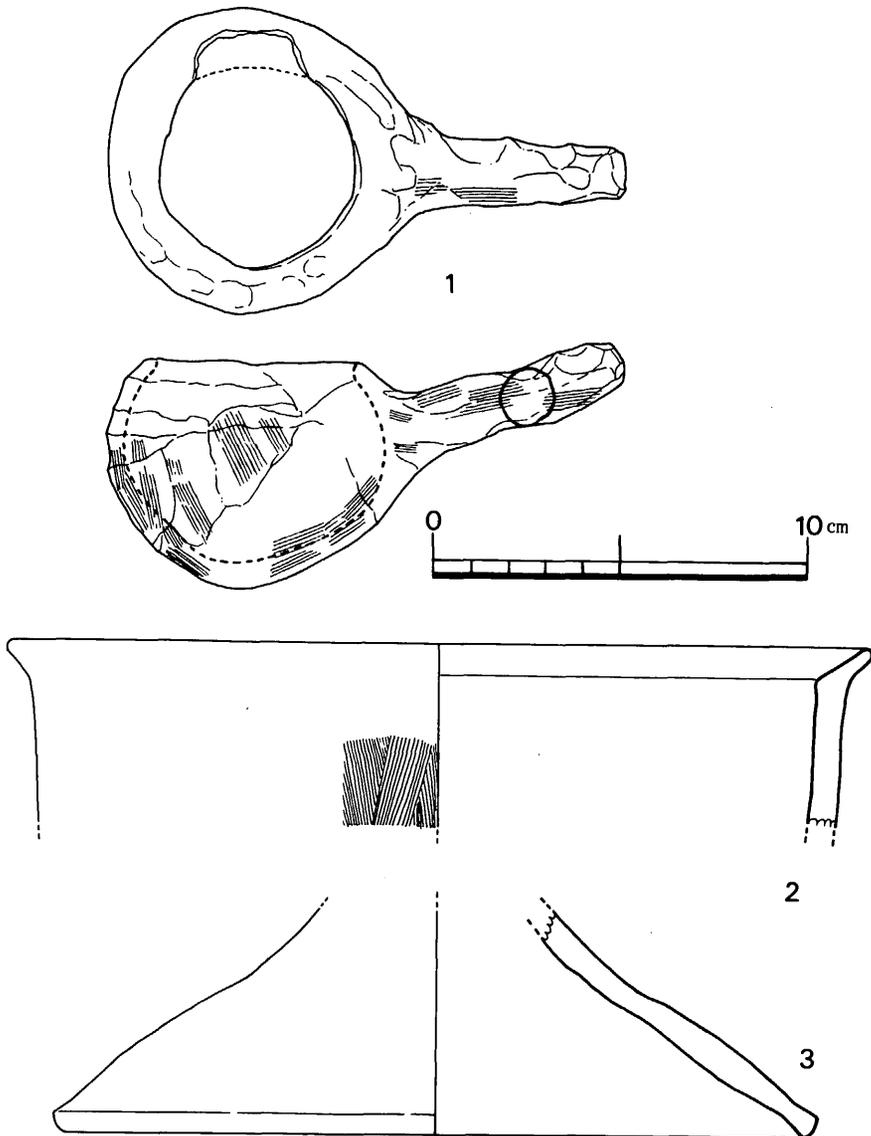
36号住居跡 (第18図) は3.4×3.7mの小さな住居跡で、炉は家の中央にある。柱穴らしきものは沢山でてきたが、確実な組み合わせはできなかった。土器は荒い刷毛目がつけられた甕形土器が主体で、そのうちでもやや小型のものが多い。そのほかに高杯も出土している。6類土器は弥生時代後期初頭に編年されている。注目されるのは、硬玉製の棗玉 (第19図)が出土したことで、径1.1cm、厚さ1cmで両面から穿孔されている。なお中央に一本の沈線が刻まれ、それから3対の枝が別れ出ている。



第19図
硬玉製棗玉 (実大)

(8) 弥生時代後期（その2） 7類土器（第20図）

39号住居跡は3.9×4.9mのやや長方形の住居跡で、中央に炉と思われる焼土がある。また床面には作業台であろう大きな平石が据えられている。柱穴はあまり明確ではないが、一応4個検出された。めずらしいことに北東壁近くの床面のくぼみから、完形の土製柄杓（ひしゃく）が発見された。これは長さ14cmで、手づくねで作られ、表面に刷毛目がつけられている。その



第20図 7類土器 39号住居跡出土 (1/2)

他には土器の出土量が少なく、時期決定に明確さを欠くが一応弥生時代後期末と考えられる。

(9) 古墳時代前期 8類土器 (第21図)

40号住居跡は3.7×3.3mの方形小型の住居跡で中央よりやや南に炉とおもわれる焼土がある。

柱穴しきものはあるが、全体の配置は不明確である。出土土器は土師器壺1個だけで、口縁部の中程がやや厚くなる。胴は球状で、底部は尖り気味の丸底である。口縁外側は無文で、内側には刷毛でよこなでをしている。胴部は縦に鋭い刷毛目がつけられ、上部はその上から横に刷毛目がつけられている。土器の内面はへら削り整形である。

このほかに35号住居跡があるが、土器の出土が皆無である。しかし南東壁にそってベットが設けられ床面中央には炉とももわれる焼土があり、36・39・40号などはほぼ同時期と思われる。そうであれば、この4軒の住居跡は弥生時代後期初頭から古墳時代初頭へかけて連続した一家屋の変遷を示すものといえる。

(10) 古墳時代後期(その1)

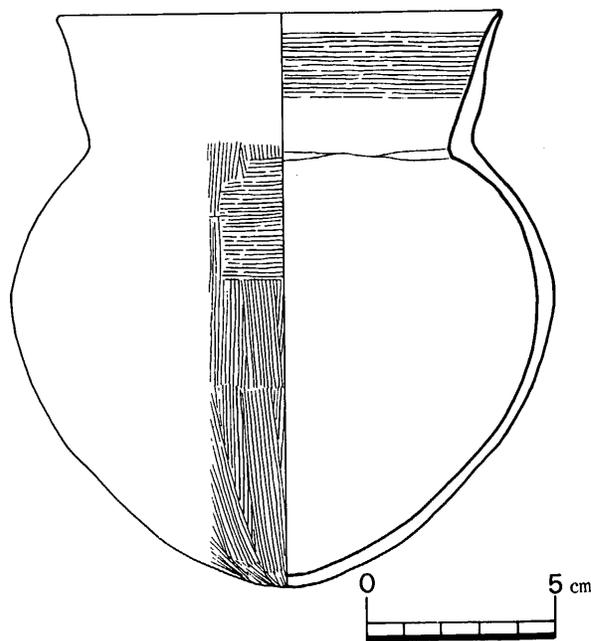
9類土器 (第23図)

43・44号住居跡 (第22図)

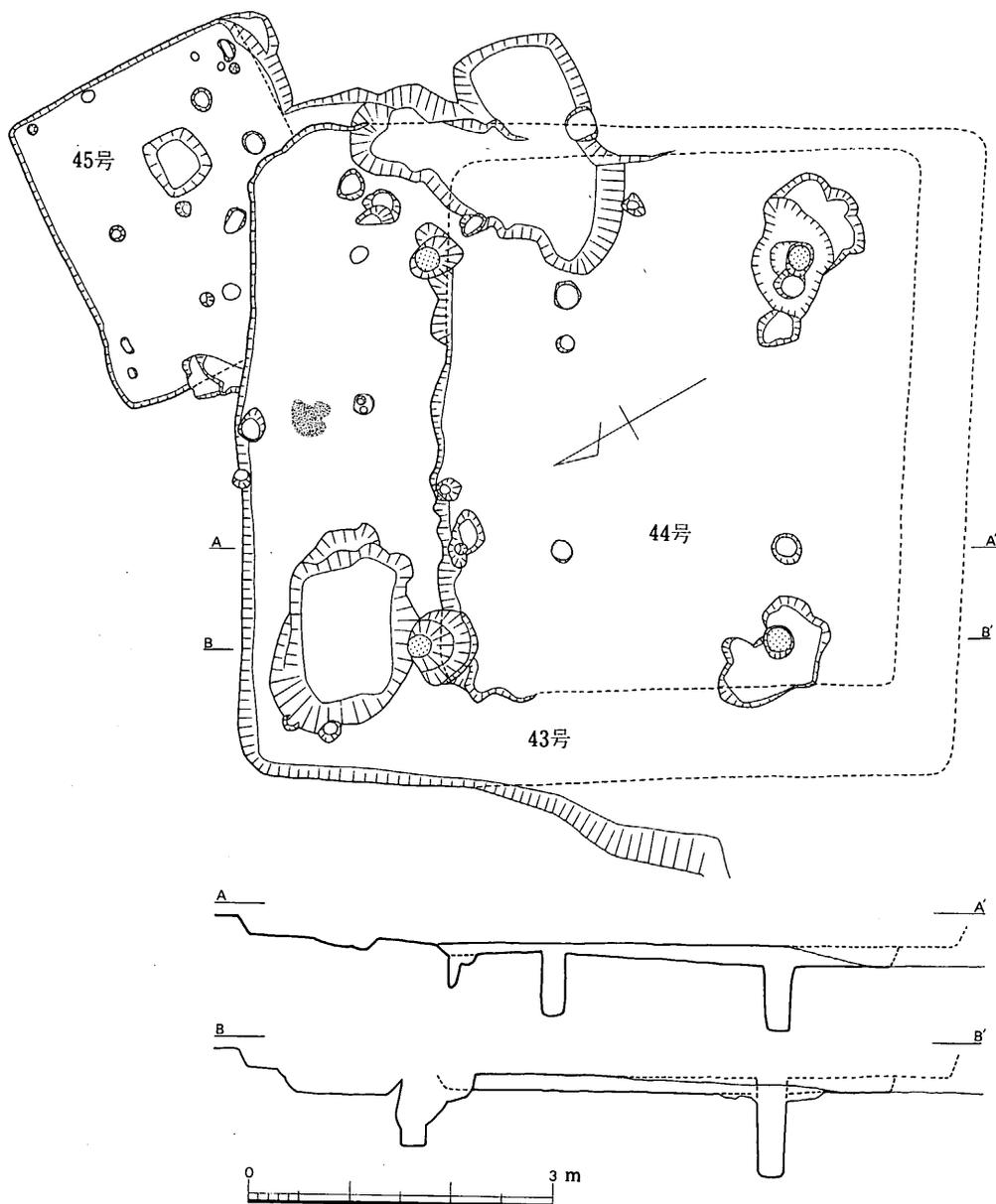
南区南端の43号内に44号が検出されたが、これは44号を埋めて43号が作られたものである。44号住居跡は5.3×4.6m、43号住居跡は6.5×7.1mで、43号住居跡の方がひとまわり大きくなっている。また両者の方位も同一であり、出土遺物もほとんど

変りないことから、43号住居跡は44号住居跡の建て増しと考えられる。出土遺物には須恵器と土師器がある。須恵器蓋は天井部と体部との境に明瞭な段がつくられ、口唇部に古式須恵器の特徴がみられる。須恵器高杯は脚部しか残っていないが、三方に方形のすかしがあり、その間にへら記号をもっている。

土師器は精製土器として壺・碗・碗形土器があり、壺と碗器土器はよく研磨されている。胴



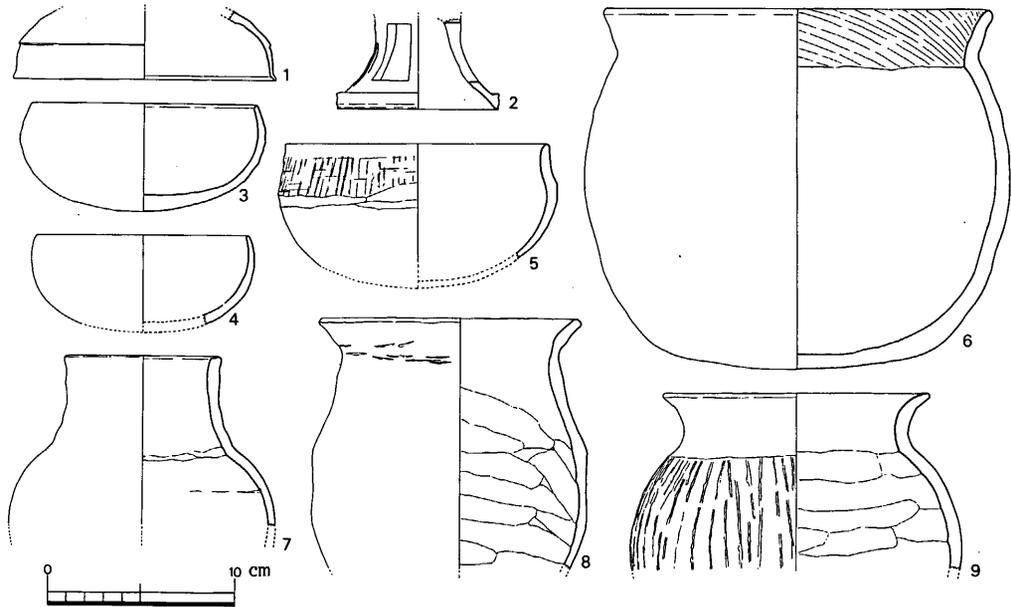
第21図 8類土器 40号住居跡出土 (1/2)



第22図 43・44・45号住居跡

のややふくらむ鉢（6）も器面が研磨されている。そのほか粗製甕もある。全体的に土師器も製作がていねいである。しかし、10類土器にみられる土師器杯は共伴しないようである。

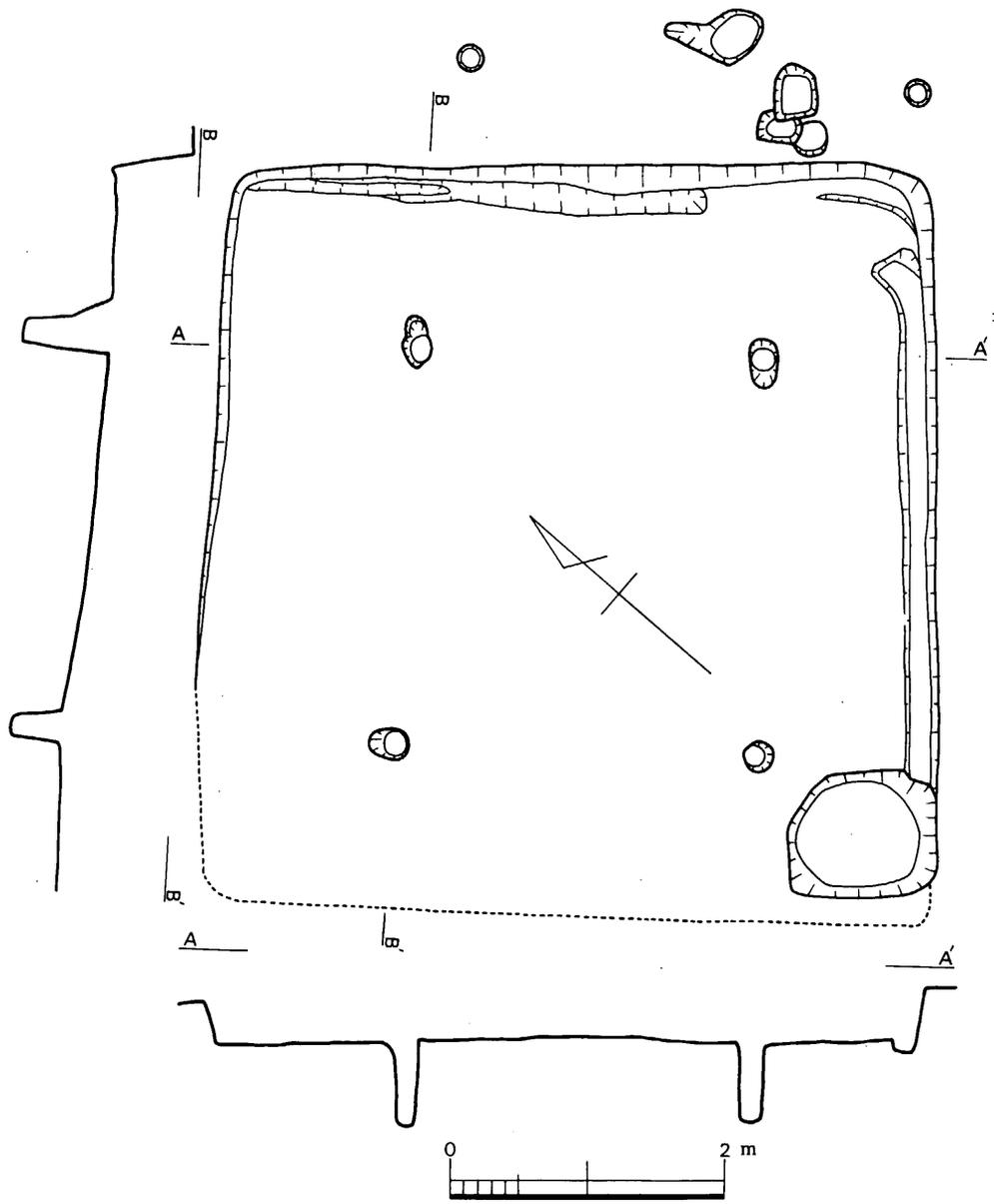
さらに9類土器は北区の28・30号住居跡の埋土中より発見されていて、かつてこの付近にこの時期の住居跡があったものと考えられる。



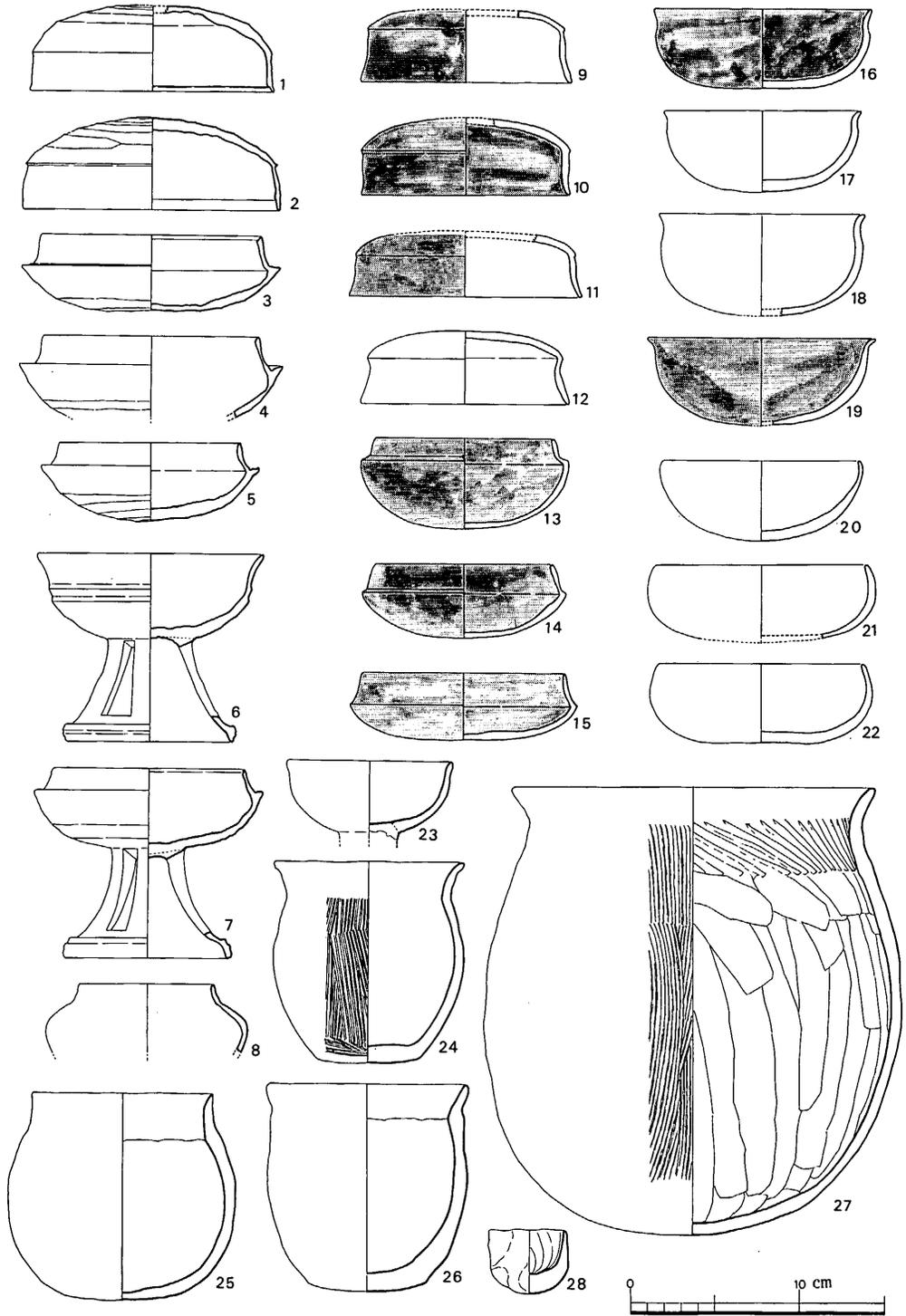
第23図 9類土器 43号住居跡出土（1・2－須恵器）（ $\frac{1}{4}$ ）

30号住居跡（第24・25図）

30号住居跡は、次の10類土器を出す住居跡であるがその埋土から、特に須恵器において9類土器が多く出ている（第25図）。1・2は杯蓋で天井部と体部との境に明瞭な段がつき、口唇部に古式の特徴をもっている。天井部はていねいなへら削り整形をしている。3・4は杯身で蓋受け部の立ち上がりが高く、口唇部に古式の特徴をもつものもある。以上の杯は、次の10類土器の杯に対し、最大径が大きい。5は10類土器であろう。6・7は高杯で、両者とも脚の三方に方形のすかしがあり、古式須恵器の特徴をもっている。6の破片の一部は28号住居跡のかまど内にぬりこめてあった。7は蓋付高杯で、杯自体は10類の特徴をそなえているが、一応9類に入れてみた。土師器としては、精製土器に杯身、杯蓋、口縁が外反する碗、口縁が内弯する碗形土器、高杯があり、そのうち、杯身・杯蓋・碗には土器表裏両面に黒漆を塗ったものも多い。粗製甕は大小あるが、内面はへら削り整形してある。また手づくね土器が3個出土している。以上の土師器は大部分10類土器に属するものと考えられる。



第24图 30号住居跡



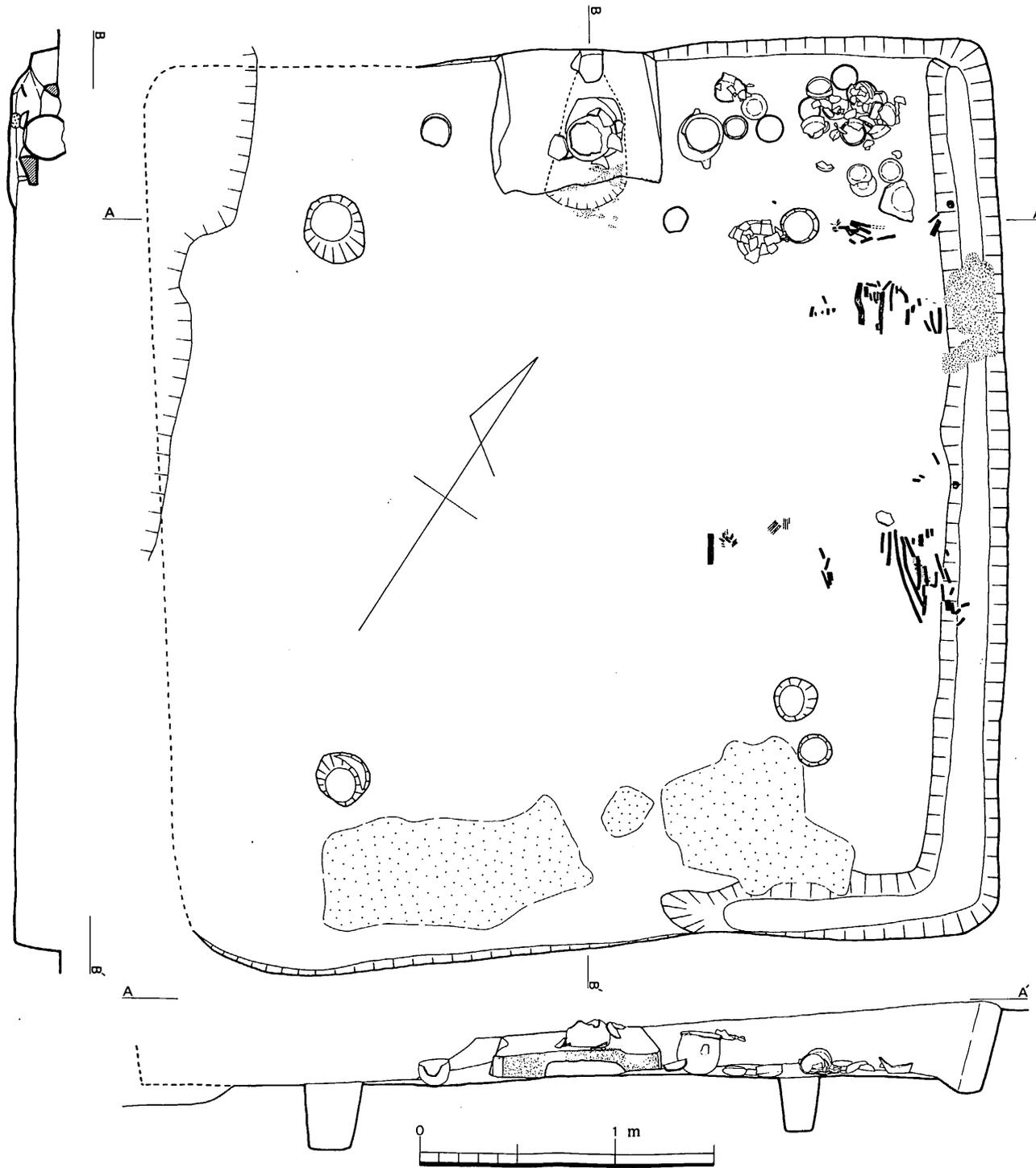
第25図 9類・10類土器 30号住居跡出土（1～8一須恵器）（ $\frac{1}{4}$ ）

(11) 古墳時代後期（その2） 10類土器（第27・29・30図）

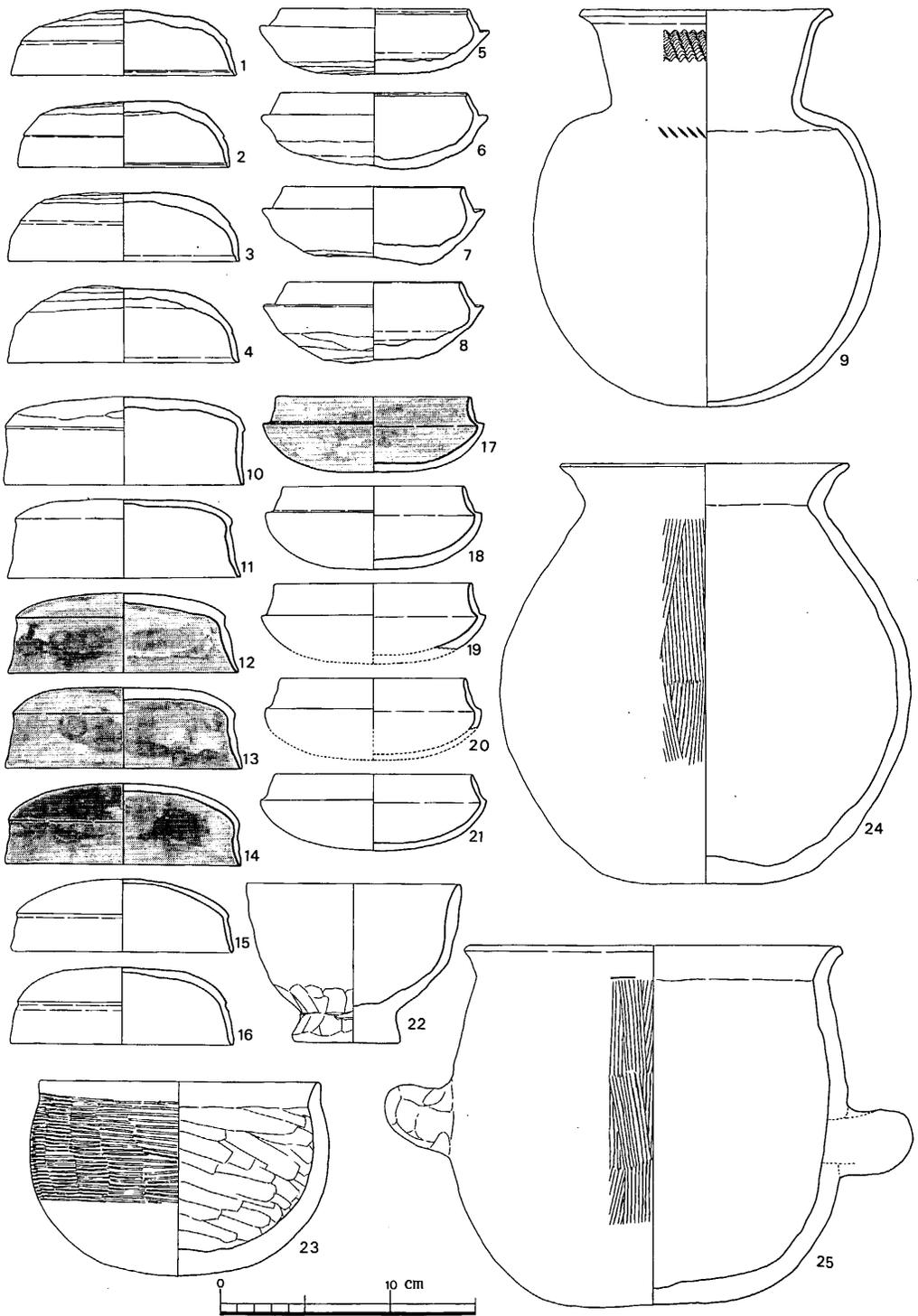
34号住居跡（第26・27図）

34号住居跡は北区の南端部、陵線近くに位置し方形で4.5×4.2mの中程度の住居跡である。この住居は火災にあったものらしく、全面を建材の焼炭片や、かや、藁の焼けたものが覆っていた。とくに北西壁近くでは壁に平行に径2～3cmの細木材をすのこ状に組んだものが、炭化した状態で発見された。これが床面に敷かれたものか、壁や天井の一部なのか、また棚状のものなのかははっきりしない。南東壁にそって粘土塊がみられるが、その一部は焼炭層の上に乗るものもあり、確実に当住居跡の施設とはいきれない。この住居跡で一番興味あることは、火災にあったため、かまどを含め土器全部が残り、当時の台所がそのままそっくり復元できることである。このような例はめずらしく、また当時の生活をうかがう上からも重要であろう。土器の配列をみると、まずかまどの左に土師器鉢があり、かまどには土師器甕がかけてある。かまどの右には把手付甕が据えられ、さらに須恵器杯4組、土師器杯(蓋7個以上、身5個以上)・碗がかたまって発見された。これは床面に据置かれた状態ではなく、棚などの上に置かれていたものが、焼け落ちたような様相を示している。柱穴のそばには、あたかも柱にもたせかけたように須恵器壺がおかれていた。かまどは幅85cm、奥行70cmの方形で、焚口からかまどの中心にかけて、やや掘りくぼめてあり、次第にのぼって煙道にいたる。かまどにかかっている甕の下には、土製円柱状支脚が横倒しになっていて、それを粘土塊で支えていた。さらに北東部の壁際に焼土がみつかったが、暖をとるための炉の跡であろうか。

出土土器のうち須恵器杯蓋(1～4)は天井部と体部との境に段のつくものから、その痕跡を残さないものまであり、口唇にも古式須恵器の特徴を残すものから、全く残らないものまでである。3・4には天井部内面にタタキ痕を有する。須恵器杯身(5～8)も同様に口唇部に古式須恵器の特徴を残すものから全く残っていないものまでである。これにはタタキ目はない。須恵器には、このほか壺がある。土師器のうち杯蓋(10～16)は天井部が平坦で体部との境に明瞭な段がつき体部の立つものから、天井部が丸くなり体部との境が沈線のみになり体部の開くものまでである。土師器杯身(17～21)も蓋受け部がやや広く、立ち上がり部の内反度のつよいものから、蓋受け部がほとんどなく内反度の弱いものまでである。以上土師器杯は表裏両面研磨され、黒漆の塗られたものも多い。碗(22)は胴部と底部との境をへら削りで作くりだし、高い底部にしている。底には木の葉の圧痕がついている。鉢(23)は胴部に荒い刷毛目を横方向につけ、内部はへら削り整形をしている。かまどにかかっていた甕(24)と把手付甕(25)は、ほとんど作りが同じで、胴部に荒い刷毛目を縦方向につけ、内部はへら削り整形をしている。この34号住居跡出土土器を標式に10類土器とし、時期は6世紀中葉頃と考えられる。



第26图 34号住居跡



第27図 10類土器(1) 34号住居跡出土 (1~9-須恵器) (1/4)

20号住居跡（第28・29図）

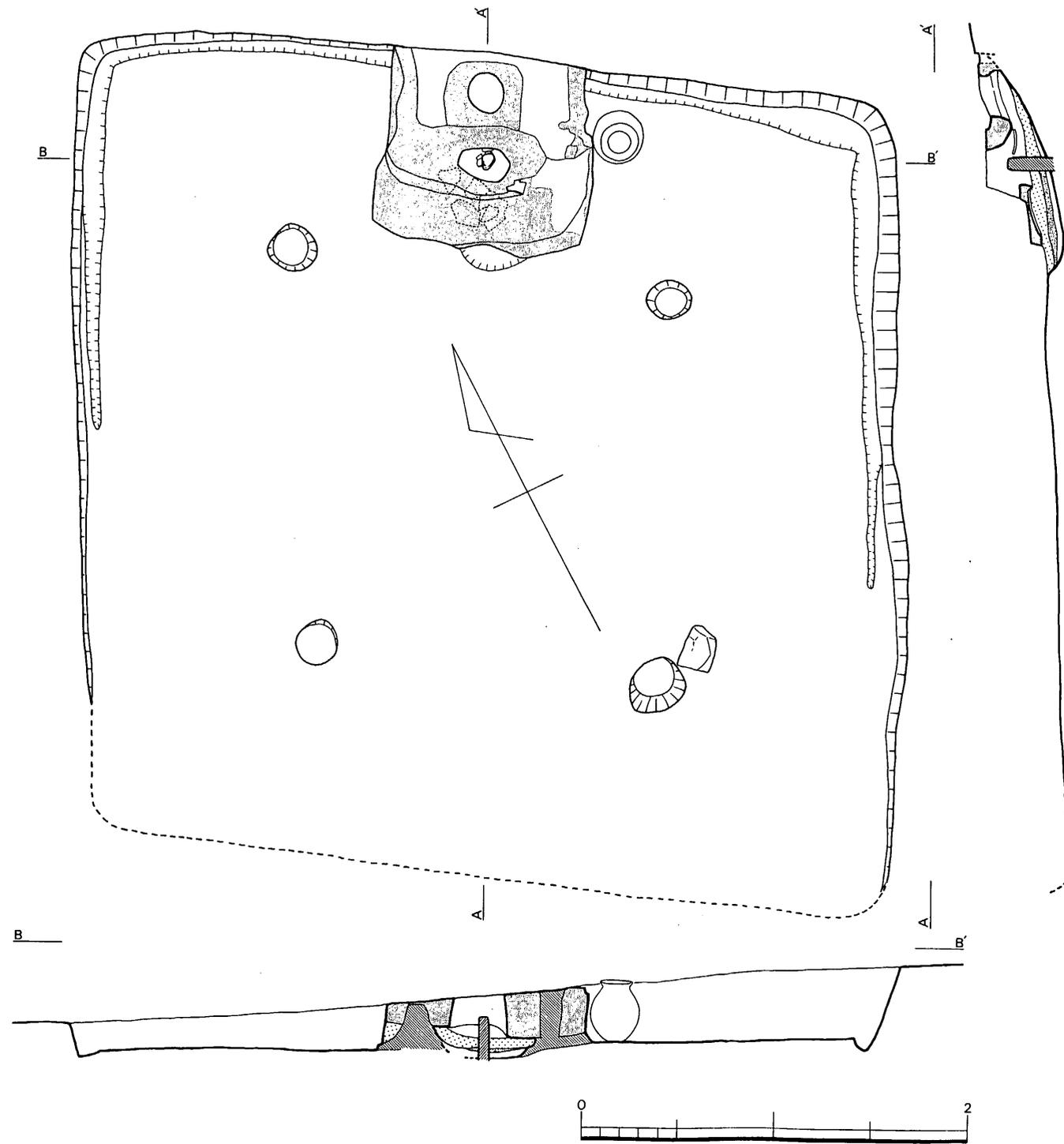
4.3×4.1mの方形の住居跡で北東壁中央に巾1.1m奥行1.0mのかまどが据えつけてある。このかまどで興味深いのは、煙道、中央の穴、かまどの周囲を粘土でかためていることである。まず焚口より少し掘りくぼめ、支脚に近づくにしたがって少しずつのぼりはじめ、その間の最も火のあたる天井部には、精製研磨の甑(5)の破片をはりつけている。支脚を過ぎさらにのぼって煙道に抜けている。支脚には細長い石棒を使用している。なおかまどの右には土師器甕(10)が据え置かれていた。この20号住居跡出土の土器は、須恵器片や前述土器のほかに精製土器としては土師器杯身(1)・碗形土器(2～4)、粗製土器として小形甕(6～9)と胴長で底の厚い甕(11)がある。

41号住居跡（第30・32図）

この住居跡も火災にあっていたので慎重に発掘した。その結果、図のように住居跡全面において残りが非常によく炭化木材が発見された。四隅からは叉首が中央に向かって走り、壁の中程では壁に直角に垂木がならんでいるのがわかる。そのほか柱や桁も精査すれば判明するのではないかとおもわれ、専門家の研究によって家屋の復原などに役立つことが期待される。なお炭化材の間に屋根をふいたとおもわれるカヤの焼けたものも発見された。ところで42号住居跡も同方向でならんでいて、また火災にあっていることから41号住居跡と同時に火災にあったものであろう。41号住居跡のかまどは北壁中央にあり、支脚は石製であり附近に土器片が散在していた。出土土器としては須恵器片のほかに、土師器杯蓋、黒漆塗りの杯身、碗形土器、表面にへう削りと荒い条痕があり下から大きくなりこみのある底部、高杯の脚がある。また平底の碗形土器があり、12には底部に木の葉の圧痕を有する。粗製土器には小形甕と大甕の底部がある。特異な遺物としては土製の槌が出土し、製陶具と考えられている。また滑石製の薄い玉も出土したが、同様なものは14号住居跡から出土している。

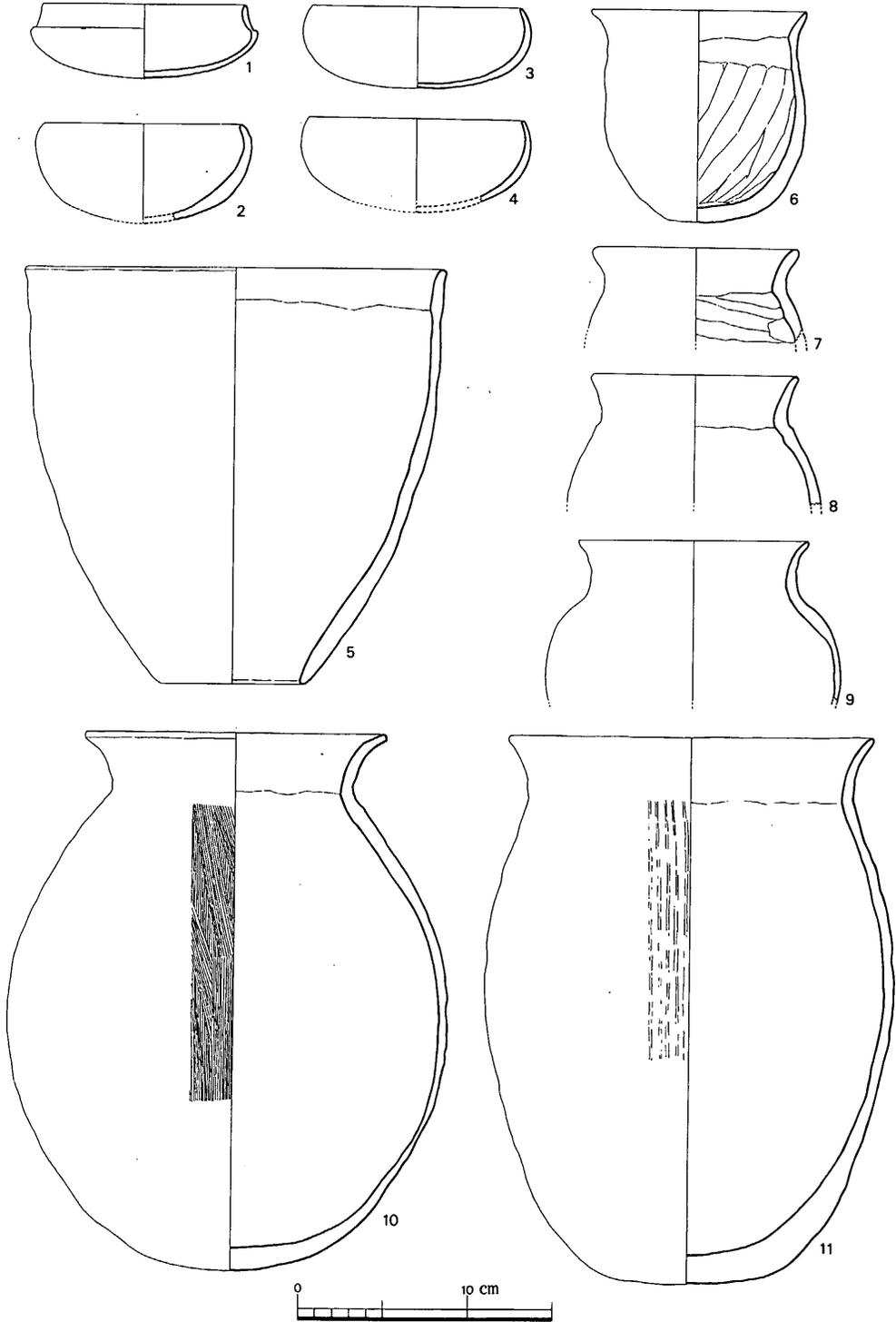
このような祭祀遺物としては、3号から土製丸玉、13号から滑石製勾玉、28号から滑石製管玉と白玉が発見されている。さらに北区では土製模造鏡も出土していて、おそらく10類土器にともなうものであろう。そのほか小形手づくね土器が多くの住居跡すなわち5・7・9・25・30号から出土したがとくに5号と7号からはかまど付近で発見された。その他の遺物としては9号住居跡からは鉄刀子1本、鉄鎌2本が出土し、12号住居跡からは組み合わせあった土師器杯の中に丹の塊を収納しているのが発見された。

以上、10類土器を出す住居跡は全部で21軒もある。重複するものもあり、すべてが同時存在ではないが、しかしこの時期にこの場所に集落が栄えていたことは間違いないであろう。ところがこれに後続する遺構がほとんどみられないのはどういうわけであろうか。

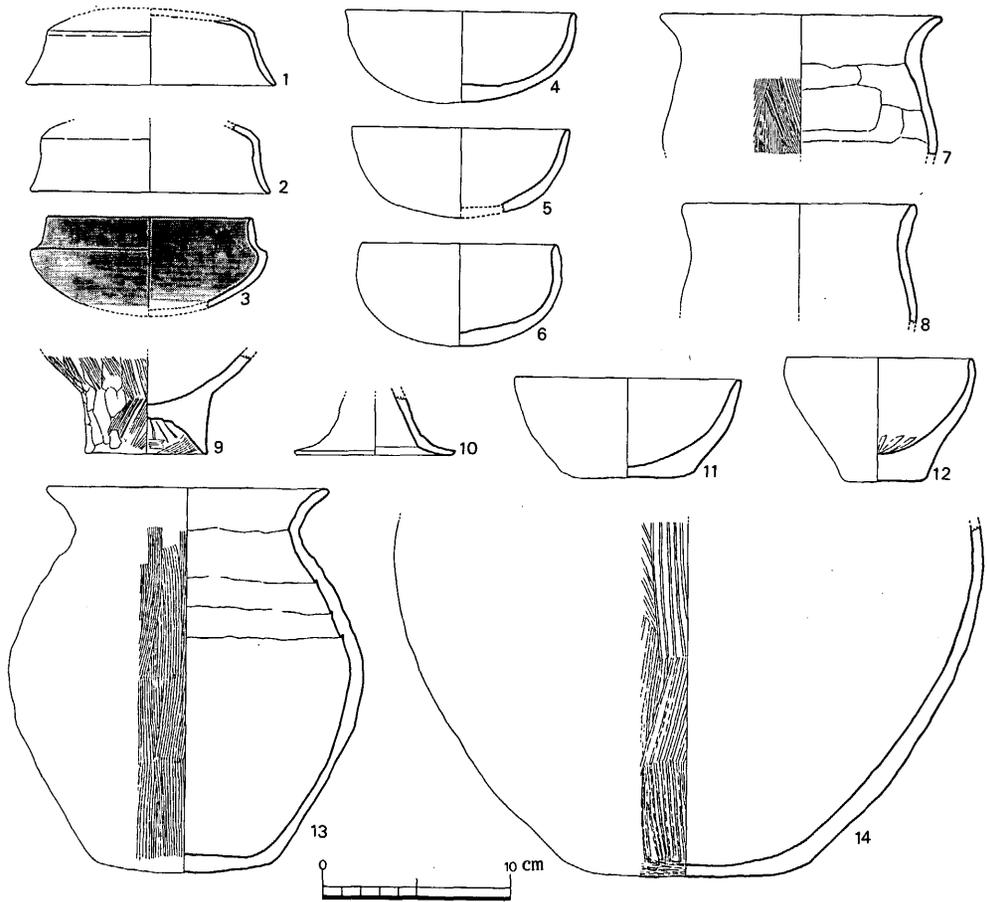


第28图 20号住居跡

なお、41号住居跡の炭化材を、学習院大学理学部木越研究室で、年代測定していただいた結果は次の通りである。 G A K-3127 B. P. 1210±110



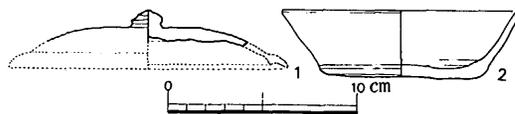
第29図 10類土器(2) 20号住居跡出土 (1/4)



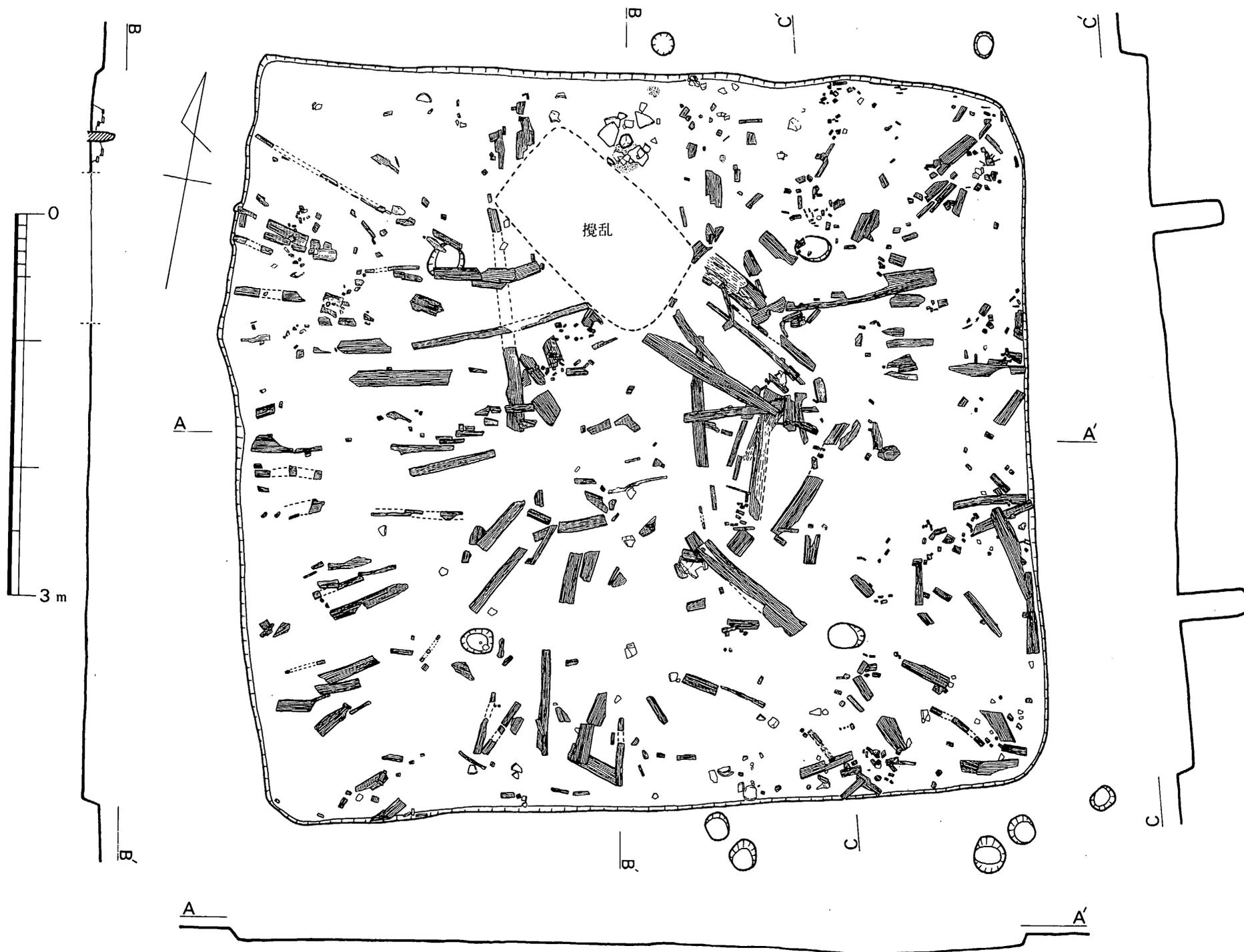
第30図 10類土器 (3) 41号住居跡出土 (1/4)

(12) 古墳時代後期 (その3) 11類土器 (第31図)

38号住居跡は、ただ平坦面に土器片が散在しているだけで、住居跡の形をそなえていない。しかし、当遺跡での最も新しい土器を出土している。須恵器は宝株つまみのある蓋で、土師器はへら切り底の杯である。この類の土器は遺跡の他の部分からは出土していない。7世紀のものと思われる。



第31図 11類土器 32号住居跡出土 (1-須恵) (森田測) (1/4)



第32図 41号住居跡 (新原、宮原測)

4. 結 語

野黒坂丘陵地における調査結果については既に述べたとおりである。

旧石器時代の包含層は薄い、丘陵地の南北にわたり、ナイフ形石器・台形石器の共伴は立証できない。しかしながら相互に接近した時期に位置するものと考えられる。三稜型尖頭器は製作技法から見ても、ナイフ型石器と共伴関係にあるものと思われる。

旧石器時代末期以降、縄文晩期までの野黒坂は見捨てられた丘陵であったらしい。しかし縄文期の生活も人口の少ない稀薄なものであったろう。

この丘陵が集落として開花するのは次の弥生式時代をまたなければならなかった。

弥生期になると、丘陵周囲の谷間の低湿地は、自然湧水による灌漑により、水田として、人々の生活を支える生産基盤となり、古墳時代に引継がれて行った。しかしながら、古墳時代中期の住居跡も遺物も見られないことは発掘区域の関係もあるが、やはり集落の存在そのものも疑われる。ところが、6世紀になると急速に集落は拡大して絶頂期に入り、間もなくかき消す様に集落の姿を消すのはいかなる訳であろうか。全村あげての移住なのか、疾病等による全滅なのか、また他の理由によるものか現在は不明である。筑紫君磐井の乱、白村江の敗退後の大宰府経営の着手等、この野黒坂集落の終末期に近い頃に社会的大変動があったこともその理由に関係するかも知れない。

南バイパス建設によりこの地域は経済的により発展することが約束されるのであるが、その陰に過去の文化の累積があったことを記憶すべきである。

第一表 野黒坂遺跡住居跡一覽

No.	形態	時期	土器形式	大きさ (m)	深さ (cm)	溝	柱穴 (個)	柱穴間距離 (m)	炬の場所	かまど		焼土	作業台石
										場所	支脚		
1	方形	古墳時代	10類	(3.67×?)	46	有	2	1.60×		なし		なし	なし
2	方形	古墳時代	10類	$3.86 \times 1.87 + (3.85)$	48	なし	4	1.68×1.60		なし		西壁	なし
3	方形	古墳時代	10類	4.14×2.55+	36	なし	2	2.40×		南壁	石	なし	なし
4	方形	古墳時代	10類	不明	7	なし	不明						
5	方形	古墳時代	10類	$3.84 \times 2.70 + (4.27)$	30	有	4	1.64×1.96		西壁	石	なし	有
6	不明	古墳時代	10類	不明	不明					有	なし		なし
7	方形	古墳時代	10類	4.42×2.75+	42	なし	不明	不明		西壁	石	なし	なし
8	方形	古墳時代	10類	4.20×	15	なし							
9	方形	古墳時代	10類	3.98×4.05	61	なし	4	1.65×1.60		西壁	なし	東	なし
10	隅丸長方形	弥生中期	5類	5.70×3.30	70	なし	なし		中央			なし	なし
11	円形	弥生中期		径 6.90	50	なし	3		中央				
12	方形	古墳時代	10類	4.34×4.00+	13	なし	不明			北東隅	なし	なし	なし
13	方形	古墳時代	10類	3.67×3.50	40	なし	4	1.50×1.68		西壁	なし	東壁	有
14	方形	古墳時代	10類	6.68×6.55	60	有	4	3.94×3.83		北西壁	なし	なし	なし
15	方形	古墳時代	10類	2.88×2.55	48	なし	4	3.20×2.85		北東隅	石、壺	なし	有
16	隅丸長方形	弥生前期	3類	2.42×2.90+	38	なし	5		なし				
17	円形	弥生中期	4類	径 7.64	50	なし	12		中央			なし	有
18	隅丸方形	弥生中期	4類	3.40×	17	なし			不明				なし
19	隅丸方形	弥生中期	4類	4.00×	23	なし	2	3.10×	不明				なし
20	方形	古墳時代	10類	4.30×4.12	40	有	4	2.05×1.85		北東壁	石	なし	有
21	方形	古墳時代	10類	不明	不明	不明	不明			西壁	なし	不明	なし
22	隅丸方形	不明		不明	不明	不明	不明		不明	不明		不明	不明
23	隅丸長方形	弥生前期	3類	$3.40 \times 4.00 + (4.60)$	10	なし	不明		中央			なし	なし
24	円形	弥生中期	4類	径 7.40	50	なし	12		中央			なし	有
25	方形	古墳時代	10類	5.23×4.44	37	有	4	3.30×2.52		西壁	なし	東壁	なし
26	隅丸長方形	弥生前期	3類	$3.10 \times 2.40 + (4.00)$	50	なし	不明		中央			なし	なし
27	隅丸長方形	弥生前期	3類	4.40×3.60+	21	なし	不明		不明			なし	なし
28	方形	古墳時代	10類	5.72×5.19	53	有	4	3.65×3.05		南西壁	石	北東壁	有
29	隅丸長方形	弥生前期	3類	3.40×2.10	40	なし	なし		なし			なし	なし
30	方形	古墳時代	10類	5.17×5.25	55	有	4	2.55×2.85		南西壁?		不明	なし
31	隅丸長方形	弥生前期	3類	$2.10 \times 3.20 + (3.90)$	53	なし	16		中央			なし	なし
32	不明	古墳後期	11類	不明	不明	不明	不明			有		不明	なし
33	方形	弥生前期	3類	2.65×2.00+	48	なし			不明			なし	有
34	方形	古墳後期	10類	4.50×4.18	35			2.72×2.38		北西壁	土製	北東壁	なし
35	方形	弥生後期?		4.00×4.97	22	なし	6		中央			なし	なし
36	方形	弥生後期	6類	3.43×3.72	31	なし	5		中央			なし	なし
37	円形	弥生中期	4類	径 8.40	35	なし	20		中央			なし	なし
38	円形	弥生中期	4類	径 5.97	15	なし	6		中央			なし	なし
39	方形	弥生後期	7類	3.94×4.88	47	なし	4		中央			なし	有
40	方形	古墳前期	8類	3.69×3.34	10	なし	5	1.62×2.70	南寄り				なし
41	方形	古墳後期	10類	5.52×6.20	8	なし	4	3.02×2.92		北壁	石	なし	なし
42	方形	古墳後期	10類	$4.54 \times 0.90 + (5.40)$	5.5	なし	4	2.04×2.66	不明			なし	なし
43	方形	古墳後期	9類	$6.49 \times 5.40 + (7.10)$	30	なし	4	3.80×3.64		北東壁	なし	なし	なし
44	方形	古墳後期	9類	$5.26 \times 3.60 + (4.60)$	15	なし	4	2.54×2.22	不明	不明		なし	なし
45	方形	弥生前期	2類	6.49×7.10	30	なし	不明		中央			なし	なし
46	方形	弥生前期	2類	3.90×3.50	20	なし	23		中央			なし	なし

註 「焼土」とは炬、かまど以外に、壁際にあるものを指す。住居跡の大きさは床面で測った。()は推定

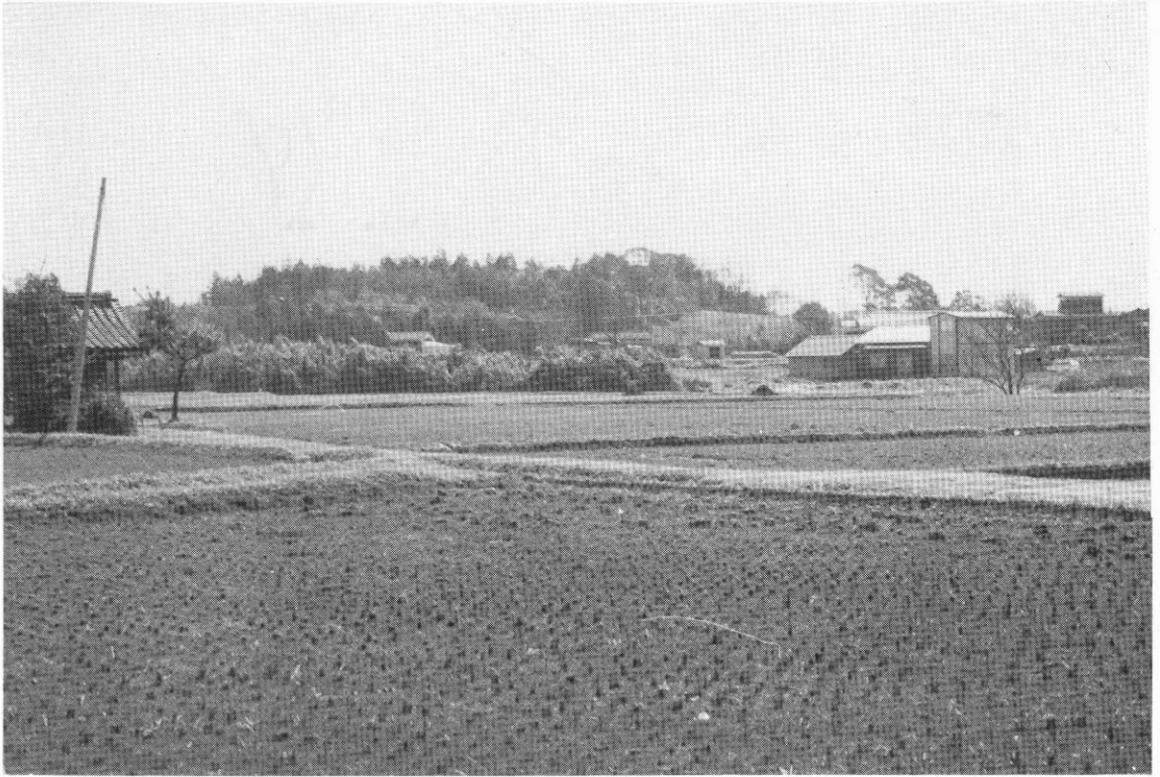
出土遺物		切りあい	備考	発掘時番号
土器	その他			
スエ・杯 土師・杯	土師・杯	2号を切る		P - 1
スエ・杯 土師・杯	高杯	1号に切られる		P - 2
スエ・杯 その他	土師・杯 土製丸玉	4・5号に切られる		P - 5
スエ・杯	土師・甕	3・5号を切る		P - 6
スエ・甕 土師・杯	杯 甕	手づくね土器 3号を切る、4号に切られる、Pit-11に切られる		P - 7 P - 11
スエ・杯 土師・杯	甕	手づくね土器 紡錘車		P - 4
スエ・杯				P - 60
スエ・杯 土師・杯	甕	手づくね土器 鉄鎌2 鉄刀子1		P - 59
甕 器台	高杯	11号を切る 12号に切られる		P - 39
なし		10・12・13号に切られる		P - 32
土師・杯		杯内に丹を取納		P - 29
土師・杯	碗形土器	滑石勾玉		P - 28
スエ・杯 土師・甕	高杯	滑石平玉1		P - 30
スエ・杯 土師・甕	碗形土器		竪穴外に柱穴	P - 31
壺 甕				P - 41
甕 浅鉢		鉄刀子 紡錘車 磨製石鎌 打製石鎌		P - 12
甕		19号に切られる		WPit-20
甕		18号を切る		WPit-22
土師・杯 甕	碗形土器			P - 33
スエ・甕 土師・杯	高杯	不明		P - 34
土師 弥生式土器				P - 49
弥生土器片		Pit-17・18に切られる	埋めもどしあり	P - 40
甕		25号に切られる		P - 50
スエ・杯 土師・杯	高杯	手づくね土器2 鉄鎌		P - 45
弥生前期土器				P - 37
壺・甕				P - 35
スエ・杯 土師・杯	高杯	管玉1 滑石製白玉3	埋土内より9類スエ器出土	P - 47
弥生土器片		砥石		P - 52
スエ・杯 土師・杯	高杯 高杯	手づくね土器3	埋土内より9類スエ器出土	P - 55
弥生土器片				P - 61
スエ・杯 土師・杯	甕			P - 36
甕				P - 44
スエ・杯 土師・杯	甕 把手付き甕		Pit-23に切られる	P - 43
土器片少量		36号を切る	炭化材：おら・かや 南東部粘土塊 南東部にベット有り	P - 20
甕 高杯		硬玉製棗玉		P - 19
弥生土器片少量			35号に切られる 37号を切る	P - 18
弥生土器片少量			36号に切られる Pit-33を切る	P - 17
高杯 甕		ひしゃく	Pit-26・27・28を切る	P - 16
壺			Pit-30を切る	P - 15
土師・杯 甕		滑石製平玉 土製箱		P - 13
土師・甕			火災にあっていない 炭化木材 火災にあっていない 炭化木材	P - 14
スエ・杯 土師・杯	高杯 碗形土器 鉢 甕		44号・45号を切る	P - 22
土師・甕			43号に切られる	P - 26
甕 壺			43号に切られる	P - 23
甕 壺		磨製石斧		P - 25

第二表 野黒坂遺跡竪穴(Pit)一覽表

Pit番号	性格	時期	土器形式	口辺部		底面		深さ(cm)	断面の形	埋めどし
				形	大きさ(m)	形	大きさ(m)			
Pit 1	不明	不明	不明	隅丸長方形	2.04×1.36	隅丸長方形	1.92×1.28	23		
Pit 2	掘り込み	弥生中期	4類	隅丸長方形	2.68×1.90	隅丸長方形	1.92×1.54	25		
Pit 3	掘り込み	弥生中期	4類	長方形	1.60×1.45	長方形	1.08×0.80	35		
Pit 4	不明	古墳後期	10類	楕円形	2.25×1.68	楕円形	1.96×1.56	60		
Pit 5	不明	弥生中期	4類	溝状	2.35×0.85	溝状	2.30×0.55	44		
Pit 6	不明	弥生中期	4類	溝状	3.80×0.70	溝状				
Pit 7	不明	弥生中期	4類	溝状	4.10×0.70	溝状				
Pit 8	土器溜り	古墳後期	10類	不定形	2.80×2.20	不定形		50		
Pit 9	貯蔵穴	弥生前期	3類	方形	0.54×0.68	方形	1.10×0.89	102	袋状	なし
Pit 10	不明	弥生中期	5類	不定形	2.20×1.20	不定形	1.85×1.00	20		
Pit 11	不明	弥生中期	4類	隅丸長方形	1.32×0.88	隅丸長方形	1.04×0.60	38		
Pit 12	不明	弥生中期	4類	楕円形	1.20×0.70	円形	0.74×0.64	92		
Pit 13	不明	弥生中期	4類	楕円形	1.26×0.96	楕円形	1.08×0.60	52		
Pit 14	不明	弥生中期	4類	楕円形	1.50×1.14	円形	1.12×0.98	23		
Pit 15	不明	弥生中期	4類	楕円形	2.24×1.50	楕円形	1.56×0.75	77		
Pit 16	不明	弥生中期	4類	隅丸長方形	1.76×1.10	隅丸長方形	1.38×0.75	75		
Pit 17	貯蔵穴	弥生前期	3類	円形	0.71×0.67	多辺形	2.12×1.80	230	袋状	なし
Pit 18	貯蔵穴	弥生前期	3類	方形	0.85×0.75	長方形	2.00×1.50	195	袋状	なし
Pit 19	土器溜り	古墳後期	10類	不定形	不明			不明		
Pit 20	貯蔵穴	弥生前期	3類	不定形	1.74×1.55	多辺形	2.18×2.11	127	袋状	あり
Pit 21	貯蔵穴	弥生前期	3類	円形	1.19×1.20	多辺形	1.86×1.89	176	袋状	あり
Pit 22	貯蔵穴	弥生前期	3類	不定形	1.39×1.21	隅丸胴張り方形	1.70×1.64	105	袋状	あり
Pit 23	貯蔵穴	弥生前期	3類	不定形	1.42×1.30	多辺形	1.80×1.63	153	袋状	あり
Pit 24	不明	弥生中期	4類	楕円形	1.28×0.88	楕円形	0.84×0.52	58		
Pit 25	貯蔵穴	弥生前期	2類	円形	2.98×2.65	多辺形	2.88×2.35	180	方形	あり
Pit 26	貯蔵穴	弥生前期	2類	円形	0.99×0.82	方形	1.84×1.62	165	袋状	なし
Pit 27	不明	弥生前期	2類	不定形	1.03×0.87	不定形	0.78×0.86	95		
Pit 28	貯蔵穴	弥生前期	(2類)	不定形	1.63×1.13	隅丸方形	1.46×1.54	85	袋状	あり
Pit 29	貯蔵穴	弥生前期	2類	方形	0.64×0.48	胴張り方形	1.75×1.55	195	袋状	あり
Pit 30	貯蔵穴	弥生前期	(2類)	不定形	1.54×1.51	長方形	1.94×1.61	64	袋状	あり
Pit 31	貯蔵穴	弥生前期	2類	不定形	1.36×1.65	方形	2.17×2.22	183	袋状	あり
Pit 32	貯蔵穴	弥生前期	2類	円形	0.77×0.76	隅丸方形	1.68×1.46	75	袋状	なし
Pit 33	貯蔵穴	弥生前期	2類	不定形	2.06×1.77	多辺形	2.30×2.31	150	袋状	なし
Pit 34	貯蔵穴	弥生前期	2類	不定形	1.76×1.75	方形	1.93×1.79	145	袋状	なし
Pit 35	貯蔵穴	弥生前期	(2類)	不定形	1.55×1.74	台形	1.47×1.31	105	袋状	なし
Pit 36	貯蔵穴	弥生前期	(2類)	不定形	0.80×1.40	長方形	1.97×1.46	148	袋状	なし
Pit 37	不明	不明	不明	長方形		長方形	1.50×1.10		方形	
Pit 38	貯蔵穴	弥生前期	2類	長方形	2.13×1.47	長方形	2.16×1.24	158	方形	なし
Pit 39	不明	不明	不明	長方形	1.08×0.74	長方形	1.11×0.78	92	方形	なし
Pit 40	貯蔵穴	弥生前期	2類	不定形	1.27×2.15	多辺形	1.61×2.12	170	袋状	なし
Pit 41	貯蔵穴	弥生前期	2類	楕円形	1.94×0.91	不定形	1.99×1.82	160	袋状	あり
Pit 42	貯蔵穴	弥生前期	2類	長方形	1.43×1.22	長方形	1.55×1.25	75	袋状	なし
Pit 43	貯蔵穴	弥生前期	2類	長方形	1.11×0.87	長方形	1.31×1.02	96	袋状	あり
Pit 44	貯蔵穴	弥生前期	(2類)	方形	1.70×1.86	方形	1.57×1.91	82	袋状	あり
Pit 45	貯蔵穴	弥生前期	2類	不定形	1.25×1.75	隅丸方形	1.27×1.64	134	袋状	なし
Pit 46	貯蔵穴	弥生前期	2類	不定形	1.19×1.09	多辺形	1.70×1.50	180	袋状	なし
Pit 47	貯蔵穴	弥生前期	2類	長方形	2.03×1.95	長方形	1.85×1.67	208	袋状	あり
Pit 48	貯蔵穴	弥生前期	(2類)	不定形	1.00×1.20	隅丸長方形	0.90×1.69	205	袋状	なし
Pit 49	貯蔵穴	弥生前期	2類	不定形	1.05×1.40	方形	1.43×1.61	235	袋状	なし
Pit 50	貯蔵穴	弥生前期	(2類)	長方形	1.53×1.11	長方形	1.29×0.78	44	袋状	なし
Pit 51	貯蔵穴	弥生前期	(2類)	不定形	1.61×1.49	隅丸長方形	1.82×2.32	253	袋状	あり
Pit 52	貯蔵穴	弥生前期	(2類)	不定形	1.24×1.40	隅丸方形	1.49×1.50	196	袋状	あり

出土遺物		切りあい	備考	発掘時番号
土器	その他			
スエ・土器・小片		5号住居跡を切る	井戸状の深い穴がある	P-8
甕	石鏝			P-10
スエ・杯、壺、甕				WPit-15
弥生中期土器片				WPit-14
弥生中期土器片				WPit-13
弥生中期土器片				WPit-16
弥生中期土器片				WPit-17
スエ・杯、土師・杯、高杯				P-58
甕				WPit-18
甕、壺				WPit-10
甕				CPit-1
甕、器台				CPit-2
甕				CPit-3
甕				CPit-4
甕、壺、大甕	磨製石斧・磨製石剣		土器多し	WPit-19
弥生中期土器片	今山製石斧			WPit-21
甕4、壺2、蓋2	丹を入れた壺あり	23号住居跡を切る		WPit-11
甕10、壺3、蓋1	石鏝4、スクレーパー2	23号住居跡を切る	土器多量出土	WPit-4
スエ・杯、土師・杯、高杯				P-48
甕3、壺1		32号住居跡を切る	床面に炭化材あり	WPit-3
弥生前期土器片			床面に炭化材あり	WPit-5
弥生土器細片		Pit-23を切る		P-53
なし		Pit-22に切られる 34号住居跡を切る		WPit-6
甕、壺				WPit-1
小甕1、壺3、彩文壺1	丹の塊あり		張り出しあり	SPit-10
甕、鉢、彩文壺	砥石	39号住居跡に切られる		SPit-17
弥生前期土器片	石鏝	39号住居跡に切られる		SPit-6
弥生前期土器片		39号住居跡に切られる		SPit-23
甕			完全残存	SPit-8
		38・40号住居跡に切られる		SPit-22
甕		40号住居跡に切られる		SPit-11
甕		40号住居跡に切られる		SPit-21
甕4、鉢1		37号住居跡に切られる		SPit-7
甕				SPit-9
				SPit-29
				SPit-30
弥生土器・スエ・土師				SPit-4
甕			床面に柱穴5あり	SPit-2
				SPit-1
弥生前期土器片				SPit-28
甕、壺			張り出しあり	SPit-3
甕、壺	石匕			SPit-18
鉢、蓋、壺				SPit-13
弥生土器片	磨製石斧、磨製石剣			SPit-19
		Pit-46に切られる Pit-47を切る		SPit-25
甕		Pit-45を切る		SPit-12
甕、彩文壺	石鏝2	Pit-45に切られる Pit-48に切られる		SPit-16
		Pit-47を切る Pit-49を切る		SPit-24
	石包丁	Pit-48に切られる		SPit-20
甕	石鏝1			SPit-5
弥生前期土器片		Pit-51を切る		SPit-26
弥生前期土器片		Pit-52に切られる		SPit-27

図 版

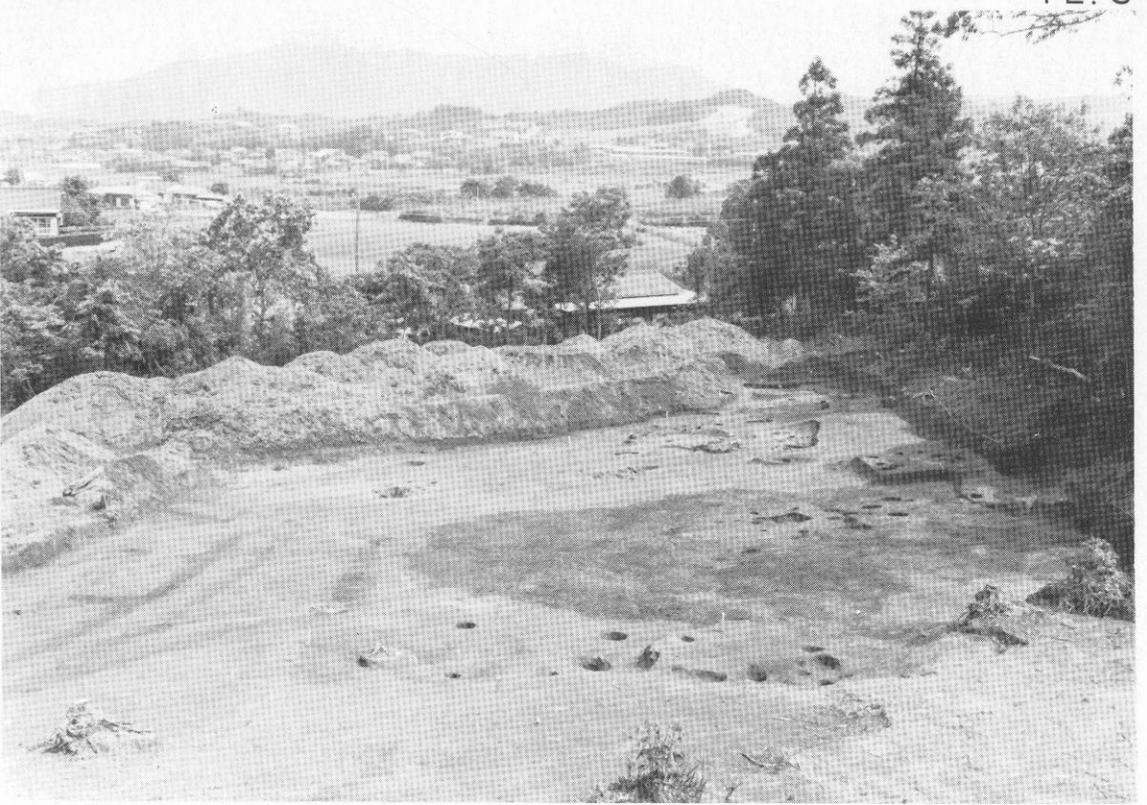


(1) 北から見た野黒坂丘陵



(2) 西から見た野黒坂丘陵





(1) 北区北斜面全景（大曲遺跡・池田遺跡を望む）



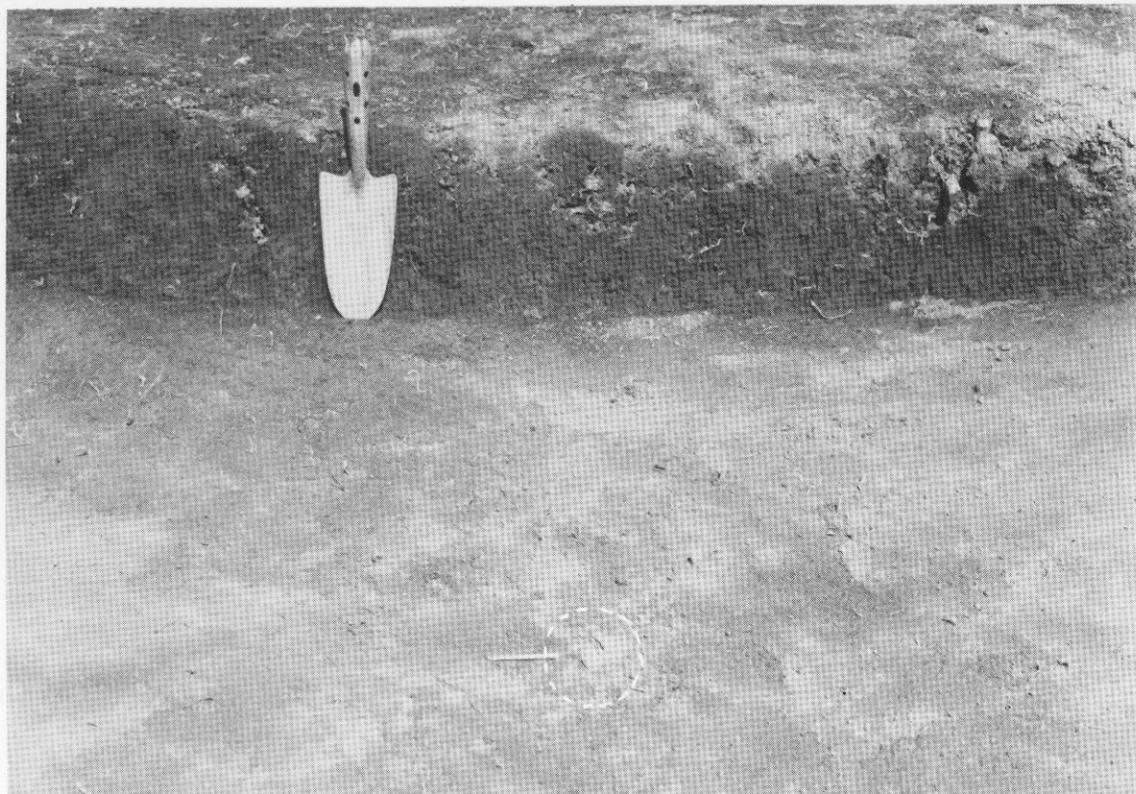
(2) 北区北斜面遺構群



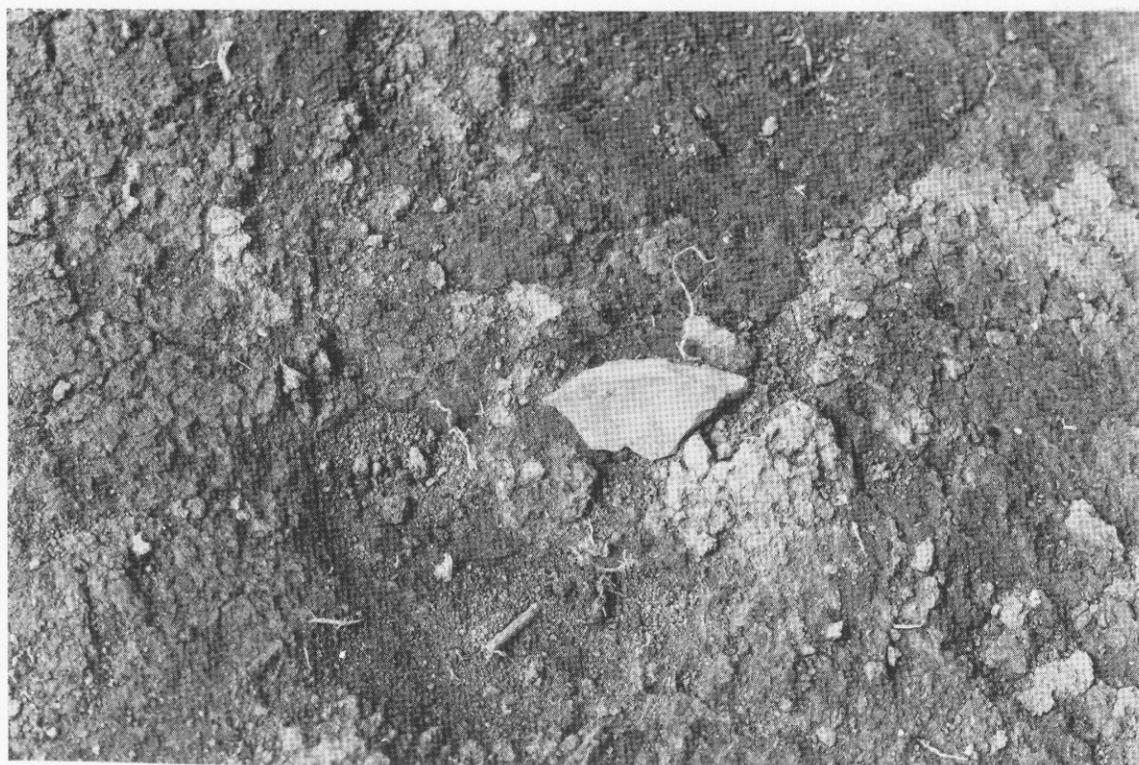
(1) 北区西南斜面遺構群



(2) 南区東側住居跡群



(1) 南区第3層ナイフ型石器出土状況



(2) 同上



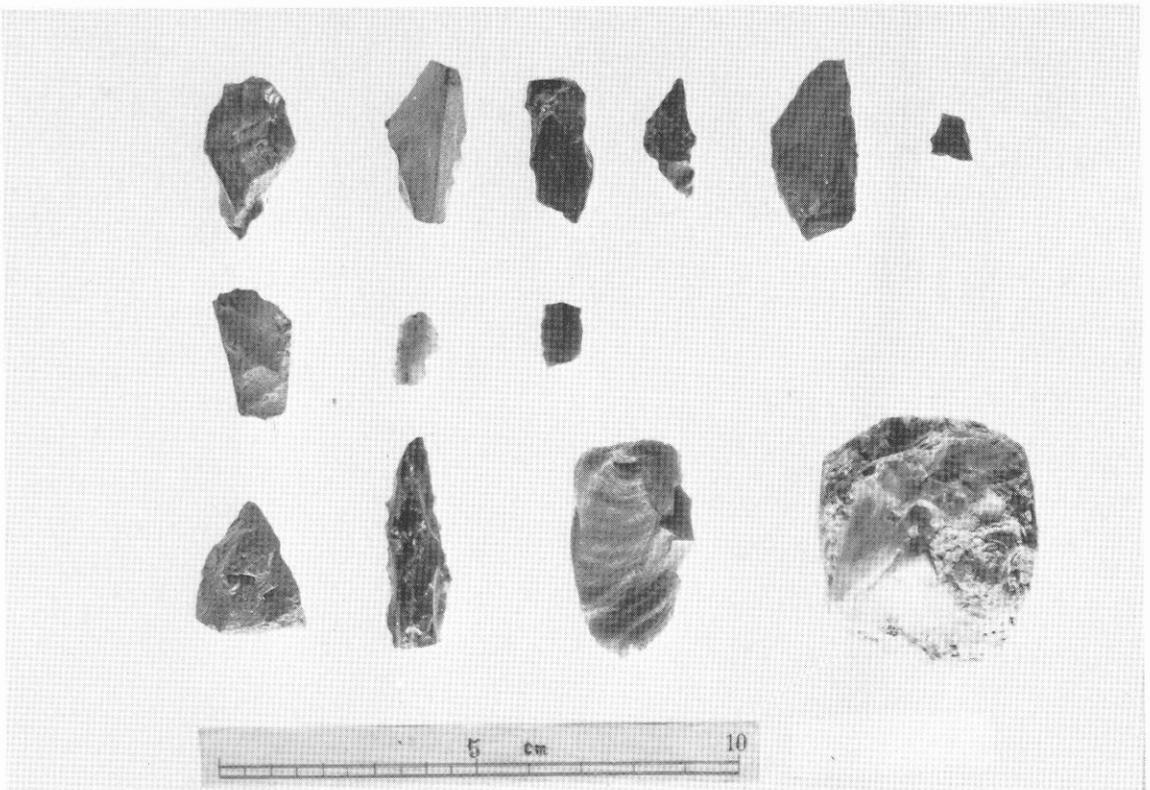
(1) 南区トレンチ全景



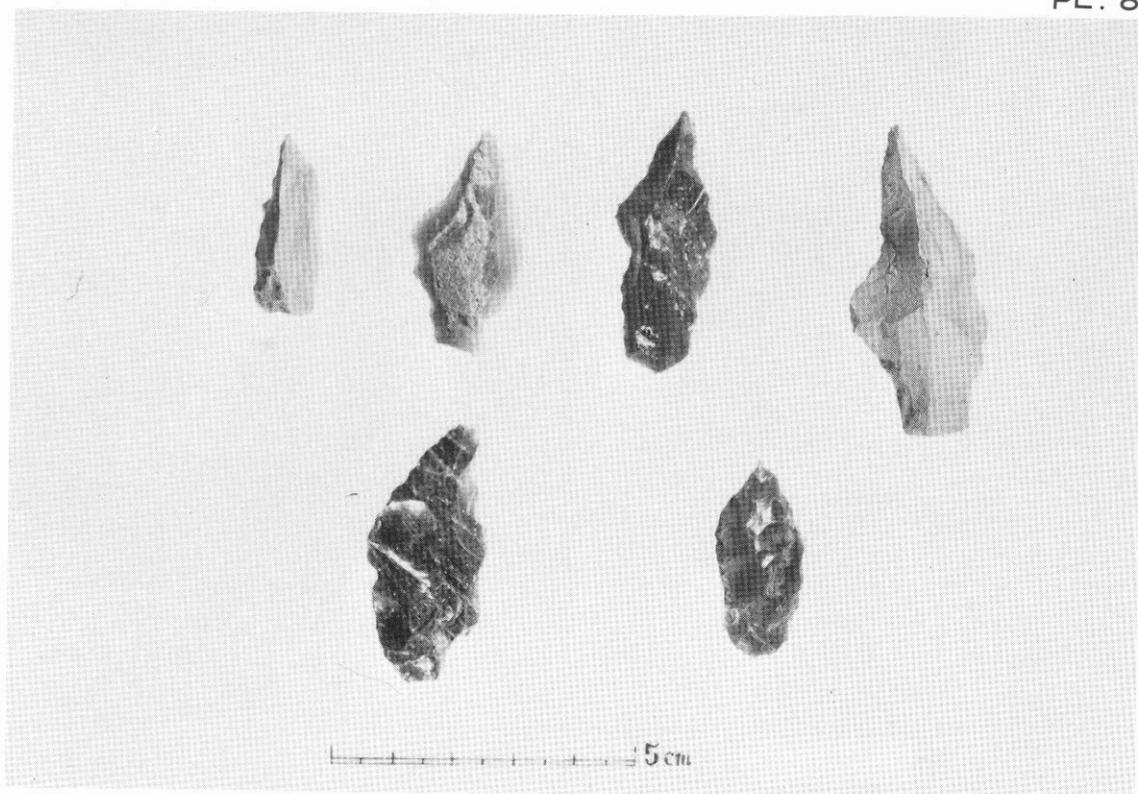
(2) トレンチ内土層



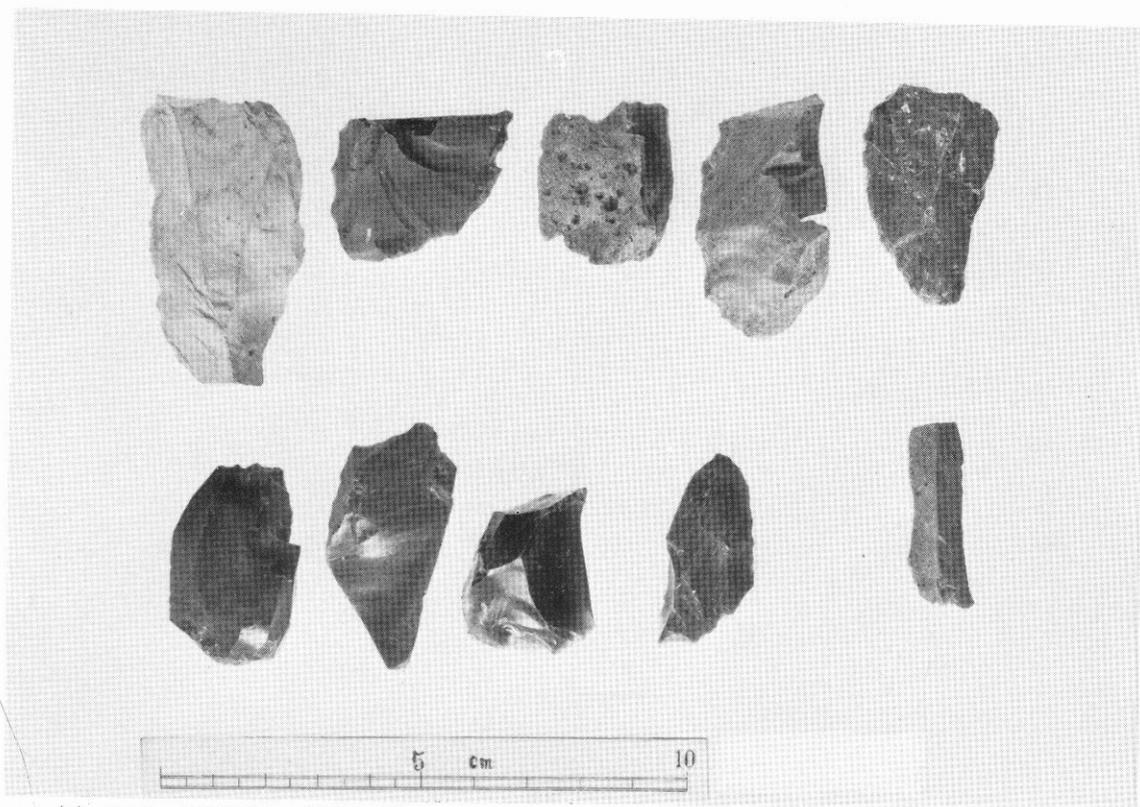
(1) 南区出土ナイフ型石器・台形様石器



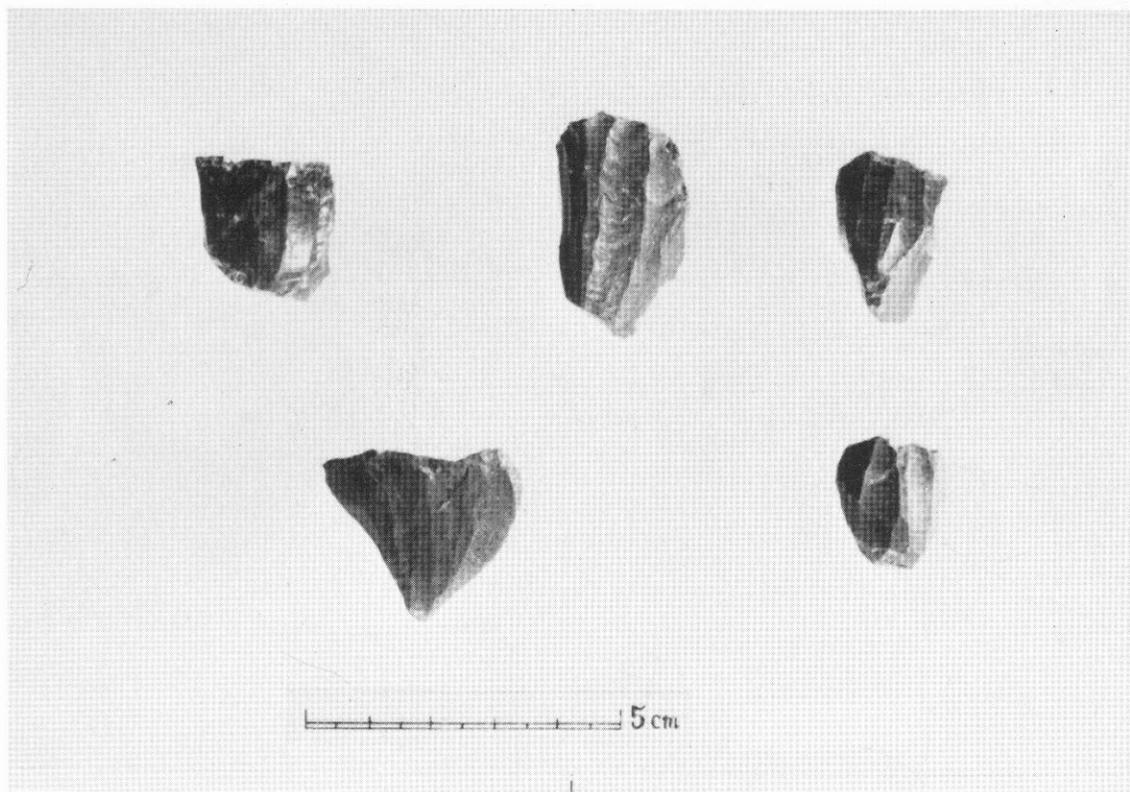
(2) 北区出土ナイフ型石器・台形様石器・尖頭器・石核



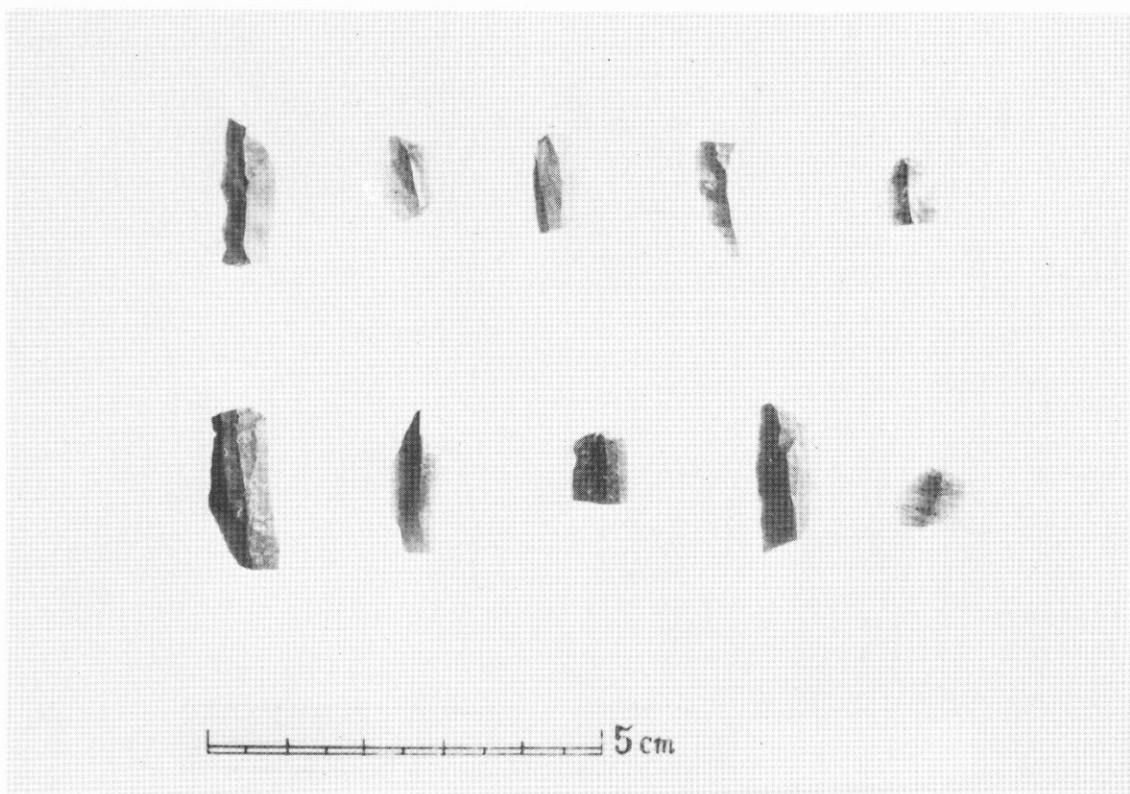
(1) 尖頭器



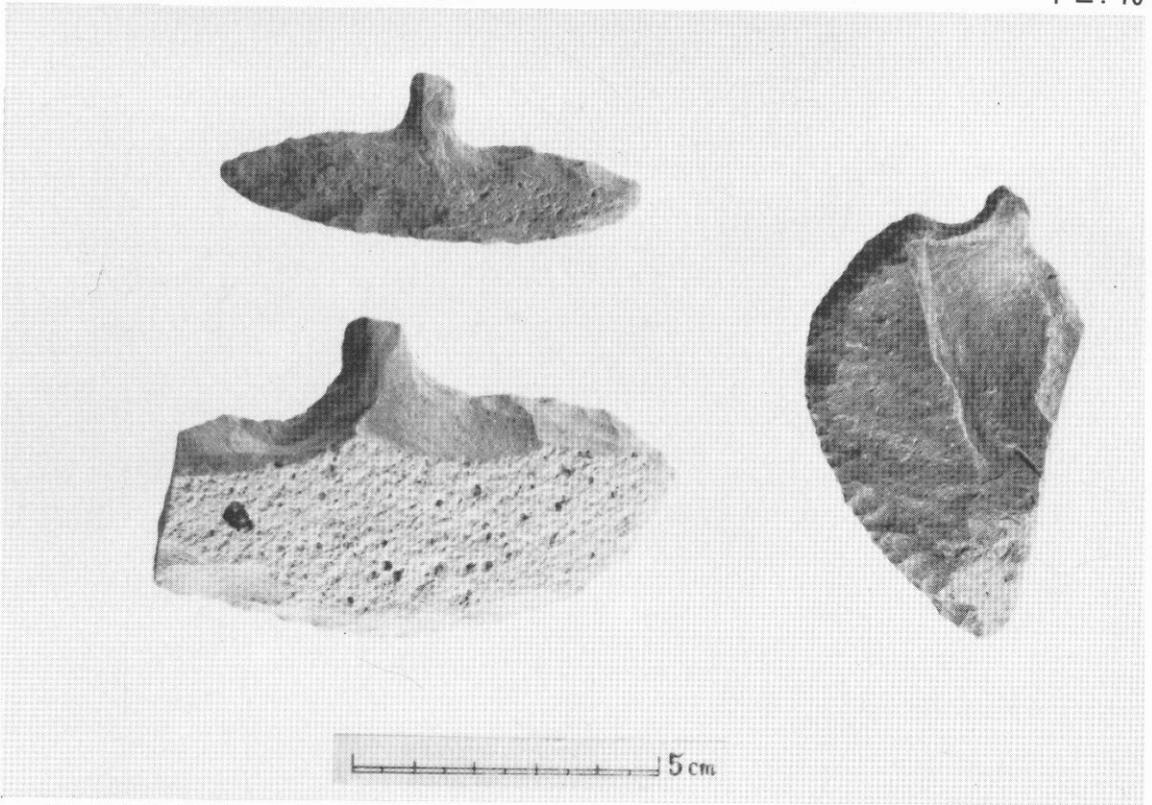
(2) 石刃・使用剝片・彫刻刀様石器



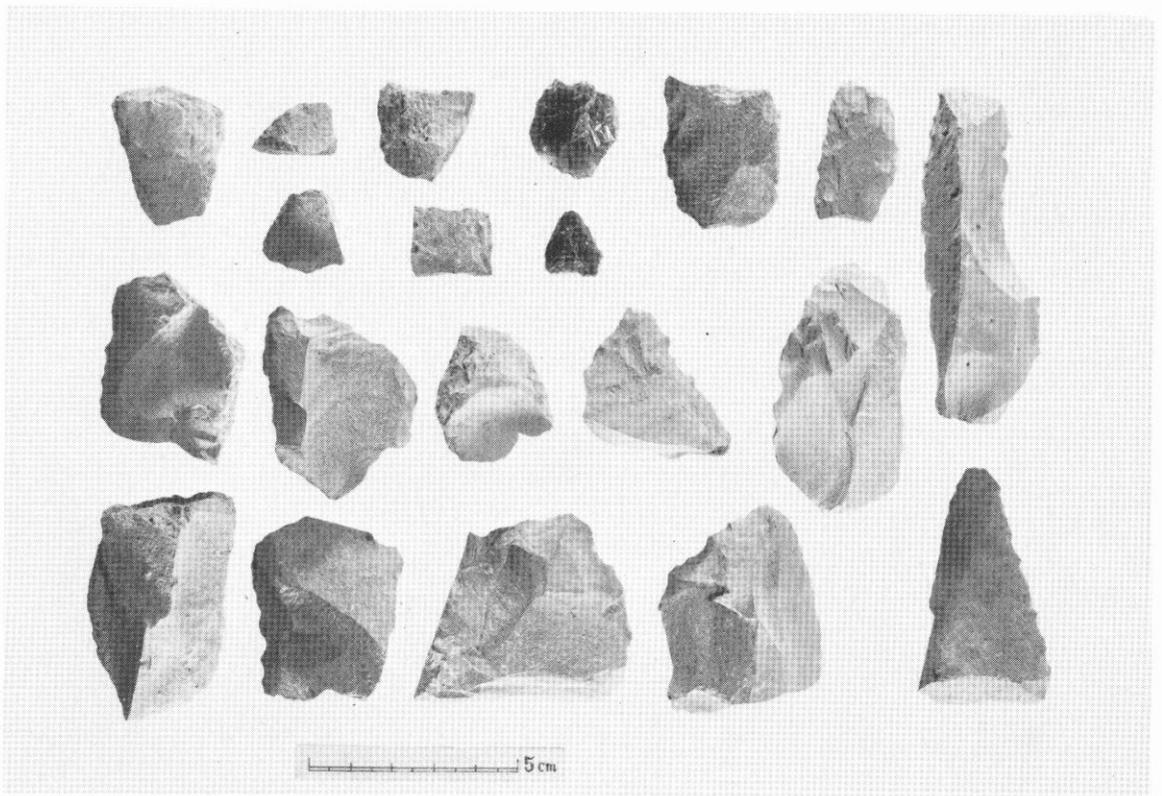
(1) 細石核



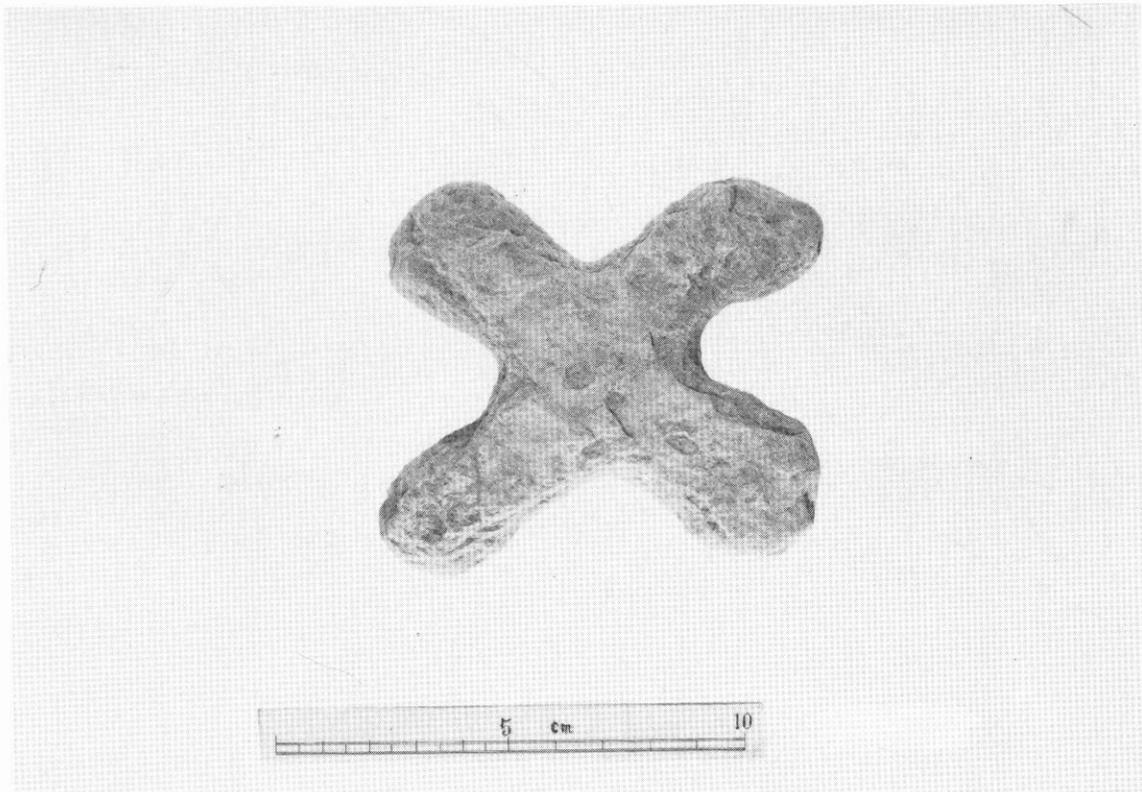
(2) 細石刃



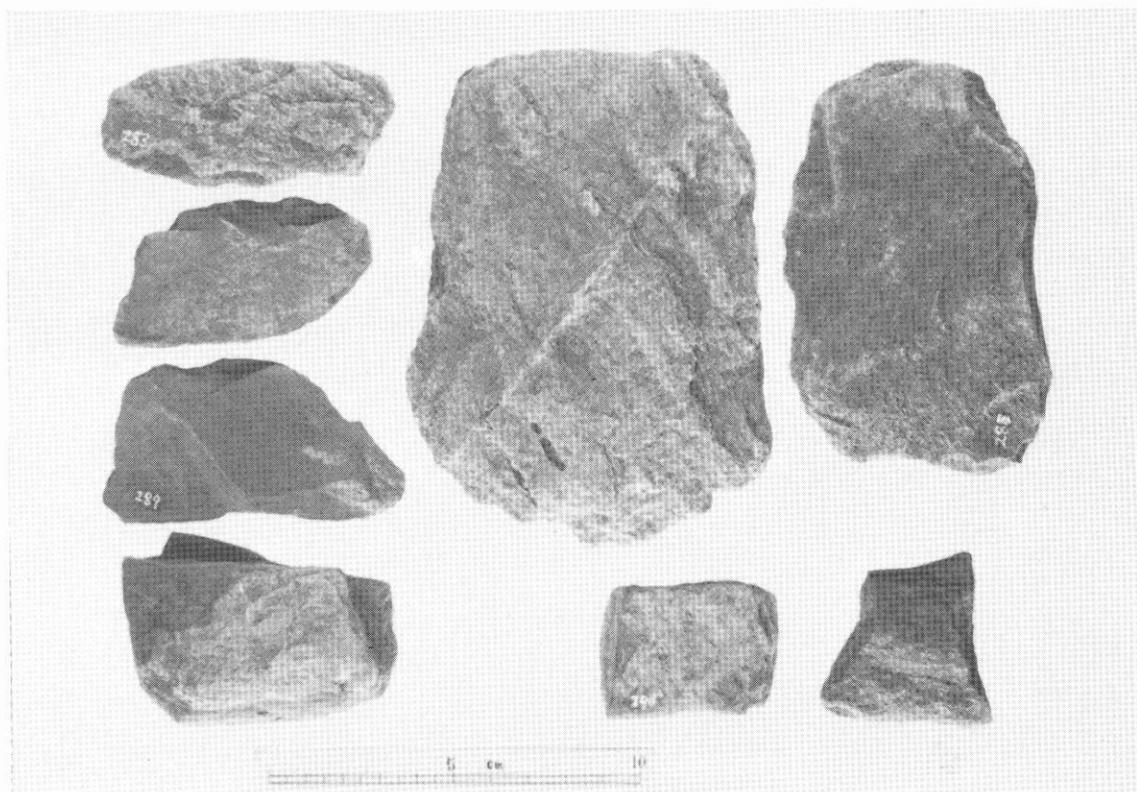
(1) 南区出土石匕



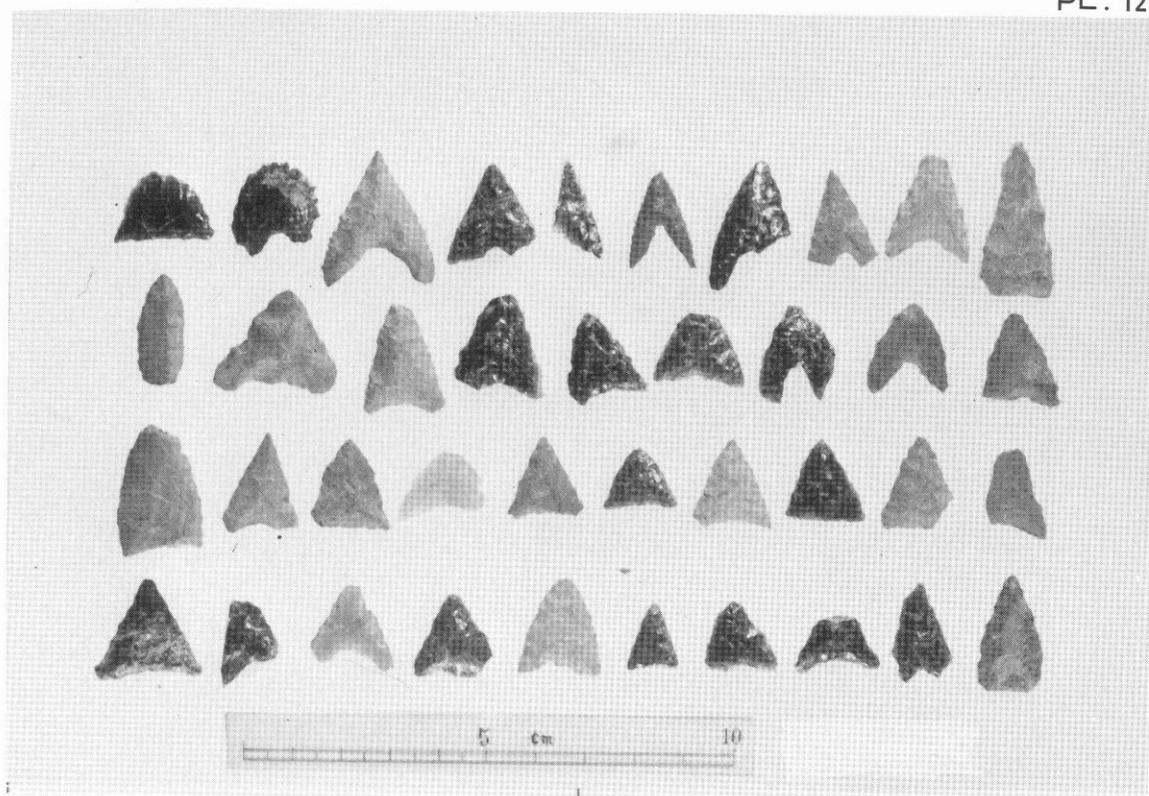
(2) 北区出土搔器 (スクレーパー)



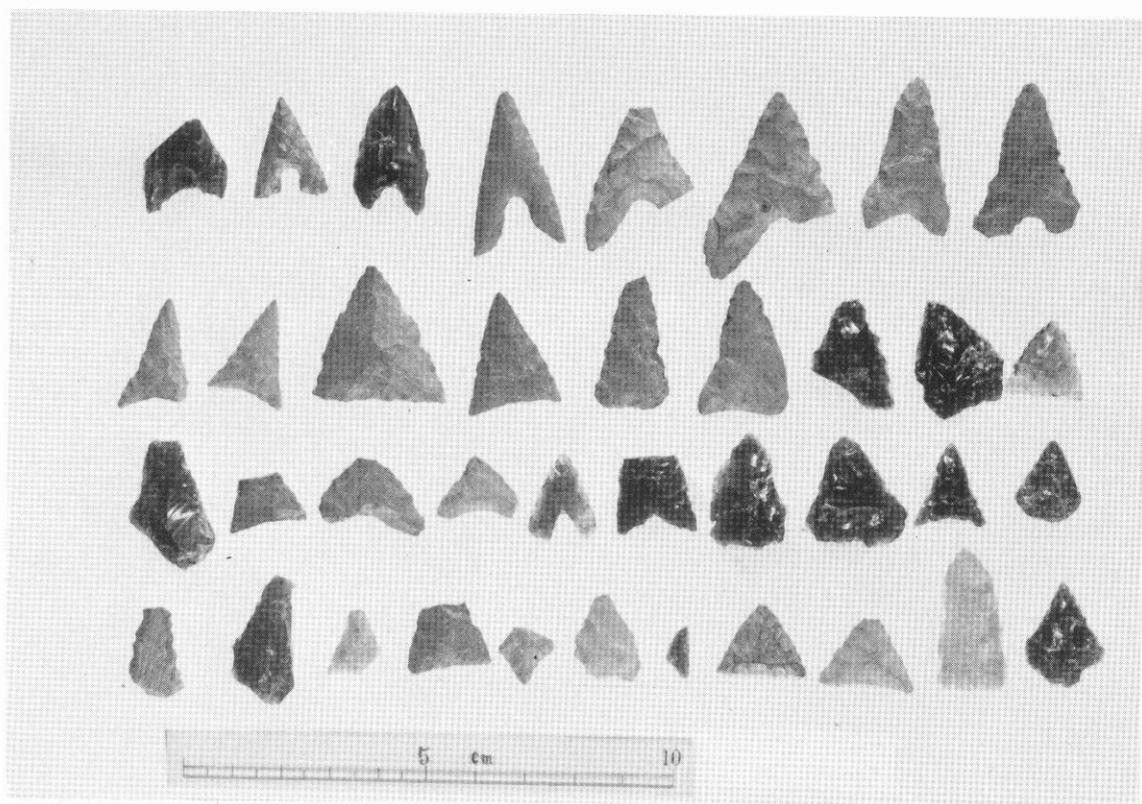
(1) 南区出土十字形石器



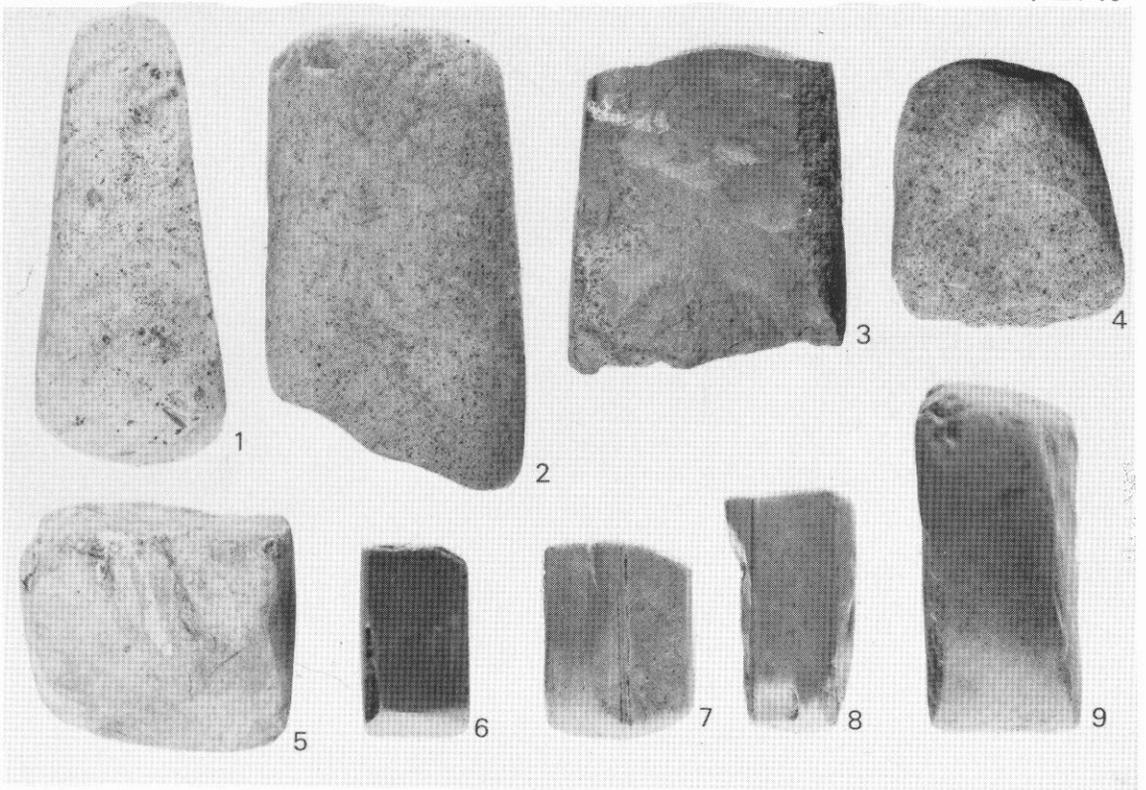
(2) 打製石斧および打製石器



(1) 北区出土石鏃



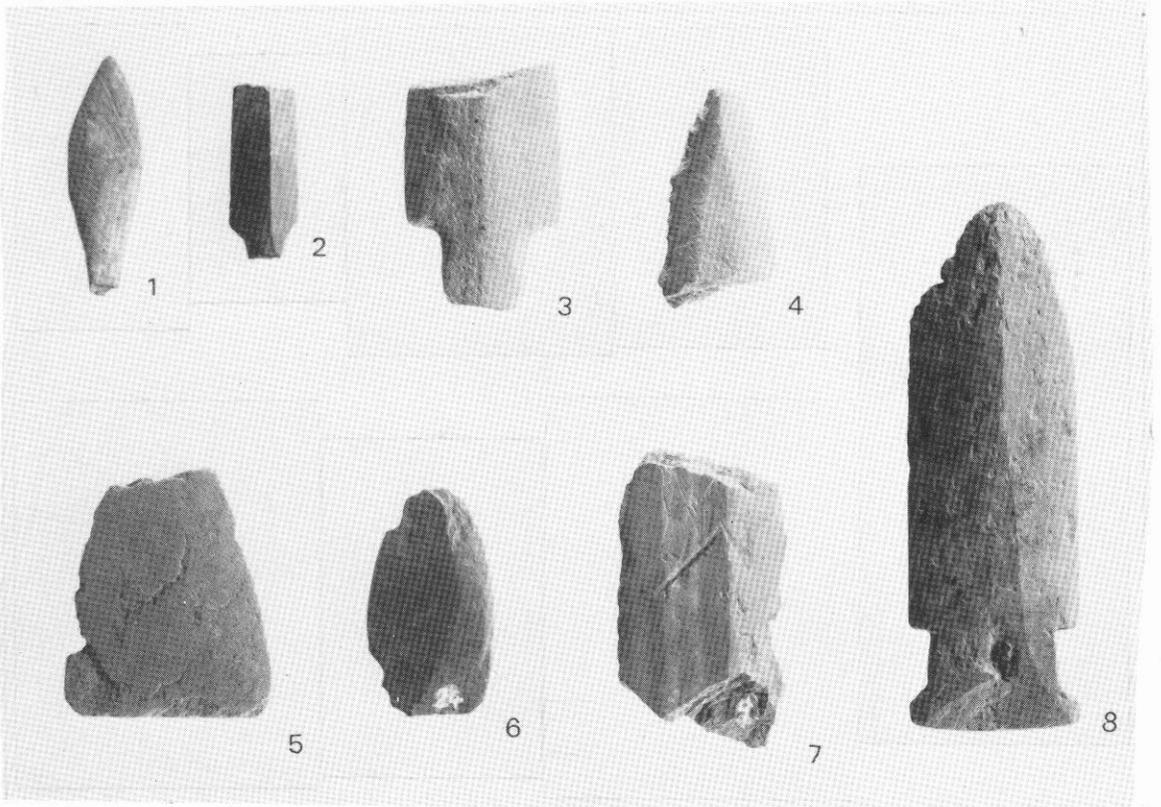
(2) 南区出土石鏃



(1) 磨製石斧と磨製片刃石斧

3-Pit15
7-Pit46

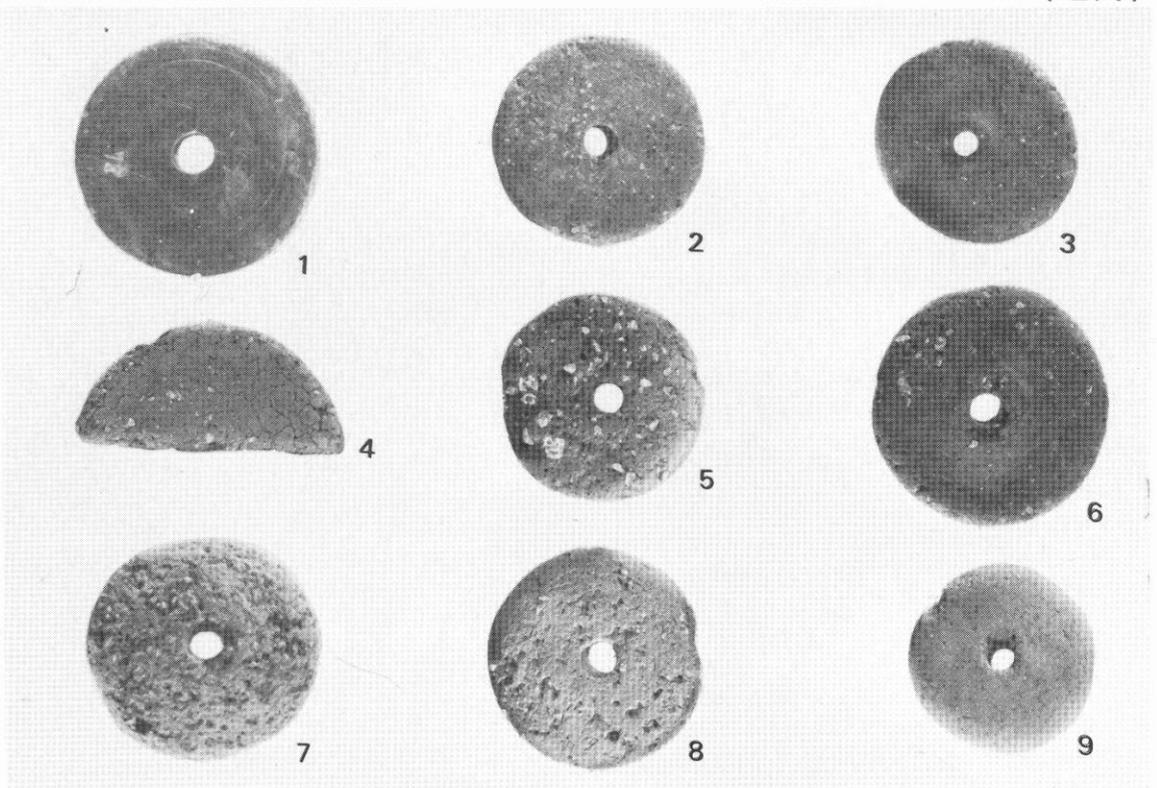
5-46号
8-24号



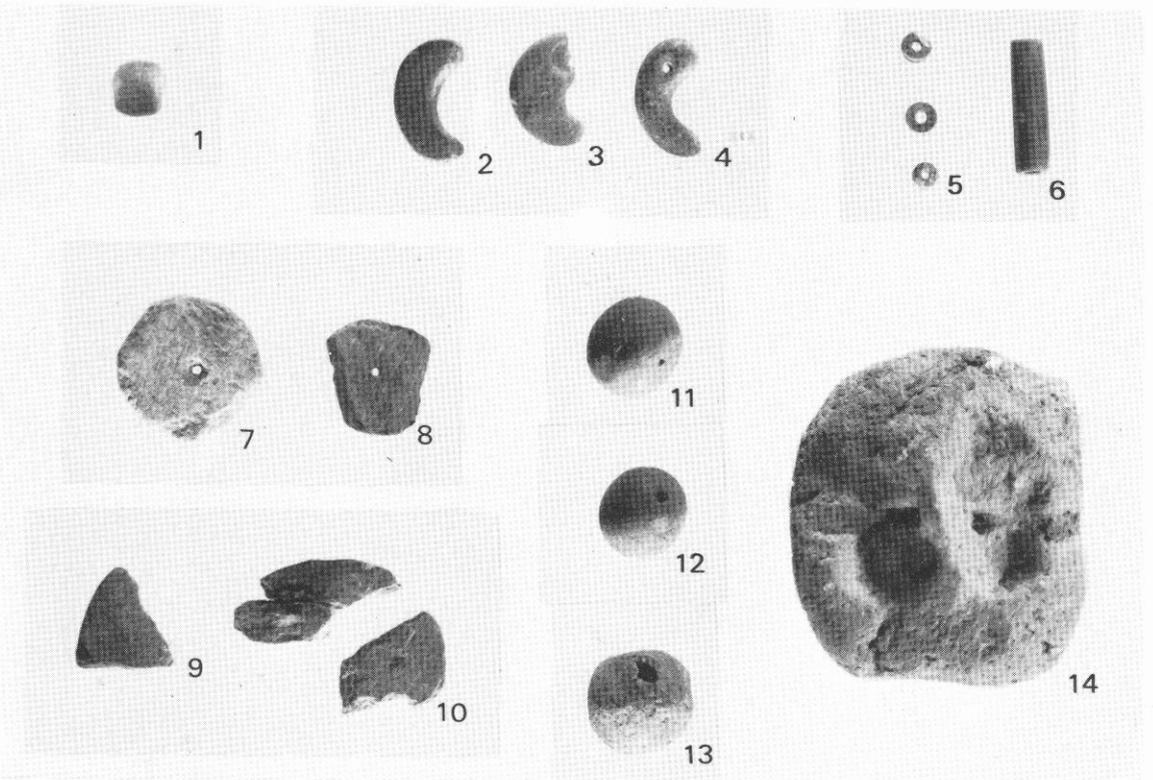
(2) 磨製石鍬と磨製石剣

1-南区
5・7-17号

2-Pit38
8-Pit15



(1) 紡錘車 1-7号(石製) 2-9号 3-4号 4-17号 5-Pit 18
6-27号 7-Pit 20 8-Pit 32 9-Pit 50



(2) 玉類と土製模造鏡 1-36号 4-13号 5・6-28号
7-14号 8-41号 11-3号 14-北区



(1) 10·11·12·13号住居跡



(2) 10号住居跡内弥生土器群



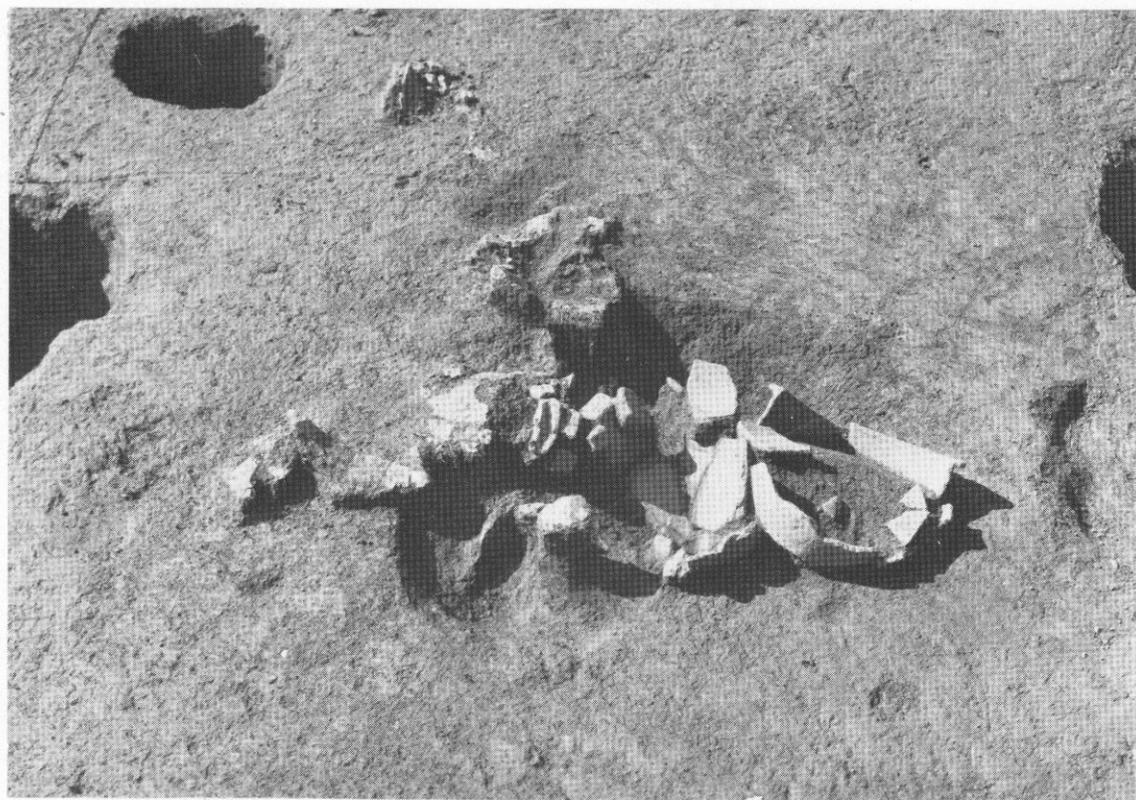
(1) 北区頂上部全景



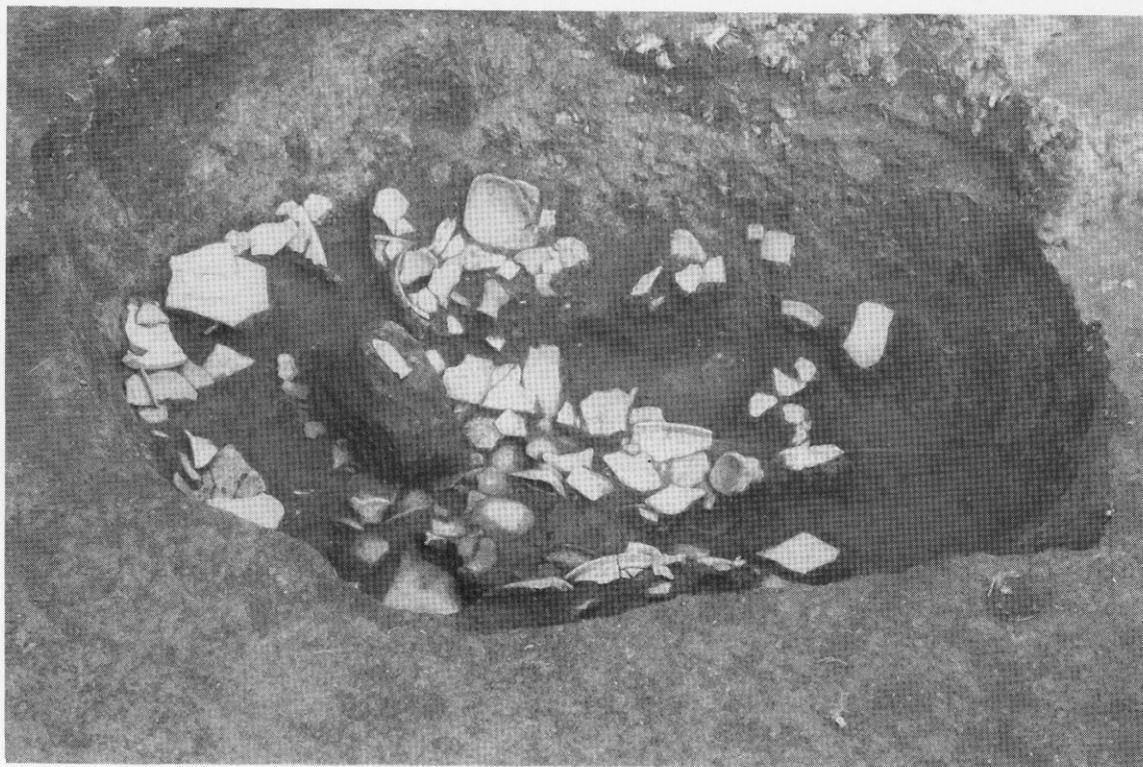
(2) 17号住居跡



(1) 17号住居跡内弥生土器



(2) 同上



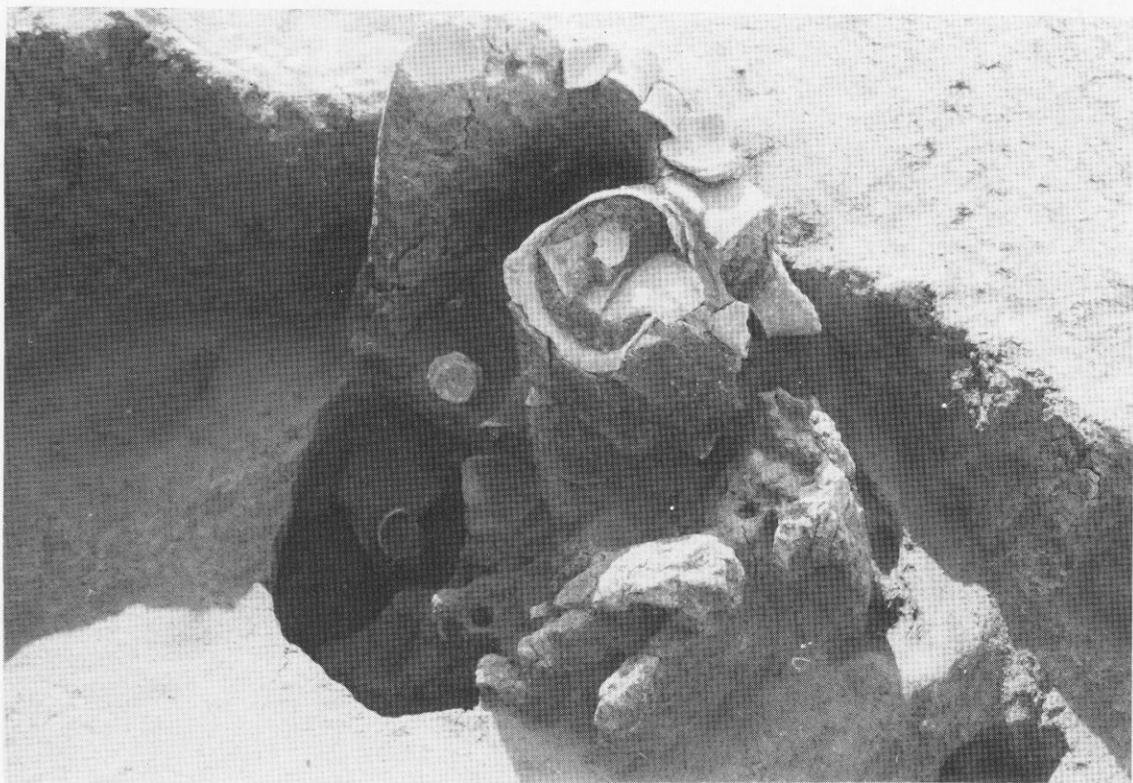
(1) Pit15 遺物出土狀況



(2) Pit15 磨製石劍出土狀況



(1) Pit17・18 袋状堅穴



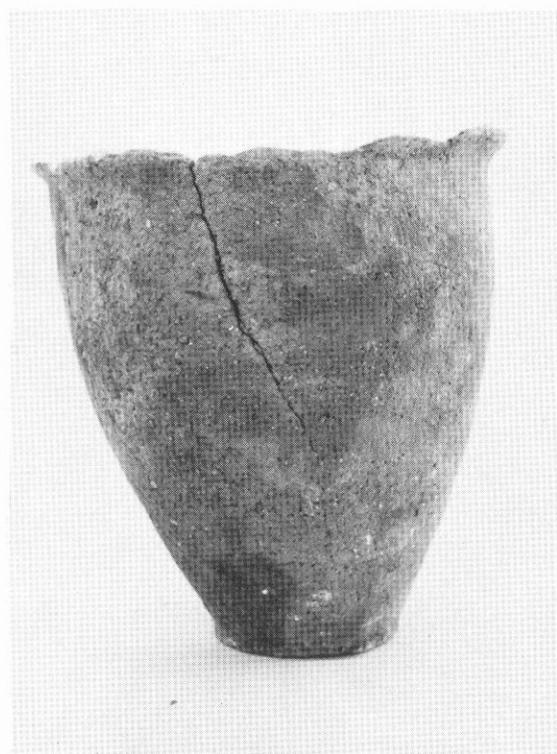
(2) Pit18 袋状堅穴上部土器出土状況



(1) Pit18 袋状堅穴 沈下した旧地表部



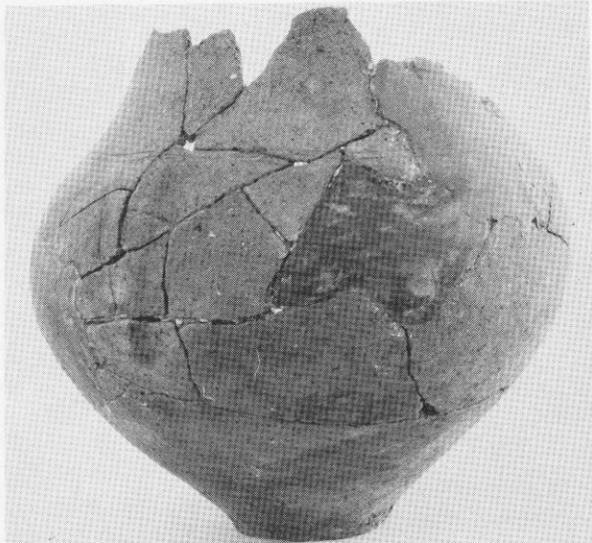
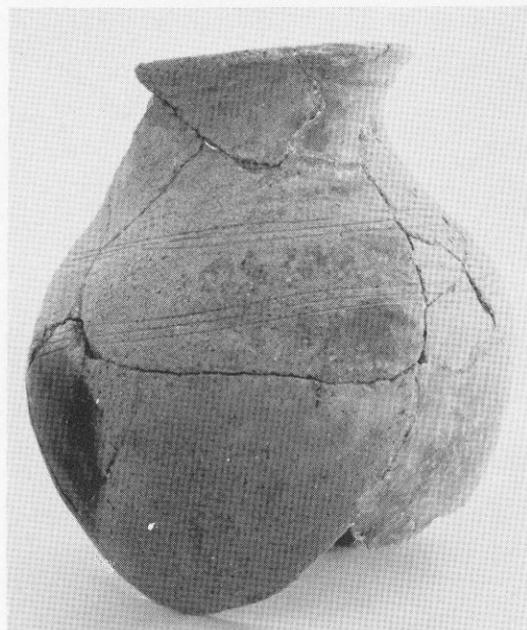
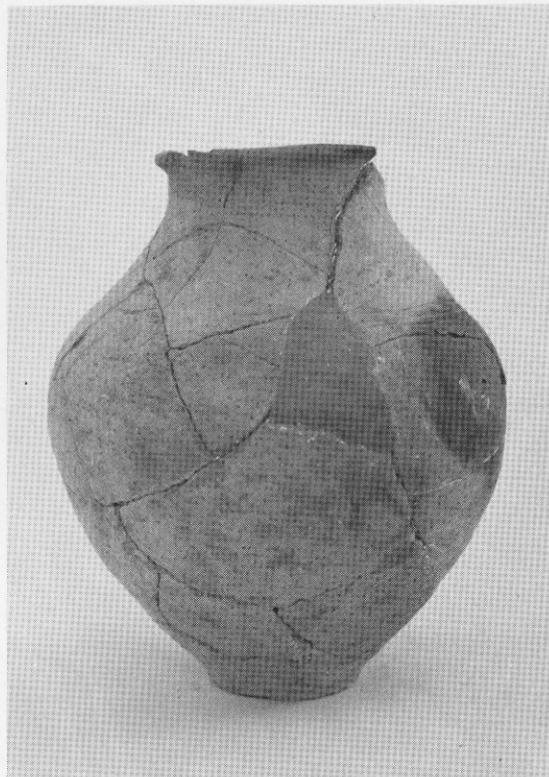
(2) 同上内部全景



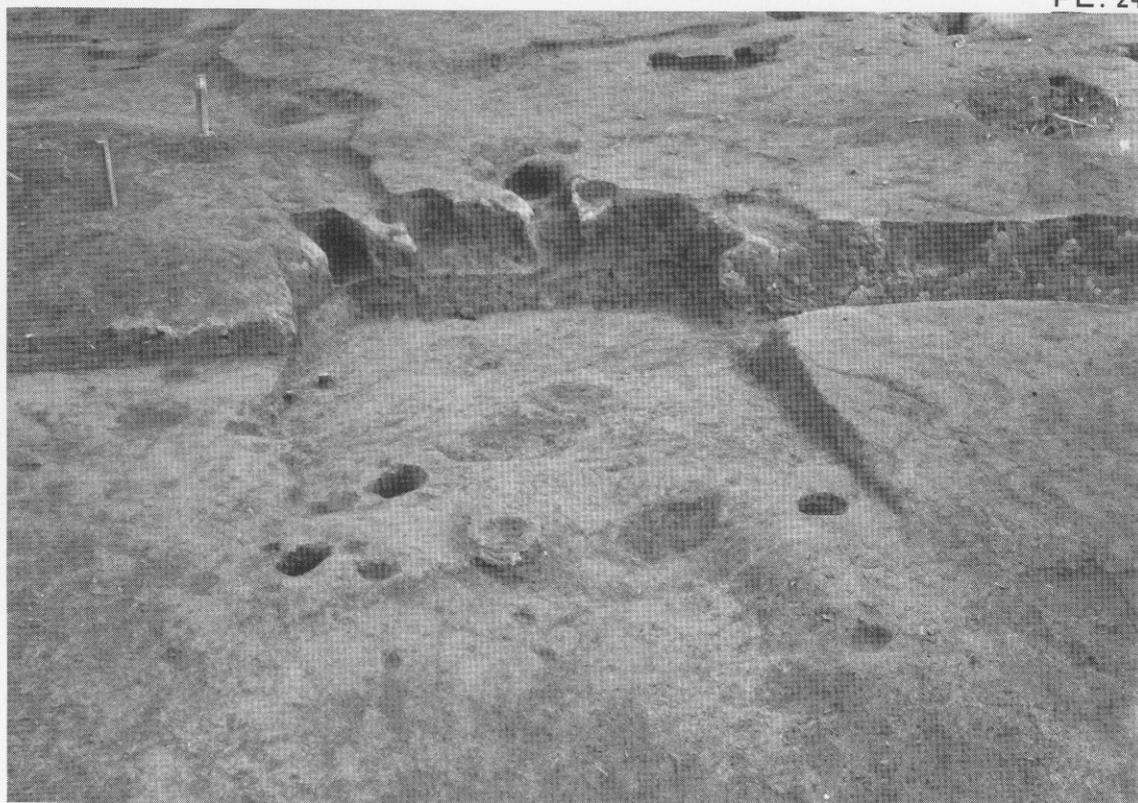
Pit18出土弥生土器 (1)



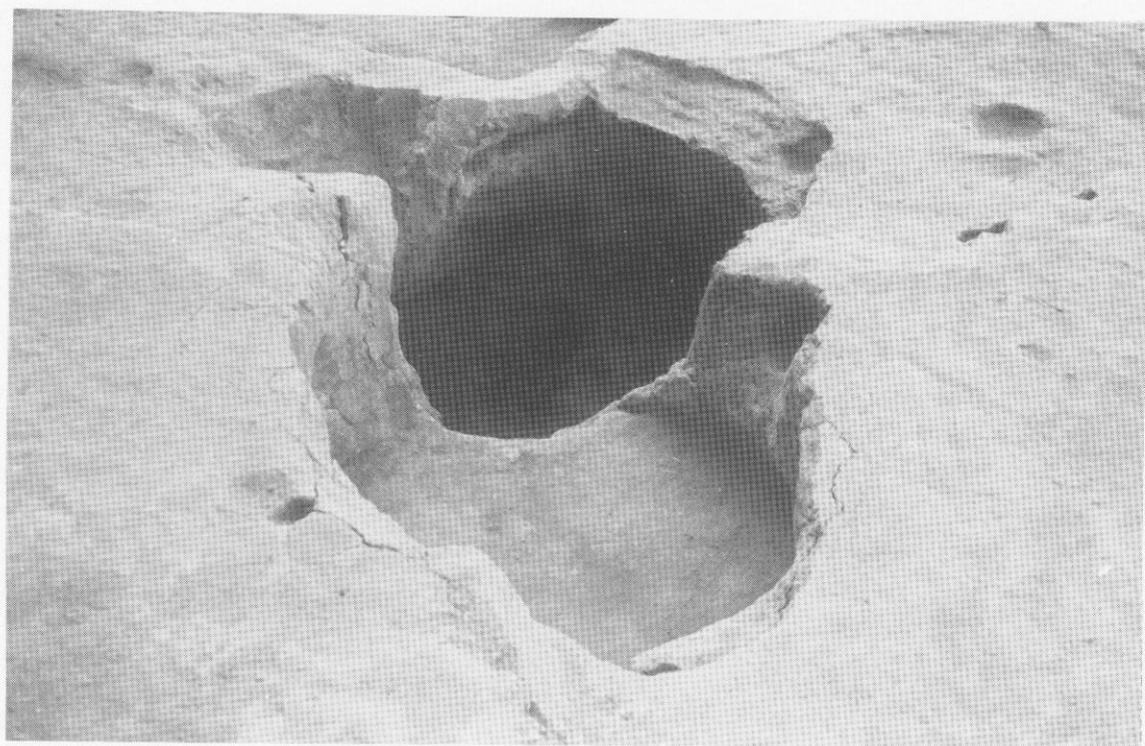
Pit18出土弥生土器 (2)



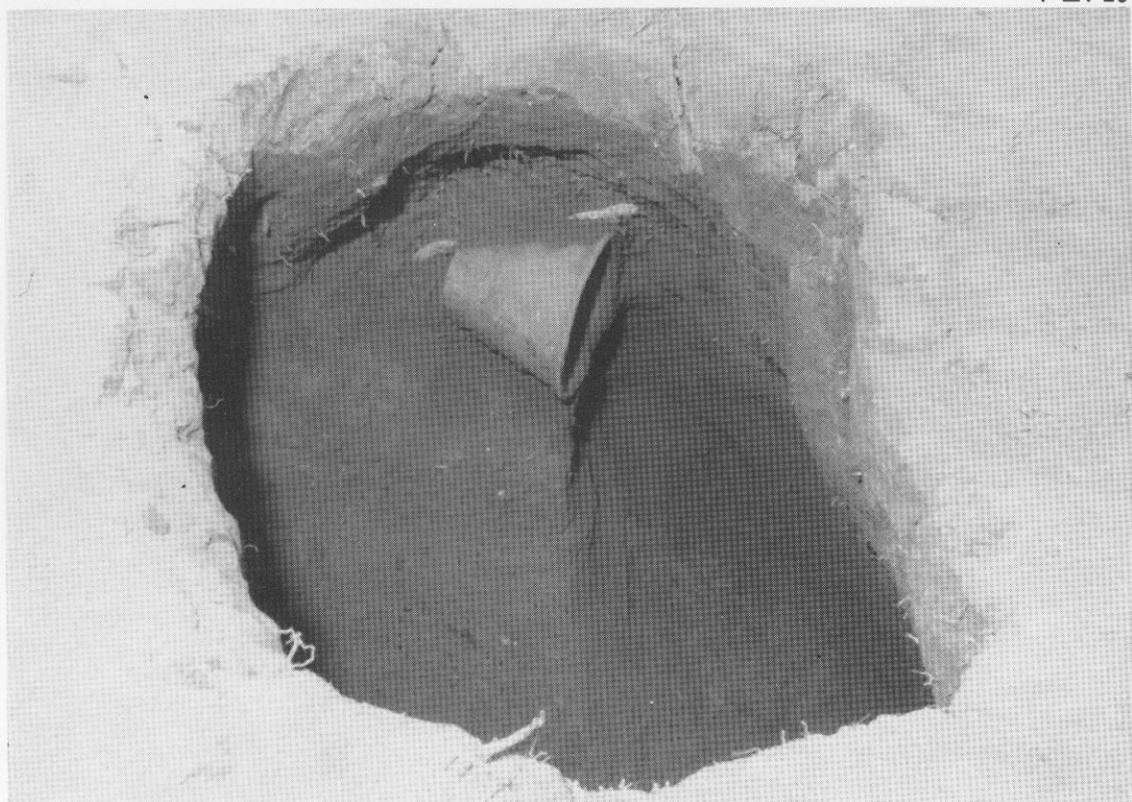
Pit18出土弥生土器 (3)



(1) 31号住居跡



(2) Pit22 (手前)・Pit23 袋状堅穴



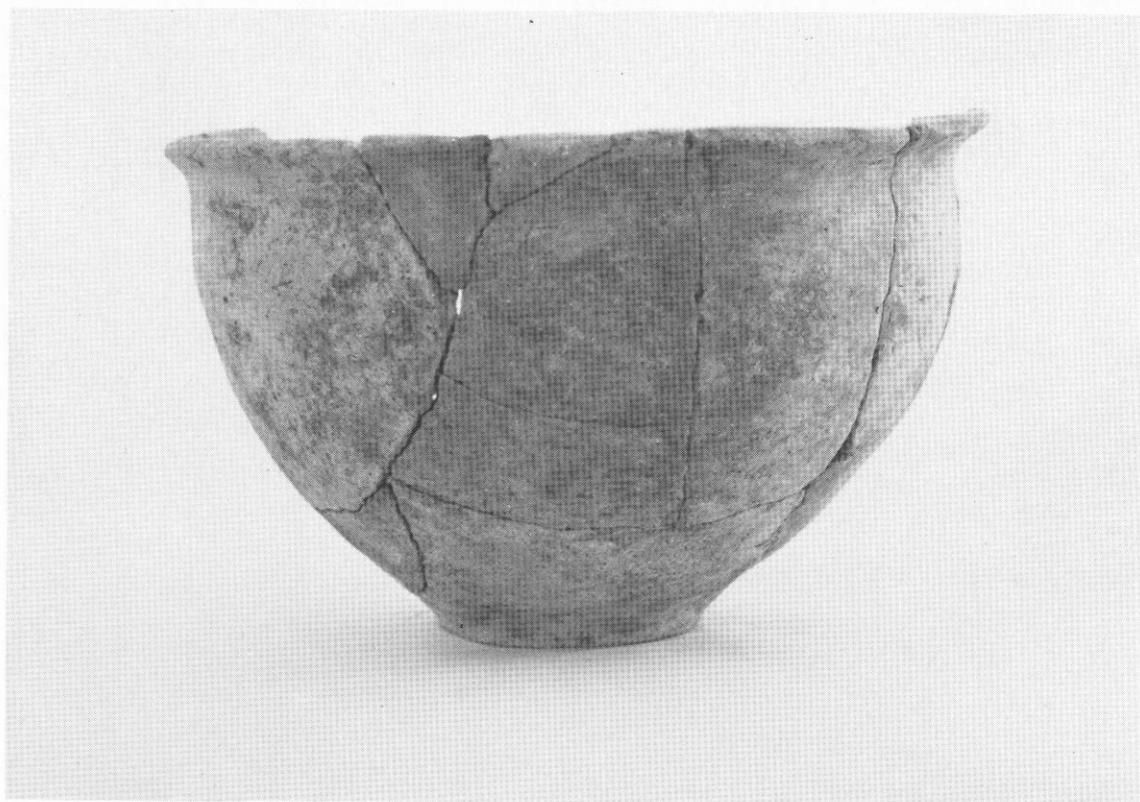
(1) Pit29 袋状堅穴



(2) 同上出土弥生土器



(1) Pit33 袋状堅穴



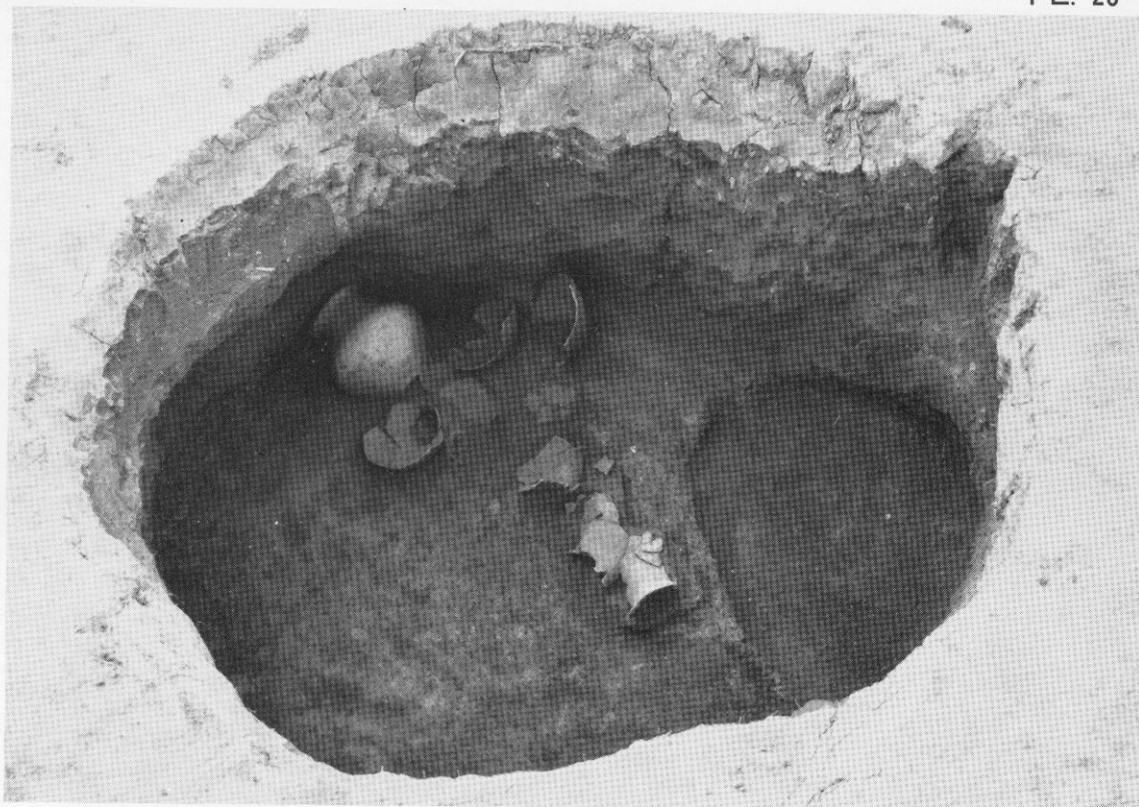
(2) 同上出土弥生土器



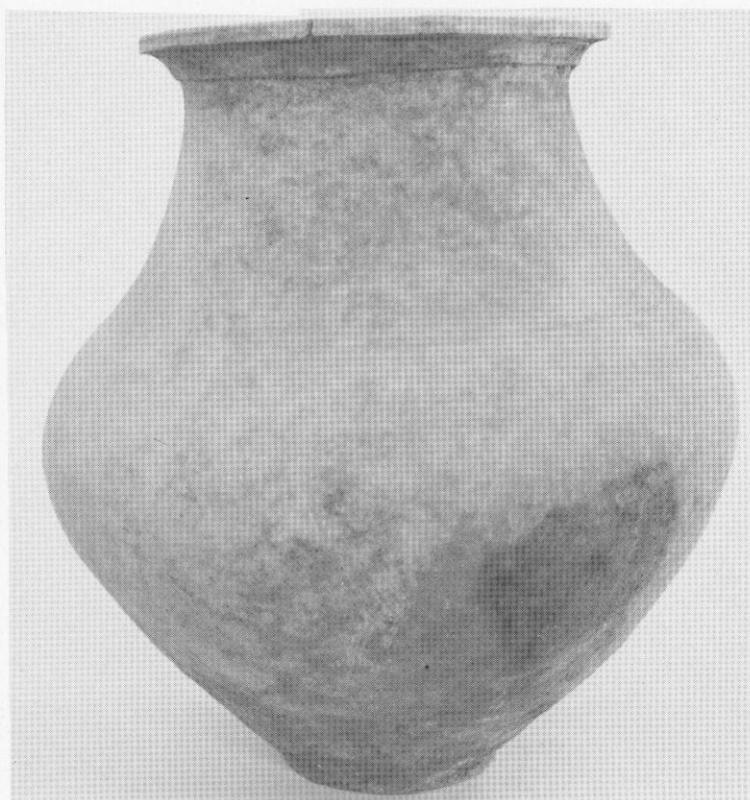
(2)
同
右



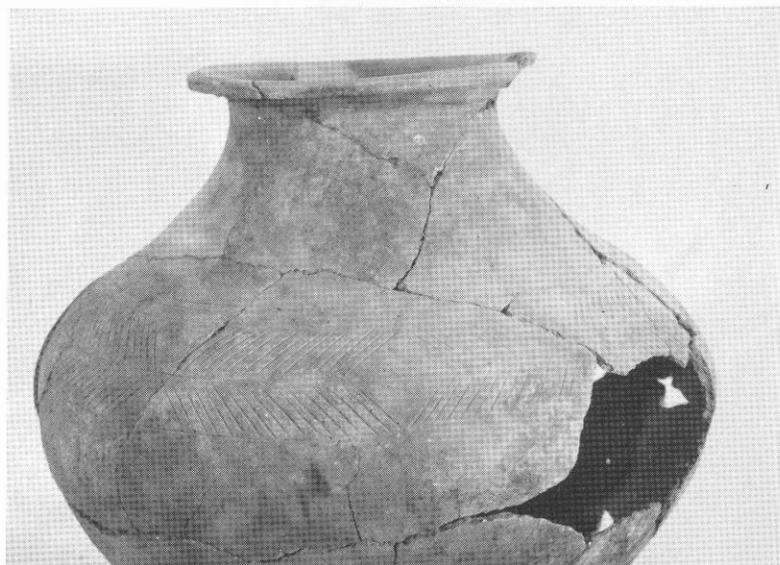
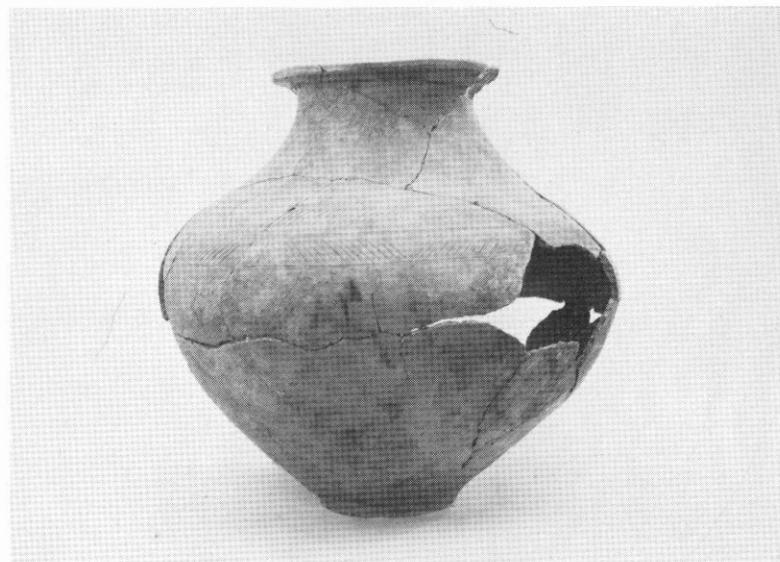
(1)
Pit
33
出
土
弥
生
土
器



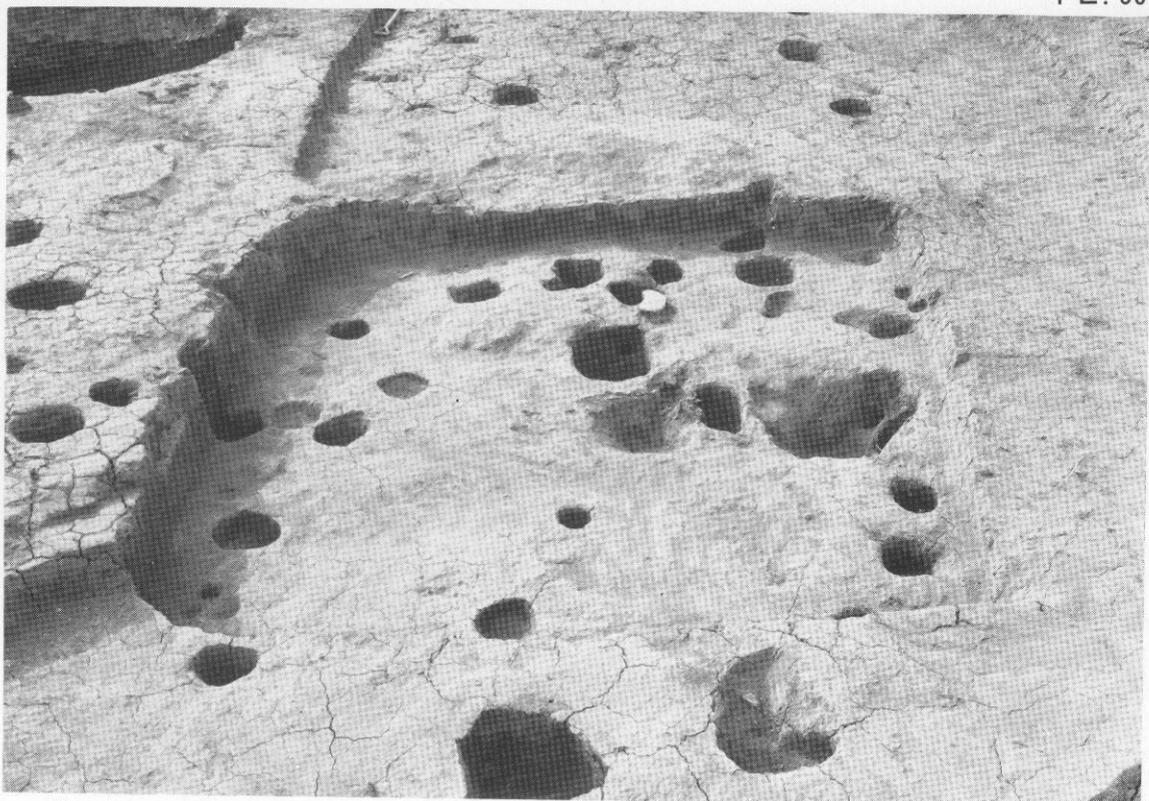
(1) Pit25 袋状堅穴



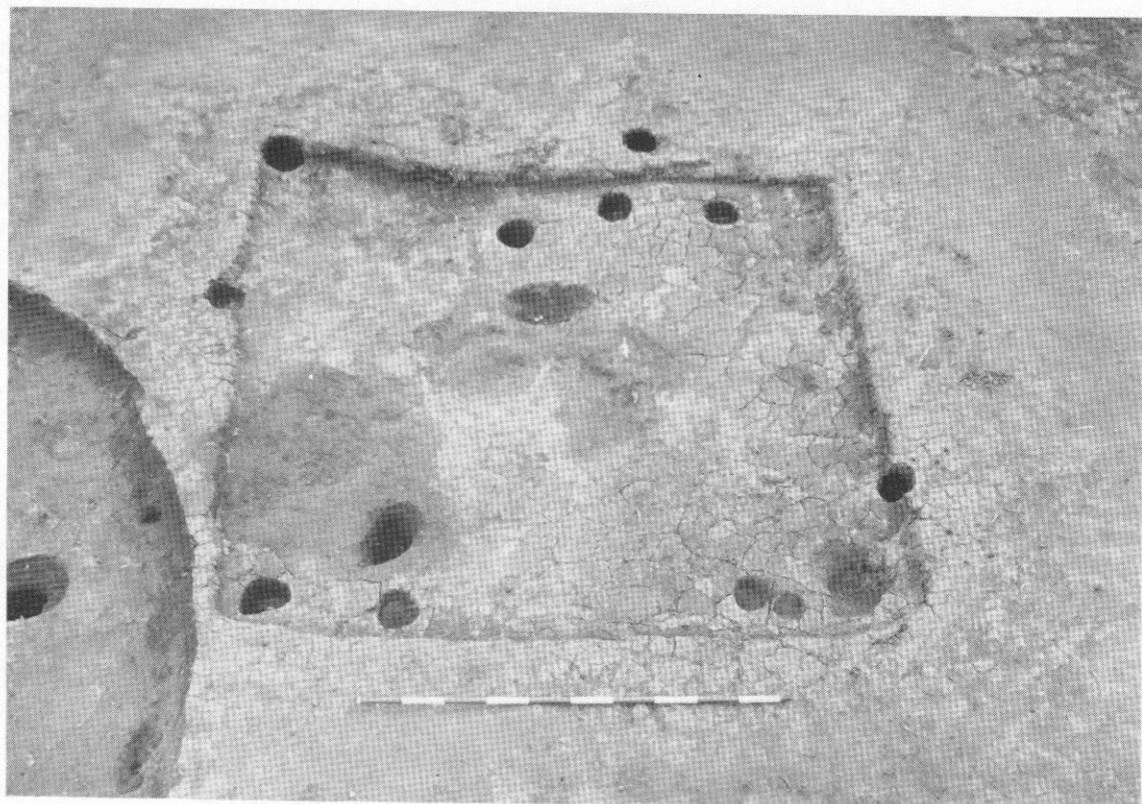
(2) 同上出土弥生土器



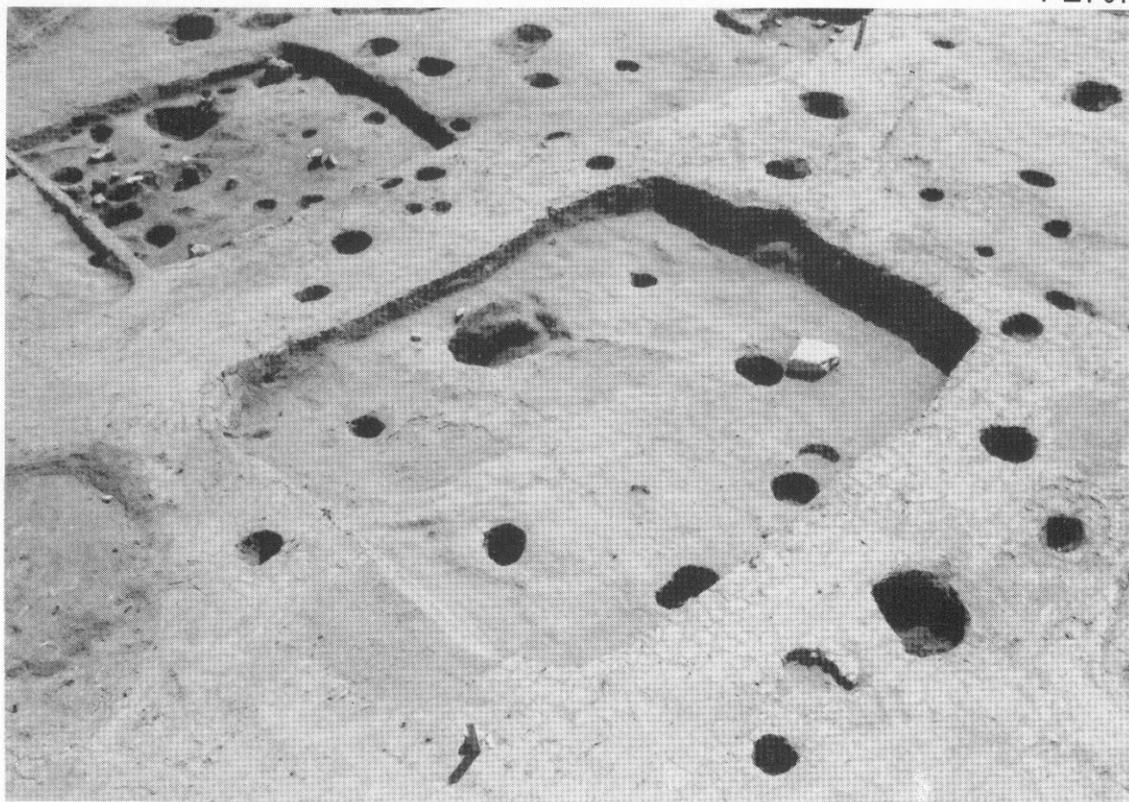
Pit 25 出土弥生土器 (左は彩文土器)



(1) 36号住居跡



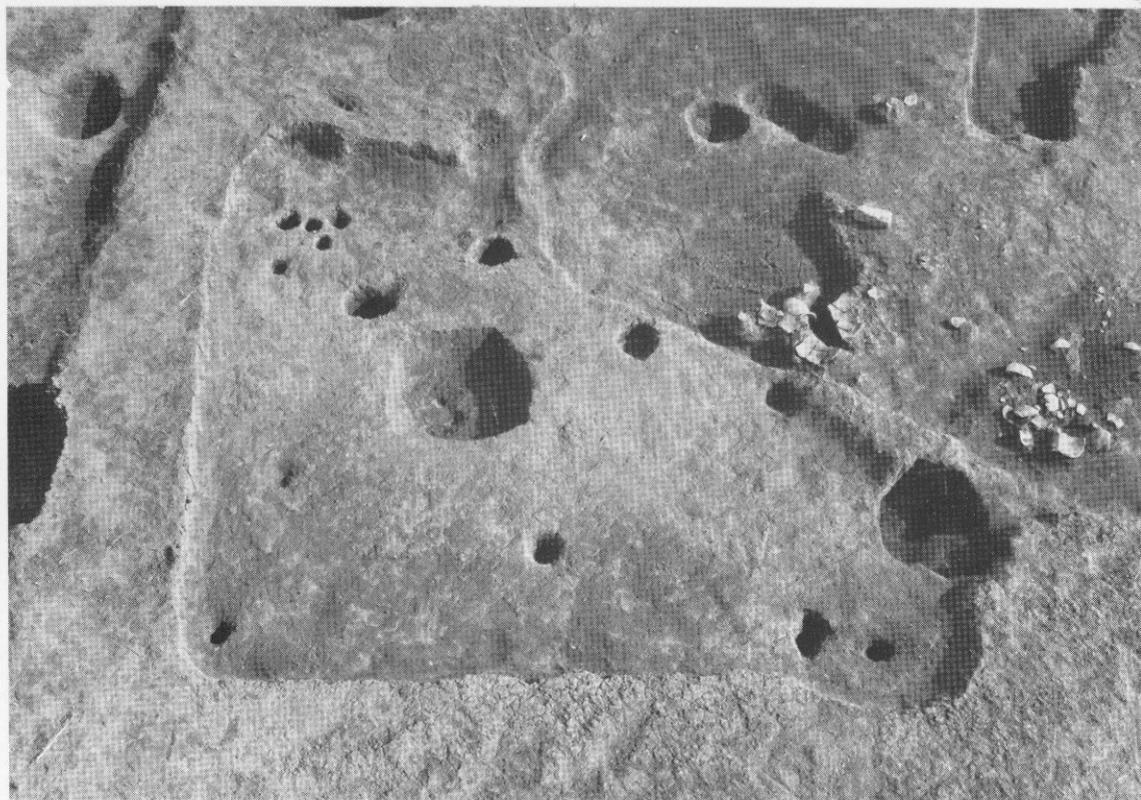
(2) 40号住居跡



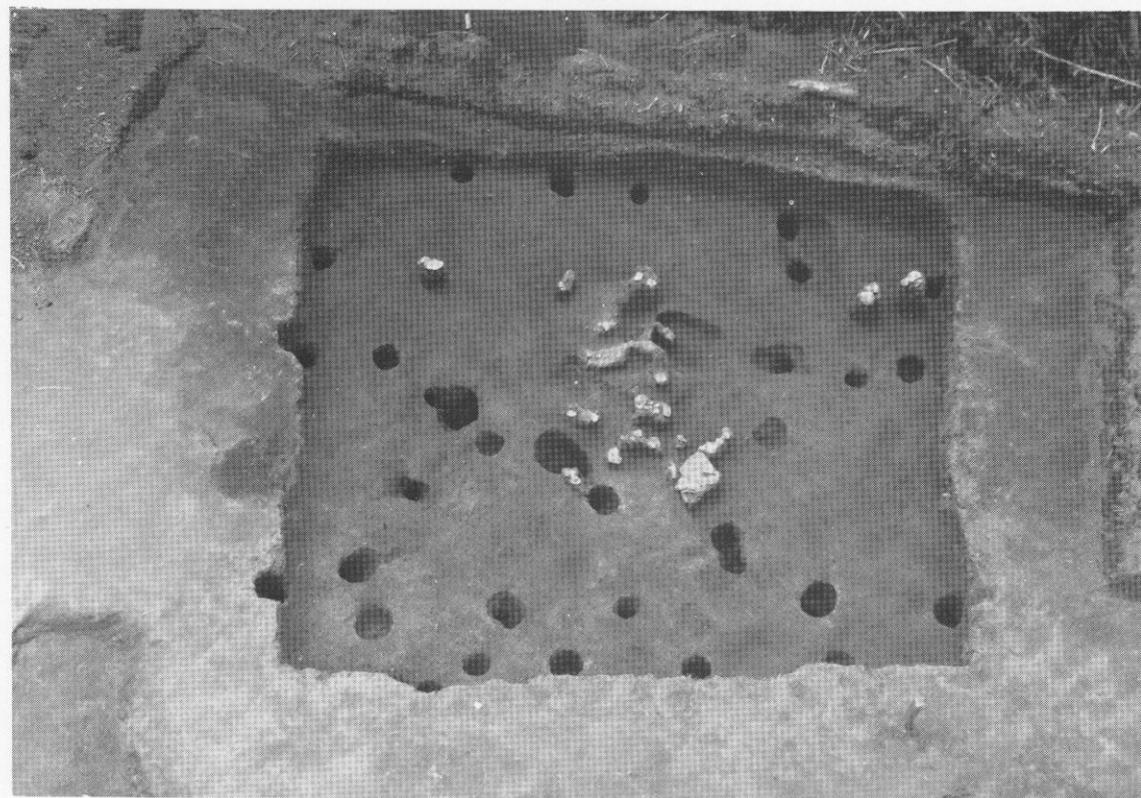
(1) 39号住居跡



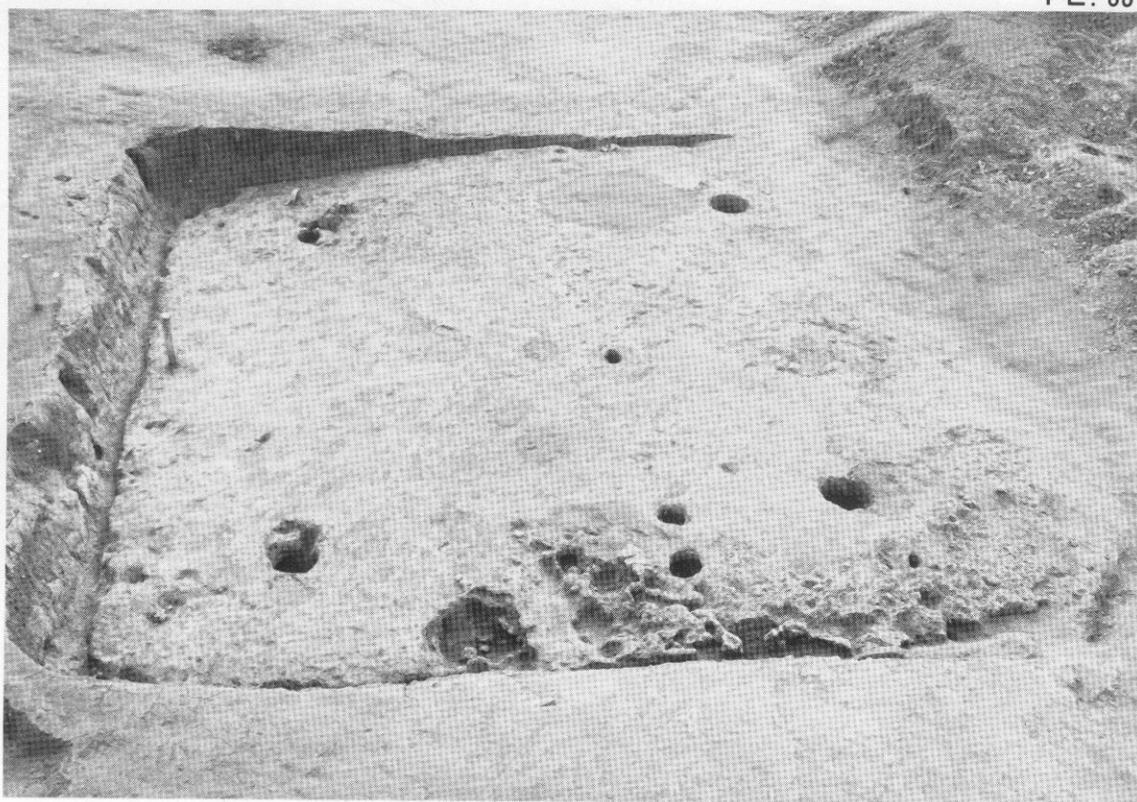
(2) 同上出土土製柄杓



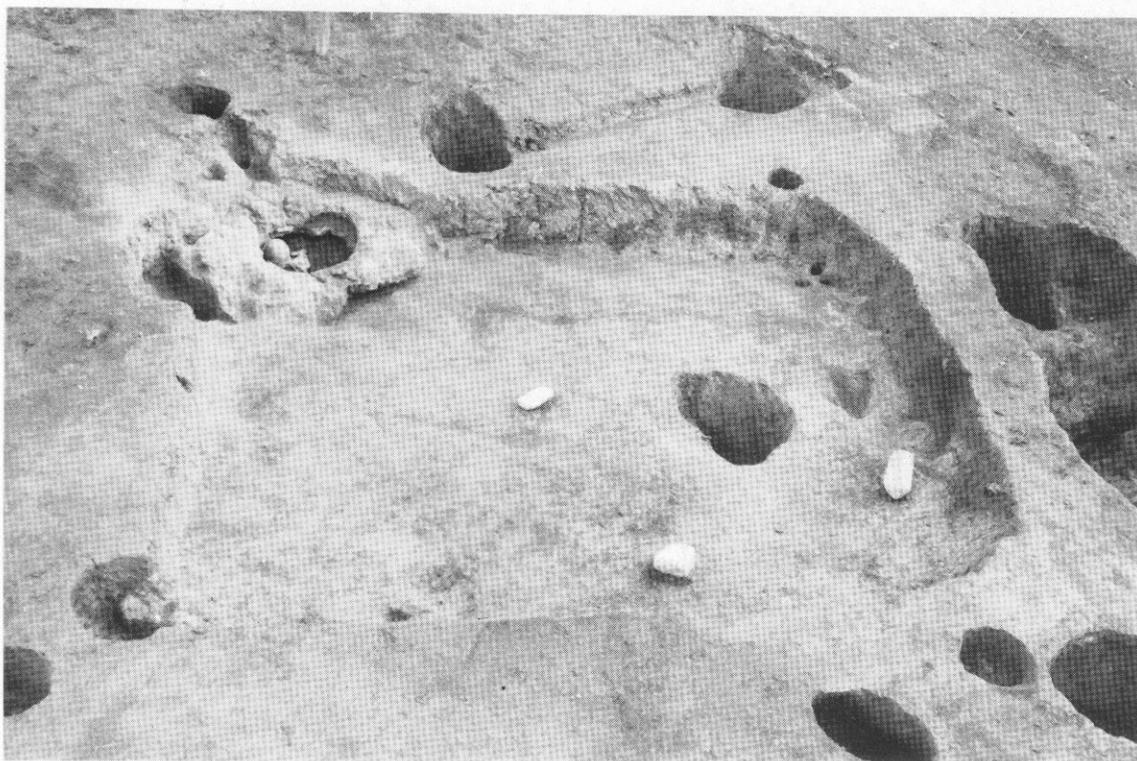
(1) 45号住居跡



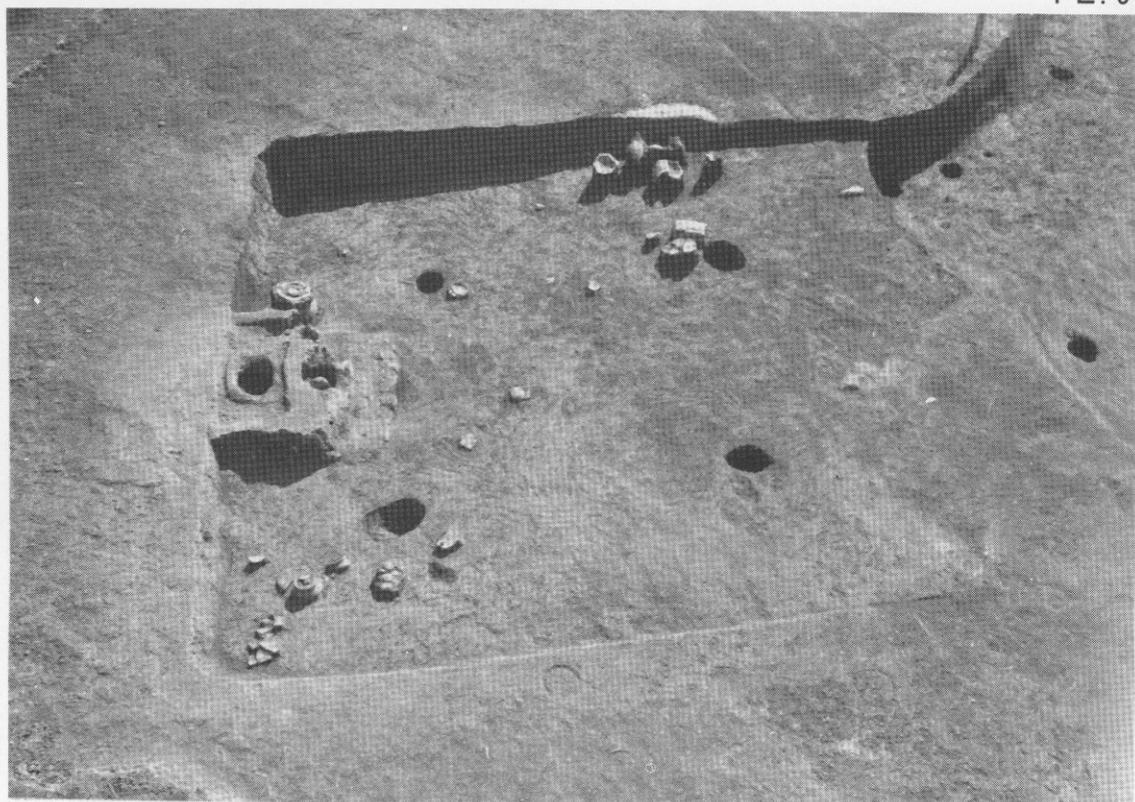
(2) 46号住居跡



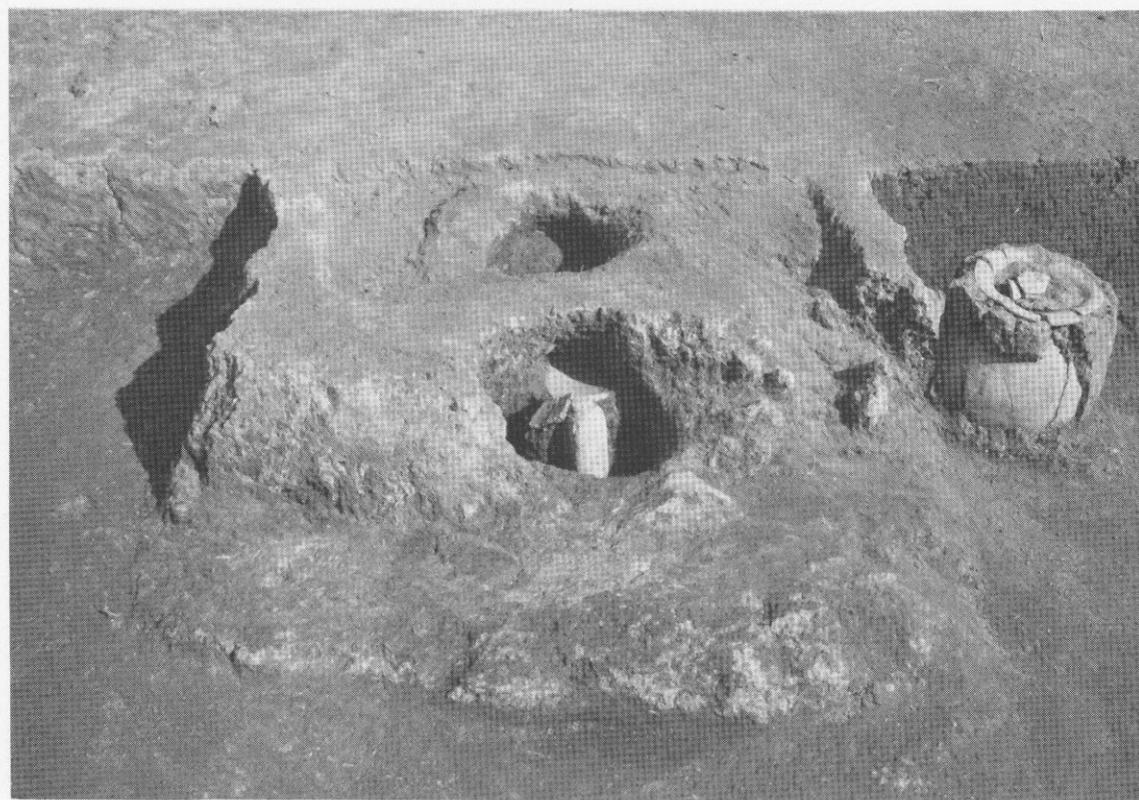
(1) 14号住居跡



(2) 15号住居跡



(1) 20号住居跡



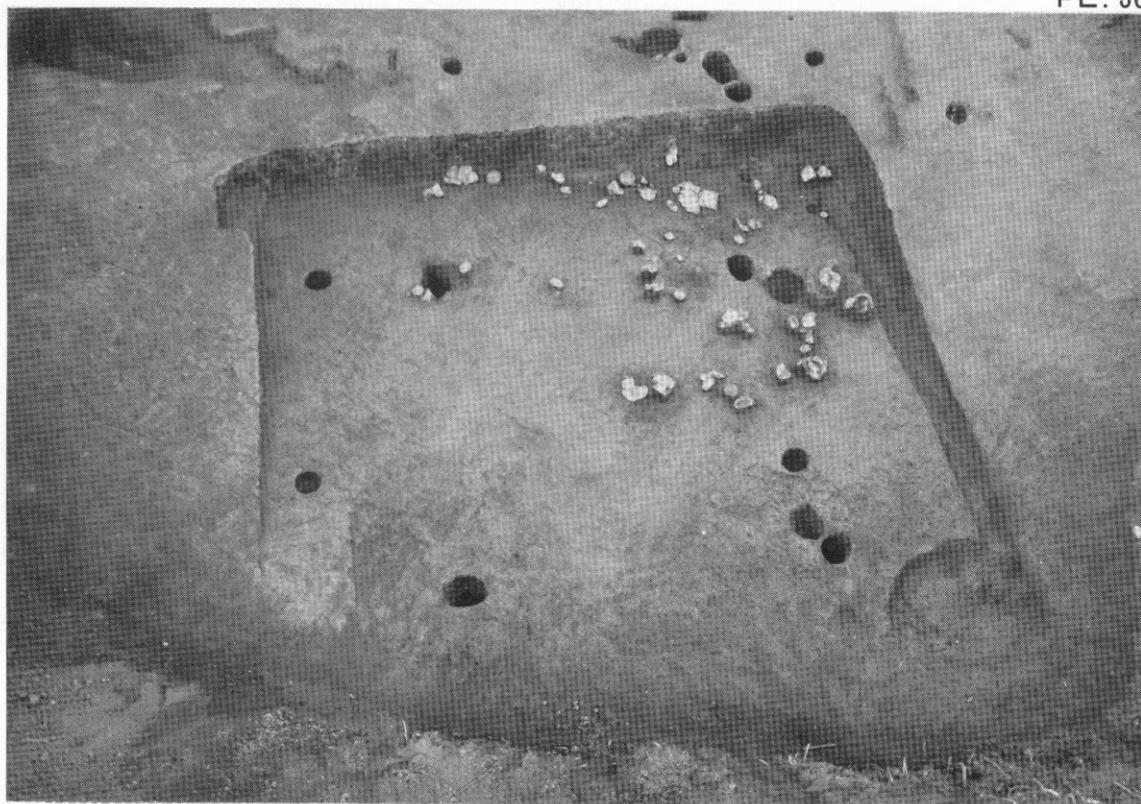
(2) 同上カマド



(1) 24号(手前)・25号住居跡



(2) 27号(右)・28号住居跡



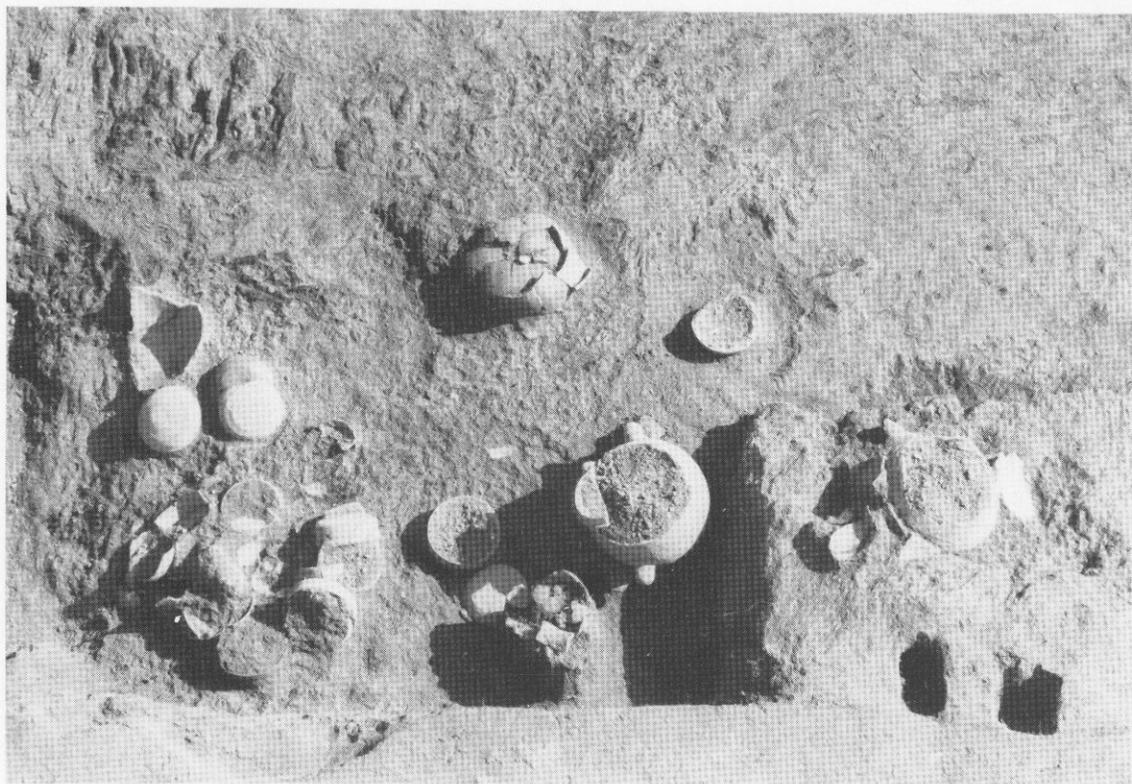
(1) 30号住居跡



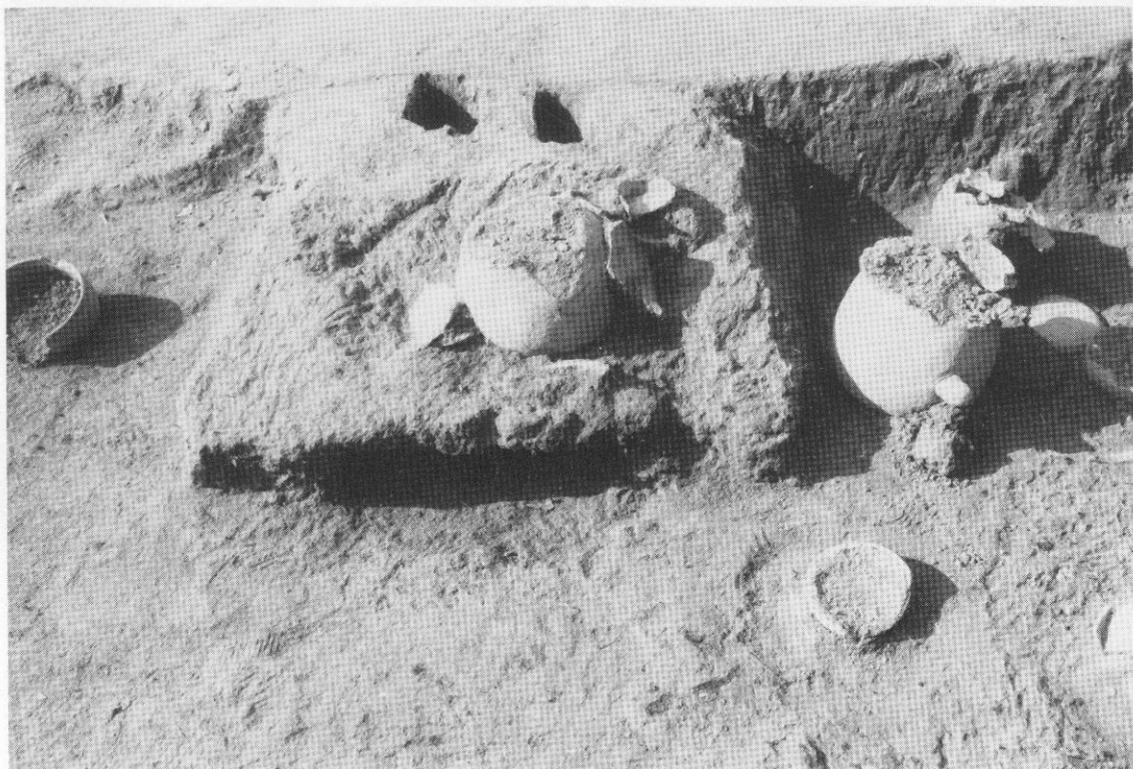
(2) 同上埋土出土須恵器高杯



(1) 34号住居跡



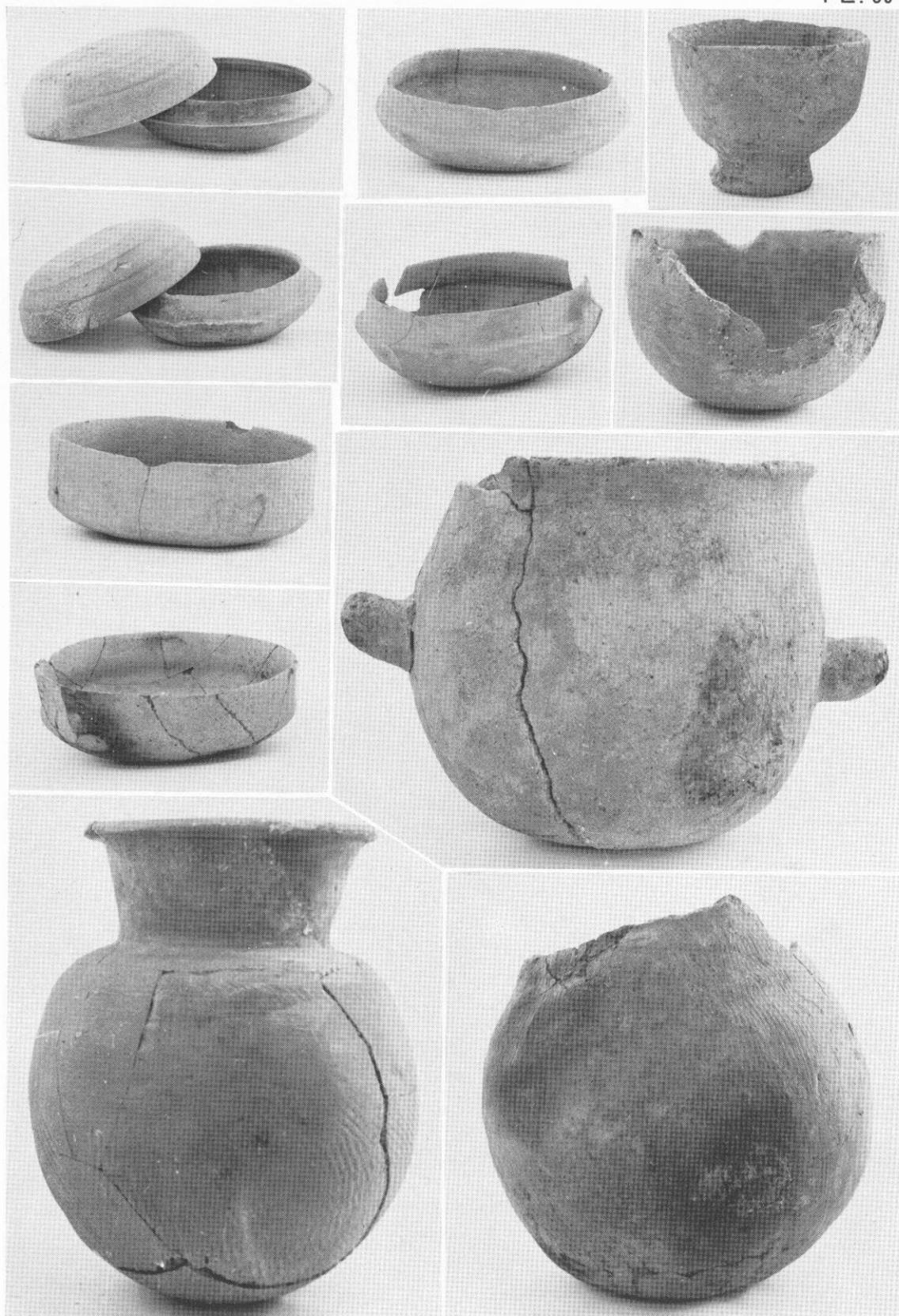
(2) 同上 土器出土状況



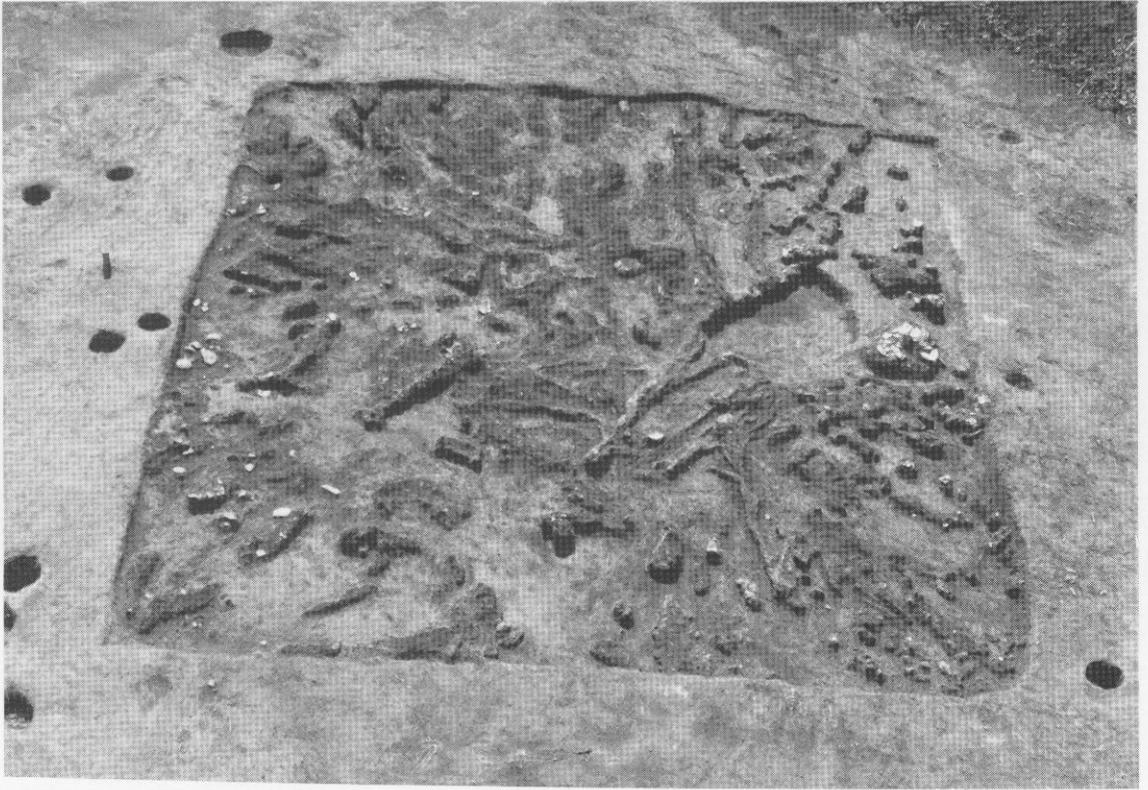
(1) 34号住居跡カマド



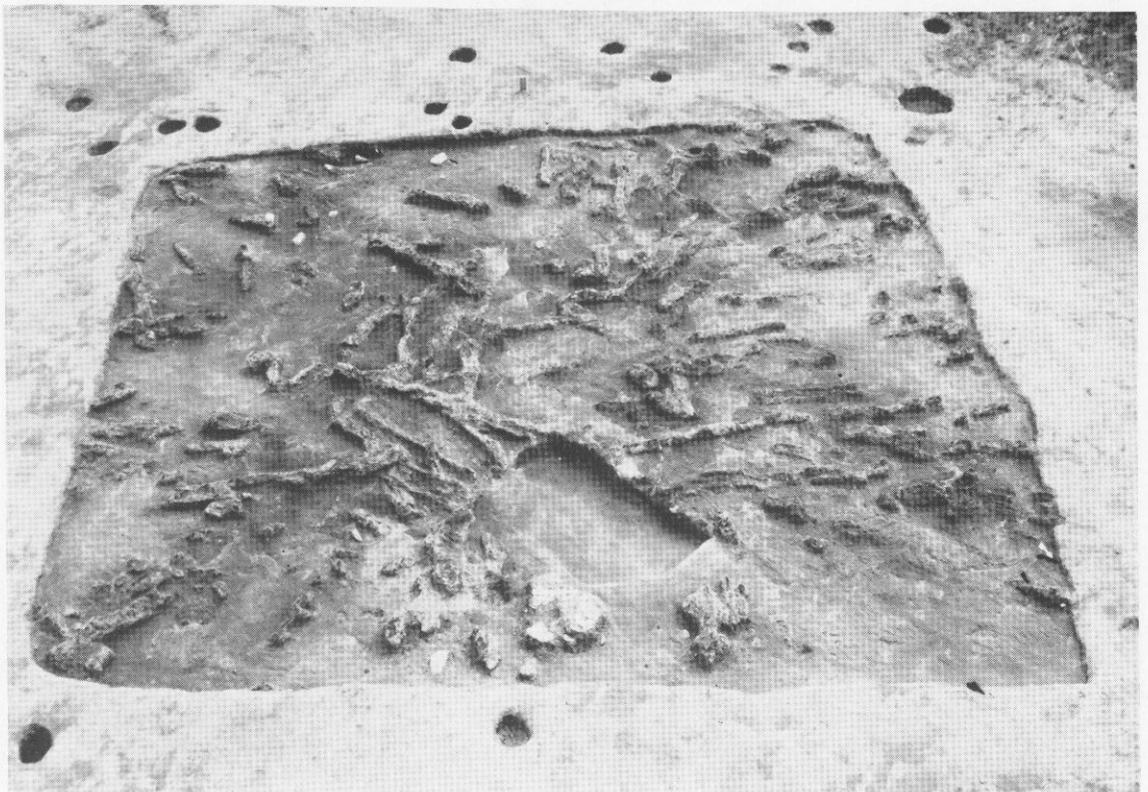
(2) 同上 右側土器出土状況



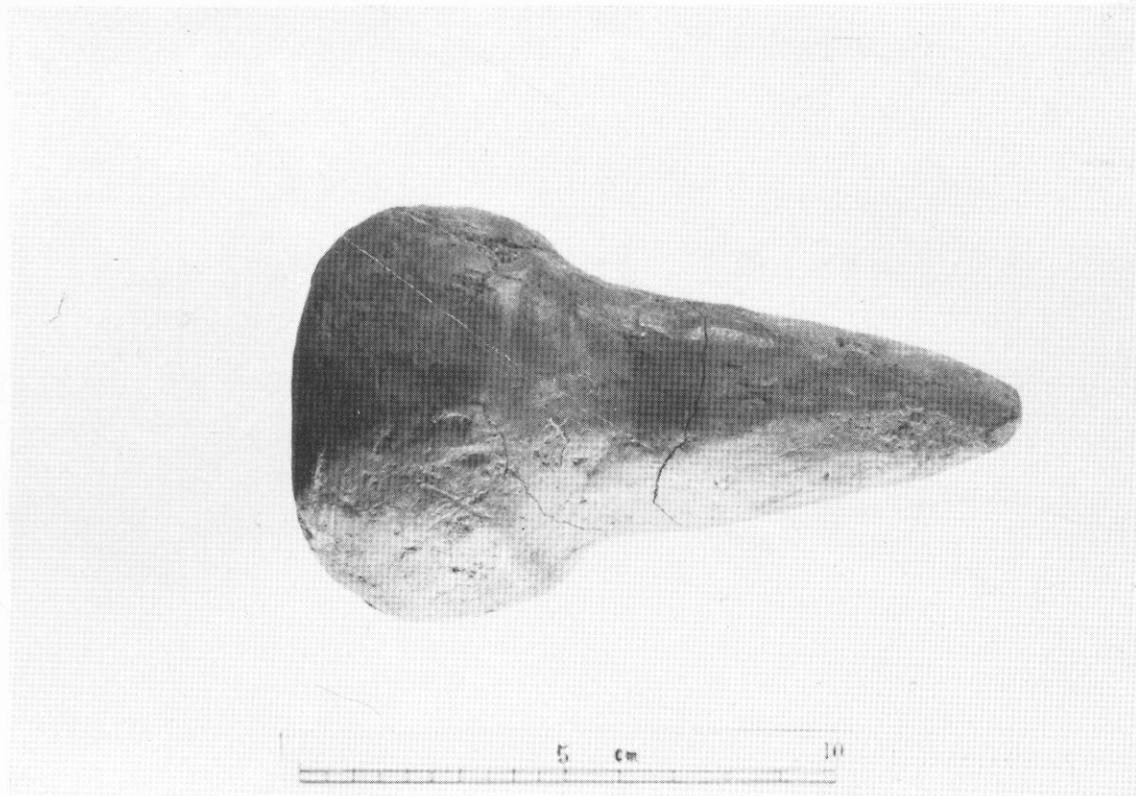
34号住居跡出土土器



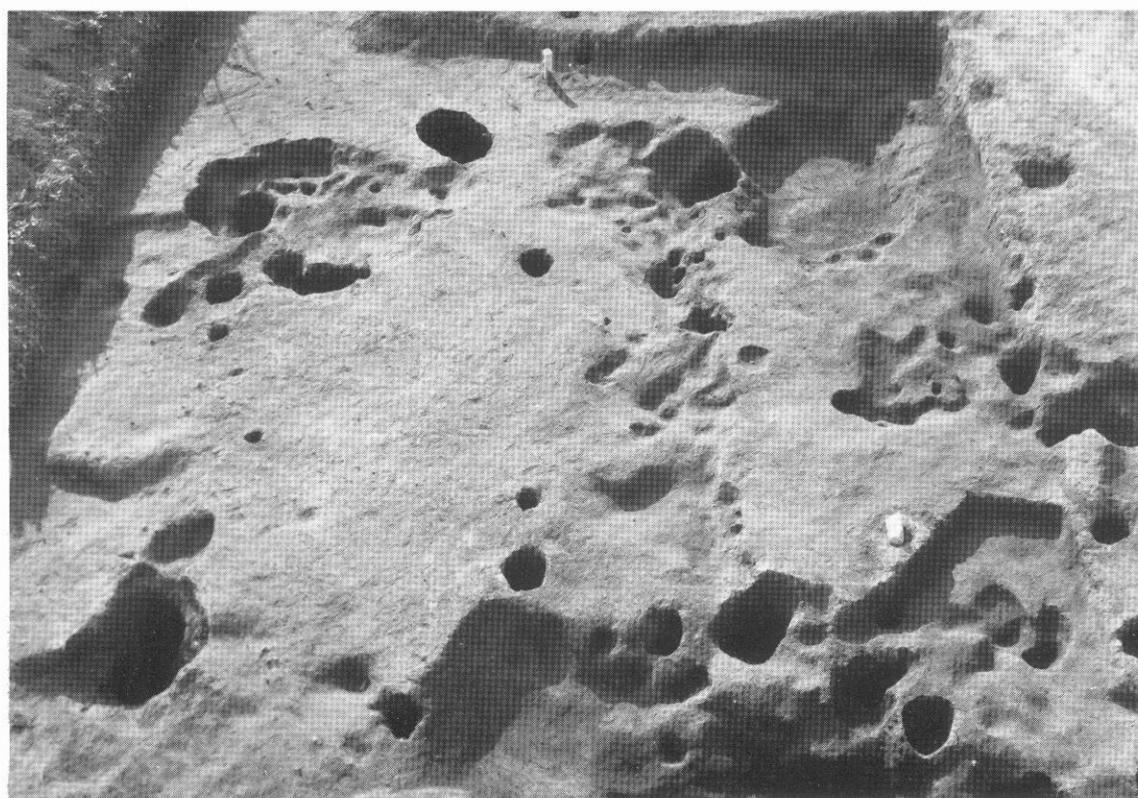
(1) 41号住居跡（東から）



(2) 41号住居跡（北から）



(1) 41号住居跡出土土製陶具



(2) 43・44号住居跡

永岡遺跡

筑紫郡筑紫野町永岡所在遺跡の調査

本文目次

1. 調査経過	新原正典	111
2. 遺跡	橘昌信	114
3. 遺構	新原正典	116
4. 遺物		
(1)土器及び土製品	中村幸史郎	121
(2)石器	橘昌信	126
5. 周辺遺跡の調査(その1)	橘昌信	129
6. 周辺遺跡の調査(その2)		
— 宝満川流域の先土器時代 —	橘昌信	140

なお、本報告書の編集は賀川光夫、橘昌信が担当した。

図 版 目 次

		本文対称頁
図版 1	(1) 遺跡全景 (E地区よりD・C・B地区を望む)	114
	(2) U字溝断面及び遺物出土状態 (E-Ⅳ区)	117
2	(1) U字溝 (E-Ⅱ・Ⅳ区)	117
	(2) 溝状遺構 (E-Ⅲ区)	118
3	(1) 弥生式土器 (E地区)	121
	(2) 須恵器 (E地区)	123
	(3) 弥生式土器出土状態	117
4	(1) 石器 (A・C地区)	126
	(2) 周辺遺跡の石器 (Ⅰ)	129
5	(1) 周辺遺跡の石器 (Ⅱ)	129
	(2) 同 上 (裏)	129

挿 図 目 次

第1図	永岡遺跡付近地形図（九州地方建設局原図）……………	115
第2図	E地区地形及び遺構平面図……………	116
第3図	E－Ⅳ区U字溝断面図……………	117
第4図	E－Ⅲ区溝状遺構断面図……………	118
第5図	常松永岡遺跡の地形及び溝状遺構略図 （常松遺跡調査報告書より引用）……………	120
第6図	遺物（土器及び土製品実測図）……………	122
第7図	遺物（土器実測図）……………	124
第8図	遺物（A・C・E地区出土石器）……………	127
第9図	周辺遺跡の石器（1）……………	131
第10図	周辺遺跡の石器（2）……………	132
第11図	周辺遺跡の石器（3）……………	142
第12図	周辺遺跡の石器（4）……………	146
第13図	周辺遺跡の分布図……………	とじこみ

1. 調査経過

永岡遺跡の発掘調査は昭和45年2月25日から3月25日までの第1次調査と、同じく7月15日から7月31日までの第2次調査の2度にわたって行なわれた。

以下、その調査の進行経過を日誌によって振り返ってみることにしよう。

第1次調査

- 2月25日 調査関係者は、午後宿舎の永岡公民館に集合し、福岡県教育委員会の松岡史・酒井仁夫両氏の指導にて器材・宿舎の整備・現地調査見学を行なう。
- 2月26日 本日より発掘を開始し、B地区に6個の試掘溝を掘る。午後より雨が降り出し宿舎にて遺物洗いを行なう。
- 2月27日 A地区にブルドーザーがはいり、表土除去作業を行なう。なおA地区は県教委側によって、今後の作業が進められた。又、C・D及びE-Ⅲ区に試掘溝を設けるが、いずれも遺物包含層・遺構を確認することはできなかった。
- 2月28日 午前中は雨で午後より現場へ出る。作業はD地区の第Ⅰ及び第Ⅱトレンチの設定と第Ⅲ層までの進掘を行なう。又E-Ⅱ区においてトレンチ設定作業を行なう。
- 3月1日 昨日設定したD地区トレンチの進掘を続けるが、遺物はほとんど検出することはできない。
- 3月2日 新たにE-Ⅰ区に第Ⅰ及び第Ⅱトレンチを設定し、E-Ⅱ区のトレンチとともに掘り下げを行なう。又E-Ⅱ区西側の土堤の断面を削り、溝状遺構を確認する。一方D地区においてもⅣ層まで振り下げるが、出土遺物はほとんどみられない。なお本日よりB地区にブルドーザーが入って表土剥ぎを行なう。
- 3月3日 10時頃までの雨も漸くやみ、E-Ⅱ区の土堤の断面図取りを行なう。又E地区の各トレンチの進掘を行ない、E-Ⅱ区トレンチにおいて溝状遺構が確認される。D地区においてはトレンチ掘りを行なったが結局遺物包含層には当らず、本日で発掘作業は一応終了した。
- 3月4日 昨日残していたE-Ⅱ区土堤断面図の作成とブルドーザーが入ったE-Ⅰ・Ⅱ区の表土除去作業と遺構部への削平を進めた。B地区においては表土除去を終え、遺構検出にとりかかる。
- 3月5日 D地区において各トレンチの断面実測と平板測量を行ない、B地区では遺構検出作業を続行する。
- 3月6日 B地区遺構の露出を行なうが、あまり良好な遺構は確認されず、清掃、写真撮影をする。又本日よりC-Ⅲ区において遺構検出作業を行なう。なおC-Ⅱ区においてポイントが出土。

- 3月7日 A地区において露出された遺構の実測、平板測量及び、C-II・IIIの遺構検出、E-II区の溝の進掘作業を行なう。
- 3月8日 遺物整理を行なった。
- 3月9日 午前中、C-II・III区の小ピット、土壌の露出と平板測量を行なうが状態の把握は困難であった。
- 3月10日 昨日に引き続き、実測、平板測量を行なう。
- 3月12日 C-III区の平板測量を行なう。
- 3月13日 B地区の平板測量を行なう。又C-II区において先日、ポイントが出土したため、旧石器包含層確認のため掘り下げを行なう。午後からは雨のため作業を中止し、遺物洗いを行なう。
- 3月14日 E地区の平板測量とE-III区溝の進掘、及び実測を行なう。
- 3月16日 C-II区及びE-II・III区の溝の掘り下げを行なう。
- 3月17日 昨日に引き続き同じ作業を続行するが、E-II区の溝の延長を確認するため新たに、E-IV区にトレンチを設定する。
- 3月18日 C-II区の進掘を行なうが遺物出土は全くない。E-IV区には溝状遺構が確認され、掘り下げを行なう。
- 3月19日 C地区・E地区とも掘り下げ及び実測を行なう。なおE-IV区の溝の最下層からは、弥生中期の壺が出土した。
- 3月20日 E地区の作業は本日の平面及び断面の実測を行なってほぼ完了す。又C地区は引き続き、旧石器層を目指して掘り下げる。
- 3月22日 C地区進掘を行なう他は3班に分かれて、ゼネラルサーベイへ出かける。1班は四三島、東小田附近、2班は山家、寺坂附近、3班は津古附近のサーベイを行なう。1班は弥生式土器、甕棺片を、2班はコア、ポイント、トラピース、石鏃を、3班はナイフ、黒耀石、サヌカイトのフレイクが多量採集された。なおC地区における掘り下げは何ら遺物を出土せず、作業を一応終了する。
- 3月23日 C地区の実測を終了し、4班に分かれて、ゼネラルサーベイを行なう。1班は八並、吹田附近の調査を行ない、弥生式土器、須恵器を採集する。2班は屋形原、三沢附近で弥生式土器、須恵器、黒耀石、サヌカイトのフレイク採集。3班は津古上の原、及び杉塚方面で、津古上の原では石鏃、スクレイパー、ナイフなどが採集される。4班は針摺、井島地区で、井島ではスクレイパー等が採集された。なお本日をもって南バイパス10号遺跡の発掘は全て終了した。
- 3月24日 器材撤収
- 3月25日 午後解散

第 2 次 調 査

- 7月15日 午後、宿舎の永岡公民館に賀川、橘両先生ほか学生8名が集合。
- 7月16日 午前中、はげしい雨が降り、午後から小雨の中でF地区の表土剥ぎを行なう。
- 7月17日 引き続き表土剥ぎを行なうが、午後より雨が降り出し作業中止。
- 7月18日 雨のため作業中止。
- 7月19日 午前中表土剥ぎを行ない、午後からは遺構検出にとりかかる。
- 7月20日 一日中雨のため作業中止。
- 7月21日 遺構を確認し、掘り下げを行なう。
- 7月22日 遺構は時期不明の不規則な堅穴で、出土遺物は全くなし。
- 7月23日 遺構の実測とF地区全体の掘り下げを行なう。
- 7月26日 掘り下げの結果再び遺構が見つかったが、これは何かわからず、実測、写真を取り、埋め戻しを行なう。
- 7月27日～30日 永岡F地区の発掘は一応終了したので、津古上の原、若江方面ゼネラルサーベイを行ないポイント、ナイフなどの採集を行なう。なお30日のサーベイでは、三沢のゴルフセンター近くの墓地では、弥生式土器片が多数採集された。
- 7月31日 午前中器材撤収、午後解散。

2. 遺 跡

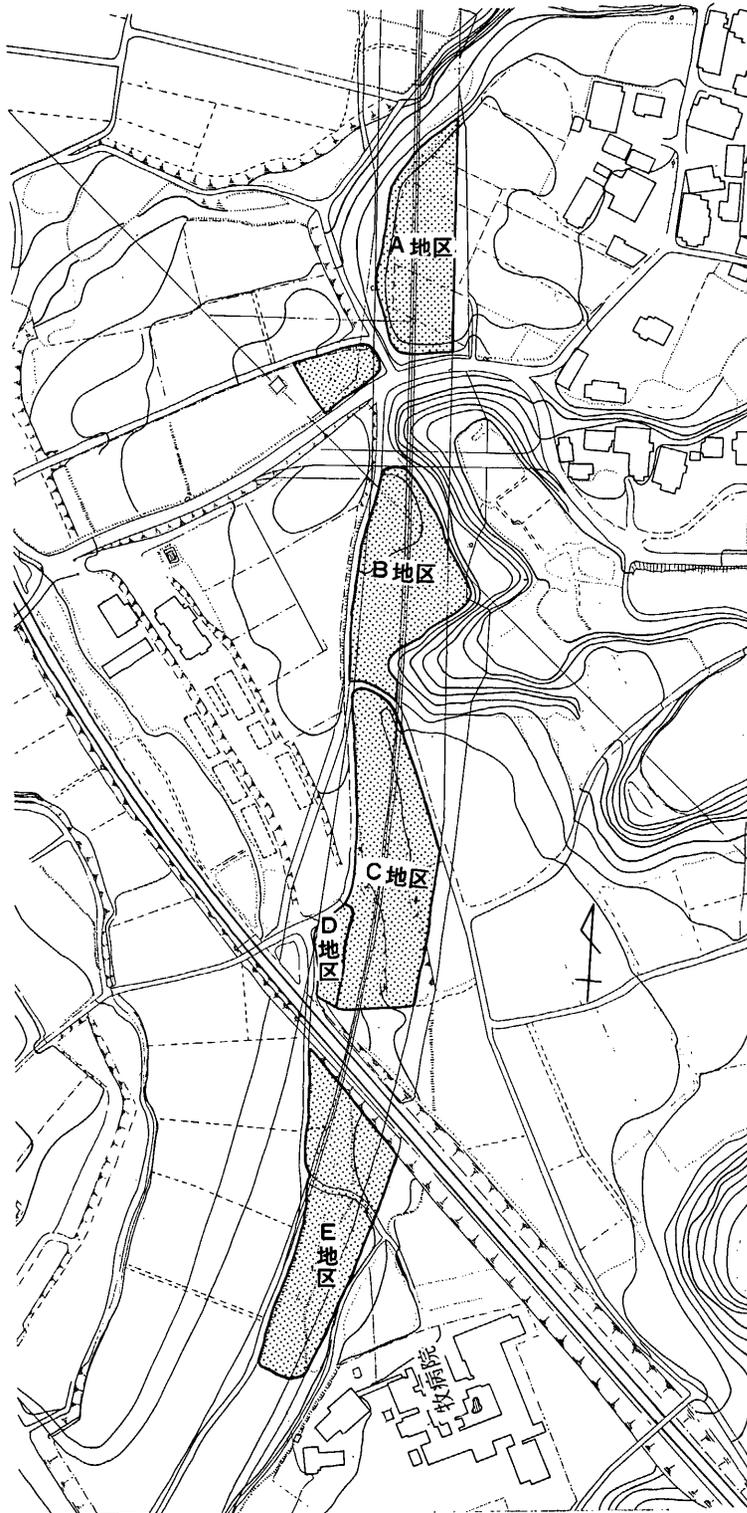
永岡遺跡は基山（標高404.5m）の東北に延びた花崗岩にお、われた山麓の低い舌状台地に立地しており、北及び東側には山口川・宝満川によって形成された沖積地が開け、それに接する突出した丘陵の北側に所在する。この丘陵は湧水による小谷が周辺に向かって走り、ヤツ手状の舌状台地群をなしている。現在の永岡部落はこの台地群の北端に営なまれており、遺跡は永岡部落の東南に占地し、標高は39～42mを数える。昭和44年12月に調査を実施した常松遺跡とは北東において接しており、地形的にも遺構・遺物の上からも常松遺跡の一部として考察すべきである。（註1）

調査は北西に開けた谷に沿って台地縁辺には、南北の細長い調査区を設定し、北より南に向かってA～E地区と仮称し実施した。その結果、常松遺跡よりの南端のE地区において弥生時代中期の溝状遺構と遺物を検出したのであるが他の地区においては皆無といってよいほど遺物も遺構も見出し得なかったのである。

各調査区について今少し説明を行うこととする。A地区は常松・永岡両遺跡の調査区で最も北に位置しており、B地区とは国道3号線より永岡の部落へ通ずる農道によって区分され、このA地区は調査が行なわれるまで、ブドウ畑として利用されており、上面は平坦に削平されてかもブドウ畑の諸施設のためかなり広範囲にわたって手が加わっている。そのせいか、当調査区においてわずかに弥生式の遺物と遺構と考えられるものの一部を検出できたのみであった。注目すべき遺物として1点であるが先土器時代と考えられるサヌカイトのブレード状の剥片が攪乱層より出土している。B地区は永岡部落の北で東に向かって開く小さな谷の奥づめに接する平坦な台地上に設定して調査を実施したが弥生時代の遺構・遺物は皆無であった。C地区はB地区の北で隣接し、永岡と常松両部落の中間に位置する北東へ延びる小さな舌状丘陵の基部にあたる地点を設定し、さらにC地区の西に一段低くなった小さな畑地をD地区として調査を行なったがB地区同様C・D地区においても成果を期待できなかった。ただC地区において、表土層下の黄褐色粘質土層の上面より、サヌカイト製の大型な尖頭器が一点出土した。先土器時代の包含層の有無を確認すべく粘質土層を掘り下げたが一点の剥片をも検出できなかった。

以上のようにA地区のごく一部をのぞいてD地区まで、包含層も遺構も皆無に近い状態であった。常松遺跡と何らかの関連をもつ遺構や遺物が多少なりとも存在していたと考えられるが、何度かの土地利用のため削平、消滅したものであろう。薄い表土層の直下には赤褐色ないし黄褐色をした花崗岩のバイラン土壤が続いている。

このようなわけで、永岡遺跡の調査の中心は、西鉄大牟田線と国道3号線の中間にあたる谷の奥に営なまれている水田に接する小さな台地上に占地するE地区におかざるを得なかった。



E地区の遺構・遺物について後で詳しく触れることにする。

45年の夏、二次調査として、国道3号線より永岡に通じる農道で以前道路の拡張工事の際、大形カメ棺が出土したというA地区の西南にあたる続きの台地をA'地区として実施したのであるが、弥生時代の遺物・遺構は全く検出できなかった。

註1 賀川光夫・他「福岡県筑紫郡筑紫野町常松遺跡報告書」別府大学文学部考古学研究報告書1 1970

第1図

永岡遺跡付近地形図(九州地方建設局原図)

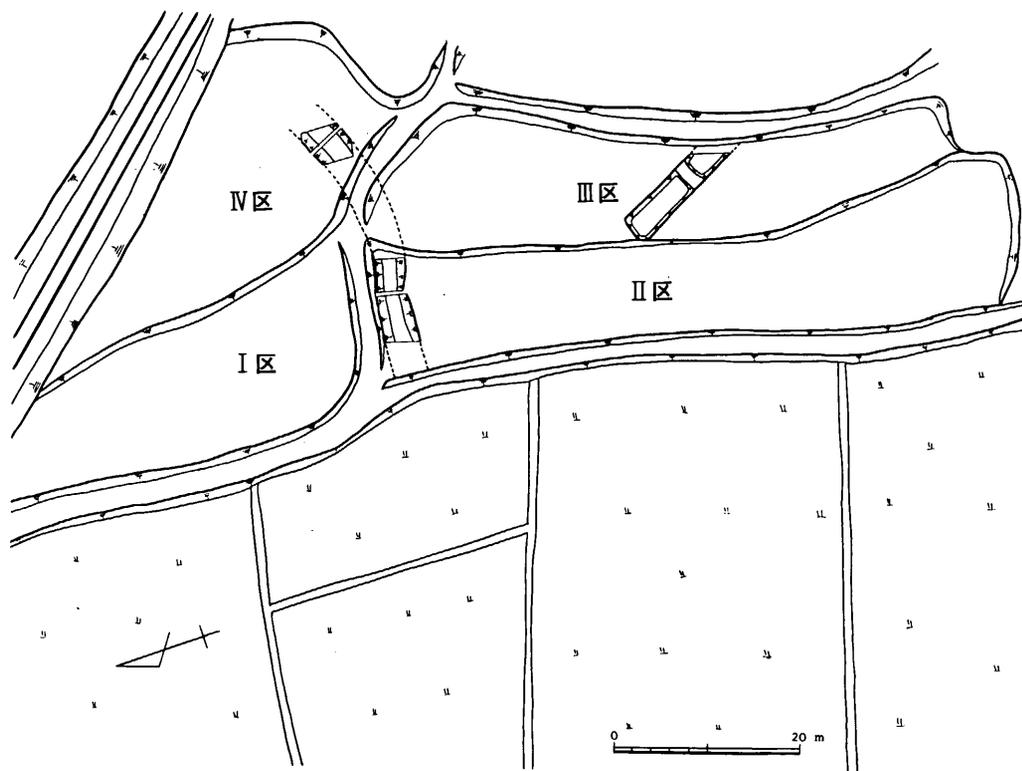
3. 遺 構

建設予定の福岡南バイパス10号遺跡（永岡遺跡）は、E地区においてのみ遺構が発見されたので、その部位について詳報をおこなう。西鉄大牟田線が永岡地区を通過する際、湯ノ上附近より常松地区に刻入する小谷に沿って進入する。この部位の小谷に接した位置にI区～IV区を設定して調査を進めた。すなわちI・II区は台地縁端の水田に接した地区、III・IV区は低台地上段、I・II区に接して東側に設けた。この地区のII・III・IV区において溝状遺構が発見され更にII区中央部において堅穴など何らの遺構をとまわず遺物（土器）多数が発見された。この土器群は、如何なる理由による堆積であるか明かでない。

次下溝状遺構について詳報することにする。

(1) E-II・IV区遺構（図版1(2)・2(1), 第3図）

湯ノ上附近より常松に向って永岡の西側を南北に通ずる小谷の東側台地縁端II区より、低台

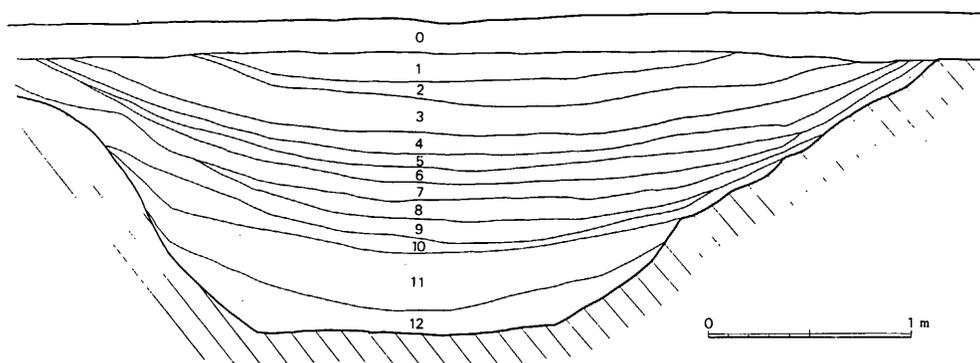


第2図 E地区地形及び遺構平面図

地上部Ⅳ区にむかって巾3.30m、深さ1.20mの溝が、西から東に向ってやや北への湾曲をみながら東西に延びる。この溝は東より永岡・常松の西台地に深く刻入している谷頭に接続する如く、ヤツ手状台地を切断する。

E-Ⅱ・Ⅳ区溝はその断面が5層に分類される。1層は褐色土層で、15cmの厚さの堆積を主に土師器を含む。2～3層は黒色土層（2褐色含）で25cm、3層には須恵・土師が含まれていた。4～7層は暗褐色粘質土層で、各層は若干含成分を異にするが大きく一つの層とみてもよい。遺物の包含がなく厚さ35cm。8～10層は黒色粘土層で、8層は粘性に乏しい。8・9層は弥生中期の土器を含み25cmの厚さで堆積されている。10～12層は暗褐色粘質土層で、厚さ40～50cmで弥生式中期の土器を多量に包含している。

出土遺物としては、以上の如くE-Ⅳ区における所感を述べた。大別すると、第1層においては土師・第3層では須恵・土師の共伴（須恵は坏・蓋坏の形式からⅣ-A期6世紀と推定される）。更に9・12層においては本遺構設置当時の遺物と推定される弥生式中期後半の土器多量が発見されている。



- | | | |
|-------------|--------------|--------------|
| (0) 表土層 | (5) 褐色粘質土層 | (9) 褐色粘質土層 |
| (1) 褐色土層 | (6) 暗黒褐色粘質土層 | (10) 黒褐色粘質土層 |
| (2) 黒褐色土層 | (7) 褐色粘質土層 | (11) 褐色粘質土層 |
| (3) 黒色土層 | (8) 黒色土層 | (12) 暗褐色粘質土層 |
| (4) 黒褐色粘質土層 | | |

第3図 E-Ⅳ区U字溝断面図

(2) E-Ⅲ区溝状遺構（図版2(2)・第4図）

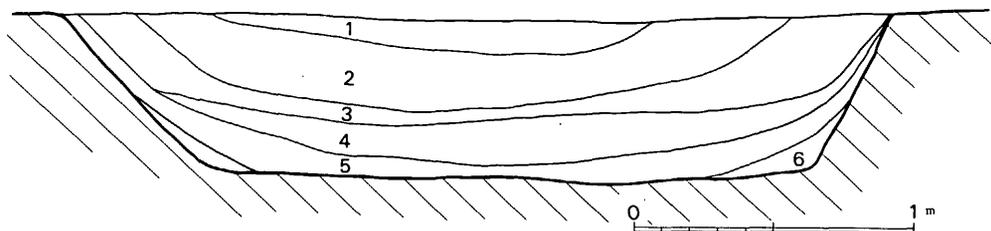
Ⅲ区の溝状遺構は、全長13mで、巾3m、深さ50～60cmを数え、湯ノ上から常松に向う小谷

の縁辺より北東に向かって延びている。Ⅱ・Ⅳ区同様常松地区の浸蝕谷と連続するものと推定されるが、調査では溝中の一部に堰の如き土塁状の掘り残しがある、それには柱穴状のピットが認められた。堰状の部分は巾170cm、高さ50cmの大きさで、掘り残し部々上面には深さ20cm程のピットがあるが、この堰状掘り残し部分の性格は明らかではない。又溝状遺構の南側は一段高い牧病院の方へ延びるものと予想されるが、北側は一段下のE-Ⅱ区においては認められず、Ⅱ区とⅢ区の境において溝状遺構は終了していることが確認された。

E-Ⅲ区の溝状遺構の層序は次の如くである。

1～3層は黒色土層で厚さは35cm、2層に須恵器を含んでいる。4・5層は黄褐色粘質土層で、弥生式土器を含み、厚さは20cmである。6層は黒褐色砂質土層で、堆積後流出削平されたと考えられ、溝の両側にのみ残存するが溝造成の際両側より落下堆積された土層と観察することができる。

出土遺物としては、3層より須恵器片が、溝底上部より弥生式土器が発見されている。この両者は、Ⅱ・Ⅳ区の溝より推定すると、3層は6世紀・5層は弥生式中期末と判ぜられるが、細片のため、特徴のない部位の土器であるため明確でない。



- | | |
|-----------|-------------|
| (1) 黒褐色土層 | (4) 黄褐色粘質土層 |
| (2) 黒色土層 | (5) 黄色粘質土層 |
| (3) 黒褐色土層 | (6) 黒褐色砂質土層 |

第4図 E-Ⅲ区溝状遺構断面図

(3) 溝についての考察 (第5図参照)

E-Ⅱ・Ⅳ区における溝の3層からは、須恵器が、12層からは弥生式中期後半の壺(第7図12)が出土している。出土遺物から溝の構築年代はほぼ弥生時代中期後半か、それ以前に求められるであろうが、弥生前期以前の遺物は認められず、常識的には弥生中期の遺構とみてよい。

溝の性質は計り知れぬが、およそ農業共同体社会における集落の構造に関連した遺構とみられるので、その存続には注目すべきである。決め手としては、溝上層部位の土師・須恵の存在であるが、6世紀頃と推定される須恵器の推積は、現在の表土より50cm弱であって集落の機能を果たしたとは考えられぬ。ここに共同体崩壊後、古代国家形成の問題にかかわりえる古墳時代

形成期の課題があるといえよう。

さてそのような問題を、本遺跡溝遺構で考えるとすれば、層序的考察を必要とする。もともと層位というのは、人意的な遺構の観察によって序列を考えるわけであるが、遺構の一つ一つがどのように変化したかということも当然考察の対象となる。そこで、溝が何時造成され、そして何時放棄されたかということと同時に、溝が集落内で果たした役割が何であるか、問題は多くある。

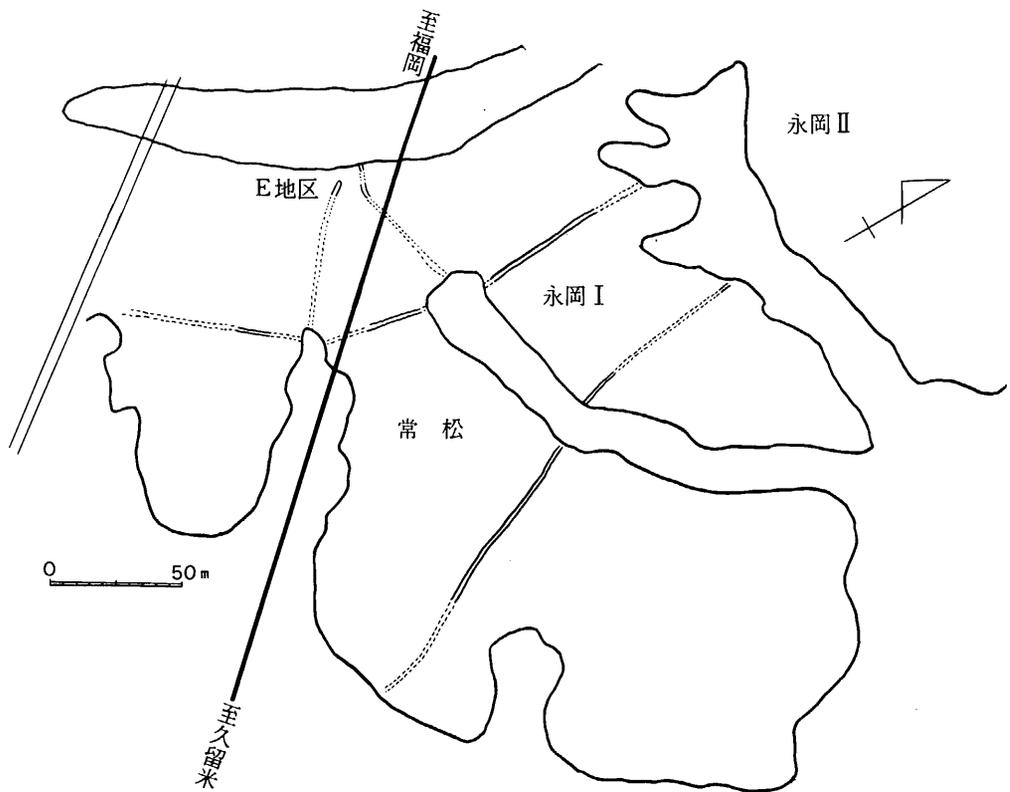
溝内部に堆積した土層と、それに含まれる遺物を大別すると、前述の如く二時期に分類される。第1は、Ⅱ・Ⅳ区、Ⅲ区ともに溝が巾狭く深さも浅く、そのような溝は、常松・永岡のヤツ手丘を一線に貫く大溝と比すれば規模が小さすぎる。特に本遺跡の八ツ手状の主丘には、いくつかの浸蝕谷を有し、それぞれの谷を結んだ大溝の一つは、諸田・常松・永岡と4丘を串刺しするような状態で1kmに及ぶ。本遺跡の溝は、これを南北に小さく交錯する如きもので、主溝に対する枝溝ということになる。したがって、主溝と枝溝とは、当時の集落を考えるうえで重要であるが、この溝は、弥生式の土木工事の発達と、土城的性格をもった小国家的集落を考慮する上で重要であると同時に、金属器文化の採用による拡大形成的社会を考える必要上、その構造は大きな意味がある。防塁の意味か、氏族共同体の単位をあらわすものか明らかでないが、弥生式の大集落の形成にしばしばみるところであって、興味深い。今後この性格を明らかにしなければならぬが、その意味では大規模発掘が注目される。

さて、年代的考察であるが、溝底部に推積する土器をもって年代を考えれば、前述の如く弥生式中期ということになる。さらにその存続時期は、その上位の層に遺物が存在せず表土近くに須恵器と土師器が存在していることから、弥生中期の溝造成後、この台地から集落が移動し、次第に溝は堆積した土壌で埋まったことになる。少なくとも古墳終末の時期に、集落が営まれたことは、常松附近の遺構で明らかであるので、この時期に台地の再利用がおこなわれる。

この古墳時代には、溝は若干の起伏ある地形としての状態で、雨水などの流路となっていたが、勿論集落の機能を果たす如きものではありえない。おそらく、古墳時代の集落は、少数の血縁共同体の如き集団ではなく、地縁的なつながりや、もっと広い生産性社会の一つとして、集落の外郭を溝や塁で防御する必要がなかったものと推定される。集落の拡大にともなう集落構造の変化であろう。したがって、福岡南バイパス10号遺跡の発掘や、それ以前に実施された永岡・常松地区の溝は、弥生式中期における部落単位の社会構造にもとづく集落の構造であって、その後、集落の拡大と灌漑の発達により、支配力の拡大期においては、条溝の性格が必要以上に強調されることはなかったものと推定される。

最後にこれら条溝の性格はいったいどのようなものであったろうか。常識的には排水のためであったろうが、Ⅲ区の如く堰の如きものが台地縁辺の傾斜地の溝内にみられるとすると、多少の溜水をこの溝に留めることも考えねばならなくなる。また、同じ地区に二本の溝の併列状

態も考慮せねばならず、単に排水ではなく、濠としての存在も当然の如く考えねばならぬ。これが濠という文字をあてて防御的な意味があるとすれば、南北に交錯する濠が台地の上に存在し、文字通り「土城」的性格の集落が形成されることになる。弥生式中期の遺跡がすべて「土城」的性格のものであるということでは勿論ないが、須玖遺跡をはじめ、近時緊急に調査されつつある福岡平野南部の高地立地の遺跡には、多く中期に占地され、条溝や環溝によって集落を防御するような状態の遺跡が多く存在する。周溝や条溝の問題を再び考察するような問題に対して検討を加えるべきであろう。



第5図 常松・永岡 遺跡の地形及び溝状遺構略図
(常松遺跡調査報告書より引用)

4. 遺物

(1) 土器及び土製品

本遺跡の遺物は出土数が少なく、全体としては遺構にも恵まれることなく終了した。その広大な面積から散布状態で発見された土器は弥生式土器中期後半に位置するものが多い。そして、その大部分は、溝内の出土であったり、台地縁辺に集積された状態であって二次的堆積のものが多い。従ってまとまりのあるものは少なく、器形復原に時間を要した。石器は、これも二次的位置から無土器時代の剥片など少数が発見されたにとどまり、顕著なもの出土はなかった。全体としては、重要遺跡の周辺部に対する調査であったことが遺物の性格としてあらわれているのである。

甕形土器（第6図①～④）

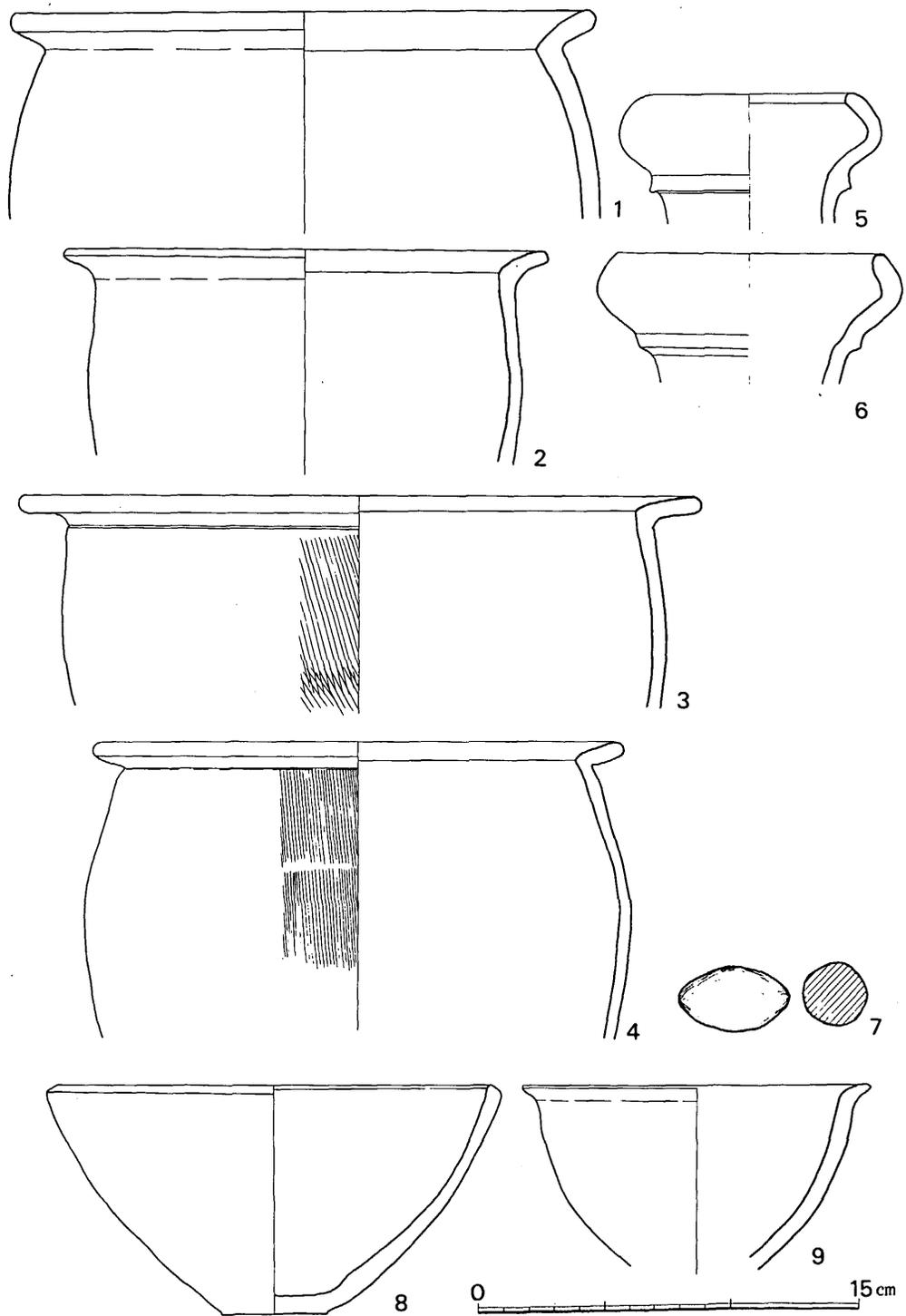
甕形土器は口縁部断面が「く」の字形を呈するものと「L」字形を呈するもの（③④）に分けられる。また最大直径が口縁部にあるもの（②③）と、胴部にあるもの（①④）に分けられる。①②においては器面調整による痕跡は見られず、③④においては器面全体に刷毛目を有している。なお③においては口縁部直下に沈線が一本施入されている。胎土はすべて良好であり焼成はよい。色調として①は茶褐色、②は赤褐色で土師器的な色彩がみられる。③は黒褐色で④は茶褐色をしている。なお、①②はII区赤褐色粘質土層、③は同じく基盤直上、④はIV区溝底より出土。

長頸壺形土器（第6図⑤⑥）

口縁部はいわゆる「袋状」になっており、口縁部直下に凸帯を一本有している。なおこの凸帯は貼り付けによるものであろう。口縁部直径は⑤が8cm、⑥が10cmで⑥の方が⑤に対してやや開きぎみである。なお⑥の土器の口縁部内側凸帯附近には段がみられる。胎土・焼成はあまり良好とはいえず、色調は黄褐色である。⑤はII区基盤直上で⑥はIV区溝の第5層より出土。

鉢形土器（第6図⑧⑨）

口縁部直口のもの、外反するものとがみられ、胴部はやや膨らみをもちながら底部の方へ向かい、底部は小さな平底をなす。口縁部は大きく開き、口縁部直径は高さの約2倍の比率を示している。なお、⑧の口唇部は平坦面をなし、⑨の口縁部は接合して「く」の字形を作ったのではなく、屈曲させたものであろう。胎土・焼成は比較的良好で、色調は黄褐色をしている。⑧⑨ともにII区赤褐色粘質土層より出土。



第6図 遺物（土器及び土製品実測図）

壺形土器（第7図⑩⑪）

口縁部は大きく外反し平坦面を有しているが⑩はいわゆる「鋏形」を呈している。頸部には凸帯を有し、この凸帯は貼り付けによるものである。胴部は欠損しているが大きく張るものであろう。⑩はその製作過程として口縁部を外反させ、その内側に平坦面を有するように粘土を貼りつけている。⑪の凸帯のすぐ上に内側にえぐり込んだように薄くなっており、この凹みは粘土接合部において生じたもので凸帯はその部分の補強の意味もあるのではないだろうか。胎土はともに砂粒を多く含み、焼成はよい。色調は赤褐色である。ともにⅡ区基盤直上出土。

広口壺形土器（第7図⑫⑬）

口縁部は「く」の字形を呈し、胴部が大きく張った壺形土器である。口縁部直径は高さとは同じで、最大径は胴部の中央部にある。口縁部には2個一対で向かい合った計4個の穿孔が見られる。これは内側から外側に向かって穿孔されており、孔の大きさは⑫は直径0.5cmであり、⑬は0.4cmである。この孔はおそらく紐を通すためのものであろう。底部は平底であるが、⑬はやや上げ底になっている。⑫の胴部内側には器面調整のための指による凹凸がみられ、内側ほどではないが表側にも数ヶ所みられる。なお一部分ではあるが内側に炭化物の附着したところがある。⑬の底部内側には粘土接合のためと思われる肉厚の部分が見られ、また表面全体と口縁部内側部分には丹塗りが施こされている。胎土として⑫は砂粒を多く含み、⑬はやや少ない。焼成は⑫はあまり良好ではないが⑬は良好である。ともに黄褐色の色調をしている。

⑫はⅣ区溝底より、⑬はⅡ区赤褐色粘質土層より出土。

高坏（第7図14）

高さが22cmの高坏で口縁部は平坦面を有しやや上り気味で「鋏形」の断面をなしている。坏部は深い鉢形を呈し、脚部は坏部に比べてわずかに高く、裾はあまり広がらない。胎土は砂分を多く含み、焼成も悪い。色調は黄褐色である。Ⅱ区赤褐色粘質土層出土。

投弾（第6図⑦）

長さ4.5cm、直径2.5cm、重さ25gの紡錘形をなしている。胎土はよく、研磨されており焼成も良好である。色調は茶褐色である。Ⅱ区赤褐色粘質土層出土。

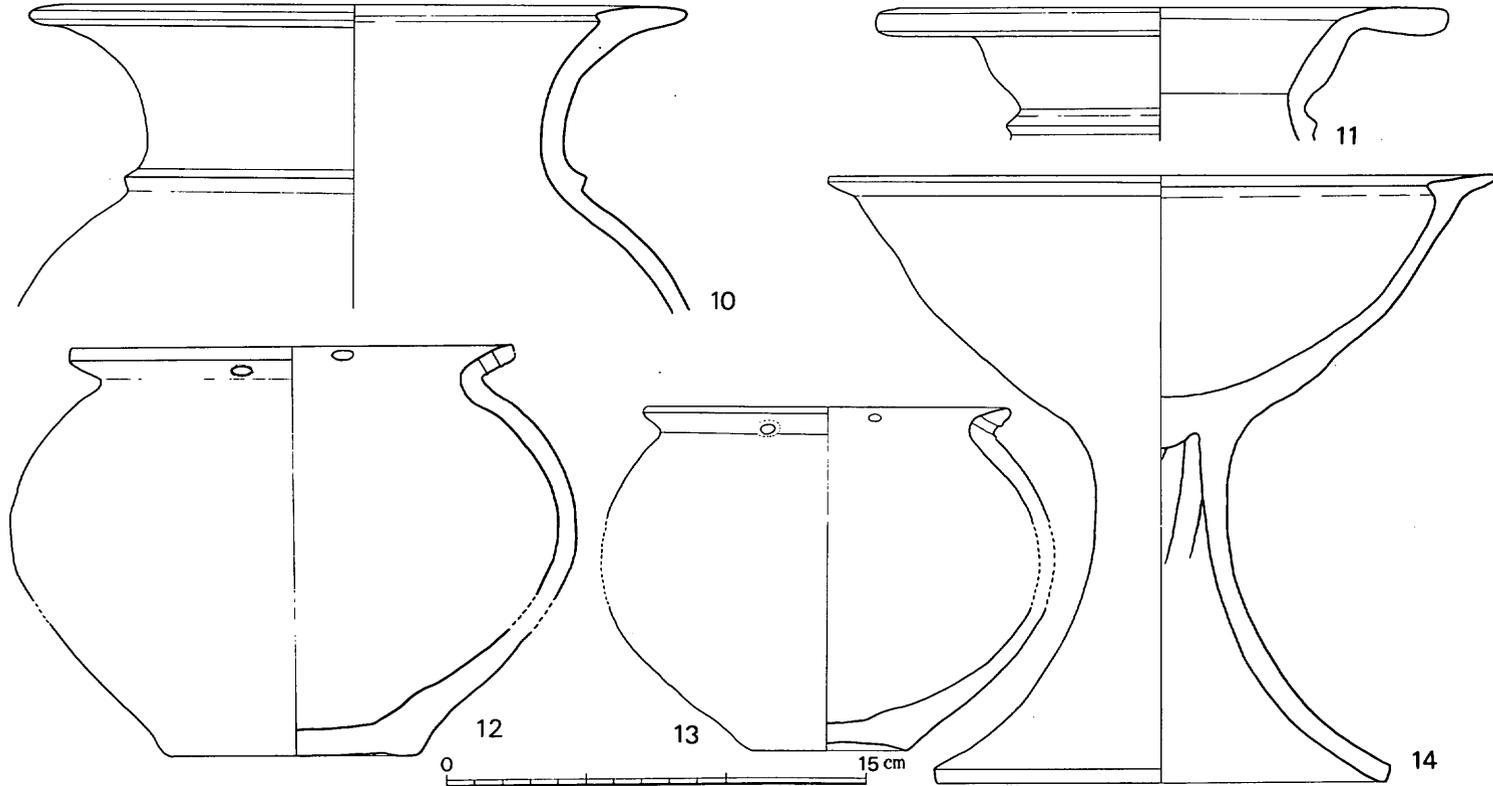
壺形土器（図版3(1)の最下）

この壺形土器は肩部のみで、凸帯を2本有している。器形は定かではないがおそらく板付遺跡出土の壺形土器（註1）に類似するものと考えられる。器表面には丹塗りがみられる。胎土・焼成ともに良好で色調は赤褐色をしている。Ⅱ区赤褐色粘質土層出土。

須恵器

E-Ⅳ区溝第3層より出土したもので、坏身と坏蓋のセットである。坏身の最大径は13cm、口径11cm・高さは4.5cmである。

坏蓋の直径は12.8cmで高さは4.3cmをはかる。坏身の口唇部はあまり「そり」をもたず、短



第7図 遺物（土器実測図）

かくて須恵器第ⅣA期の特長を示している。なお底部には3本の平行した長いへら描き記号が施されている。

以上述べたE地区における出土遺物の時期は、須恵器を除いては弥生中期中葉から後葉のものであろうと考えられる。須恵器は先に述べたごとく古墳時代須恵器第ⅣA期に属するものである。

註1 森貞次郎・岡崎敬 「板付遺跡」 日本農耕文化の生成所収 1961年

(2) 石 器 (第8図)

今回の永岡遺跡で検出した石器類は非常に少なく、溝状の遺構と弥生時代中期の比較的まとまった土器片を出土したE地区においても石器類は数えるほどしかなかった。石器類が極めて少ないことをどのように解釈すればよいのか、またここに図示したE地区出土の2点の石器を共に弥生時代中期に属するものと考えてよいのかも不明である。

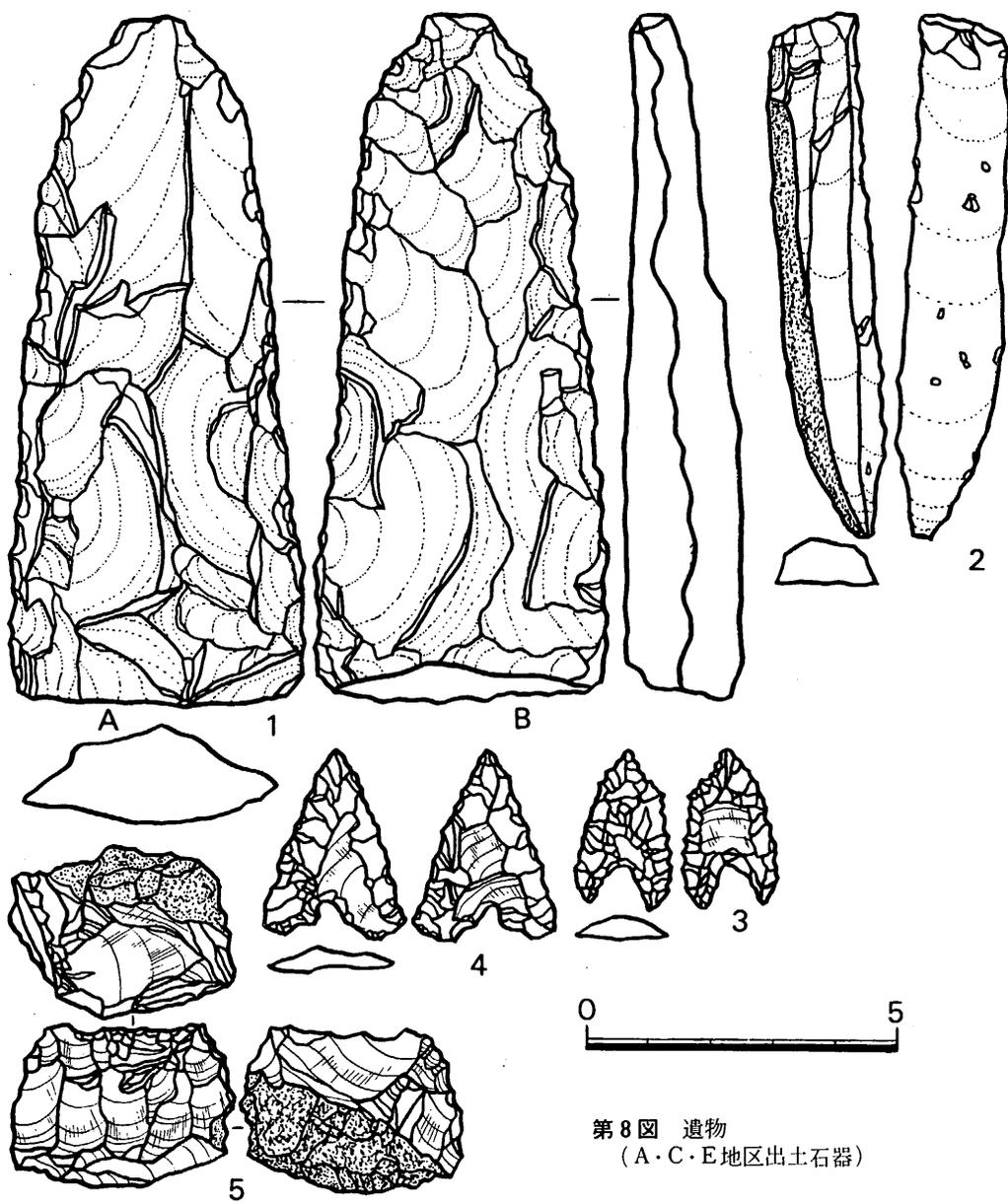
以下5点の石器類について報告を行うこととする。

④ 黒耀石製の打製石鏃である。やや大形で側辺が一直線にのびる形の整った三角形を呈す。二次加工の剥離は両面とも両側辺に沿って施されており、中央部近くに大きな剥離面を残している。素材の剥片が不定形のためか、横断面は屈曲している。E-III地区の溝内の出土である。

⑤も同じくE-III地区であるが表土層より出土している。黒耀石製の小石核で、一面に上端からの5つの剥離痕が残っており、いずれの剥離面も長さに比べて幅が広いという共通性を持っている。打面と逆の面にも2つの剥離痕がみられこの剥離は石核の表皮を剥取するためのものと考えられる。縄文時代・弥生時代の普遍的な剥片石器を考える時、この小石核から剥離された石片が素材となり得る石器を推測するのは困難なように思える。パティナーはあまり進んでいないようであるが、先土器時代の細石刃文化との関連を考えなければならない石核なのであろうか。

③ D地区における唯一の黒耀石製の石鏃である。先端部近くの両側辺に肩をもち、基部の抉りの深い脚部はやや内側に弯曲する傾向をもっている。一面は周辺よりの小さな加工がおよんでいるのに対し、もう一面の加工は周辺に沿ってのみで、中央部に比較的大きな主要剥離を残している。このような加工の結果、横断面は平坦なカマボコ状をなしている。2層と考えた褐色土層中よりも出土である。以上の石器の他、永岡遺跡の調査で特記すべき石器としてサヌカイト製の尖頭器とブレード状の剥片がある。

①はC地区で出土した唯一の石器で表土下の赤褐色粘質土層上面より出土したことは前に述べた通りである。基部を3分の1程と先端のごく一部を欠損しているため全体の形態を正確に知ることはできないが恐らく柳葉形をなすものと推測される。現長11.0cm, 最大幅4.5cm, 厚さ1.7cmとかなり大形である。加工は表裏の全面におよんでいるがその剥離技術に相違が観察される。すなわち(A)における加工はステップフレイキングによる大まかな剥離が両側および先端部の方向から施こされているのである。ステップフレイキングによる大まかな剥離作業はこの石器を製作する際、大体の形を整える初期の段階に行なわれたものと思われる。これに対して(B)の加工はプレッシャーフレイキングによるものと考えられる極端に薄くて幅広い大きな剥



第8図 遺物
(A・C・E地区出土石器)

離面が側面に沿ってほぼ斜めに並らんでいるのである。このように表裏異なる大きな剥離面によって整形された後、さらに両面の側面に沿って局部的な小さな剥離面による調整を施こして仕上げているようである。この尖頭器に施こされているおよそかけ離れた剥離技術が一点の石器の両面に観察される事実は石器製作技術を考える際の大きな問題点となるであろう。と同時に、この表裏の剥離技術の違いはこの尖頭器の素材と関連するのではないかと考えている。す

なわち、この尖頭器は縦剥ぎか横剥ぎかは不明であるがいずれにせよ大きなやや厚味のある剥片から製作されたものであると推測するのである。凹凸が予測される表面(A)にはステップフレイキングによって剥離を行い、平坦な主要剥離面(B)にはプレッシュフレイキングを施して製作していると考えるのである。当遺跡出土の尖頭器は佐賀県多久市の三年山・茶園原遺跡出土のそれに関連を求めなければならないであろう。(註1) 多久市の両遺跡を含めて、九州に於ける尖頭器文化の拡がりや編年の位置が十分明らかにされていないだけに、それらに極めて類似した尖頭器が福岡平野と筑後平野の中間地帯の遺跡で発見されたことの意義は大きいと考える。熊本県の柿原遺跡の資料とともにその間の空白地帯を埋め得る可能性の一端を示めず資料といえよう。また、隣接する常松遺跡(註2)では永岡遺跡の尖頭器とは異なる木葉形をした小形の尖頭器を一点であるが検出しているので一層興味深い問題へと展開できるであろう。

②はA地区の一つのピット内より出土した石器である。このピットについては遺物が不明なため時期を決定できなかったが、他からの流れ込みと考えられる遺物である。サヌカイト製で、鋭い両側辺が並行にのび、中央部には打面近くでは3本、下半部では2本の稜が真直ぐ走りあたかも真正の石刃と考えられる好資料である。打面は小さく、2つの剥離面(あるいは摂理面)から成り、その交わった稜を打撃点としているようであるが定かでない。

①の尖頭器もかなり風化しているのであるが、それと比較しても一見して区別がつかないほどパティナは進んでいる。石質における風化の度合がそのまま時間差に結びつくと考えられるならば、尖頭器よりも明らかに古い時期を想定しなければならないであろう。

註1 ①杉原荘介・戸沢充則「佐賀県多久三年山石器時代遺跡について」日本考古学協会第26回総会研究発表要旨 1960

②戸沢充則「尖頭器文化」日本の考古学I所収 1965

③鎌木義昌 間壁忠彦「九州地方の先土器時代」日本の考古学I所収 1965

註2 桶 昌信「先土器時代の常松遺跡」福岡県筑紫郡筑紫野町常松遺跡報告書 1970

5. 周辺遺跡の調査（その1）

はじめに

今回の周辺調査は永岡遺跡の1次・2次の発掘調査に前後して春・秋の2回にわたり一週間を費いやし実施したものである。踏査の主眼は、地形的には筑後平野の北詰にあたり宝満川に向って東西から延びている標高30～80mの舌状の洪積台地や花崗岩の丘陵縁辺に置いた。また時期的にはこの地域で断片的にしか知られていない先土器時代および縄文時代を特に考慮した。これは今回永岡遺跡と44年12月に調査を行なった常松遺跡の立地、出土遺物より得た一つ指針である。(註1) すなわち、永岡・常松両遺跡は宝満川に向って開けた標高30～55mの花崗岩の舌状台地に隣接して立地する弥生時代中期の大遺跡であり、常松では局部的であるが福岡西南部において貴重な縄文時代晩期と先土器時代の包含層、遺物を検出することに成功し、永岡においても先土器時代の遺物が確認されたのである。このようなわけでこの報告では我々が実査した遺跡の中で、永岡・常松遺跡で改めて提出された問題に関連して特に先土器時代および縄文時代の遺跡を意識的に抽出して、その遺物を考察することにした。

宝満川は宝満山(標高869m)に源を発し、東西の丘陵地帯を縫ってほぼ南北の方向に流れをとり、久留米市の北で九州最大の大河である筑後川に注いでいる。福岡県の地質図によると、宝満川及びその支流の沖積地に接する丘陵は、宝満川の西では主として嘉穂型黒雲母花崗岩より成っており、これに対して東側は洪積層の舌状台地によって形成されている。今回の踏査を行なった40数箇所の遺跡の大部分は標高30～50mの宝満川に向って広がる花崗岩の丘陵縁辺もしくは30～70mの洪積層の舌状台地に占地しているのである。

宝満川流域の考古学的調査は先学によって早くから進められており、特に弥生時代・古墳時代に関しては地元の朝倉高校郷土部によって多大な成果をおさめており(註2)一方先土器時代の遺跡・遺物に関しても松岡史氏、久保山教善氏等によって注意が払われているのである。今回の調査についても松岡・久保山の両氏や朝倉高校の高山明先生をはじめ朝倉高校郷土部の生徒諸君に大変お世話になった。紙面を借りて感謝の意を表したい。

津古上ノ原遺跡(第9図 1～22)

遺跡 西鉄大牟田線の津古駅のすぐ南側に原田方面より東の宝満川に向って宝珠川が注いでいる。この宝珠川をはさんで南北にはいり込んだなだらかな花崗岩の丘陵地帯が続いている。北方の低い丘陵上には弥生時代より古墳時代にかけての貴重な遺跡である津古内畑遺跡(註3)が所在し、逆の上ノ原遺跡の丘陵に続く南側にも津古遺跡が立地している。津古上ノ原遺跡は小郡町の北端に位置し宝珠川南側の標高30～40mの平坦な花崗岩丘陵上に占地しており、上面

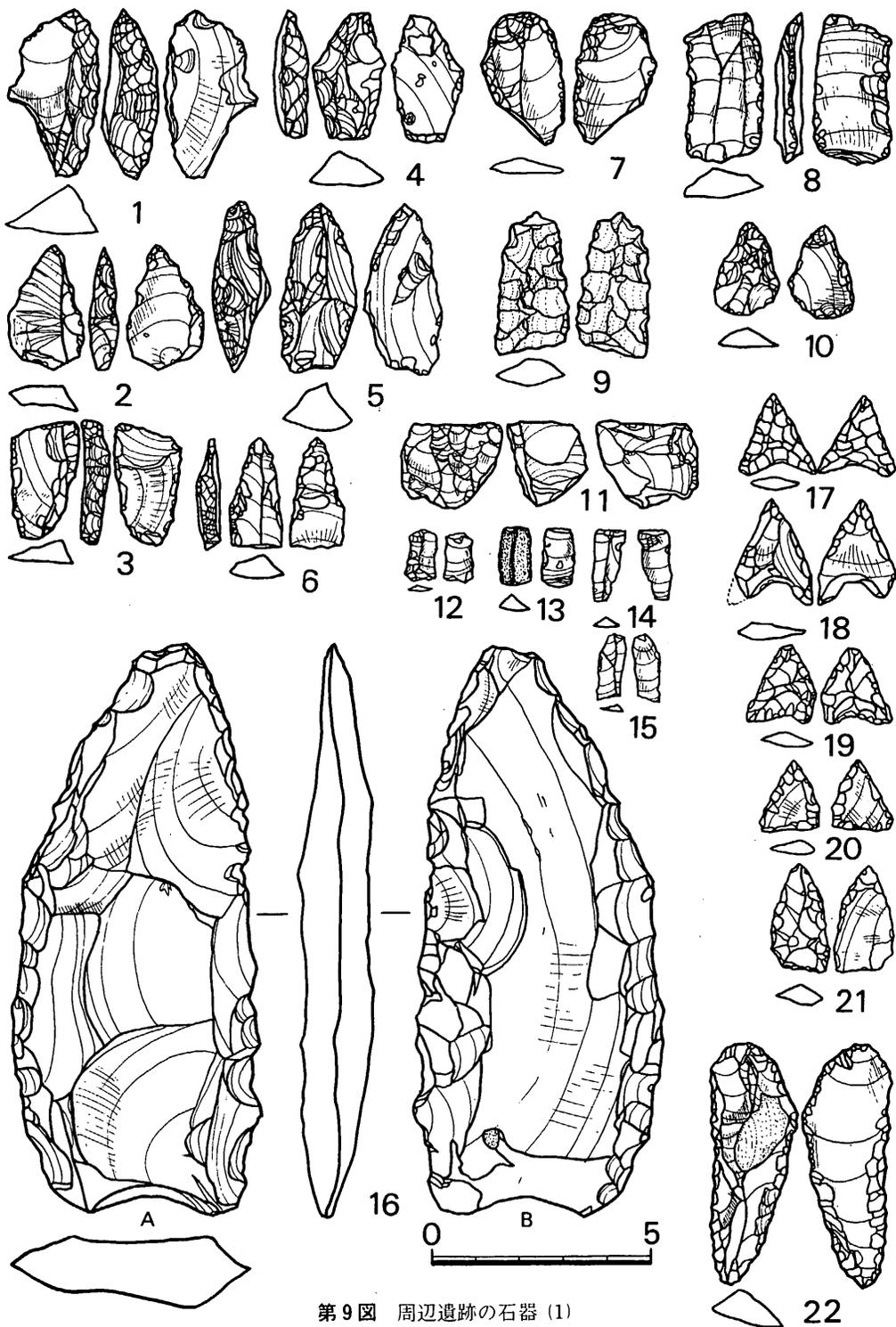
は畑地利用のため削平整地されている。そのためか、遺物の散布はかなり広範囲にわたっており、時期的にも先土器時代から古墳時代までの永い期間営なまれているようである。多量に採集される黒耀石の剥片や石器にはほとんど例外なく表面に擦痕が観察されそれも剥片の稜やエッジの鋭い部分にとどまらず、主要剥離面などの平坦な面にまで顕著に見られるのである。これらの擦痕は遺物がかなり以前から包含層より地表面に露出していた事を示めすものと思われる。また遺物の一部がより高い南側の台地より流れ込んだ2次的堆積物である可能性を想定させるのに十分である。

遺物 剥片の数量に比較して石器類は意外と少なく、先土器時代の遺物と考えられるものにはナイフ形石器、尖頭器、スクレーパー、細石核、細石刃などがあるがその数は必ずしも多くない。先土器時代以外の石器類としては石鏃が多く破片を含めて25点を数える。この他に黒耀石、サヌカイトの剥片に2次加工を施した一種のスクレーパーがあり、風化の度合からも明らかに先土器時代のそれと区別出来るようである。一方土器片では土師器の他はあまり見当らず、僅かに弥生時代前・中期と明確ではないが縄文時代後・晩期と思われる風化した土器片が存在する程度である。以下実測図に従って代表的な石器類について述べることにする。

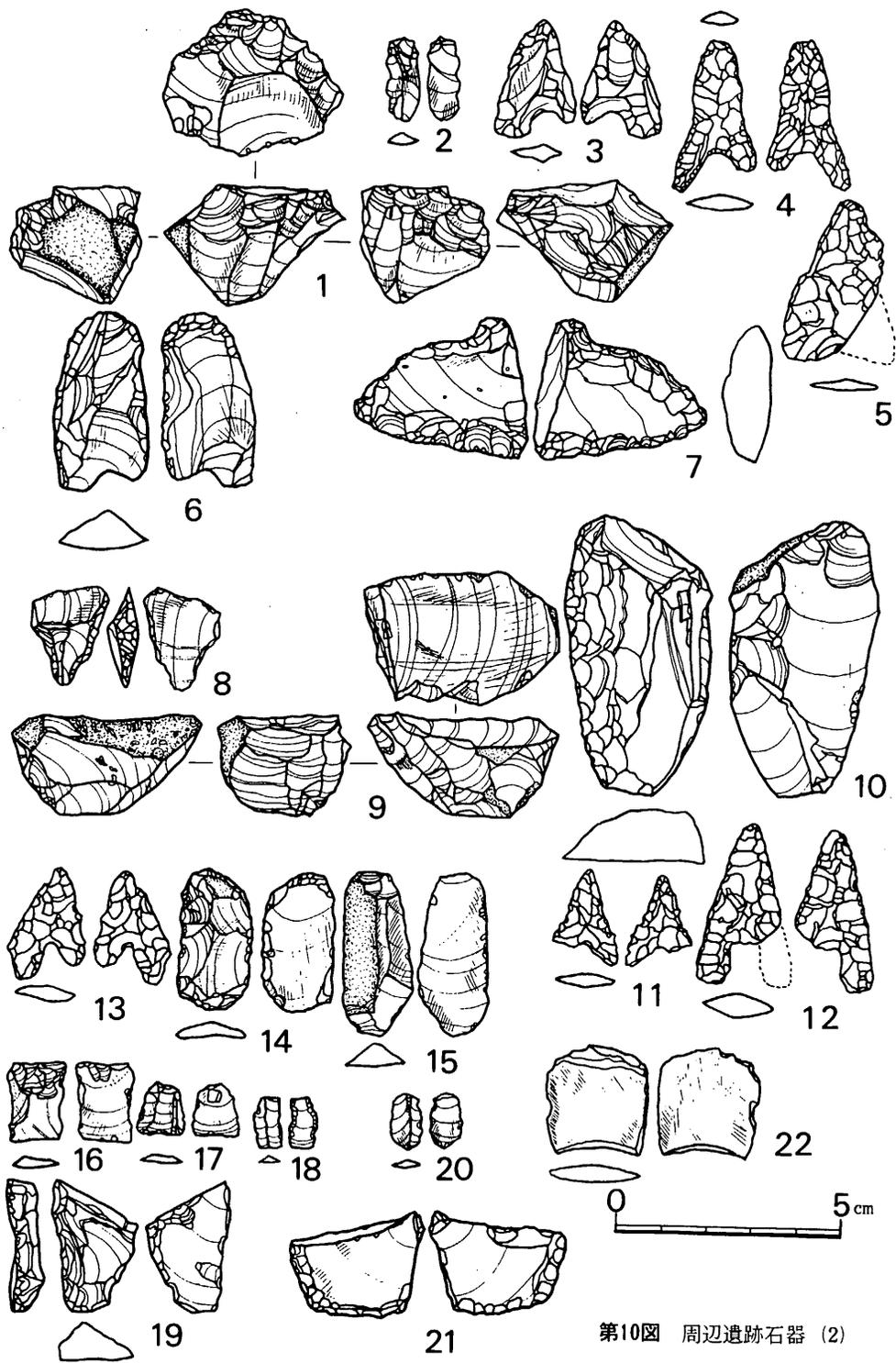
①ナイフ形石器 硬質の安山岩製で、厚味のある横長の剥片を素材に打面の部位に主要剥離面側から整った2次加工を入念に施して背部としている。刃部は横長剥片の打面とは逆の一边をそのまま利用しているが、刃部側の基部にあたる下半部は直角に近いブランティングによって抉入しており舌部を形成している。刃部には使用によると考えられる刃こぼれと破損が観察される。厚味のある横剥ぎの剥片を素材に用いている事や、打面側を背部としさらに刃部側の一部にもブランティングを施している事など、いわゆる切出形石器と呼称されるものに極めて類似している。西北九州で一般的な九州型ナイフ形石器(註4)とは著しく異なっている。石質が安山岩製であることも考え合せると瀬戸内の宮田山(註5)井島遺跡(註6)出土のナイフ形石器・切出形石器の中にその好例を見出すことが出来る。③のナイフ形石器と共に瀬戸内との何らかの関連を示す石器と考えられる。また、常松遺跡において縄文時代晩期の包含層下の赤褐色粘質土層中より出土したサヌカイト製のナイフ形石器(註7)と形態および加工の方法は著しく似ており、特に刃部側基部の舌状の作りは全く共通している。ただ常松の場合は縦長剥片が素材となっているので、この縦長、横長という剥片の違いと形態・技術の類似をどのように処理すればよいのか大きな問題である。

②は黒耀石製で縦長剥片の側面にナイフ形石器の背部と考えられる2次加工を行った石器であるが、一般のナイフ形石器の加工と比較すると粗雑な感じをうけ、形態的にも問題が残る資料である。

③は黒耀石製のナイフ形石器であるが、横剥ぎの剥片を素材としている点がまず注意される。①の横剥ぎ剥片の主要剥離面と反対側の面では上端からの比較的大きな縦長の剥離面が見られ



第9図 周辺遺跡の石器 (1)
 [1~22 津古上ノ原]



第10圖 周辺遺跡石器 (2)

るのに対しこのナイフ形石器の素材である横長剥片では主要剥離面の反対の面も横剥ぎの剥離面より成っているのである。背部の加工は剥片表面の稜が残されていない程、打面側に入念なブランディングが施こされているのである。上端の約三分の一と下端のごく一部を欠損しているが、縦側面の翼状彎曲を知るのに充分である。横剥ぎの翼状の剥片それに施こされた打面側のブランディング等はあたかも瀬戸内技法の系統を引くナイフ形石器を彷彿させるのである。大きさは国府型・宮田山型ナイフ形石器に比較すると小形であり、これは黒耀石製であるという素材の相異に起因するものであろう。ただ一点の表採資料でしかも明確な瀬戸内技法の系統を引く剥片や石核が検出されていない以上、国府型、あるいは宮田山型ナイフ形石器と断定することは出来ないであろうが、地理的に密接な関連のある九州北部の資料だけに¹あえて瀬戸内地方との類似を指摘したいのである。(註8) 瀬戸内海地方における古い時期の一群である瀬戸内技法や国府型ナイフ型石器との直接的関連は別にしても九州において、横剥ぎの剥片を素材に打面側にブランディングを施したナイフ形石器の存在は明らかであり、今後宮田山、井島遺跡などとの関連が問題にされるべきと考える。同時に縦長剥片を截断したような九州型ナイフ形石器群の系統との関係を追求しなければならないであろう。特に九州型ナイフ形石器の始源と終末に大きな問題をかかえていると言えよう。

④ 黒耀石の剥片を素材に一側辺に二次加工を施した石器で一種のナイフ形石器と考えた。しかしながら一般のナイフ型石器のブランディングに比べてその剥離面は比較的大きくしかも角度が鋭角を示すので背部とするには問題である。刃部側の小さな剥離面の存在についても同様である。

⑤ 厚味のある黒耀石の横剥ぎ剥片を用い、打面側の一側辺に二次加工を施して背部を形成しており、その背部の加工は上下両端に集中している。刃部は打面側とは逆の第一次剥離の鋭い一辺を利用している。

⑥ 黒耀石製のナイフ形石器で、断面が三角形をなす縦長剥片を素材に一側辺に沿って垂直に近いブランディングが施こされている。三分の二程を欠損しているが、恐らく両端が尖る柳葉形をした九州型のナイフ形石器である。主要剥離面の一端に両側辺からの二次加工が行なわれているので、天地逆に考えて調整の施されている一端をこのナイフ形石器の基部とすべきかも知れない。

⑦ ⑧はいずれも黒耀石製の形の整った縦長剥片で、側辺に沿って小さな二次加工の剥離、あるいは使用痕と考えられる刃こぼれが観察される。表採資料であるため表面の風化の進み方をのぞいては先土器時代の遺物という確証はなく、形態的にもナイフ形石器ともスクレーパとも決め難く、一種の刃器と考えておきたい。⑦については②と極めて類似した形態を示すが、風化の度合や打面の違い—②では非常に小さく調整されているのに対し⑦は大きな平坦打面をそのまま残している—が指摘できる。

⑨ サヌカイト製の両面加工の尖頭器。先端の一部と下半部を欠いているため現長は3cmと小形であるが、縁は直線的に延びているので恐らく8cm前後の柳葉形をなすものと考えられる。加工は表裏共全面にわたっており、断面は凸レンズ状を呈す。時期については弥生時代の石槍とする考え方もあろうが、当遺跡で得た弥生時代と考えられるサヌカイト製石鏃のパティナーとは全く違って深く、さらにほぼ斜めの並行剥離の技術がみられる事から先土器時代のものとして判断した。九州内におけるサヌカイト製の尖頭器については現在までのところ、佐賀県の三年山・茶園原(註9)にまとまった資料が検出されているが、⑨の資料とは形態的に全く異なっている。むしろ、ナイフ形石器と共に採集されている事からも瀬戸内の鷺羽山(註10)・宮田山遺跡(註11)の尖頭器との関連が求められるように思える。

⑩ 黒耀石製の小形の剥片石器で、周辺から大小の剥離が施こされ全体の形はほぼ三角形を呈す。主要剥離面では三角形の一端に小さな剥離を行ない、その先端部一側辺には挟り込むような調整が施こされ、くちばし状の鋭い先端が意識されているようであり、石錐としての機能を想定することが出来る。

⑪ 黒耀石製の細石核。半円錐形に近い形をとり、一面にのみ見られる細石刃の剥離痕は不規則である。打面は剥離作業が施こされている側とは反対方向より大きな一つの剥離面よりなる平坦打面である。素材はあまり大きくない礫より剥取された厚味のある剥片が使用されているようである。

⑫～⑮はいずれも黒耀石製の細石刃である。⑫は比較的大きな平坦打面を残し、片方の側面に沿って小さな調整が施されている。⑬にはごく一部であるが使用痕が観察される。⑭は主要剥離面と反対の面に黒耀石の表皮を残し、しかも中央に一本の稜が走っているため、原石が角礫であった事をうかがうことができる。

⑯ 横剥ぎの大きなサヌカイトの剥片を素材に両面とも側辺に沿って二次加工を施している。(A)面は両サイドよりの五つの大きな剥離面より成っており、打面側と逆の一辺にはやや整った剥離による刃部が形成されている。一方の主要剥離面では両側辺に沿って顕著な二次加工が施されており、打面側のステップフレイキングによる調整は剥片の打面の厚みを剥り形を整えるためのものと考えられる。それに対し片方の側辺にはほぼ大きさの定まった剥離面が整然と並んでおり、明らかに刃部形成の意図がうかがえる。全体の形はほぼ半月状を呈するが、これは素材の横長剥片と因果関係をもつためであろう。大形の半両面加工の尖頭器あるいはその未成品とも考えられないこともないが、側辺の二次加工を重視してサイドスクレーパーとするパティナーは比較的進んでいる。

⑰～⑳の石鏃はいずれもサヌカイト製の打製石鏃である。図示した以外の石鏃もやはりサヌカイト製が多く、形態的には基部の抉入の浅いものが大部分を占めており、津古内畑(註12)出土の石鏃と類似している。素材には縦剥ぎ、横剥ぎの両者が用いられており、特別な選択、

区別はなされていないようである。

② 黒耀石の縦長剥片を利用し、表裏とも両側辺に沿って整った小さな2次加工が施こされている。打面と逆の一端は両側辺よりの特に入念な調整が両面に行なわれ、意識的に鋭い先端部が形成されている。機能的にはものを突き刺したり、切りさいたりするのに極めて有効な石器と考えられる。この石器の特徴として、素材となった縦長剥片の片面に上下両端からの剥離面が残っていることがあげられ、他に風化の度合いが進んでいないこと、更に打面の部分に調整が施され、打面が極めて小さいことなどが指摘できる。表採品であるため、時期の決定は難しいが、一応の予則として縄文時代後・晩期が考えられ、あるいは弥生時代の前期頃まで降るかも知れない。

以上が津古上ノ原遺跡の代表的な石器類である。中でも比較的まとまった先土器時代関係の資料は貴重と思える。ただすべて表採品であるため、先土器時代における編年的位置や石器の組合せについては不明である。ナイフ形石器を中心に、尖頭石器、細石核、細石刃などの表採品は先に述べた遺跡遺物の状態から重複していると見なければならぬであろう。問題点の一つとして、先土器時代の九州におけるナイフ形石器の中に横剥ぎの剥片を素材に、打面側にブラントングを施して背部とするナイフ形石器の存在は、サヌカイト製の小形の尖頭器と共に瀬戸内海地方の先土器文化との関連で特に重要であると考えられる。

牧の池遺跡（第10図 1～6）

遺跡 宝満川の一支流である山家川は大根地山（標高652m）に源を発し、鞍手型花崗閃緑岩よりなる山地を縫って西南の方向へ、国道199号線とほぼ並行して走り、津古の北側で宝満川に合流している。国道199号線の冷水峠と筑紫の中間よりやや冷水峠よりに池田という部落があり、部落南の洪積台地に周囲約2.5kmの凹凸の激しい牧の池が所在し、この池の南4分の3程が夜須町に入っている。遺物が散布しているのは牧の池に接する西南の比較的なだらかな台地で標高は60～70mである。

遺物 遺物の量は必ずしも多くなく、散布地域も比較的狭い地域に限定されるように観察される。土器片は縄文時代早期の押型文土器と無文土器が少量存在し、他には須恵器・土師器の破片が採集されている程度である。石器では小さな剥片の他、細石核・細石刃、石鏃それにつまみのある横型の石匙等が主要な遺物である。

① 黒耀石製の細石核。半円錐形を呈し、正面及び側面の2ヶ所に上端からの剥離作業が行なわれている。剥離痕は一般の細石核のそれに比較して幅が広く、並び方も整ってなく全体に粗雑な感じを受けるので、細石核とは区別して小石核とすべきかも知れない。打面は正面側からの二つの大きな剥離と、背面側からの小さな剥離によって調整されているが打面調整が入念に行なわれている側の一面には細石刃の剥離作業をみないのである。一部に表皮を残し原石はあ

まり大きくない角礫を使用している事がうかがえる。発掘資料でなく、また風化があまり進んでいないので一沫の不安は残るが、その技法および形態より九州の細石器文化の中で古い時期一福井岩陰第Ⅳ層もしくは第Ⅶ層（註13）一に対比できる資料と考えて大過ないであろう。

② 黒耀石製の細石刃で①の細石核と同一の時点で考えられる遺物である。打面を残しており、打面調整によって形成された剥離面の稜の一個所を打点として剥離されている。

③～⑤は打製石鏃でいずれもサヌカイトの剥片を用いており、形態的にはそれぞれ異なっているが全体的に大形である。他の資料から考察して恐らく縄文時代に属するものであろう。

⑥ 石鏃の未成品のようであるが主要剥離面先端の個所に施されている小さな2次加工は先端を尖らすためとは考えられず、むしろ長方形に近い形を整えるための調整であろう。サヌカイトの縦長剥片を素材にしているため横断面は三角形を呈し、一側辺の鋭いエッジに使用によると推察される刃こぼれがみられる。パティナーは非常に進んでおり、先土器時代の刃器として考えておきたい。

⑦は横型の石匙で、ほぼ半分を欠損している。やや厚味のあるサヌカイトの横剥ぎの剥片を用いていることが中央部に残された主要剥離面（この図では左側）で明らかである。2次加工は周辺に沿って集中的に行なわれているため表裏共中央部は平坦である。

細石器文化の研究ではどうしても細石核によるところが大であり、当遺跡で得た細石核もその点からも重要であり、福岡における今後の資料の追加が待たれる。

中島堤遺跡（第10図8～12）

遺跡 牧の池より西南へ約1kmの地点に、牧の池の3分の1程度の中島堤が所在し、北には山家変電所、東に養鶏場が隣り合っており、西および北側は筑紫野町と境をなす。この堤の周囲は標高50m前後のやや平坦な丘陵で、これをすぎるとなだらかなカーブを描きながら宝満川の沖積地へと降りている。遺物の散布地は2ヶ所に大別される。すなわち堤の南側（A地点）と東側（B地点）とである。遺物は東側のB地点により多く見られる。

遺物 遺物としては弥生時代中期・後期の土器片、土師器片の他、石器では台地様石器、小石核、スクレーパー、石鏃などがある。

⑧ 台形石器。黒耀石のやや厚味のある縦長剥片を素材にその両端に垂直に近いブランディングを主要剥離面側から施し、三角形に類する平面形をとっている。幾分斜めを呈する刃部は縦長剥片の鋭いエッジをそのまま利用しており、面両の一部に使用によると考えられる小さな刃こぼれが観察される。A地点の採集品である。なほこの台形様石器の製作法について次の事が考察される。まず縦長剥片を横向きに置き、刃部を想定する逆の一側辺2ヶ所にノッチ状の加工が考えられる。この石器の場合のノッチは一方にだけ深くおこない、他方については次の折りとなる作業が十分に行なわれる最少限度の段階でとめられているようで、ノッチの抉入は浅い。

このノッチの大きさは台形石器のでき上りの形態を大きく左右すると思われる。次の段階で細くなった部分を折り取る作業が行なわれている。このことは(A)面の刃部に近い側面に石片を折ったあるいは石片が折れた際に観察される特有のながれるようなリングから察知できる。最後に折り取ったほぼ台形ないし三角形をした原形に主要剥離面の方向からナイフ形石器と同様な垂直に近いブランディングを施して完成品となる。ノッチを入れず石刃状の剥片を折断して製作した台形石器については鹿児島県上場遺跡の資料で報告例がある。(註14) 上場の場合はノッチを入れずに直接折り取っているの、当台形石器を含めて西北九州にかなり普遍的なそれらとは異なるようである。ノッチの有無を問題とすればむしろヨーロッパ中石器時代のタルドノア文化(註15)の製作技術により類似しているとみなさなければならぬであろう。ノッチを入れて製作する技術が考えられる以上、今後の精査によって台形石器をもつ文化に「マイクロビュアリン」の伴う可能性が予測されると思われる。この事が解明される事によって、西北九州における台形石器を中心とする幾何学形細石器を伴う文化(註16)をヨーロッパ、東南アジアという広い視野から日本の先土器時代終末から縄文時代の起源に関する研究に一つの手がかりを与えるものと考えられる。

⑨ 黒耀石製の小石核。形態の上では舟底形細石核に近いと思われるが種々の点で異なっているようである。剥離痕は正面及び側面の一部に比較的幅広の剥離面が4面並んでみられるが、現在残されている打面によって上端近くが中心となっている。打面の調整は剥離が行なわれた方向からの一回の大きな剥離面より形成されているが、この打面調整後の剥離作業はおこなわれていないのである。また両側面の剥離は大きく、舟底形細石核特有の鱗状の小さな剥離は全く施されていない。側面の数ヶ所に自然面を残している。

⑩ サヌカイト製の典型的なサイドスクレーパーである。厚味のあるサヌカイトの縦長剥片を用いその一側辺に沿って主要剥離面側から、舟底形細石核の側面を思わせるような鱗状の精巧な2次加工が整然と並んでいる。他の一側辺には不規則な剥離面がみられ、打面近くは表皮のまま残されている。形態的にも技術的にも典型的なサイドスクレーパーであるが、刃部はものを切るのに十分すぎる鋭さを有している。パティナは非常に進んでおり、刃部の加工からも先土器時代の石器と認定できる資料である。

⑪はサヌカイト製の小形の石鏃で脚部近くで肩を張る特徴的な形態を示す。

⑫は黒耀石製の大形の石鏃で基部の抉入は深く、いわゆる鍬形鏃と一緒に表採されている押型文土器に伴うものと考えられる。⑨～⑫はB地点の採集品である。

小郡ゴルフ場遺跡 (第10図 13～15)

遺跡 国鉄基山駅の北東は小さな池をまじえて入り込んだ花崗岩の丘陵地帯が開けている。当遺跡は小郡町の西端にあたり、佐賀県と境をなす比較的平坦な丘陵頂上部附近で小郡ゴルフ

場と隣接している。標高は50m前後を数える。

遺物 弥生時代中期の土器片を中心に土師器、須恵器の破片が散布しており、石器では石鏃、不定形な石核と考えられるもの、スクレーパー、縦長剥片などがあり明確な先土器時代の遺物は検出できなかった。

⑬ 黒耀石製の石鏃で脚部の長さは左右異なり、長い方に肩をもつ特異な形態を有する。

⑭ 黒耀石の縦長剥片の周囲に小さな調整を施し打面も完全にカットしている。長崎県の筏遺跡等で出土しているサイドスクレーパー（註17）に類似した石器である。

⑮ も同じく黒耀石製の形の整った縦長剥片で、一側辺に使用によると考えられる刃こぼれが観察される。⑭ ⑮は共にパティナーは進んでおらず、最近注意が払われつつある縄文時代後・晩期の剥片石器の中で取り扱われる資料と考えられるがそれと同時にこれを含めた一般の剥片石器が弥生時代の前期でどのように把握されるか、また中期に降る時点ではどうか興味ある問題が展開されると思われる。

若江遺跡（第10図 16～19）

遺跡 筑紫駅より西鉄大牟田線に沿って南へ約1kmの個所で花崗岩の舌状台地が宝満川の沖積地に向って延びており、遺物の散布はこの丘陵頂上部付近の標高50m前後に見られる。

遺物 弥生時代中期の土器片、須恵器と一緒に、黒耀石の破片がかなり散布しており注目すべき石器としてナイフ形石器と細石刃がある。

⑯ 黒耀石の縦長剥片で表面の打面近くに2次加工が施されており、この加工は打面の厚味を剥取するためのものであろう。刃器として使用されたらしく一側辺に刃こぼれが見られる。

⑰ は打面と逆の一端を欠損しているが、小石刃を想定させる形の整った黒耀石の縦長剥片である。

⑱ 黒耀石製の細石刃で、打面及び先端を欠いているが、これは恐らく長方形を意図した一種の加工と見るべきであろう。主要剥離面の両サイドに沿って観察されるリタッチはこの細石刃が石器の一部として使用された事を十分に物語っている。

⑲ 黒耀石製のナイフ形石器。斜めの刃部の一辺を残し、両側辺と基部の三個所に垂直に近い調整が施されており、切出形石器の形態をとっている。刃部の角度は一般のナイフ形石器に比べて大きく直角に近いため、機能的にはものを切るための cutting-tool として必ずしも適していないように思える。不整形な縦に長い剥片を素材にしており、風化の度合はかなり進んでいる。

以上の遺跡・遺物の他、図示した石器について簡単に触れることとする。⑳は宝満川と山家川のほぼ中間に位置する宮地岳南側の花崗岩台地上の筑紫野病院近くの表採品である。黒耀石製のマイクロブレード。㉑は曾根田川上流の標高50m前後の平坦な丘陵上で採集したサヌカイ

ト製のスクレーパーと考えられる石器である。②は若江と津古の間にある隈部落の南側台地で得た粘板岩製の磨製石鏃である。

- 註1 賀川光夫・他 「福岡県筑紫郡筑紫野町常松遺跡報告書」 別府大学文学部考古学研究報告書1
1970
- 註2 高山 明「埋もれていた朝倉文化」 朝倉高校郷土部 1969
- 註3 西谷・柳田・副島 「津古内畑遺跡」 小郡町教育委員会 1970
- 註4 鎌木義昌 「刃器文化」 日本の考古学Ⅰ所収 1965
- 註5 ①西川 宏・杉野文一 「岡山県玉野市宮田山西地点の石器」 古代吉備3 1959
②鎌木義昌・高橋 護 「瀬戸内海地方の先土器時代」 日本の考古学Ⅰ所収 1965
- 註6 ①鎌木義昌 「香川県井島遺跡」 石器時代4 1959
②註5②と同じ
- 註7 註1に所収 橘 昌信「先土器時代の常松遺跡」 福岡県筑紫郡筑紫野町常松遺跡報告書 1970
- 註8 ①鎌木義昌・間壁忠彦「九州地方の先土器時代」 日本の考古学Ⅰ所収 1965
②鎌木義昌・芹沢長介「長崎県福井岩陰」 考古学集刊3-1 1965
- 註9 杉原荘介・戸沢充則「佐賀県多久三年山石器時代遺跡について」 日本考古学協会第26回総会研究
発表要旨 1966
- 註10 鎌木義昌「岡山県鷲羽山遺跡調査略報」 石器時代 第3号 1956
- 註11 註5に同じ
- 註12 註3に同じ
- 註13 註8①②に同じ
- 註14 池水寛治「上場技法とその展開」 もぐら第8号 1969
- 註15 ①J. G. D Clark The Mesolithic Settlement of Northern Europe 1936
②芹沢長介「細石器文化」 石器時代の日本 1960
③角田文衛「新環境と獲得経済の存続」 世界考古学大系12所収 1961
- 註16 ①戸沢充則・富樹憲次「佐賀県原遺跡の石器群Ⅰ」 考古学手帖第14号 1962
②同「唐津周辺の細石器Ⅲ」 考古学手帖第18号 1963
③和島誠一・麻生 優「島原半島百花台遺跡の調査」 日本考古学協会第29回総会研究発表要旨
1963
④註8の①に同じ
- 註17 賀川光夫「サイドブレードについて」 考古学ジャーナル16・17 1968

6. 周辺遺跡の調査(その2)

— 宝満川流域の先土器時代 —

ここで取扱う資料は、永岡遺跡の調査中あるいはその後の周辺調査中、朝倉高校郷土部の平田定幸君等に見せていただいた夜須町周辺の先土器時代関係の表採品である。

屋形原遺跡 (第11図 1~12)

夜須町の南に位置する城山(標高 130.6 m)は周辺に入り込んだ谷をもつ複雑なヤツ手状丘陵を形成している。遺跡はそれらの舌状丘陵が草場川に向って張り出している台地上に占地し、遺物の分布範囲は広く三つの丘陵にまたがっているようである。時期的にも台地縁近くには先土器時代の石器の他、縄文時代・弥生時代の遺物の分布が見られる。更に丘陵の尾根上には弥生時代の墓地群と古墳が形成されており、台地一帯は先史時代の一大遺跡を展開している。

① 黒耀石のナイフ形石器で、やや巾広の縦長剥片を用い全体に幾分大形である。加工は一側辺と基部とに施されており、縦長剥片を截断して製作したナイフ形石器であることがわかる。いわゆる九州型のナイフ形石器である。(注1)

② は①と同様、縦長剥片の一側辺を斜めにたち切るようにブランディングを施している先端部近くの背部はやや弯曲して鋭さを増している。刃部は剥片の鋭いエッジを利用しているが、カッピングツールとしてのナイフ形石器の用途と同時にものをつきさすための機能も十分考えられる資料である。基部を一部欠損しており、主要剥離面にその際生じたと思われる小さな剥離面が観察される。

③ 厚味のある剥片を素材に用い、一側辺にのみほぼ垂直なブランディングを行い背部を形成している。この背部の加工は剥片が厚いため両面よりなされている。先端の一部と基部を欠いているので全体の形を想定することは困難であるが、ナイフ形石器の中にあっては、素材にサヌカイトを使用していることと相まって特異な存在といえる。水俣市石飛遺跡のⅥ層中より類似した資料が見られる。(注2)

④ は③と同様、厚味のある縦長剥片を素材に、両側片と基部に調整を行い、斜めの刃部を有する切出形の石器である。加工は主要剥離面(A)の刃部にも薄く小さな剥離が施こされている。黒耀石製で風化は進んでいる。

⑤ 黒耀石製の台形石器。縦長剥片の鋭い縁を水平な刃部として、両端にノッチを入れて截切ったと考えられる典型的な台形石器で、一側辺には垂直な細かい調整が主要剥離面の方向から

なされている。他の一側辺は欠けている様であるが、あるいは剥片を折り取った意識的な剥離面であるかも知れない。

⑥は水平な刃部をもち、基部の一部に二次加工が施こされている台形様の石器である。⑤に比較すると非常に粗雑な感じを受けるが、これは素材になった剥片が整った縦長剥片でないことに起因するものと考えられ、台形石器の精粗二種類のタイプを示す資料と見なすことが出来よう。

⑦も⑤⑥と同様、黒耀石の剥片の鋭いエッジを利用して水平な刃部を有する台形石器である。側辺に縦長剥片を截切ったブランディングが施こされている点は⑤と共通する一方、片面における基部の加工は⑤のそれに見られた特徴である。このように精粗の台形石器の両者にそれぞれ類似した点が指摘でき、大きさの面からも両者の中間に位置づけられる存在である。この三者の台形石器が全く同時期に共存し、台形石器のバリエーションとして把握され得るものかどうかは表採資料のため明らかでない。

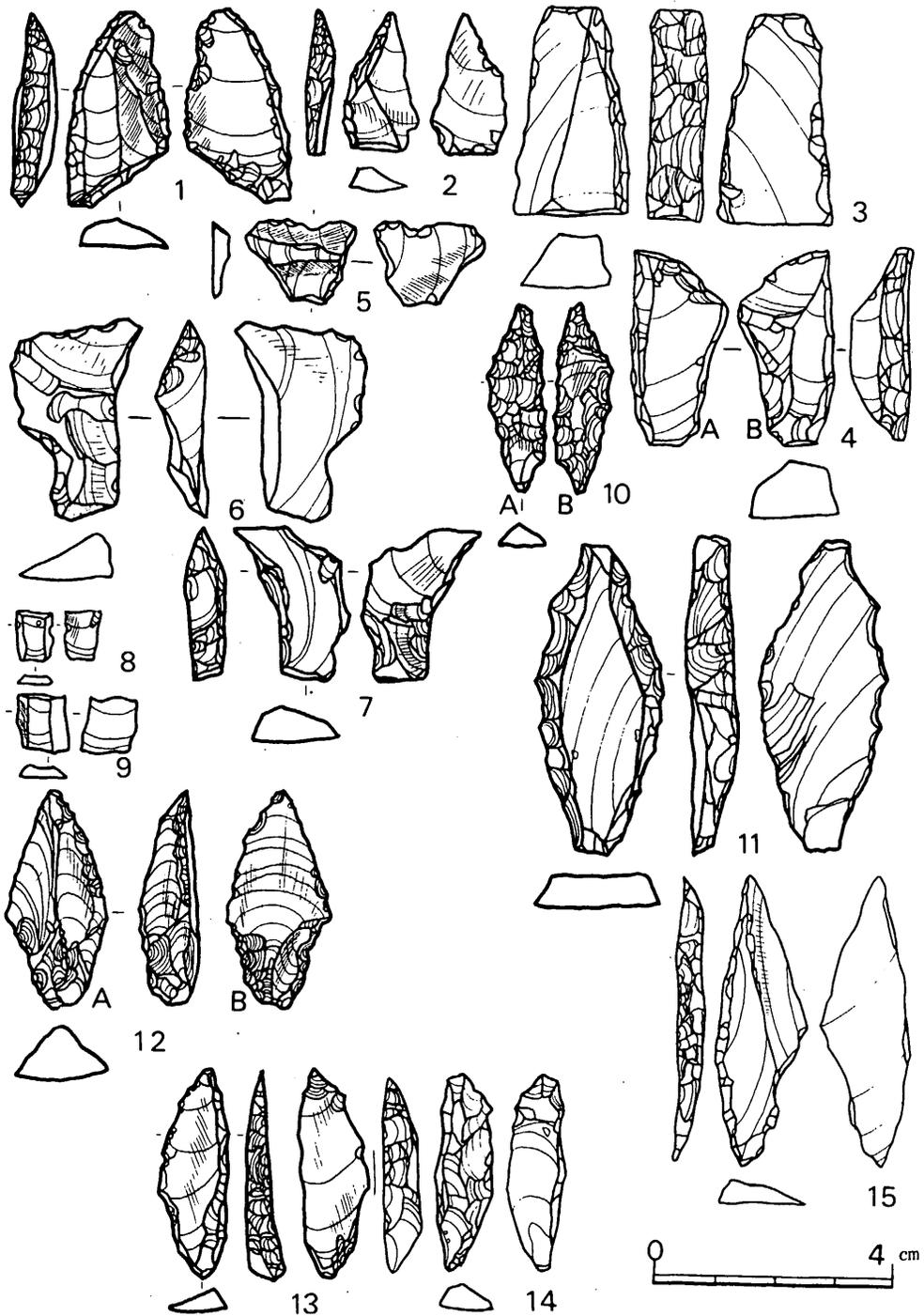
九州における台形石器を眺めると、⑤に類似した整った台形石器としては、長崎県百花台遺跡（註3）の第Ⅳ層にまとまった資料が知られており、一方⑥の好例として、佐賀県平沢良遺跡（註4）鹿児島県上場遺跡（註5）の発掘資料に求める事が可能と思われる。更に佐賀県原遺跡（註6）枝去木遺跡（註7）では精粗の両者、あるいはその中間的な台形石器が報告されている。このような状態から、精粗二種類の台形石器に多少の時間的な差が一応予測されるのであるが、中間的なタイプの存在はその時間的な隔たりが大きくないことを示すものかも知れない。

⑧⑨は共に黒耀石製の整ったマイクロブレードである。片面に二本の稜が走り断面は台形を呈する。いずれも両端を欠損している。

⑩ 黒耀石製の小形尖頭状の石器で、加工は両面ともほぼ全面に及んでいる。(A)の中央に両側辺からの剥離による稜線が走っているのに対して、(B)は平坦な面をなしている。素材として縦長剥片の利用が(B)の中央部に残されている主要剥離面で明らかである。縦長剥片を利用し片面に稜を有する断面三角形の特殊な尖頭器である。

⑪ サヌカイトの比較的長手の剥片を用いて周囲に主要剥離面側から二次加工を施した石器である。全体の形は木葉形に近く、両端とも極く僅か欠損している。二次加工が周辺におよび、剥片のもつ鋭いエッジがどこにも残されておらず、形態的には木葉形をなすことから一種の尖頭器と考えられる石器である。

⑫もやはり尖頭器であるが極めて特徴的な存在である。黒耀石製の断面三角形の縦長剥片を素材に選び、打面の方向に両面共入念な二次加工を施し舌状の基部を形成している。基部以外の加工としては一側に小さなリタッチが見られるが、ナイフ形石器の直角に近いいわゆる刃潰しのブランディングとは異なるようである。しかもこの加工には先端部を鋭くしかも先端をこ



第11図 周辺遺跡の石器 (3)
 [1~12 屋形原 13~14 針摺 15 中牟田鬼神山]

の石器の中央に置こうとする意図が読みとれるのである。このため、形態的には左右シンメトリな鋭い三角形を呈する。ナイフ形石器としての一応の形態・機能を備えているようであるが、それ以上にその製作法から尖頭器として考えられる石器である。九州において類例は多いとは言えないが佐賀県原遺跡(註8)に極めて類似した資料が存在し、また伊万里市平沢良遺跡(註9)出土の剥片を素材に基部近くのみ調整を施した一種の尖頭状石器も同様な資料として扱ってよいのかも知れない。断片的であるが、小形のナイフ形石器や台形石器と一諸に発見されることが多く、現在まで明らかにされていない九州における小形尖頭器の一端を暗示する資料と思われる。両面加工のいわゆる有舌尖頭器と区別して、剥片の鋭い素材が尖頭部に生かされている事を重視して、「有舌剥片尖頭器」と仮称することとした。

針摺遺跡(第11図13, 14)

大宰府町の北、宝満川と山口川の間位置する南側に延びている標高50~60mの舌状丘陵において表採された資料である。

⑬ 黒耀石製の縦長剥片を素材にした形の整ったやや小形のナイフ形石器で、背部にあたる一側辺と刃部側の基部とに主要剥離面の方向より直角に近い丹念なブランディングが施されている。第一次剥離のまま残された鋭い一辺は刃部として使用されたらしく、小さな刃こぼれが観察される。先端・基部とも尖ったほぼ柳葉形をなす九州型ナイフ形石器の好例である。

⑭ 幅に対して厚味のある縦剥ぎ剥片を用い、打面の方向を基部として一側辺と刃部側の基部とにブランディングを施こしている一種のナイフ形である。加工は先端両面と刃部と考えられる一辺にも行なわれている。他のナイフ形石器の大部が黒耀石製なのに対してこの石器ではサヌカイトが用いられており、技術的、形態的な特異性は石材と密接な関係があるように思われる。

中牟田鬼神山(第11図15)

山家川の東側には30m前後の平坦な洪積層の台地が開けており、中牟田の部落はその台地上に営まれており、部落の東側において検出された資料である。

⑮ 夜須町周辺のナイフ形石器の中で、非常に珍しく黄褐色をしたチャートが石材に選ばれている。縦長剥片を截切るように一側辺と刃部側の基部とに弯曲した垂直なブランディングが丹念に施され、先端・基部とも尖る形の整ったナイフ形石器である。

福島鎮ノ神（第12図1～5）

夜須町の南側は曾根田川と草場川とによる沖積平野が開けている。その中間には標高25～30mの低い洪積層の舌状台地が二つの川の沖積地へ向って延びており、鎮ノ神遺跡は西へ張り出した舌状台地の一端に占地している。

① 横に長い黒耀石の剥片を素材に打面側の一边と、逆の一边の基部に垂直に近いブランディングを施した切出形石器である。表面は側辺のブランディングの他、ほぼ全面にわたって不定形な剥離面が見られる。刃部にあたる剥片の鋭いエッジの一端を欠損している。横剥ぎでしかも厚味のある剥片を利用し斜めの短い刃部をのぞく側辺に沿って二次加工が施こされている典型的な切出形石器で、瀬戸内地方の横剥ぎのナイフ形石器・切出形石器との類似が注意される資料である。（註10）

② 黒耀石製の形の整った細石刃で表面に並行する三本の稜が走っている。側辺の一部に使用によると思われる刃こぼれが観察される。

③ 黒耀石製の尖頭状石器である。両側面には垂直な二次加工が主要剥離面の方向より施されており、(A)面は両側辺からの剥離のため中央部に稜線を形成している。逆の(B)は主要剥離面で一側辺からの薄くて幅広い剥離による加工が行なわれ平坦な面を成している。このため横断面はほぼ五角形という特異な形を呈している。基部の一端を欠損しているが平面形は側辺にやや角ばった肩をもつ柳葉形をなすものと思われる。①の切出形石器と共に、瀬戸内のナイフ形石器文化にしばしば見られる尖頭状石器との関連が問題となるかも知れない。

④ 黒耀石製の両面加工の尖頭状石器。平面の加工は両側辺よりの剥離によって③と同様中央に稜を有しており、(B)面はプレッシャーフレイキングによる平たい大きな剥離面が一側辺から施こされ、他の一边の剥離は小さく側辺に沿った個所のみおこなわれている。横断面は三角形を呈しており、これはこの石器の素材がやや厚味のある縦に長い剥片を使用したことに起因するものと考えられる。両サイドに肩を有し、一端を欠損しているため平面形は五角形を呈している。一部を欠損しているので全体の形を正確に把握すること出来ないのであるが、図で先端とした肩より上の尖頭部は天地逆で基部となり、一種の有舌尖頭器としての見方もできよう。

⑤も黒耀石製の両面加工の尖頭石器である。③④に比較すると大形で重さもある。(A)は両側辺よりの比較的大きな剥離面よりなっており、中央部に弯曲した稜が走っている。これに対して主要剥離面と考えられる(B)は一側辺から集中的に大小のプレッシャーフレイキングが施されている。このため横断面はほぼ台形状を呈する。基部は僅かに欠損しているが恐らく尖らず、平面形はボート状をなすものと考えられる。先端部とそれに接する両側辺は両面からの入念な加工のため非常に鋭利でこの石器の技能の有効性がしのばれる。当遺跡における三種類の尖頭石器は九州における小型ないし中型の尖頭器を考察する上で貴重な資料と言える。

吹田（第12図6～7）

山家川と曾根田川の間で北より延びてきている洪積層の平坦な舌状台地が開けており、遺跡は松延部落の北に所在する松延堤の西岸台地上に占拠している。標高は30～40mを数える。

⑥は一見すると両面加工の尖頭器と考えられる形態を有し、その加工は非常に複雑で、横断面、縦断面にそれを向うことができる特殊な石器である。黒耀石を素材に両側面に垂直な大小の剥離を施し、基部近くは特に顕著である。(A)はステップフレイキングによる深い剥離が両側面より行なわれ、2～3本の稜が通っている。これに対し(B)の剥離はプレシャーフレイキングによる幅広く薄い剥離が入念に施されている為、角ばった稜をもたず平坦な面を形成している。角ばったカマボコ状という特異な形を呈している。さらに側面で観察されるように先端部近くはくちばし状に弯曲している。これらの特徴からこの石器をただちに尖頭器とするには問題が残るであろう。

⑦は台形石器で縦長剥片の両端をカットして製作している。一側面は幾分挟り込むように加工が施されているのに対し、他の一側面は直線的で調整は顕著におこなわれていない。これは縦長剥片から台形状の形を得る際の技術の違いによるものであろう。すなわち前者は縦長剥片に深いノッチを入れることによって剥片の幅を細くしてその後折りとしたことを推察させるのに対し、後者の場合は深いノッチを施さず、折りとする作業が行なわれたことを示すものと考えたい。言い換えれば、縦長剥片の打面側の厚味のある方にノッチを入れ、逆の薄くなる方には深いノッチの加工を行なわず折りとするという台形石器の一つの製作法が考えられないであろうか。

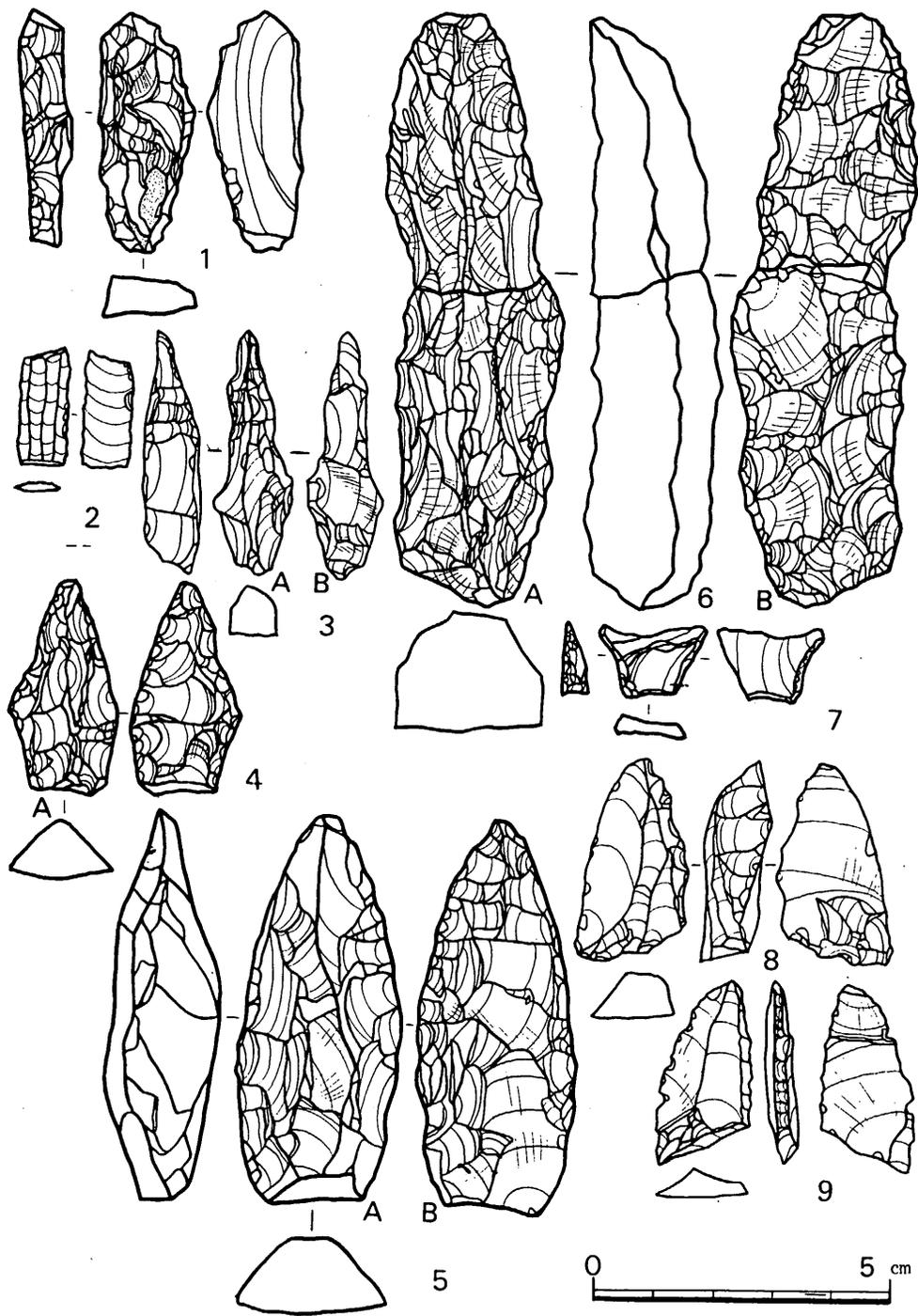
松延（第12図8～9）

吹田遺跡の対岸、すなわち松延堤の東岸の台地上において採集された資料である。

⑧ 黒耀石製のナイフ形石器で、厚味のある縦長剥片を用い、打面の方向を基部としている。一側面のブランディングは主要剥離の方向から施され、その二次加工の剥離面は大きく特徴的である。基部の調整は剥片の打面及び打面近くの厚さを減ずるためのものと考えられる。

⑨はやはり黒耀石製のナイフ形石器で打面の方向を基部としているが、一部欠損している。刃潰しのブランディングは直角に近く整然と一側面に沿って並んでいる。風化の度合は進んでおり、全体にローリングを受けている。背部と反対の鋭い一側には著しい刃こぼれがみられる。

各遺跡における資料がはたして同一の時期に属し、セットをなすものかどうかについてはいずれも表採品であるため不明であるが、今後の研究いかんによっては更に貴重な資料となり得るであろう。現時点においてもいくつかの重要な問題提起が可能と思われるので周辺調査のまとめとして二・三述べてみることにしたい。



第12図 周辺遺跡の石器 (4)

[1~5 福島鎮ノ神 6~7 吹田 8~9 松延]

屋形原遺跡では比較的多くの資料が知られており、ナイフ形石器、尖頭器、台形石器それに細石刃と先土器時代における代表的な器種が一通り揃っているのである。これらの石器がすべて同一時期に位置づけられるかは少くとも現在の段階では不明である。一つの器種を取上げてみても、その形態・製作法さらに素材・石質とそれぞれに違いが指摘できるので、時間的な先後関係やセット関係についての研究がどうしても必要であろう。これには遺跡ごとの検討と同時に夜須町を含めた宝満川流域という、比較的まとまった地域における先土器文化の流れの中で把握すべき課題であろう。この過程で当然出て来るであろう一つの具体的な問題として先に触れたナイフ形石器がある。九州型ナイフ形石器群の系統と位置づけ、さらに今後も福岡県を中心に類例を増すであろう瀬戸内系のナイフ形石器（註11）との関連が問題であり、これは西日本におけるナイフ形石器文化の実体を究明する上で重要な要素となるであろう。

九州におけるナイフ形石器を考察する上で、極く最近発掘調査が実施された針摺野黒坂遺跡の資料はこの点で非常に有効と思える。包含層より出土した資料は必ずしも多くないが、限られた狭い地域においてかなりの数にのぼるナイフ形石器を検出しているのである。

野黒坂遺跡のナイフ形石器は黒耀石の縦長剥片を素材の基調として、二次加工を一側辺および刃部側の基部近くに施したいわゆる九州型ナイフ形石器がベースをなしているようである。形態的には基部に丸味をおびる大形のもの、細身の柳葉形をしたもの、斜めの刃部を有する小形のペンナイフ形のもの、さらに切出形石器に類似したものなどバラエティに富んでいる。ナイフ形石器を出土する遺跡で最も近似しているものとして唐津市原遺跡をあげることができるであろう。両遺跡はナイフ形石器以外においても、台形石器、細石核、さらに特長な「有舌剥片尖頭器」の類似性も指摘できるのである。編年的位置についてもほぼ同時期で恐らく先土器時代の終末に近い時期が考えられるであろう。

野黒坂遺跡の遺物の中で特に注目すべきものとして先に述べたようなある程度まとまったナイフ形石器が存在しているが、その中に1点も横剥ぎ剥片を素材に打面側に背部をもつナイフ形石器あるいは切出形石器を見出し得ないことである。この現象は類似の遺跡としてあげた原においても同様である。これらのナイフ形石器のあり方は九州のナイフ形石器文化を大きく区別する場合の一つの基準になると考える。すなわち、九州型ナイフ形石器のみを出土する遺跡と、宝満川流域の諸遺跡で観察されたように瀬戸内系と考えられる横剥ぎのナイフ形石器と一緒に出土している遺跡とに大別できるようである。この区別は石器の組成や瀬戸内海地方の先土器時代の編年の比較からそのままナイフ形石器の編年的位置をそのまま予想させるのである。すなわち、前者の方が新しく、後者はより古く位置し、瀬戸内の宮田山遺跡の時期に対比できるものと考えたい。これは現時点での一応の予察であり、同時に今後の問題点としてここにあげておきたい。

もう一つの問題提起として屋形原・鎖ノ神の両遺跡で検出された尖頭器をあげなければならぬであろう。

尖頭器の具体的な問題の一つとして、縦長剥片を素材に用いたと明らかに考えられる一群の尖頭器の存在である。両面加工を施すことによって形態を整える点は普遍的な他の尖頭器と同様であるが、素材の選択・製法さらにそれらによって必然的導き出される形態に大きな差異が認められる一群の尖頭器である。基本的な製法として、片面の加工は両側辺から中央に向けて比較的大まかな剥離を施して全体の形をほぼ形づくるのであるが、両側辺からの剥離が交わる中央部付近において角ばった稜を形成するのである。これに対してもう一方の面—主要剥離面—は、集中的に一側辺よりプレッシャーフレイキングによる薄くて幅広い剥離面が形成されフラットな面をなすのである。それ故、横断面は三角形ないしそれに近い形を呈するのである。このような製法のベースは素材となる石片が形の整った縦長剥片におかれていることは局部的に残されている主要剥離面から明確に察知できるのである。

尖頭器の素材として意識的に縦長剥片を用いたり、また片面の中央に一本の稜線が走る断面三角形の形態を意図した一群の尖頭器に対して、他の尖頭器と区別するため、「剥片錐」「石刃錐」の名称にならって「剥片尖頭器」、あるいは断面三角形の稜をもつ尖頭器ということで「三稜尖頭器（ポイント）」なる名称が考えられるであろう。

さらに、横断面が五角形ないし、角ばった舟底形に近い形態をなす一群についても、凸レンズあるいはかまぼこ状の断面をもつ尖頭器とは一応区別して検討しなければならないであろう。

瀬戸内のナイフ形石器文化に見られる断面三角形の舟底形石器（註12）との関連を考慮しなければならないようであるが、主要剥離面の加工、と大きさに相違が指摘できるようである。これは文化の違いに起因するのか、それとも時間的な差によるものなのか、今後の検討を要する課題である。

以上述べてきた特殊な尖頭器がはたしていつの時期に属するのか、またこの石器とセットをなす石器はどのようなものか、について明らかにして行く必要がある。

福岡における先土器時代の問題は山積されており、これからなすべき仕事はあまりに多いと言えよう。最近福岡県の先土器時代の遺跡はふえる傾向にあり、遺物の数は現在のところ必ずしも多いとは言えないが一地域における遺跡の密度は高いものと考えられるのである。また石材の面からも佐賀県の代表的な黒耀石の原産地である腰岳、それに杵島の鬼ノ鼻山一帯のサヌカイト地帯を西の比較的近距离に控えているだけに、先土器時代研究に大きな期待を寄せうるものと確信している。実際今回の調査で実見した石器、石片の大部分は黒耀石とサヌカイトで占められており、特に黒耀石の多くはその肉眼的観察から明らかに伊万里市腰岳産のものを利用しており、時期的にも先土器時代のナイフ形石器から弥生時代の石鏃にわたる永い期間にわたっているのである。今後精査することによって各時代ごとの腰岳産黒耀石の需給範囲や利用

の頻度など石材による分布圏さらに文化圏の問題を追求することができるものと思われる。また腰岳産とは一見して異なる特長をもつ黒耀石の存在にも眼を向けなければならないであろうし、サヌカイトについても鬼ノ鼻山一帯との関連が同様問題にされるべきであろう。このような点を考察する上からもまさに宝満川流域一帯は大きな問題をなげかけているのである。さらに長崎県を中心とする西北九州地域の九州型ナイフ形石器文化・細石器文化との接触を西へ控へ、東には瀬戸内海地方のナイフ形石器文化が存在し、その中間的位置を占めているだけに両者の関連性を解明する上で特に重要な地帯と考えられ、その片鱗をすでにうかがわせているのである。

今回の調査・報告にあたっては福岡県教育庁の松岡史・前川威洋の両氏、朝倉高校高山明先生、平田定幸君をはじめとする生徒諸君、江上幹幸氏等に特にお世話になった。心よりお礼を申し上げたい。

- 註1. 鎌木義昌「刃器文化」日本の考古学Ⅰ所収 1965
- 註2. 鹿児島県立出水高校郷土部「水俣市石飛遺跡の第二次調査」もぐら第9号 1970
- 註3. 鎌木義昌・間壁忠彦「九州地方の先土器時代」日本の考古学Ⅰ所収 1965
- 註4. 杉原荘介・戸沢充則「佐賀県伊万里市平沢良の石器文化」駿台史学第12号 1962
- 註5. 池水寛治「鹿児島県出水市上場遺跡」考古学集刊3-4 1967
- 註6. 戸沢充則・富樹憲治「佐賀県原遺跡の石器群」考古学手帖14 1962
- 註7. 富樹憲治・戸沢充則「唐津周辺の細石器」考古学手帖18 1963
- 註8. 註6に同じ
- 註9. 註4に同じ
- 註10. ①西川宏・杉野文一「岡山県玉野市宮田山西地点の石器」古代吉備3 1959
②鎌木義昌「香川県井島遺跡」石器時代4 1959
- 註11. 註10と同じ
- 註12. ① 註10-①と同じ
②鎌木義昌「香川県城山遺跡出土の石器」古代学8-3 1960
③鎌木義昌・高橋謹「瀬戸内海地方の先土器時代」日本の考古学Ⅰ所収 1965

周辺遺跡の調査地名表

	遺跡名(所在地)	時期(採集遺物)
1	杉 塚	先土器(ナイフ形石器……未確認)
2	石 崎	縄文(中期), 先土器
3	向 原	弥生(中期), 古墳時代
4	針摺野黒坂	先土器, 弥生, 古墳
5	針 摺	先土器(ナイフ形石器) 弥生(前・中期), 古墳(土師器・須恵器)
6	立 明 寺	弥生
7	永 岡	先土器(尖頭器), 弥生(中期)
8	常 松	先土器(ナイフ形石器・尖頭器)
9	脇 道	縄文, 弥生(中期カメ棺)
10	筑紫野病院	先土器(細石刃), 弥生, 古墳(須恵), (石鏃)
11	大 又	弥生(中期), 古墳(土師器, 須恵器)
12	山 家	弥生(中期), 古墳(須恵器), (スクレーパー)
13	蔵 役	縄文(中期…未確認), 弥生, 古墳(土師器・須恵器), (有孔軽石)
14	朝 日	弥生(中期), 古墳(須恵器・土師器)
15	中 島 堤	先土器(台形石器・小石核・スクレーパー), 弥生(中・後期), 古墳(土師器)
16	赤 坂	弥生(?), 古墳(土師器)
17	弥 ノ 池	先土器(細石核・細石刃), 縄文(早期) 古墳(須恵期・土師器) (石鏃・石匙)
18	吹 田	先土器(台形石器・尖頭器), 弥生(中・後期), 古墳(土師器・須恵器)
19	陣 ノ 内	弥生(中期), 古墳(土師器・須恵器), (スクレーパー)
20	八 並	先土器(細石刃・細石核・ナイフ形石器・台形石器)
21	若 江	先土器(ナイフ形石器・細石刃・石刃・スクレーパー), 弥生(中期), 古墳(須恵器)
22	隈	弥生(磨製石鏃)
23	津古内畑	先土器(ナイフ形石器), 弥生(前・中期), 古墳
24	津古上ノ原	先土器(ナイフ形石器・尖頭器・細石核・細石刃・スクレーパー), 縄文, 弥生(前・中期), 古墳(土師器)
25	古 賀	古墳(須恵器), (スクレーパー)

26	力 武	弥生 (中・後期), 古墳 (土師器・須恵器)
27	小郡ゴルフ場	弥生 (中・後期), 古墳 (土師器・須恵器), (石鏃・石核・スクレーパー)
28	三沢ピクニックセンター	弥生 (中期)
29	下 原	弥生 (中期)
30	丸 町	弥生 (中期), 古墳 (土師器)
31	峯	弥生 (中期)
32	沼 尻	弥生 (中期), 古墳 (土師器・須恵器)
33	石 橋	弥生 (中期), 古墳 (土師器・須恵器)
34	福島鎖ノ神	先土器 (ナイフ形石器・尖頭器・細石刃)
35	馬 市	弥生 (中・後期), 古墳 (須恵器・土師器)
36	向 福 島	弥生 (中期), 古墳 (土師器)
37	乙 隈	弥生 (中・後期), 古墳 (土師・須恵), 中世居館跡
38	四 三 島	弥生 (中期), 古墳 (土師器・須恵器)
39	干 潟	弥生 (カメ棺), 古墳 (須恵器)
40	屋 形 原	先土器 (ナイフ形石器・台形石器・尖頭器)
41	城 山	弥生 (前期), 古墳
42	松 延	先土器 (ナイフ形石器)
43	夜須中学校	弥生 (中・後期)
44	中牟田鬼神山	先土器 (ナイフ形石器…未確認)
45	高 雄	先土器 (台形石器)

別府大学考古学研究室で実際踏査を行った遺跡の他、すでに学界で知られているものや地元研究者等の教示によるものも一部付加した。また遺跡名については必ずしも当を得ていないものもあると思われるので今後の調査によって更に充実した遺跡地名表が作られる必要がある。

む す び

常松遺跡の調査で新たな視野から弥生時代中期のヤツ手状丘陵における溝状遺構と墳墓群を中軸に集落の構造と土地利用の問題が展開されたのであった。今回の永岡遺跡は常松と隣接する舌状丘陵に営まれた弥生時代中期の遺跡である。遺跡の状態は必ずしも良好とは言えないが、常松での問題意識を発展させるには十分であった。また調査期間中に実施した周辺遺跡の調査では予想をはるかに上廻る成果をあげることが出来たのである。特に先土器時代関係の遺跡・遺物については興味深く今後の研究に期待することが大である。

永岡遺跡の発掘調査とその後の整理は、別府大学賀川光夫教授指揮のもとに文学部考古学研究室で行なわれたのである。報告の一部を考古学専攻の学生である新原正典・中村幸史郎の両名にさせた。周辺遺跡の整理は山野洋一が中心になって行ない。作図については二宮忠司・上村佳則・青崎和憲等がこれにあたった。このように調査・整理は考古学研究室の専攻学生多数の協力によって成し得ることが出来た。報告書の内容執筆については賀川教授の指導による。

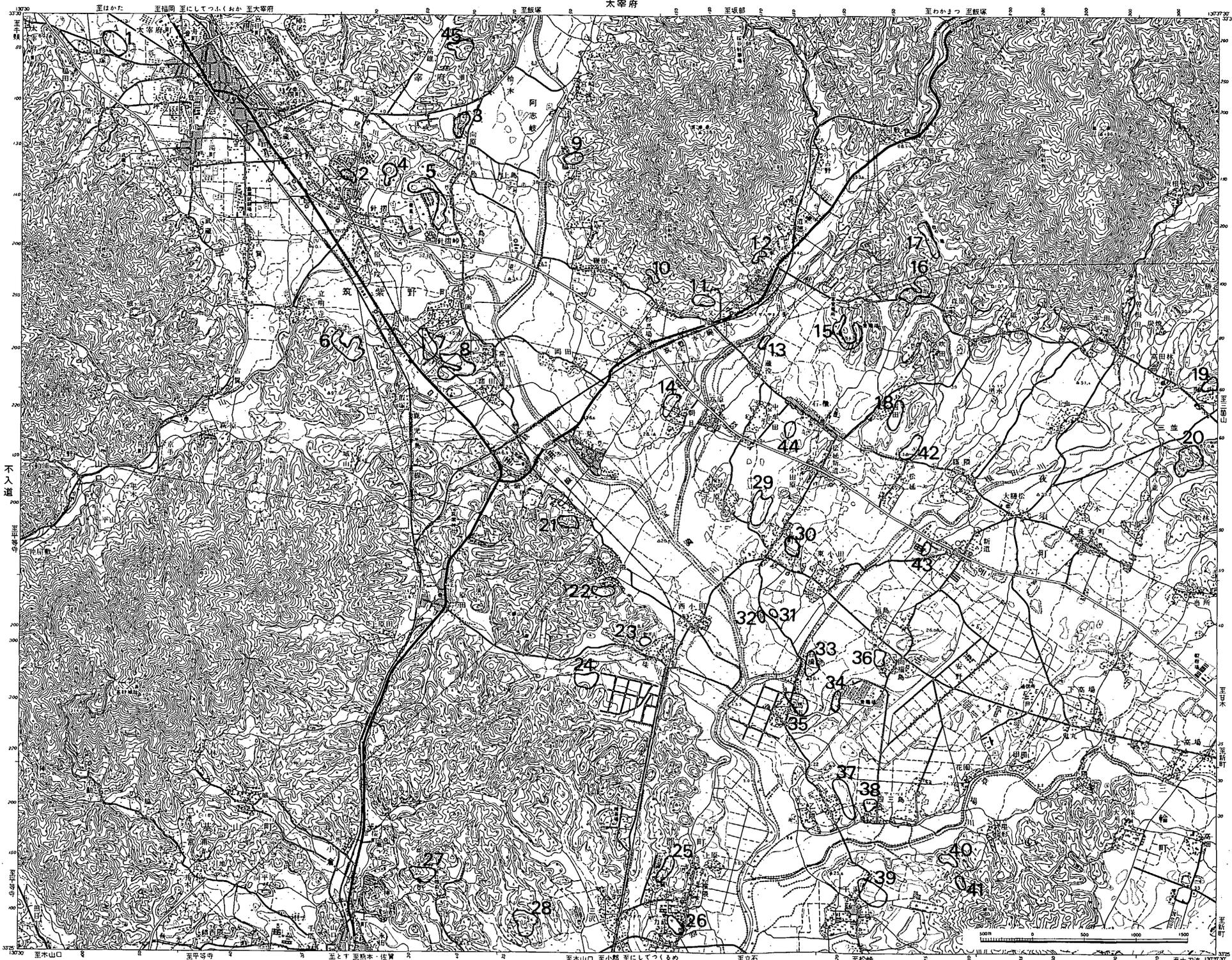
今回の調査については福岡県教育庁文化課の松岡史氏に終始お世話になった。永岡遺跡の弥生時代の遺物については九州大学小田富士雄氏より貴重な教示を賜わった。記して感謝の意を表したい。

調査関係者名簿

(別 大)	賀 川 光 夫	橋 昌 信	坂 田 邦 洋
中 村 修 身	江 上 幹 幸	山 田 島 常 方	清 水 宗 昭
山 崎 純 男	横 山 邦 継	小 倉 正 五	桑 原 道 男
二 宮 忠 司	高 木 正 文	中 村 幸 史 郎	弥 栄 久 志
青 崎 和 憲	山 野 洋 一	上 村 佳 典	栗 原 孝 幸
新 原 正 典	江 本 直	天 本 洋 一	宮 崎 真 理
長 谷 川 和 美	部 谷 恵 美 子	蔵 本 聖 子	豊 田 幸 美
首 藤 恭 子	大 崎 由 美 子	宮 崎 正 文	牧 野 吉 秀
池 部 元 明	小 池 哲 史	山 手 誠 治	倉 原 謙 治
坂 本 嘉 弘	牧 野 義 則	藤 田 和 夫	西 田 道 世
(朝 高)	高 山 明	平 田 定 幸	小 林 美 孝

1:25,000 地形図 NI-52-10-8-3
ふつかいち (福岡8号-3)

二日市



第13図 周辺遺跡の分布図

図 版

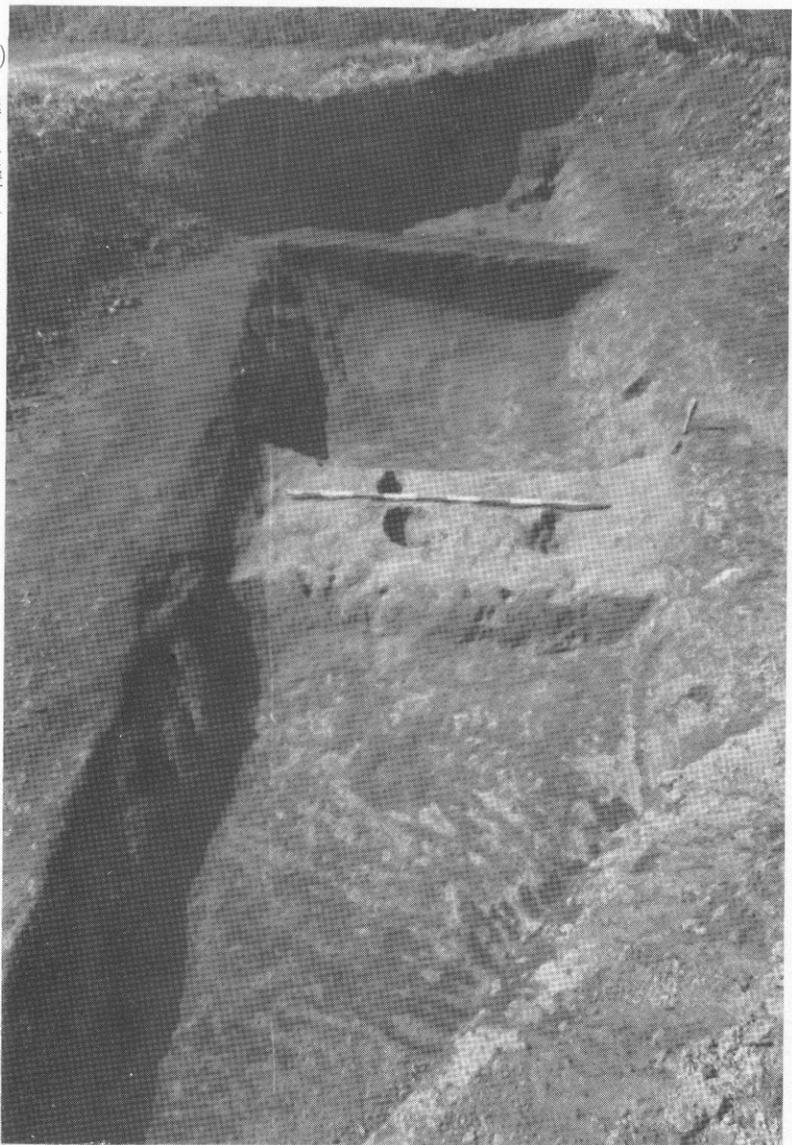


(1) 遺跡全景 (E地区よりD・C・B地区を望む)



(2) V字溝断面及び遺物出土状態 (E-IV区)

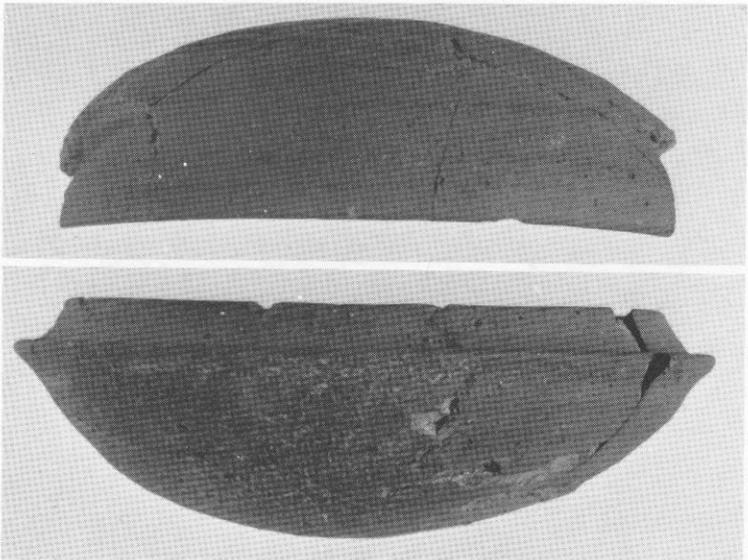
(2) 溝状遺構 (E-III区)



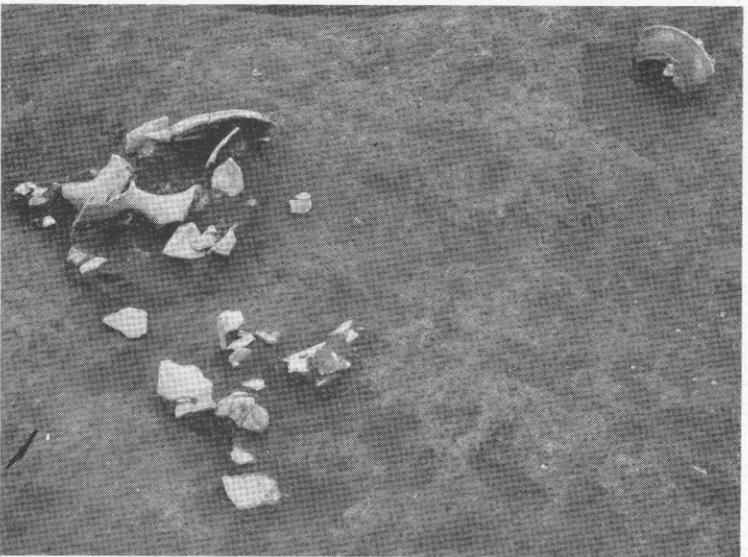
(1) V字溝 (E-IIIIV区)



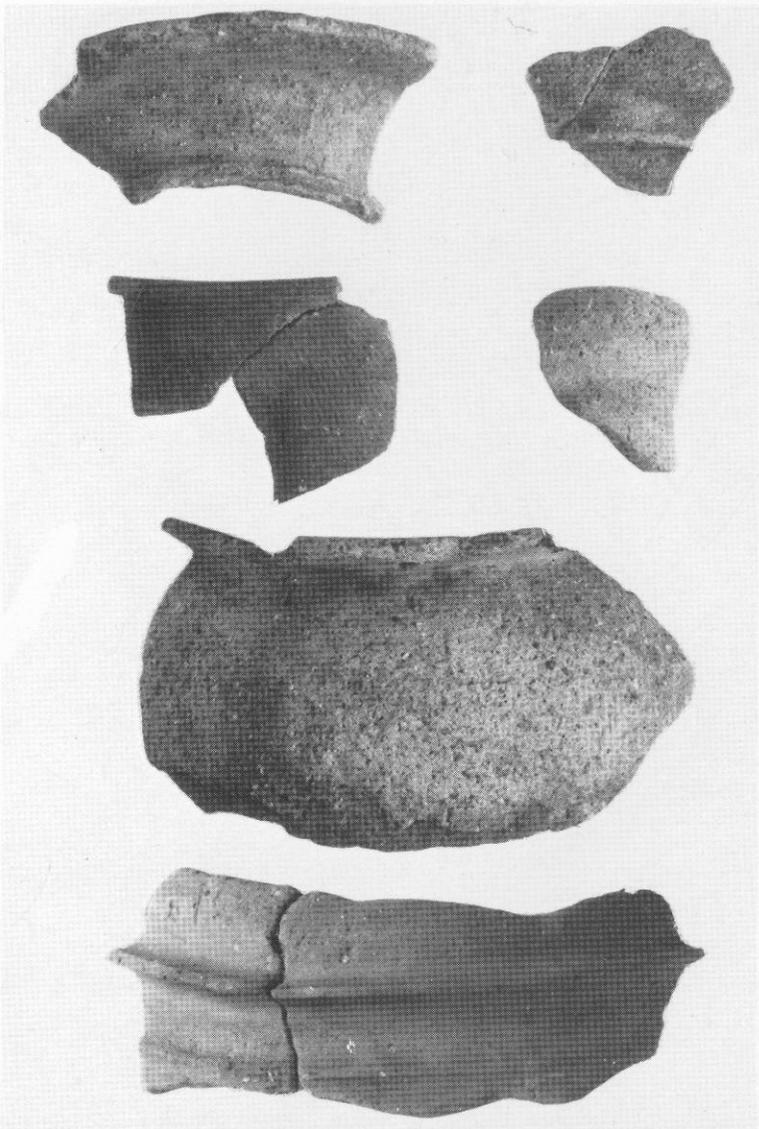
(2) 須恵器 (E地点)

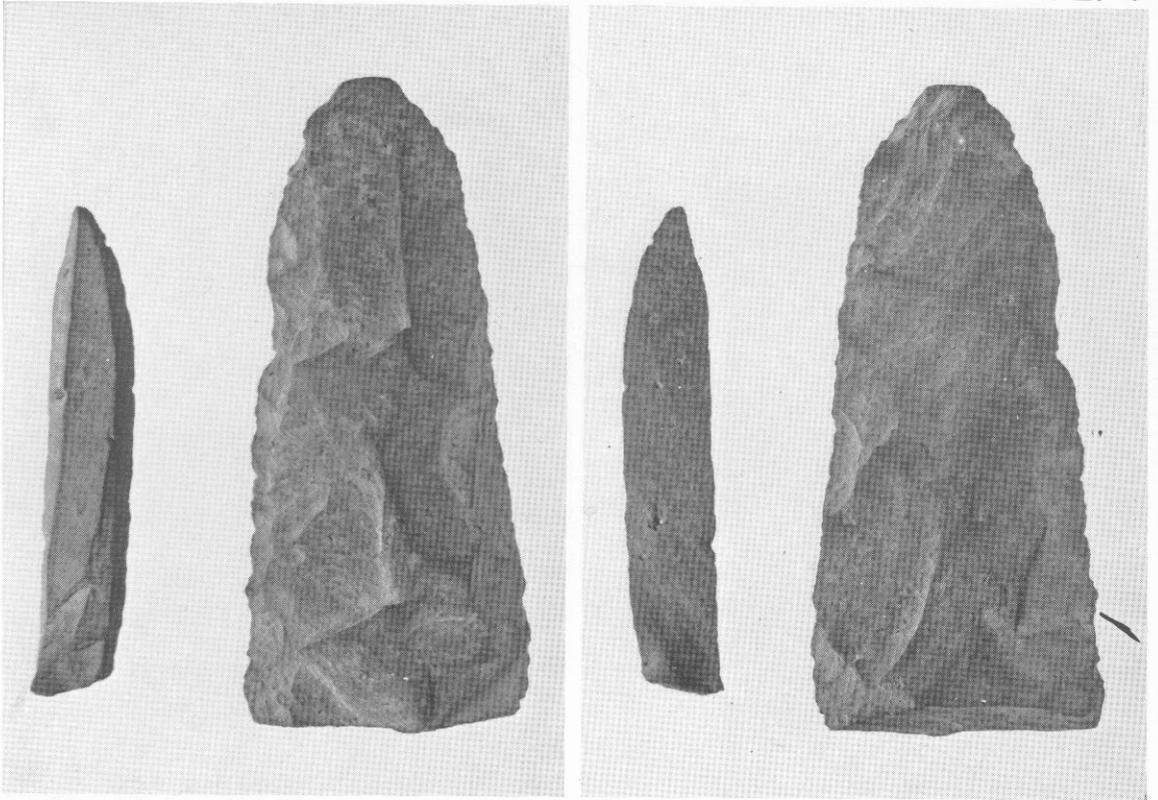


(3) 弥生式土器出土状態

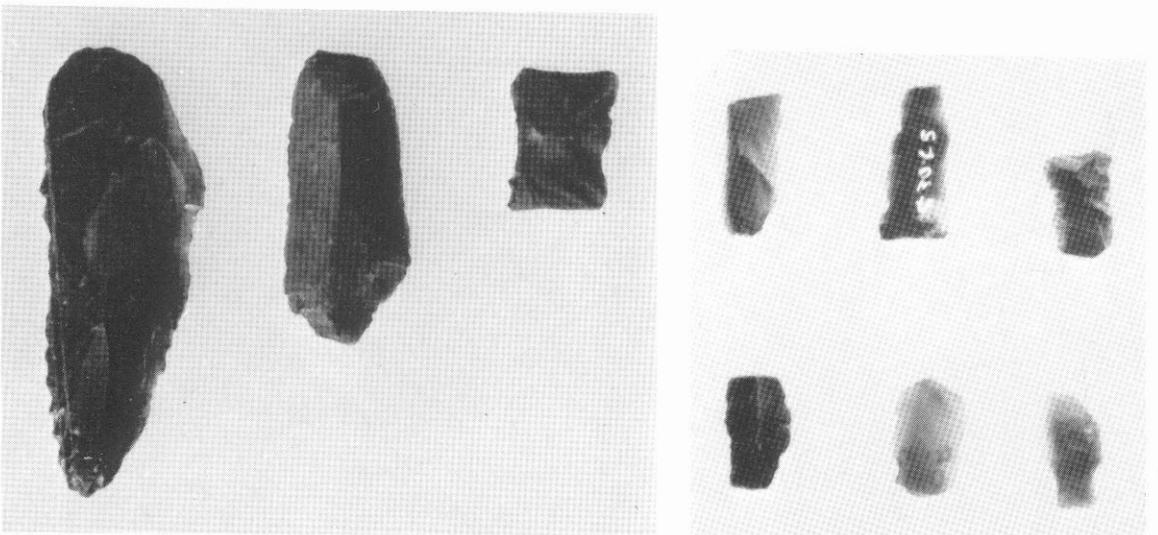


(1) 弥生式土器 (E地区)

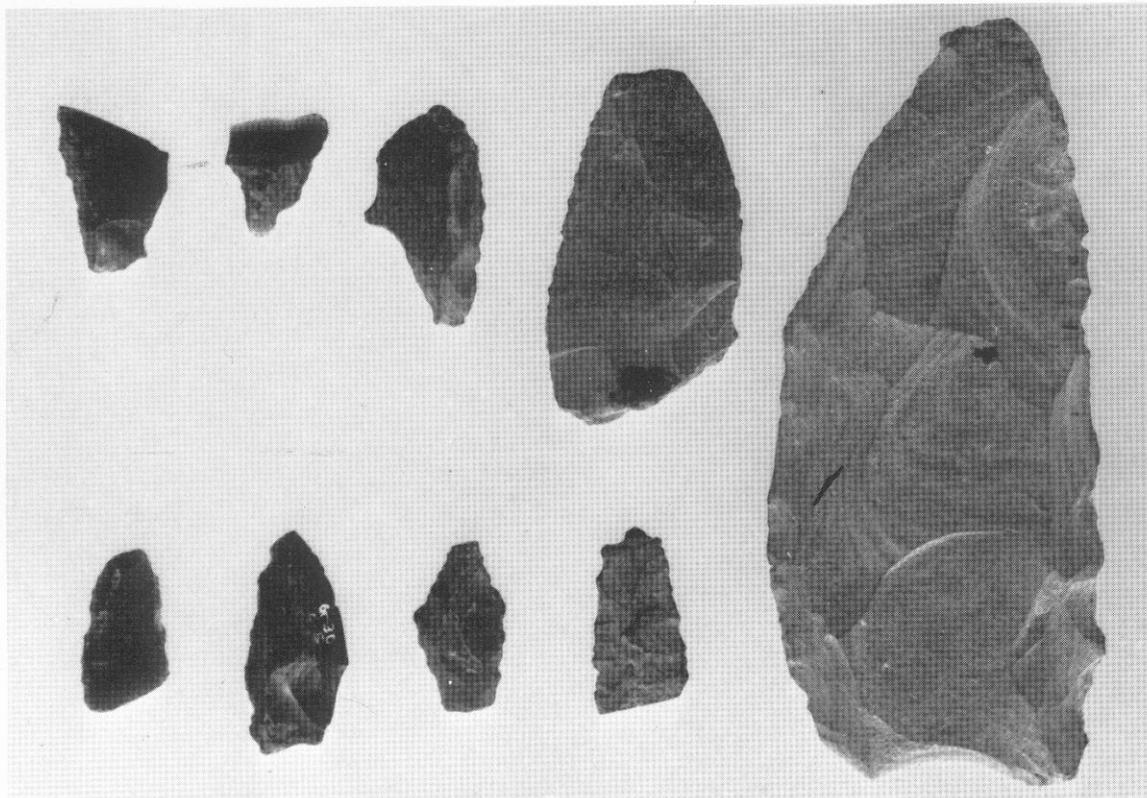




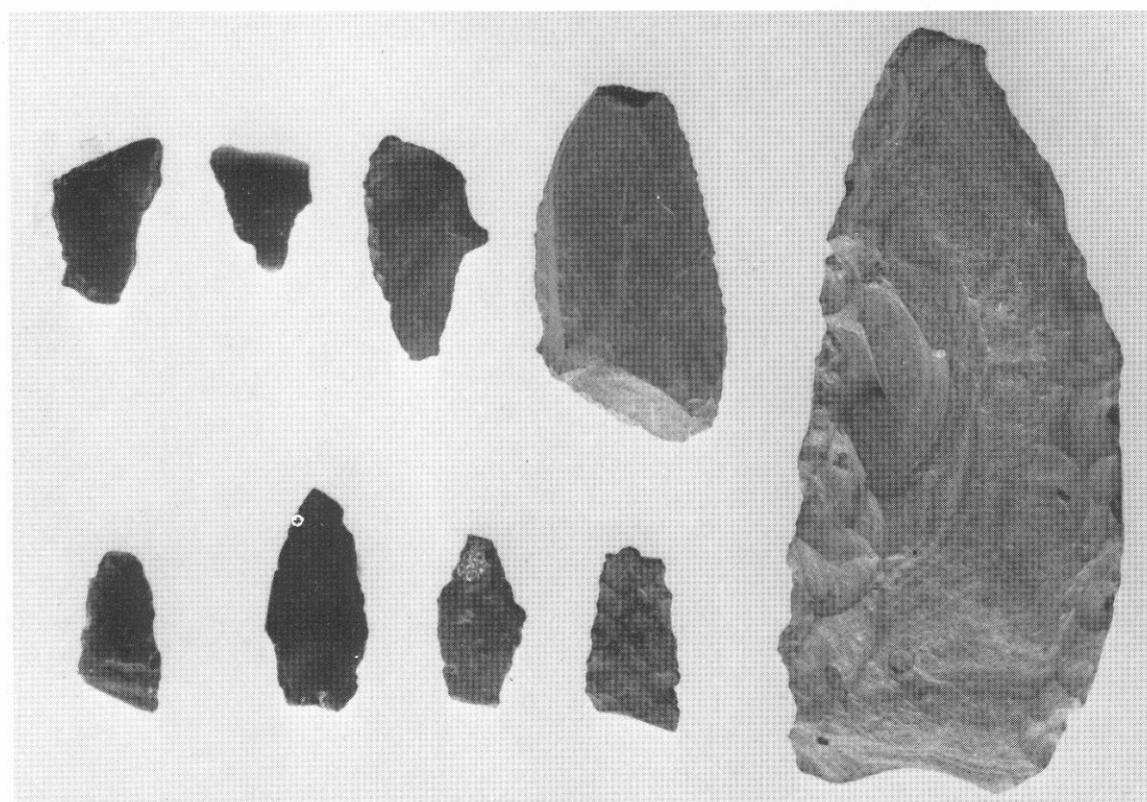
(1) 石器 (A・C地区)



(2) 周辺遺跡の石器 (I)



(1) 周辺遺跡の石器 (II)



(2) 同上 (裏)

福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告

— 第 1 集 —

昭和45年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市東中洲6街区29号

印刷 福岡印刷株式会社

福岡市舞鶴1丁目2-5